
名もなき花の散る果てに

小鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名もなき花の散る果てに

【Nコード】

N9102S

【作者名】

小鳩

【あらすじ】

物心ついてからずっと暗い地下で暮らし続けた子供。名すら与えられなかった子供は、家のため公爵家へと嫁ぐこととなった。

望まれない幼い花嫁を待つのは冷やかな眼差しで…。

このお話は、サイトからの再掲載となります。

本編は完結済です。番外編更新中。

01* 土に眠る種（前書き）

このお話はBLとは言えませんが、ノーマルとも言い切れません。両性・無性と言ったキーワードがNGな方は目を通されない事を強くオススメします。

（保険として警告タグに「ボーイズラブ」をつけさせて頂いております）

また、一部流血・暴力的な表現なども含まれますのでご注意くださいませ。

とはいえ、強烈な描写はほとんどありませんのでゆるーくお付き合い頂けたら嬉しいです。

01* 土に眠る種

その子供は、空を知らなかった。

その子供は、星を知らなかった。

その子供は、風を知らなかった。

その子供は、大地を知らなかった。

その子供は、言葉を知らなかった。

その子供は

名前を知らなかった。

じめじめとした暗い石段を降りてくる足音が聞こえてきた。

物憂げで擦るような足音は、朝がやって来た合図なのだ。

朝がどんな物か、知らなかったけれど。

幼い囚人にとって、朝は憂鬱な足音と高い天窓から差し込む四角い光だった。

柔らかな木綿の掛け布から抜け出して、気まぐれに与えられた櫛で髪を梳かす。

そうしている内に、頑丈な扉の下に付けられた小窓から朝に使う分の水差しと食事が与えられるのだ。

だが、今日は少しばかり、いや大きな変化があった。

今までに数回だけしか聞いた事のない大きな物音がして開く筈のない扉が開いた。

何が起きたのかと、寝台に腰掛けたまま開かれる扉を見つめた。入って来たのは、キラキラとした衣服で恰幅のいい身体を包み隠した中年の男。

薄暗い部屋の中で、嫌悪も露な瞳だけが浮かび上がって見える。

「お前が、アリゼの子か」

吐き捨てるような声に、細い肩が震えた。

アリゼ、その単語は子供にとっても大事な物だった。

それを汚い物のように口にされ、まるで打たれたかのような痛みが心を走った。

かすかに愁眉を寄せた様子になど気付かず、突然の侵入者は壁に寄り添うようにして蹲る捕らわれ人に、煌々と火の燈った手燭を突きつけた。

薄暗い部屋に突然、小さな太陽を持ち込んだような輝きが満ちる。

あまりの眩しさに子供は、怯え固く目を閉じた。

物心ついてからこの地下に押し込められて過ごして来た人間に、眩いまでの光は恐怖でしかなかったのだ。

だが、そんな物に頓着せず男はしげしげとその子供を観察した。

心行くまで値踏みするとフンツと鼻を鳴らして、扉の外で控えていた下働きにぞんざいに命令を下した。

「これを外に連れて行け。それから湯殿に連れて行って徹底的に磨け。思ったほどの造作ではないが、これなら幾らかの担保にはなるだろ」

何が起こったのか判断も出来ない子供に、さらに理解不能な言葉が投げかけられる。

引き立てられるように腕をつかまれ、一度として許されなかった外への階段に足をかけた。

「良くもまあ、捨てずに置いた物だ。こんな所で役に立つのだから」

含み笑う不気味な声に、訳も判らず震えるしかなかった。

初めて見た空は、恐ろしい程広かった。

空の端は紫暗に暮れ、太陽の光が朱色の帯を残す。

初めて見る色は、涙が出るほど美しい物だった。

声にならない吐息が漏れる。

ざわめく葉が弾く緑の光。

風に混じる太陽の匂い。

裸の足に触れる土の柔らかさ。

歩くことに慣れていない足は、生まれたての子鹿にも劣るものだったけれど、身体を巡る喜びに弾むように動く。

踏み出したばかりの世界は、光と音色に満ちていた。

今までの感じていた自分の世界は、あの小窓よりも狭い物だったのだとようやく知った。

腕を取られ、奴隷の様に引きずられるようにして歩かされていたけれど、日差しの強さを知らない唇は幸せそうに微笑んでいた。

「……まったく、こんなに汚れていては三度洗ってもまだ足りやしない」

連れて来られた湯殿には、数人の女が待ち構えていて、突き出された反動で床に倒れこんだ細い身体から、問答無用で衣服を剥ぎ取った。

服とも言えないような埃で灰色にそまつた布切れは、眉を顰められてから指で摘まれて捨てられた。

何が何だか判らないでいる間に、水を頭から掛けられて鋭く息を呑んだ。

温められていない水は、慣れていない肌にはいかにも冷たかった。身体を洗うことなど考えもしない身体は強く匂い、髪は飴でも塗り掛けられたかのようにベツタリとしていた。

湯殿で女たちが嫌悪で顔を顰めても当然の有様であった。

高価な石鹸を惜しげもなく使って、野鼠の様な身体を洗い立ててい

く。

何度も身体にくぐらせた水が、灰色から透明に近くなって、泡が浮かんでくるまでになる。

額に汗を浮かべて一心不乱に手を動かしていた女たちは目を見張った。

黒く埃が粘ついていた髪は柔らかに亜麻色の流れを作り出し、痛いくらいに擦られた肌はまるで乳白色の温かみを露にしていた。骨格から華奢なその身体は、女性らしい丸みも男性らしい無骨さとも無縁だった。

まだ未発達な無垢な肉体だけが存在していた。

長く密な睫毛の隙間から覗く瞳は、持ち主の心をありのままに移す透き通る青灰色。

今は戸惑うように揺れている。

浴槽に浸けられて温かい水を不思議そうに手に潜らせて、ペロツと舐めてみた。

水は温められても水のままのようだった。

初めて土に触れた足の痛みも、こうしていると解けていくような気がしてうつとりと目を閉じる。

だが、幸せな一時もすぐに終わりを告げた。

入って来た時と同じように急き立てられるように追い出された。

一回り身軽になった身体に、ふわふわとした布で身体を包まれて拭かれた。

やはり数人がかりでの大仕事だ。

体中の水分を取り終わると、何処からか持ってこられた衣を着せられた。

瞳の色と合わせた薄い空色の布を幾重にも重ねた軽やかな衣は、歩くたびに裾が蝶の羽の様にひらめいて大輪の花にも似ていた。

胸の前につけられた細い綾紐を器用に結んでいく指先を面白そうに青灰色が見つめていた。

着付けが行われている間に、髪にも手が入られる。

一度も刃を入れられていない髪は、床に渦を作るほどに長く伸びていた。

痛みの激しい先が躊躇い無く落とされていく。

それでも光沢のある髪を短く削ぐのは躊躇われたのか、背の中ほどで揃えられた。

全ての準備が整うと女たちは自分たちの腕に満足した。

其処にいたのは薄汚れた野鼠ではなく、輝くような無垢さを纏った一人の幼い美姫だった。

終わった頃を見計らって館の主が扉を開いてやって来た。

「ふん、あのアリゼの子供なだけあるな」

ピクリと貝の様な耳が動く。

アリゼ、紅を引いた訳でもない花唇が音を象る。

無遠慮に近づいた男が細工物の様な顎を掴み上げ、視線を合わせた。

上から下にと値踏みして、ニヤツと口角を吊り上げた。

青灰色の瞳は、何の感情も無くただ男を見つめる。

事実、その子供には男の言っている事も今現在の状況も理解出来ないでいた。

「これなら、あの男も興をそえられるかも知れんな。少しの足止めになればと思っていたが。いやいや、我が妹は良い物を残して逝ってくれたものだ」

含み笑いはだんだんと大きな笑い声となって館中に響いた。

そのただ中にあっても青灰色の瞳は、ぼんやりと窓硝子の向こうを見つめていた。

その夜、美しく磨き上げられた子供は地下の部屋ではなく誂えられた客室に置かれた。

柔らかな寝台に驚きながら横になってみたが、何だか落ち着かなく

て抜け出した。

掛け布だけを体に巻きつけて部屋の隅に座り込む。

大きな窓から月光が部屋に伸びる。

格子模様の影を興味深そうに見つめて、そっと手を伸ばす。

白と黒の筋からふわりと幽かな光が立ち上った。

『安らぎの子、ようやく皆に会わせられた』

『ハ克蘭！』

虚ろだった子供の顔が喜色に染まった。

まるで床に伸びる月光から生まれ出たような貴人は、薄く透ける身体で宙に留まっていた。

淡い白灰色の髪が薄絹のように垂れて床に着く前に消えている。

ハ克蘭、と呼ばれた青年が人ではないことは明らかだった。

その言葉も、人には理解出来ない旋律だ。

その子供が話したのもハ克蘭と同じ旋律。

『大地も、日も、緑も、風も、全てそなたを愛している』

『アイ？』

『そうだよ、安らぎの子。そなたは愛されるべき子だ』

歌うような会話に名もない子供は、困惑するように首を傾げるばかりだ。

半透明の伸ばされた手が磨き上げられた子供の頬を包む。

感触のない温もりは一人蹲る未発達の小さな身体をただ優しく労わる。

『覚えておいで、優しい子。世界はそなたを愛する。無論、この私も』

『アイ、する。ハ克蘭も？』

『そうだよ。愛しい子。私はいつでもそなたの傍にいる』

艶やかに微笑んだハ克蘭は現れたのと同じように淡く消えた。消えた後先を追うように瞳を彷徨わせて子供は眼差しを伏せた。

『アイ？アイってなあに…？』

呟きは虚ろに消えて、亜麻色が頬を流れた。

01* 土に眠る種（後書き）

既に完結しているお話ですので、なるべく毎日更新できるようにしていきたいと思います。

感想・誤字脱字のご報告など頂けたら、とっても喜びます！

02* 芽吹き

「お前には、これから礼儀作法を徹底的に学んでもらう。期限は二週間だ。生まれの卑しさはどうにもならないが、見掛けだけでも磨いておかねばな」

部屋から連れ出されたその子供を待っていたのは、意味の判らない作法の稽古だった。

男の一言で始まったそれは、歩く事も満足に出来ない子供には厳しい物だった。

身体に傷をつけない様言われているのか、鞭や手が出ることは無かったが、止む事のない厳しい声は精神を確実に疲弊させていった。

「まったくこの程度の事なら、アリゼ様は一度で覚えましたよ。はい、もう一度」

歩き方から、茶器の持ち上げ方、手の上げ下げまで。

容赦のない叱責が飛ぶ。

自分以外の人と会話をした事もない人間に、詰りにも近い言葉は堪えた。

期限の日が近づくにつれ、優雅な拳措は身に付いたが同じように人に対する恐怖も根付いていた。

大きな声を叩きつけられると全ての動作が麻痺して息苦しくなるのだ。

今も目の前の女の釣りあがった眦に恐怖を覚えながら、震える指先で紅茶をそそぐ。

色を失った唇は、今にも倒れそうな程であるのに、周りは頓着せず何度も繰り返させる。

満足に呼吸出来ない喉が大きく喘いだ。

それでも助けを求める声も、拒否の言葉もその子供からは出されなかった。

気の遠くなる思いを何度もしながら礼儀作法を習う。

期限の日。

男はその成果を満足気に眺めてその子供に言った。

「お前には、ベール公爵のもとに行つて貰う。せいぜい振る舞いに気をつけて媚びる事だ。なに、その顔と身体があれば容易いだろう。お前は、あのアリゼの子だからな」

初めて会つた頃は感じなかつた男からの蔑みを、強く感じた。

目の前の男は、自分を蔑み、嫌悪し、憎んでいる。

向けられる負の感情を自覚した時、無垢な捕らわれ人は顔を俯けた。

何も見たくなかつた。

周囲の全てが自分を嫌つているように思えた。

「公爵には既に言つてある。出立は明日だ。今日はもう休め。その顔に惨めなところでもあれば家の恥だ」

それだけ言い捨てて出て行こうとした男は、ふと足を止めた。

「そうそう、名がないと不便だな。アリゼの子だからな、リゼイラとでもするか。良いか、これからお前の名前はリゼイラだ。リゼイラ・カンターナの名、ありがたく受け取るが良い」

リゼイラ。アリゼの子の名前。

その子供に初めて己を現す言葉が出来た瞬間だった。

例え、片手間に与えられた名であろうと、子供は心から喜んだ。

リゼイラ、声のない言葉が繰り返される。

リゼイラ、リゼイラ。

何度も繰り返して、大事に胸に仕舞つたのだつた。

出立の準備は、慌しかった。

リゼイラは、太陽が昇る前から身体中を磨き上げられ、見た事もないような豪華な絹を着せられた。

それからキラキラと光る石を首から掛け、耳にも同じ色の石が下げられた。

今までは長く下ろしたままだった髪は、痛いくらいにキツチリと纏め上げられ複雑な形に結い上げられた。

踵の高い銀の靴を履いて、リゼイラは馬車へと運び込まれる。周りの者は笑い声一つ立てず、ただ黙々と支度を整えていく。

そうして、リゼイラの乗った馬車の他に身の回りの品を乗せた馬車をもう一台が用意され、静かに館を出発した。

見送りもない、まるで葬送にも似た出立であった。

貿易と商業の国、風華。

物品の流通が盛んなこの国は、家一つでも様々な個性を持っている。

商人として成功した屋敷などは、南国の守り神が金無垢で門前を飾っていたりもする。

そんな個性豊かな屋敷を抜けていくと、閑静な館が並び立つ。

派手な色彩はないが、落ち着いた色合いの上品な屋敷が並んでいく。

専属の庭師もいるのだろう、丁寧に剪定された庭木に風華らしい色の鮮やかな花が覗いて華やかだ。

布で覆われた小窓からそつと外を眺めて、物珍しさに目を見張った。

『貴方たちは花の精霊？』

小さく開いた小窓から飛び込んできた花びらの上に、同じような色を纏った精霊の少女たちが楽しそうにひらめいた。

『そうよ、変わらない方』

『あたしたちは風扇花ふうせんかと言っの』

『花嫁には相応しいでしょう』

細い手のひらに乗った花びらは、その名前の通り扇形をしており、中心に沿って黄色から橙色へと色を変じている。

リゼイラは知らなかったが、この辺りでは花嫁の髪を飾る花として良く知られている。

『きれい』

一言そう褒めると精霊たちは嬉しそうにさざめいた。

『ありがとう』

『あなたに褒めてもらえて嬉しいわ』

『公爵様に嫁ぐあなたに幸運を』

可愛らしい笑い声を立てて、花びらの精霊たちは風に流されていった。

橙色の花の欠片が遠く消えていくのを知らず切ない想いで眺めていると、そっと脇から手を伸ばされた。

「ご無礼を。ですが、もうお屋敷に着きますのでお席にお着きください」

リゼイラの向かいに座っていた従僕が開いた小窓を閉じる。

公爵家からの出迎えだと言う彼を、リゼイラの家の人たちは酷く丁寧に扱っていた。

出会った時は、それに倣って礼を取ろうとしたら、自分には必要ないと諫められてしまった。

やはり外の人たちのやる事は良く分からない。

言われたとおりに柔らかな椅子に腰を下ろして、ぼんやりと前に座る青年を見つめる。

まるで型に嵌めたようにピンと伸びた背筋や型崩れなど知らないような衣服は、何だか見ているだけで息苦しくなってくる。

リゼイラの纏うのは宝石や金系銀系が縫い取られた豪華な物だが、目の前の青年ほど堅苦しくはないような気がする。

「どうかなさいましたか？」

しげしげと見つめてくる視線に、生真面目に青年は尋ねた。

何かを言おうとして、結局何も言えずにリゼイラは黙って首を横に振った。

外に出て知った事はたくさんある。

その一つが言葉のこと。

長く人間と言葉を交わすことのなかったリゼイラは、いつしか声を
出すと言う行為そのものを忘れた。

リゼイラ自身が話しているつもりでも、他の人間には聞こえないら
しいと言う事も。

精霊たちだけがリゼイラの友達で、外の事を教えてくれる唯一の繋
がりだった。

辛うじて話される言葉を理解することは出来たが、人間の言葉を話
すことは出来ない。

代わりのように精霊たちの言葉を聞き、彼らと会話する事は出来た
が。

「花がお好きですか？」

不意に声を掛けられて、窓に向けていた顔を正面に戻した。
生真面目な青年が僅かに目元を緩めてリゼイラを見ていた。

その柔らかな表情に惹かれるようにして、おずおずと頷く。

「そうですか。それならばお屋敷もきつとお気に召すと思います。

公爵様のお屋敷は、美しい庭園で有名ですから」

初めて微笑を向けられて、リゼイラは一瞬だけ目を丸くした。

そうして自分でも知らぬ内に、同じように微笑み返す。

向かいに座る青年がその微笑みに息を呑んだことも知らず、リゼイ

ラは公爵様の綺麗な庭に想像を巡らせた。

外は綺麗なものがいっぱいある。

初めて外に出た時の空は、吸い込まれそうな程に青くて大きかった。

それよりももっと綺麗なのだろうか。

ドキドキとしてきた胸を押さえて、リゼイラはそっと目を閉じたの
だった。

「デイル様、もうすぐ妾姫様のご到着になられますよ」

広い屋敷の中でも、日当たりと風通しの良い部屋でデイルは執務の真つ最中だった。

その隣りで働いていた側近のベルリードが、今思い出したとばかりに声をかける。

途端にデイルの精悍な顔立ちに忌々しい表情が昇った。

「そんなもの放っておけ。あの男の貢いできた女なんぞ反吐が出る」

「まあ、あそこまで言いながら、今更取り入ろうとしてくる厚顔さには感心しますね」

「どうせあの男は潰す。やって来る女には適当に部屋でも与えておけ」

どうでも良いように言って仕事に没頭する主人にベルリードはそつと苦笑した。

デイルは公爵としては、文句のつけようがない男だ。

市井を軽んずる事もなく、伝統に無闇に縛られる事もない。

柔軟な思考力と大胆な行動力で、僅かながら斜陽していた公爵家を見事に立て直していったのも彼だ。

今では国王の片腕とも目されている若い公爵に一つだけ欠点があるとするなら、それは浮いた噂の一つもないと言う所だろうか。

艶福家だった父の気質を受け継がず、それどころ反対に色恋沙汰自体を遠ざける彼に落胆を浮かべるご令嬢は数知れない。

ベルリード以下家臣たちも、お世継ぎ云々も含めもう少し仕事以外にも目を向けて欲しい物だと日々頭を痛めている。

普通であれば諫めるべき事柄の筈なのだが、勧めなければ目にもくれない主人であると言うのも珍しい。

今回の事は、相手が相手ではあるが何がしかの刺激になるのではないかとベルリードなどは期待していた。

なので、少しばかり水を向けてみる。

「お会いにはなりませんか？」

「会ってどうする」

一言で切って捨てた主人に有能な側近は肩を竦める。

「ご実家の方とはともかくも、今まで大切に育てられてきた深窓のご令嬢だそうですね。それに、絶世の美姫と歌われたアリゼイラ様に生き写しと聞いてますし」

「家の力で守られてばかりの姫など興味はない」

浅くない眉間の皺に、ベルリードはそれ以上言葉を重ねるのは諦めた。

「それでは、妾姫様の方は私が全て手配しておきます」

「ああ。直ぐに送り返すが、難癖付けられても面倒だ。それなりに持て成しておけ。宝飾品の一つや二つ与えておけば大人しくしてるだろう」

顔も上げずに指示するデイルに、有能な側近にして幼馴染は苦笑して部屋を辞した。

無理もないと思う。

本来ならデイルは、公爵の地位に就けるような身分ではなかった。

前公爵である、デイルの父が気まぐれに手を出した町娘がデイルの母である。

当時は立派な嫡子もあり、デイルはただの庶子でしかなかった。

その母親も気丈な人で、デイルを公爵家とは無縁の子として育ててくれた。

決して裕福な暮らしは出来なかったが、デイルは幸福に暮らしていたと聞く。

それが何の運命か、気付けば公爵家の跡取りとして祭り上げられたのだ。

流行り病で次々と正妻の子が死に、残ったのは庶子であるデイルだけだった。

父が死に、公爵として正式に家を継いだデイルに世間は厳しかった。

それからがむしゃらに仕事に打ち込んだ。

庶子として馬鹿にする貴族たちを見返すために。

その努力は報われ、今ではデイルを庶出と馬鹿にする者はいない。己の手で勝ち上がってきたデイルにとって、生まれだけで周囲に甘やかされてきた姫など軽蔑の対象にしかないのだろう。

しかも、今日やって来る娘はよりにもよって、デイルを爵位泥棒呼ばわりしていた男の娘。

デイルでなくとも諸手を挙げて歓迎できるはずもない。

かく言うベルリードも、口で言うほどに姫に良い印象は持っていない。

馬車の到着を知らせに来た従僕に付いて行きながら、面倒だな、とこっそりため息を吐いていたのだった。

03＊ 硬き誓

リゼイラが馬車から降り、通されたのは見た事もない程大きな屋敷だった。

数日過ごした家も大きいと思っていたが、此処はそれ以上だ。

どんなに大きな人が暮らしているのだろう、天井があまりに遠くてクラクラする。

圧倒されてしまったりリゼイラの足が怖気付いたように緩やかになる。

何も知らずに狭い部屋で無為に過ごしていた日々がどれだけ幸せだったか。

身が竦む。

「リゼイラ様、こちらです」

そんな緊張を感じ取ったのか、馬車から連れ添ってくれていた青年がそつと手を引いてくれた。

広い玄関を通り、長い廊下を歩いて、リゼイラは応接室に通された。

大きな窓が開け放たれたその部屋は、若葉色の刺繍を織り込んだ絨毯が敷かれ、季節の花が出過ぎない程度に飾られた気持ちの良い場所だった。

猫足の華奢な造りの椅子に腰を下ろして、少しだけホッと息を吐く。

履きなれない靴が足を圧迫していた事にもようやく気がついた。

痺れるような痛みが歩きなれていない足を苛む。

だが、そんな事は顔に出してはいけないのだ。

教えられたとおりに、品良く腰掛け爪先を揃えて椅子に座っていた。

ここまで付いて来てくれた青年の姿は、既にある。

これからどうなるのだろう、漠然とした不安はあったがそれ以上に

何も思えなかった。

ただ酷く身体が重く、この場で眠ってしまいたいくらい気持ちの悪い風を頬に感じていた。

そのまま本当に眠ってしまいそうになった時、リゼイラが入って来た物とは違う扉が開いて、見たことのない青年が入って来た。

鷲色の真っ直ぐな髪をした青年をぼんやりと見つめ、それから慌てて立ち上がった。

「ああ、そのまま座っていて下さって結構ですよ。私は、貴方とは何の関係もありませんから」

にこやかに言われた言葉が理解できず、きょとんと笑う青年を見返す。

それでも座っていて良いと言うところだけは聞き取れたので、良く分からないままに座りなおした。

「申し遅れました。私は、公爵様の補佐として働かせていただいているベルリード・フライゼンと申します。以後、姫様の身の回りのお世話を取り仕切らせて頂きますので、お見知りおきの程を」

滔々と述べて大仰に一礼した青年にリゼイラはただ頭を下げるしか出来なかった。

この青年が言うには、彼は公爵様ではなくて。よってリゼイラが取り入らなければならぬ相手とは違うようだ。

「差し支えなければお名前をお教えいただけますか？まさか妾姫様と呼ぶわけにもいきませんので」

明るい笑顔だ。それなのに何処か寒々しい印象を与えられる。嫌われているのだな、とごく自然に思った。

小さく胸が痛んだけれど、その痛みすらも段々と麻痺していくような気がする。

「どうなさいました？私程度には、お名前を教えては頂けませんか？」

漫然とした胸の痛みを気を取られていたりゼイラは、再度の問いにハッとして顔を上げた。

だが、リゼイラにその答えを告げる術はない。

どうしたものかと思って、口を開いては閉じる。

少々、捻くれた態度で接していたベルリードもその様子に眉を顰めた。

「失礼ですが、お声が出ないのですか？」

声が出ないわけではないが、喋れないのは確かだとリゼイラはそつと頷いた。

恥じるように俯いたリゼイラに、ベルリードは困ったように天を仰いだ。

「それは大変失礼しました。ええと、少々お待ち下さいませ」

予想外の展開にさしもの側近も戸惑い気味だ。

それでも、リゼイラを迎えに行った従僕を呼び出す。

さほど待たずに、あの生真面目な青年が部屋に招かれた。

「悪いけれど、この方のお名前とかそう言っの向こうで聞いてない？」

リゼイラから離れた場所に立ってベルリードは情報を収集する。

その様子をぼんやりと見つめて、すぐに視線を外へと向けた。

大きな窓の向こうには、あの青年が美しいと言った庭が広がっている。

木々の緑に隠れるようにして、黄色や赤の彩が垣間見えた。

座っているため余りに見ることは出来なかったが、それでも目を奪われる。

叶うなら庭に出て歩いてみたかった。

出過ぎた願いかもしれないが、それだけ。

「申し訳ありませんでした。リゼイラ様、でよろしいですね」

声をかけられて惜しみながら庭から視線を外した。

ベルリードは、先程とは違う労わるような笑みでリゼイラの名を呼んだ。

初めて他の人から呼ばれた名前の響きが嬉しくて、その思いのままに微笑む。

「……まいったな」

小さく零されたベルリートの弦きは、リゼイラには届かない。

「公爵はただいま執務中でして、先にお部屋の方にご案内いたします。今後についてはそれから」

ベルリートの言う今後が何を指すのか判らなかったが、促されて立ち上がる。

だが、足の疲れは思った以上にリゼイラの足を痛みつけていた。

一歩進みだそうとした瞬間に、痛みが走り膝から力が抜け、その場に座り込んでしまった。

「リゼイラ様?!」

驚いたベルリートと部屋の隅に控えていた実直な青年が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか?」

労わる声に頷き返すが、どうしても立ち上がれない。

「失礼いたします」

堅い声がして青年がそっとリゼイラの足から華奢な靴を取り去る。それだけで足の痛みが遠ざかって、リゼイラはホッと息を吐いた。

「どうやら歩き慣れていらっしやらないようですね」

ベルリートの声が、僅かに陰を帯びる。

「ライドル、リゼイラ様をお運び申し上げなさい」

突き放すような命令の後、すぐに身体が浮いてリゼイラは驚いて硬直した。

今までに誰かに抱き上げられた事など皆無だ。

こんなにも、自分以外の温もりが近くにあることも。

僅かの身じろぎもせず腕の中で小さくなっている令嬢に、ライドルと呼ばれた青年は申し訳なさそうにリゼイラを見つめた。

強張った顔で抱きかかえられているリゼイラは、ライドルのそんな視線に気付く余裕すらなかった。

ただひたすらに早く降ろされる事だけを願っていた。

そうして、リゼイラのために設えられた部屋に到着するとそつと柔らかな長椅子の上に降ろされた。

あまりの事に満足に息も出来なかつたりゼイラは青い顔で呼吸を整える。

「このお部屋はご自由にお使い下さい。侍女はこちらで選んでおきましたので、何かあれば彼女に。ああ、ライドルも護衛としてお付けしますので、お出かけの際はご用立て下さいませ。それでは、私は執務が立て込んでありますので御前を失礼します」

風のように一気に喋りぬけたベルリードの言葉の半分も理解できなかった。

それでも、やはり嫌われているのだけはしっかり分かつて、何だか泣きなくなってしまった。

初めて会う人にも嫌われてしまうほど、自分は駄目なのだろうか。そんな思いがグルグルと心を占めていく。

「足の手当てを致しましょう」

悄然としたリゼイラに、そつと声が掛けられて痛む足に手が添えられた。

恐る恐る顔を上げれば、ライドルが足元に跪いていた。

まるで親からはぐれた小鹿のように頼りない視線にライドルは、思わず微笑みかけた。

「痛かつたでしょうに、良く我慢なさいましたね」

優しい言葉にリゼイラは目を丸くした。

労わられた事など初めてだった。

驚きすぎて固まってしまつたりゼイラの耳に、新たに扉を叩く音が届いた。

「失礼致します。あら、ライドルじゃない」

しとやかな声と共に姿を現したのは、侍女服に身を通した少女だ。ライドルの姿を見て思わず声をもらしてしまつたが、直ぐにリゼ

イラに気付くと丁寧に頭を下げた。

「失礼しました。今日からお世話させていただきます、レジーナです。何なりとお申し付け下さいませ」

ふわっと笑って名乗ったレジーナにリゼイラもホッとして微笑み返した。

「まあ、本当にお綺麗な方……」

見惚れたレジーナにライドルが咳払いで注意を向けさせる。

「レジーナ、悪いが傷薬と包帯を持ってきてくれないか」

「え？……まあ！すぐにお持ちしますわ」

怪訝な顔をしたレジーナだったが直ぐにリゼイラの足に気が付いたらしい。

大人しやかな容貌に反して、行動は機敏だった。

「悪い娘ではないのですが、少々元気が良すぎますね」

部屋に備え付けられていた水盥に水を注いで、ライドルは傷ついた足を丁寧に洗っていく。

沁みる痛みになんだけ顔を顰めたが、ライドルの言葉に小さく笑った。

強張った心がほんのりと解れる。

「それにしても本当に、この足で良く歩いて来ましたね」

半分呆れたようなライドルの言葉に自分の足を見つめた。

ライドルの手にすっぽりと納まる足は、皮が剥け、血が滲み、肉刺が潰れ膿が出ているところもあった。

痛いのは痛かったのだが、皆この痛みに耐えて歩いているのだと思っていたし、痛み以上に気を取られる事が多すぎたせいだ。

戻って来たレジーナも余りの惨状に悲鳴を飲み込んだ。

「大丈夫ですか。化膿止めも塗布してますけど。痛み止めも持ってきたら良かったですね」

自分の方が痛そうに顔を顰めたレジーナにゆるゆると首を振った。

痛みは慣れてしまえば何も感じなくなる。

テキパキと手当てを終えるとライドルはそっと立ち上がりリゼイ

ラは慌てて頭を下げた。

喋れないリゼイラに感謝を伝える方法はそれしかない。

ライドールもその思いを感じ取ってくれたようだ。

微笑み返してもらった事にホッとする。

安堵が最後の緊張感を断ち切ってしまったらしい。

糸の切れた人形のようにリゼイラは倒れこんだ。

04＊ 植え替え

昏々と眠り続けたりゼイラを診た医師は、過労と診断した。

「過労、ですか？」

問い直したレジーナの声が戸惑いを帯びる。

眠るリゼイラは聞いた所では、周りから大事に大事に育てられてきたお姫さまのはずだ。

流行の形に結われた髪を解いて眠る姿も、レジーナなど見たこともない程に可愛らしいのに。

過労などと言う言葉なんて縁がないはずなのに。

それでもまだ幼い顔が青白く染まっているのを見ていると痛ましい思いもする。

「寝ていれば治る。足の方も、暫らくは無理をさせないようにすれば問題あるまい」

恰幅の良い医師は長く公爵家に仕えてきた人間だ。

言葉遣いに難はあるが、気の良いお爺さんである。

「ありがとうございます」

「滋養のある消化に良い物を食べさせてやりなさいな」

そう言つて部屋を出て行った医師にレジーナは深く頭を下げた。

姫に与えられた豪華な部屋を出ると医師は、豊かな顎に指を添えて思案深く顔を曇らせた。

か細い腕に、血色の悪い肌、筋肉の殆どついていない足。

似たような身体をした人間を医師は見た事があつた。しかし、今の患者はそんな身分の人間ではないはずだ。

「最近、食事制限が流行つていると言うしな」

そう呟いて医師は目を閉じた。

微かに発せられていたか細い信号は、誰にも受け取られる事はなかった。

医師の去った部屋でレジーナは、眠る主人の枕元に立ってそつと流

れる髪を撫でる。

綺麗な亜麻色は滑らかで大切に扱われてきた人なのだと思う。

癖っ毛が悩みのレジーナにはちょっと妬ましくも思えてしまった。

「……う」

気持ちの良い手触りに、手放しがたく何度も梳いているとリゼイラの密な睫毛がふるりと震えた。

「あ、目が覚めました？」

微かに開いた唇から真珠の様な歯が覗いたが、そこから声が出ることはない。

何か書くものをと慌てて辺りを見回したレジーナだが、近くには紙もペンもなかった。

『ハ克蘭……』

「え……？」

半分夢の中にいたりリゼイラは、視界に映った影をいつも傍に居てくれた精霊だと思った。

ふわりと甘い風が部屋に流れ込む。

「リゼイラ様？」

『……ちがう』

「リゼイラ様？」

『だあれ……？』

焦点の合わない視線を虚ろに彷徨わせるリゼイラにレジーナが心配そうに顔を曇らせた。

「大丈夫ですか？私が判りますか？」

強く問いかけると、ハツとした様に瞬いてリゼイラは目の前にある少女の顔を見た。

そして、一瞬だけ落胆の顔をして目を閉じた。

思い出した。此処は公爵様のお屋敷。

「まだ、お加減がよろしくないのですか？」

おろおろとしたレジーナの声にふっと目を開けて小さく首を振った。

起き上がろうと腕に力を入れればレジーナが手を貸してくれる。

「無理はなさらないでくださいね」

そんな言葉が出たのは、支えに触れた腰が余りに細かったから。触れるのが怖くなるくらいにリゼイラの身体は華奢だった。

サツと蒼褪めたレジーナにリゼイラは労わるような笑みを向ける。

気遣うはずが気遣われてしまったレジーナはこんな事じゃいけないと気合を入れなおす。

「お医者様は疲れが出たのだと仰っていましたから、疲れに効くお茶を持ってきたんです」

朗らかな笑みを浮かべてレジーナは部屋の小さな円卓に飛びつく。テキパキと白磁の茶器に琥珀色のお茶を注ぐ。

受け取った白磁の仄かな温かさにリゼイラの口元も綻ぶ。

くるくると回してみれば甘い香りが立ち上る。

「見てるだけじゃなくて、飲んでください。味も良い筈ですよ」

勧められて一口飲む。

甘い香りが口中に広がって、爽やかな苦味が後を引かずに通り抜けていく。

レジーナの言うとおり、とても美味しかった。

表情を見てそれが判ったのかレジーナも満足そうだった。

「美味しいでしょう。私の一番のお気に入りなんです」

楽しそうに話すレジーナを見てリゼイラも何だか楽しくなる。

そうやって二人が笑いあっていると扉を叩く音がしてライドルが顔を覗かせた。

手には水差しを持っていた。

どうやら代えの水を汲みに行っていたらしい。

起き上がっているリゼイラを見て強面の顔が小さく安堵に和らいだ。

「レジーナ、病人の傍であまり大きな声を出さないように」

「だ、大丈夫よ」

注意されたレジーナは少しだけ胸をそらして嘯いた。

「お前が大丈夫でもリゼイラ様は違っだろう」

「え、私煩いですか？」

慌てたように聞いてきたレジーナに驚いて首を横に振る。

こんなに話しかけてくれる人を知らなかったから、むしろレジーナのお喋りは楽しかった。

「ほら、大丈夫って言っただけです」

「お前は……」

呆れたように肩を落としたライドルの表情がほんとに困っていてリゼイラは思わず吹き出した。

声の伴わない笑い声だったが、初めてリゼイラの見せた年相応の屈託のない笑顔は二人の心をついた。

そして、二人はこの先決して幸せとは言えないだろうリゼイラに心から尽くそうと決心したのだった。

夕食の後、休憩を取っていたデイルはそこでふと今日来たと言う窓のご令嬢の事を思い出した。

あれから緊急に入った仕事に追われていて、そこまで思いやる余裕がなかったのだ。

ベルリードに適当に任せるとは言ったものの、短期間とは言えこの屋敷に住まう事になる人間だ。

知っておく必要はあった。

酒肴を手に入ってきた侍女にベルリードを呼ぶように伝える。

辛口の蒸留酒を手窓を眺めれば、夜空に細い三日月が架かり星々が無数にきらめいていた。

こうして一人でゆったりと時を過ごすのがデイルの何よりの楽しみだ。

時には冒険譚などの娯楽小説を捲る事もある。

落ち着いた貫禄を漂わせる見た目からは想像のつかない趣味である

が、少年の頃からの数少ない楽しみだ。

最近はおちついて読書も出来ないの、手に入れたまま読めないでいる書籍が積みあがっている。

もう少ししたら時間も取れるだろうから、思う存分読書に耽溺できる。

臣下が聞いたなら別のことに耽溺してください、と涙を流しそうである。

「失礼します。お呼びと伺いましたが」

この時間になってもキツチリとした服装のベルリートを向かいの椅子に掛けさせてまず酒を勧めた。

気の置けない友人である側近は笑って盃を受け取る。

「相変わらずこの酒がお好みですか」

「味覚なんてものは早々変わらないんだろう」

多くは庶民に親しまれている蒸留酒をこんなに旨そうに飲む公爵も珍しい、とからかえば何でもないようにデイルは杯を干した。

「それで、私を呼んだ用件は？」

「判っているくせに聞くのはお前の悪い癖だな」

「ははは、高く買ってくださいようで」

「茶化すな。それで、今日来た令嬢とやらはどういう人間だ？」

酔いなど知らぬ風情で酒を酌み交わしながらベルリートの指で盃の縁を弾いた。

キンツと硬質でかすかな音が立って消える。

「お名前はリゼイラ様。少々、花嫁にしては幼いですが見た目は噂どおりのお美しい方でしたよ。あれは一見の価値あります」

「……早々に落第した理由は？」

皮肉気な口振りにデイルが促せば側近はニツコリと笑顔を見せた。余程親しい間柄でない限り騙されるであろう凶悪な笑顔だ。

「自分の足で歩く事も知らないようなご令嬢なんてお伽噺の中だけかと思っておりましたので」

日の強さなど知らないだろう白い足に、怪我などした事のないだろ

う薄い皮膚。

きつと大事に大事に、真綿で包むように育てられたのだ。足と手はその人間の生きてきた道を最も明確に現す部分だ。あのお姫さまの足は自らの力で長く歩く事を知らない足だ。重い荷物を担ぎ、素足で砂利を踏み締めて生きる強さをまるで知らない足。

ベルリードは己自身が自らの手で道を切り開いてきた自負があるだけに、形もない地位だけで安穩と生きてきた人間を心底嫌っていた。

それはデイル以上に根深い憎悪。

吐き捨てるような側近の口調にデイルも眉を顰めた。

「そんな人間がいるのか」

これは想像以上に厄介な人間を押し付けられたらしい、とデイルは重いため息を吐いた。

「とりあえず、レジーナとライドルの二人を傍につけてますので滅多な事はないでしょう」

「そうか。彼らならしっかりやってくれるだろう」

やれやれと頷いたデイルに幾分の同情を込めて酒を注ぐ。

「ところで、計画の方はどうです？」

「後は調査の報告待ちだな。だいたいあの男の罪状は明らかだ。証拠を集めるのも馬鹿馬鹿しいくらいにな」

「ほんつとに地位だけだったんですね」

「お陰でこっちは助かったがな。決行日までまだある。ゆっくり詰めていくさ」

グツと伸びをしてデイルは不敵な笑みを口元に浮かべた。応えるようにベルリードも盃を軽く掲げる。

こうしては、最初の夜は更けてゆく。

新しく始まつたりゼイラの日常は、穏やかで楽しいものだった。暗く湿った地下の生活の静寂も、蔑みと叱責の飛び交う冷たさも、この屋敷にはなかった。

レジーナがいつも何かしら話しかけては笑っているし、控えているライドルもいつも優しく気遣ってくれる。

屋敷に来てから数日たつても姿を見せないご主人様が気にならないではなかったが、それよりもリゼイラは生まれて初めて誰かと過ごす温かさを噛み締めていた。

「今日も良い天気ですね。風も気持ちいいですよ」

窓を開けながらレジーナが言うつと部屋の中で何をするでもなくぼんやりと過ごしていたリゼイラの元にも花の甘さを含んだ風が届いてきた。

『今日も良い日だよ。気持ちの良い一日だ』

風の流れに乗って精霊たちの声がリゼイラに降り注ぐ。

誘いかけるとような彼らの言葉に微笑んで、そつと立ち上がった。

すると部屋の奥で別の仕事をしていたライドルが飛んでやって来て身体を支えてくれた。

まだ、足の怪我は治りきっていない。

歩くには介添えが必要だった。

ありがとう、と微笑むのも日常となっていた。

ぎこちないながら窓辺まで行くと柔らかな緑と華やかな彩りの花々に目を輝かせる。

空には小さな真白の雲が浮かんでいる。

そつと風に触れるように手を伸ばせば、透き通る精霊たちが細い指先に口付けていく。

「今日は外でお昼にしませんか？良い天気ですし、きっと気持ちいいですよ」

半ばうつとりと外を眺めていたリゼイラは、そんな明るい提案を半分聞き逃して小首を傾げた。

何だかとても嬉しい事を言われたような気がした。

「お庭に敷き布を広げて、箆にお弁当を詰めて。如何ですか？楽しいですよ」

ニツコリと笑いかけてくるレジーナにリゼイラはただ戸惑った。あんなにきれいな庭に自分なんかが出ても許されるのだろうか。

「お嫌ですか？」

困惑を別の意味にとったレジーナに慌てて首を振った。

強く振りすぎてちよつとクラクラした。

「良かった。それでしたら、私は早速準備をしてきますね！」

言うが早いか飛び出して行ったレジーナをリゼイラは呆気に取られて見守った。

「まったく。リゼイラ様、お嫌でしたらそう示して下さい下さっても構いませんよ。彼女はどうも押しが強すぎます」

困ったように言うライドルにも頭を振る。

とても嬉しいから。きっとレジーナよりもずっと自分の方が嬉しいのだ。

明るい表情のリゼイラにライドルもそつと微笑んだ。

あまり感情を表に出さない彼にしては珍しい慈しみの微笑みだった。

「まだお昼には時がありますから、お部屋の中に戻りましょう。髪も少し崩れてしまったようですし」

言われて気がついた。

先ほど強く頭を振ったせいで、レジーナが結ってくれた髪が解れてしまっていた。

折角きれいにしてくれたのに。

悲しそうに眦を下げたりゼイラに椅子まで導いてライドルは元気付けた。

「大丈夫ですよ。これくらいなら私でも直せますから」

言つて予想以上に器用な手つきで髪を直していく。
単純に横髪だけを編んで後ろでまとめていただけとは言え器用だ。
若草色の綾紐をきつちりと結んでしまつと朝と寸分変わらない形になつた。

嬉しそつに髪に手をやってリゼイラが振り返ると実直な近従は穏やかな笑みで応えた。

誰かところとして微笑みあふ事など前までなら考えられなかった。
他の人間が知つたら愕然とするような小さくてささやか過ぎる幸せをリゼイラは大切に胸にしまつた。

「さあ、この辺で如何ですか？木陰になつてて気持ち良さそうです」

「レジーナ、あまり先走るなど言っているだろう」

「はあい。でもリゼイラ様、此処じゃ駄目ですか」

パツと籐籠を下げた両腕を広げたレジーナの先には、彼女の言うとおり気持ち良さそうな木陰が広がっていた。

均一に駆られた芝草も柔らかで気持ち良さそうだ。

何より木陰を作り出しているどっしりとした楠にリゼイラは心惹かれた。

ほんのりと微笑むのは了承の印。

レジーナは顔を輝かせて弾むようにお昼の支度を始めた。

ライドルに手を貸してもらっていたリゼイラは、そつとその場で膝を折るとサラリと芝を撫でるように触れる。

くすぐったいような柔らかな感触が気持ち良くて何度も手を左右になぞらせる。

「完璧です！」

明るい声が響いて顔を上げると額を腕でぐいつと拭つたレジーナが誇らしげに笑っていた。

立ち上がって彼女の成果を見て、リゼイラは凄いと目を輝かせた。菱形を組み合わせた意匠を薄茶色と黄緑色の糸で織り上げた敷布の上には、豪華な軽食と幾つかの果実水が並べられて、採れ立ての果物も色を添えていた。

リゼイラは見た事もない光景にただ驚いて夢のような光景を見つめるばかりだ。

「どうぞリゼイラ様。ちょっと座り心地はよろしくないかも知れませんが」

そつと手を引かれ、おずおずと敷布の上に腰を降ろす。

柔らかな草の感触を布越しに感じてリゼイラは、不思議そうに何度も手で布に触れた。

大地は硬いのにそこから生えている草たちは踏んでも大丈夫なくらいに逞しい。

リゼイラの微笑みを見てレジーナはどうやら大丈夫らしいと内心でホッとした。

大丈夫だとは思っていたのだが、高貴な生まれの人は地べたに座るのを嫌がる事があるから少しだけ緊張していたのだ。

この分だと全く筋違いの懸念だったらしい。

「それじゃ早速、お昼ご飯にしましょう。厨房にちよつと贅沢言ってみたので、期待してくださいね」

悪びれなく言うレジーナに額を押さえながらライドルは、敷布ではなく芝草の上に直に座った。

侍女であるレジーナならともかく、ただの護衛官でしかないライドルがご令嬢と同じ敷布に座るわけには行かない。

それにリゼイラが気付いて首を傾げた。

もしかして場所がなくて座れないのだろうか。

「リゼイラ様？」

そつと場所を空けたリゼイラにライドルが戸惑う声を上げる。

ぽんぽんと自分の隣りを叩くりゼイラにどうしたものかと困惑してしまふ。

「ほら、ライドルも此方に来て座りなさいな。リゼイラ様のお召しですよ?」

からかうレジーナに苦い顔をしつつ、繊細可憐な新しい主人の期待にも似た眼差しにさしものライドルも屈した。

それでも半分ほど身体をはみ出させたのは護衛官としての忠義心からか。

「まったく素直じゃないんだから。それでは気を取り直して。どうぞ、リゼイラ様」

レジーナが勧めたのは、厚切りのパンに薄く削いだ塩漬けの豚肉と季節の野菜を挟んだもの。

庭園や散策などでの軽食として一般的な物だが、さすがに公爵家ともなると使われている材料が桁外れた。

初めて見る食べ物に恐る恐るかぶり付く。

パクリと言うよりもハムツとした食べ方だったが、パンの小麦の甘さと少し濃い豚肉の塩気が程よく混ざってとても美味しかった。

肉が苦手なりゼイラだったが、サッパリした野菜が過分な油分を消してくれるため思った以上に食が進んだ。

此処に来てから病み上がりだとしても、痛ましい程の量しか食べないリゼイラを心配していたレジーナは、外に誘って正解だったと胸を撫で下ろした。

今日の軽食も一般的に見れば子供のままごとのような大きさしかない。

「こっちのパイは如何ですか? 林檎と苳桃の二種類あるんですよ」

同じように手のひら程の大きさのパイを差し出すと、半分ほど食べ終わったパンを置いてリゼイラが狐色に焼きあがった菓子をきよ々と見る。

パイと言うもの自体を知らないリゼイラは、ふんわりと甘い匂いを漂わせる物を見つめた。

「食べてみませんか?」

籠から取り出した小さな包丁でサクサクツと四分の一に切っていく。

どうぞと手渡された焼き菓子を、じっと見つめてからカリッと欠片を齧ってこくと飲み下す。

砂糖で煮付けられた林檎の甘みが広がって、リゼイラの大きな瞳がパチパチと瞬いた。

「美味しいですか？」

続けてぱくぱくと食べるリゼイラを見て傍使え二人はそっと目を見交わして笑いあった。

こんなに沢山食べる姿を見たのは初めてだった。

それでもパイを四分の一と小さめのパンを一つ食べて、リゼイラの胃は精一杯だった。

もともと薄いスープと拳ほどの堅いパンが常食だったリゼイラの胃は、健康な人の半分ほどの大きさしかない。

杏の果実水で喉を潤す華奢な主人に言いようのない不安を抱いたのはライドールだ。

透けるように白い肌に歩き慣れていない足。

ベルリードが愛された証と見なしたそれらはライドールには別の物のように思えた。

リゼイラを傍で見たいれば良く分かる。

愛されて育った姫は、こんなに周りを警戒したり他人の心を見透かすような眼差しをしたりはしない。

いつでもこの令嬢は他者に気を使い自分の心をすり減らしているように見えた。

そして、食の細さもライドールに疑念を裏付ける。

もしかしたら、と考える。

ただその考えを表に出すわけには行かない。
勝手な想像でしかないからだ。

レジーナの弾けるような笑い混じりのお喋りを楽しそうに聞いているリゼイラを見つめ、ライドールは願った。

叶うなら、自分の想像が誤りであるように。

優しく美しいお姫さまに似合うのは輝く微笑であるのだから。

そんな楽しげな様子を離れた場所で見っていた影があった。

レジーナが誘った庭は、デイルの執務室から見渡せる場所にあったのだ。

休憩として窓辺に立ったデイルは其処で、軽やかな笑い声を耳にして怪訝な面持ちで首を傾げた。

目を向ければ、未だに顔を合わせていない自分の仮の妻の姿が遠くに見えた。

さすがに顔まで詳細に判別する事は出来ない。

だが、周りの様子からすると随分楽しそうだ。

どうやら彼の姫は自分がいなくともそれなりに面白楽しく暮らせているらしい。

皮肉気に思って、窓辺に肩を凭れさせる。

長く椅子に座って同じ姿勢を取り続けたせいで流石に体が強張った。

グツと伸びをして息を吐く。

「まあ、贅沢な楽しみに浸れるのも今の内だけだろうがな」

その時、深窓のお姫さまは一体どんな思いをするのだろうか。

ベルリードの話では容色は素晴らしいそうだから直ぐに何処か良い所に嫁ぐだろう。

淡々と遠からず来る未来を思い描いてデイルは執務へと戻る。

未処理の書類と処理済の書類が同じだけ積み上がった机の隅に、色褪せた小さな押し花が飾られていた。

朧にされたそれをそつと撫でてデイルは、己の計画を成功させるため精力的働き始めたのだった。

06＊ 月光浴

デイル公爵は色恋沙汰に興味を持たない堅物だと専らの評判だ。だが、本人として言わせて貰えばそれは少し間違っている。

興味を持たないのではない、既に知っているからそれ以上は必要ないだけだ。

月夜の晩にひっそりとした静けさを楽しんでいたデイルは、執務室の机にあった物と同じ栞を大切そうに手にしてそれを額に当てた。これはとても大切な思い出の証で、約束の形だ。

黄ばんだ台紙に貼られているのは、元々は金陽花と呼ばれる黄色い五弁の小花だった物だ。

既に色は茶色く変じていたが、思い出までは褪せる事はない。

目を閉じれば、明るい笑い声と共に思い出せる陽だまりの記憶。

あれは公爵家に連れてこられて間もない時だった。

無理やりに母と離されて厳しい貴族の暮らしを強いられていた頃だ。

歴史だ政治史だと、いい加減嫌になって屋敷を抜け出して適当に逃げ出した先で出会った優しい人。

今では、その場所が何処だったか曖昧だが、その人の事は良く覚えている。

栗色のふわふわとした長い髪をした美しい女性。

多分、何処かの貴族に囲われていたのだと思う。

けれどそんな影を感じさせない澁刺とした笑顔の素敵な人だった。

最初は迷い込んできたデイルに驚きながら、手作りの決して上手とは言えないお菓子を振舞ってくれた。

それから何度となく訪れては、一緒に花を摘んだり洗濯をしたりと貴族の子弟とは思えない事を二人で楽しんでやった。

今でも忘れられない思い出がある。

数ヶ月ほど勉学の一環だと地方にやられていて戻って来た時。

彼女しか暮らしていなかった筈のその家に新しい住人が増えていた。

住人と言っても、小さな小さな子供。

生まれて一月ほどの赤ん坊だった。

彼女の子供だった。

―可愛いでしよう。やっと一ヶ月なのよ―

そう言つて見せてくれた赤ん坊は、確かに可愛かった。

溶けるような愛おしそうな微笑みを向けられた幼子。

幸福を絵に描いたような母子の姿がまだ子供だったデイルにも強烈な印象を与えてくれた。

それが、長く続かない幸せだったとしても。

―名前はね、私の旦那様が与えてくれるのよ。でも、当分帰つて来れないから勝手に私が付けちゃったわ―

旦那様、その言葉を口にする時彼女は恋する女性だった。

デイルの遊び友達でも、揺ぎ無い母親の顔でもなく。

一途にたった一人だけを心から愛する女性の顔だった。

―ねえ、デイル。もし私に何かあったらあの子をお願いね―

いつだっただろうか。

突然にそんな事を言われて、驚いたことがあった。

今から思えば、何かしら感じ取つていたのかもしれない。

その時には赤ん坊は三歳になっていた。

母親に似て良く笑う子で、デイルはすっかり懐かれていた。

デイル自身、そんな子供が可愛くてお兄さん気分を味わつていたのだ。

―お願いね。旦那様が戻つて来るまで、この子を守つてあげてね。

約束よ―

約束。

その言葉と共に差し出されたのは、金陽花。

神々が誓いを交わした詞の欠片から生まれたと言われる美しい花。

―この子を、ミルレイアをお願いね―

――約束よ――

けれど、その約束を交わしてから二月後。

彼女は姿を消した。

ささやかな家を見る影もなかった。

勿論、小さなミルレイアの姿も。

体が砕けるかと思つた衝撃を思い返して、デイルは唇を噛み締めた。

あの時の自分は彼女たちのその後を突き止める力はなかった。

だが、今はそれが出来るだけの力を得た。

今度こそデイルは彼女との約束を守ろうと決意していた。

小さなミルレイア。

母である彼女は病で没したのだと風の便りで知った。

けれどミルレイアの消息だけは、どれ程手を尽くしても判らなかった。

だが、死んだという確固たる証拠もなかったのだ。

まだ生きている可能性はある。

何としても見つけ出したかった。

褪せた栞を握り締めてデイルは目を閉じる。

目蓋の裏に、光を背に笑う彼女と幼子の笑顔が浮かんで消えた。

「ん？あれは……？」

目を開いて窓から庭を覗いたデイルは、視界を横切った物を捕らえ小さく呟いた。

ふと目が覚めたのは、優しい気配を感じ取ったからだ。

柔らかな羽毛の布団を退けて起き上がったリゼイラは、痛む足でひよこひよここと露台に続く窓へと向かった。

大きな窓硝子を音を立てないように開いて、誰も居ない庭へと出る。

素足で触れる草の感触は昼間は感じなかった心地よさで、痛みを忘れてリゼイラは歩んだ。

夜風が薄い夜着をくすぐるが、風はリゼイラを傷つけない。優しい温もりを与えながらただリゼイラを導くだけだ。

ゆっくりと歩を進めながら、昼間とは違う外の様子を見つめてうっとり息を吐いた。

空は透明な黒に藍を垂らしたようで、星々が砂の様に散っていた。草花は眠っているのか、そっと下を向いている様子が可愛らしい。清かな空気を味わいながらリゼイラは迷うことなく足を進めていく。

そうして、辿り着いたのは庭の奥の生垣を越えた所にある小さな泉だった。

星明りに輝くその泉にリゼイラが近づくとふわりと胞子のような光が立ち上って一人の青年の姿を形作った。

『会いに来るのが遅くなってしまって、すまなかったね。愛しい子』

『ハ克蘭。いそがしいの？』

『いいや、心配する事は何もないよ。それよりも此処での暮らしはどうだい』

心配そうに眉を寄せたりゼイラに精霊はそつと否定した。

この無垢で優しい魂を悪戯に心配させる事をハ克蘭は好まない。

誰よりも慈しみ、大切に愛されるべき子供。

甘やかな視線を注いで問いかければリゼイラは、幸せそうな笑みを浮かべて答える。

『レジーナもライドルも、とてもいい人。やさしい人』

『そう。それは良かった。愛されるべき子、そなたはもっと優しさを注がれるべきであるのに』

薄く透ける手がリゼイラの頭を包み込む。

すると、その手がゆっくりと下ろされるのに従ってリゼイラの姿が変じた。

亜麻色の柔らかな髪は、星明かりに輝く美しい月金色に。

『ハ克蘭？』

戸惑うように見上げる瞳は、宝石の様な淡く煌く蒼空色。

そうして何より変わったのは、リゼイラ自身の姿。

13歳ほどの幼い面立ちは、凜とした華やぎを見せる成人のものへ。

身体もそれにあわせるように成長している。

それは、リゼイラの数年後の姿。

やはり性別を感じさせない無垢さと儚さが印象的だ。

人の身には持ち得ないその色を纏ったりゼイラの姿は、まさしく天上の美しさだった。

『もう少し、もう少しだよ。悲しみの子。あと幾月も待たされはしないだろうから』

『どうしたの？ハ克蘭……』

『もうすぐ……っ、どうやら招かざる者が来たよう。今宵はここまでに』

すうっと消えていく精霊に、取り残されたりゼイラは困り果てた。

悲しみの子、そんな風に言われたのは初めてだった。

考えに囚われれば不安が湧き上がってくる。

けれど、その前に消える寸前の言葉が気になった。ハ克蘭はこの場に何かを訪れるのだと言っていた。

一体何が来るのだろうか。

此処からいなくなった方が良いのだろうかと考えたりゼイラだったが、それは少し遅かった。

ガサツと木々のこすれ合う音がして、黒い影が繁みから飛び出して来る。

思わず身を竦めたりゼイラだったが、やって来た者の方が驚いたようだった。

息を呑む音がリゼイラの元まで届いた。

ゆっくりと近づいてくる影を強張った身体で見つめどうすれば良い

のかと必死で考える。

その間にも距離は詰められ、互いの顔が見られるまでになる。

「……まさか、神族？」

吐息のような声がごく近くで聞こえ、黒い影の顔をリゼイラは見つめた。

思いの外に端正な顔立ちの若い人間だった。

実直そうな面差しがリゼイラの何かを刺激した。

更に一歩踏み出してきた青年が、続けて手を伸ばそうとした時。

強い精霊の力が働いた。

「待って下さい！」

風の力に運ばれながらリゼイラの目は、何かを叫んでいる青年から離れられなかった。

ドキドキと胸が痛かった。

苦しかった。

それが一体何なのか、リゼイラには判別がつかない。

ただ、その夜からリゼイラは青年の面差しを追い続けた。

己にも良く分からない胸の痛みを抱えて。

ライドルとレジーナは、部屋の入り口に立っていた。

白いレースと淡い色彩でまとめられた室内は、部屋の主に良く似合
って可愛らしい。

気候の良い風華では、日中でも窓を開けていれば心地の良い風が吹
きぬけていく。

今日も晴れやかな天気で、風や草木の精霊が朗らかな歌声を披露し
ている。

気持ちの良い日である。

だが、部屋の中はあまり気持ちが良いとは言えない。
どちらかと言えば重苦しい。

いつも笑顔の耐えないレジーナも、はらはらとした表情で隣りのラ
イドールの服の裾を掴んでいる。

そして、部屋の主であるリゼイラは困惑気味で客人を前にしていた。

正確に言えば客人ではない。

「こんなに可愛らしいお嫁さんを貰うなんて、お兄様は幸せものね」

ニコニコと部屋の空気など気にもとめずに笑っているのは、リゼイ
ラよりも幾つか年上の少女だ。

深緑のドレスに身を包み、赤褐色の巻き毛を刺繍の施された共布の
髪紐で少し大人っぽく結わえている。

まるで風華の花のように華やかな美少女である。

「それにしてもあたくしにまで紹介して下さらないなんて、よっぽ
どリゼイラ様がお大事なのね」

小鳥の様に話し続ける少女はマリーニエと名乗った。

けれど、止め処ないお喋りに彼女の名前すら霞んでしまいそうだ。

リゼイラは話す事は出来ないの、合間に相槌を打っただけだったが、

話せたとしても口を挟む事は出来なかっただろう。

途中で紅茶を含むだけで精一杯だ。

「あ、そうだね。今度、あたくしの誕生日の宴がありますの。ぜひ、リゼイラ様もいらしてくださいな。そうすれば、皆にもリゼイラ様の可愛らしさをお披露目できますでしょう。まあ、いい考えだね。もちろん、いらして下さいますわよね」

聞いているだけでリゼイラは息が上がる。

落ち着こうと俯いて胸に手をあてていると、ありがとうございます、と朗らかな返答が上がって驚いて顔を上げた。

え、と思っている間にもマリーニエは楽しげに何かを数え上げている。

「うふふ、きつと楽しめますわ。宴には素敵な男性も来ますのよ。

あら、いやだ。リゼイラ様は興味ございませんわね。お兄様ほど素晴らしい男性なんていませんもの」

困惑するリゼイラは首を傾げて、目の前に座る少女を見つめるしか出来ない。

まだ、その公爵様にさえ会っていないというのに。

どうにかして断ろうと思っても、言葉の出ないリゼイラにそんな事が出来る筈もない。

困ったすえにライドルたちを見つめるが、公爵の妹であるマリーニエにただの使用人である二人が意見を言えるはずもない。

レジーナなどは一人楽しげなマリーニエの後姿を早く帰れとばかりに睨んでいる。

「まあ、もうこんな時間。そろそろ刺繍の時間になってしまいますわ。今、お兄様の上衣の刺繍をしていますのよ。今度の宴に是非お召しになっていただこうと思っているの。本当ならリゼイラ様のお役目でしたのに、知らなかったものだから。今回はお許してくださいね」

終始戸惑ってばかりのリゼイラの手を取って、マリーニエがニコリと笑う。

華奢なりゼイラには強すぎるほどの力が込められる。リゼイラはそこで初めてマリーニエの瞳を見つめた。笑みなど欠片も存在していなかった。

暗い淵の様な瞳に、ゾツとする悪寒を感じずにはいられない。

怖い。本能の怯えのままスツと手を抜き取ったリゼイラに、公爵家の令嬢は底知れぬ笑みを浮かべて立ち上がった。

「それでは、長々とお邪魔いたしました。宴には是非お出くださいませね」

あくまでも品良くマリーニエが部屋から出て行くと、リゼイラは緊張のあまり感じなかった疲労に力を奪われた。

一人掛けの椅子に埋もれるように倒れた主人にレジーナが飛んでいく。

「大丈夫ですか？すぐにお茶を入れなおしてきますから」

まったく口の付けられなかったマリーニエの茶器とすっかり冷めてしまった紅茶を持ってレジーナは慌しく出て行く。

いつもと変わらないレジーナに、強張っていた頬が緩む。

「お疲れ様でした」

そつとライドルから声がかけられた時には、ぎこちないながら微笑み返す事が出来た。

無理しているのが判ってしまう笑顔にライドルはそつと解れた髪を梳き上げる。

気持ち良さそうに目を閉じるリゼイラに、ライドルは不思議な感情が沸き起こるのを感じる。

「マリーニエ様は、公爵様の義理の妹様にあたる方です」

愛しい気持ちを紛らわせるように話し出す。

ぼんやりと見上げてくる胡桃のような大きな瞳に、そつと微笑みかけて公爵家について語った。

仕えている者たちには、半ば公然の秘密となっている事だ。

「先の公爵様と奥様の間には三人のご子息と二人のお嬢様がいらっしやいました。他のお子様方は流行り病でお亡くなりになられまし

たが、奇跡的にマリーニエ様だけが病を得る事はありませんでした」

初めて聞く事柄にリゼイラは驚きに目を見張った。

「後継者となられるご子息を失くした前公爵様は、デイル様をお引取りになられたのです」

寄りかかっていた身体を起こしてライドルの話しに聞き入る。

その間に、戻って来たレジーナが黙って紅茶を用意してくれる。

甘い蜂蜜を少しだけ入れたのは、疲れを癒せるようにと言うレジーナの心配りだ。

一口に飲んでリゼイラは、その甘さにビックリしながらも、もう一口飲んで美味しさに思わず顔がほころんだ。

ライドルは、幼い主人の反応に公爵家の歪んだ実態など知らせて良いものか迷いを巡らせた。

けれど、遅かれ早なかれ知るようになるだろう。

たとえ名ばかりの花嫁であっても、デイルの妻と言う立場にたったのだから。

純粹な眼差しで見上げてくるリゼイラに、わずかに苦い表情を浮かべて続く言葉を口に乘せた。

「デイル様がお屋敷にいらしたのは十歳の事です。マリーニエ様は二歳でした」

気付けばレジーナがそつと一步下がっていた。

「お二人は同じ屋敷で暮らすようになりましたが、ほとんど顔をあわせる事はなかったそうです」

話の先の想像がつかないリゼイラは、黙って話を聞き続ける。

その無垢さにライドルは告げるのを止めるべきか迷う。

そつと目を伏せて思うのは、歪んだ美しさに固執し続ける令嬢の姿と貴族の娘に嫌悪に近い感情を抱いているこの屋敷の主人。

全ての原因は、あの時からだ。

艶やかに花開いた少女は恋に落ちたのだ。

高潔な青年へと成長した若き公爵に、血の繋がった実の兄に。

「……マリーニエ様は、デイル様の事を……とても大切に思っているのです」

躊躇して、結局ライドールは事実をそのまま告げる事は出来なかった。

希釈して伝えた言葉に、リゼイラは疑問も抱かずに素直にライドールの言葉に頷いた。

きっとだから、いきなりやって来た自分は疎まれているのだろう。

嫌われること自体は悲しい事に慣れてしまっていた。

特に表情を変えることもなく黙って受け入れたリゼイラに、ライドールはそれ以上何も言えなかった。

飲み下した紅茶は、苦かった。

その日、ベルリードは不思議な光景を前に珍しくどうしたものかと頭を悩ませていた。

迅速、的確が信条の自他共に認める有能な側近の前にいるのは、若くして国王の右腕と目されている公爵、である筈だ。

ちなみに自分の主でもある筈なのだが。

開け放たれた日の差し込む窓辺で、腑抜けたように頬杖をついているデイルに才気煥発な公爵の姿は見当たらない。

何があったのか。

最後に会った昨日の夕方までは、普通だった。

何かあったとしたらその後。夜半に起こったのだろう。

「……夜這いでも掛けられたんですかねえ」

あり得ない事を呟いて、このままだと仕事にならないとわざと足音を立てて窓辺に近づく。

手にした資料を珍しく乱暴に置くと、物音にハツとしたかのようにデイルが我に返った。

「何だ、お前か」

「お前か、じゃないですよ。何腑抜けた顔をさらしてるんです？まるで、戯曲の恋に落ちた道化師みたいですよ」

何気なく皮肉ったベルリードの言葉に、デイルは予想以上に衝撃を受けたらしい。

沈着で年不相応に落ち着いた若公爵は、見事に座っていた椅子から転げ落ちた。

呆氣にとられたベルリードは、床に手を着いたまま顔を真つ赤にした主人を、見つめる。

「は、はは……。ちよつと本当ですか！いつのまにそんな事に？」
「な、何がだ」

「何が何もないでしょう。まさかとは思いますが、どこぞの女性に夜這いでもかけられたんですか？」

「馬鹿！そんな人じゃない！」

嬉々として詰め寄ってきた悪友に、デイルは思わず口を滑らした。

にんまりしたベルリードの笑顔に気付いて悔やんでも遅い。

「それで、好きになったんでしょう？」

一転して優しい口調で問いかけられてデイルは、昨夜の事を話し始めた。

自分で言いながらもあれが夢ではないのかと疑ってしまう。

けれど、ずっとあの何処か寂しげな雰囲気をまとった美しい神族の姿が離れない。

かき消すように去っていった人に、もう一目で良いから会いたくて仕方がないのだ。

全てを語り終えて、デイルはまた物憂げに外を見つめだす。

事の次第を聞いたベルリードも、まさか相手が神族だとは予想も出来なかったため、驚いていた。

この恋愛沙汰には鈍い主人が恋に落ちたのが、神に最も近いと謳われる一族だとは。

まだ相手が人間であるなら、いくらでも協力するのだが、相手が悪い。

デイル自身、判ってはいるのだろう。

遠くを見つめる眼差しは、甘さを含まずただ切ない。

こんな状態のデイルに追い討ちを掛けるのは気が進まなかったが、早急に伝えねばならない事があるのだ。

私情を抜きにした側近の顔でベルリードは、封書を差し出した。

「……案内状？」

「マリーニエ様からお預かりしました」

その名前にデイルはハッキリと不快を示した。

何かある毎にまとわり付いて来ては、仕事の邪魔をする妹をデイルは好んではいなかった。

たった一人の血の繋がった妹であるから我慢をしているだけで、無関係であるなら傍に寄らせる事もなかっただろう。

「来るマリーニエ様のご誕生の宴に、ぜひ花嫁さまとお揃いでご出席を、との事です」

「花嫁……？ああ、あれか」

そう言えば、そっちの問題もあったか。

すっかりと忘れていたもう一人の顔も知らない令嬢を思い出して、デイルは鬱陶しそうにため息を吐いた。

「断れば、また煩いな。とりあえず、出席するだけ伝えておけ」

「リゼイラ様はどうなさいますか？聞けば、既に約束は取り付けてあるそうですが」

皮肉な笑みを乗せて伝えられる言葉に、デイルは眉間の皺を深くさせる。

貴族の娘同士、さぞ話に花が咲いただろう。

「そっちは何か言ってきているのか？」

「今の所は、何も。その内、衣装や宝飾品のおねだりは来るでしょうから、その分の予算は組んでありますよ」

抜け目のない側近を労って、少し考えた後で指示を出す。

「子爵の方の案件もある事だからな。仕方がないだろう。お姫様に宴会用の衣装でも適当に贈っておけ」

「承りました」

慇懃に一礼して、ベルリードは退室した。

残されたデイルは、また外を眺める。

恋焦がれる眼差しに、愛しい人の姿は映りはしなかった。

08* 予兆

愛も恋も知らない。

愛される事も、恋する事も。

望んだ事など一度としてないから。

ただ、安らかに。

ただ、穏やかに。

日の光の下で笑うことを許してもらえるなら、それだけで幸せだったのに。

太陽が朱色の残光と共に褥に入り、清冽な月光が導となる。

昼間の突然の訪問者に疲れていたはずの体は、月の光に誘われるようにして寝台から起き上がっていた。

リゼイラは夜が好きだった。

あの暗く湿った地下に蹲るように寝ていた時から、夜が来るのが待ち遠しかった。

何故なら、ハ克蘭が訪れてくれるから。

気がつけば傍にいてくれた精霊は、いつも夜になると変わらぬ微笑みで会いに来てくれた。

誰にも構われる事のなかった子供にとって、精霊の存在だけが喜びであり楽しみだった。

だからか、夜になりハ克蘭が訪れる時刻になると自然と目が覚めるのだ。

慣れた足取りで露台から庭へと降りる。

空には満ち始めの細い三日月。

戯れる風が、リゼイラの全身を洗うように吹き抜けた。

瞬間、リゼイラはがりとその姿を变じる。

幼い子供の姿から、大人へと足を踏み出した狭間の美しい姿へと。月金色の髪がキラキラと星明りに揺れて、視線が高くなった頃にリゼイラは戸惑った。

思わず足を止めたリゼイラは、輝く金の髪を疑問に思いながらもあの泉へと急いだ。

ハ克蘭なら何か知っているかもしれない。

ドキドキと高鳴る心臓は、この姿のせい。

リゼイラは敢えて考えないようにしていた青年の事を思い出して、知らず頬を赤く染めた。

背の高い、逞しい体躯の青年だった。

現れた一瞬に、恐怖は覚えたが、穏やかな瞳と清潔感のある顔立ちに一目で好感を抱いた。

何故かその顔を見た時に嬉しい、と思ったのだ。

知らず、もう一度会いたいと思っていた。

ハ克蘭があの場合から連れ戻してくれた一瞬前。

何かを言おうとしていたのも思い出す。

風に音を遮られて、声が聞こえなかったのだけれど。

何を言っていたのだろうか。

気付けば、名前も知らない青年の事ばかり考えていたりリゼイラはふるふると顔を振った。

火照った顔を夜風で冷やす。

見覚えのある繁みを越えて、リゼイラは泉の元へと足を踏み入れる。

『ハ克蘭？』

誰よりも安心出来る精霊の名を呼んで、リゼイラは驚きに足を止めた。

そこに精霊の姿はなかった。

代わりに、かけられたのは聞いたことのない声。

「……また、お会いできましたね」
あの夜、出会った青年が泉の淵に立っていた。

デイルは、夜が訪れると居ても立つても居られなくなった。
また会える保証など万に一つも存在しない。

けれど、幾ばくかの可能性であの泉に彼の人が見れるかもしれないのだ。

そう思うと夕食もそこにデイルは月が昇るのも惜しんで泉へと向かっていた。

滾々と湧き出る泉が三日月を映し、やはり無謀な賭けだったかと肩を落とした、その時。

かさ、と小さな葉擦れの音に一瞬で振り返っていた。

繁みから顔を出した姿に、初めは夢かと思った。

恋焦がれすぎた想いが見せる幻だろうか。

惹き付けられるようにその顔から視線が外せないまま、また逃げられないようにと努めて優しい声を出した。

他人にここまで気を使ったのは初めてだった。

改めてその美しい姿を目の当たりにして、デイルは己が恥ずかしいほど緊張している事を自覚していた。

無様に掠れてしまった声に、深い羞恥心を感じながら、必死で続く言葉を探す。

「あの、どうか此方にいらしてもらえませんか？」

繁みの所で、立ち止まったままの美しい人を必死で掻き口説く。

もっと社交界にも興味を持つのだった。

そうすれば、もっと洗礼された所作で会話を繋ぐ事も出来るのに。

深く後悔しながら、けれどそんな悔やみはそつと踏み出された足音に瞬く間に消えて行く。

躊躇うように目の前まで現れた人は、やはり美しい。

流れる金の髪も、深い思慮と恥じらいを覗かせる青い瞳も。

触れたら壊れてしまいそんな華奢な身体つきまでが、デイルを魅了した。

「わ、私はデイルと申します。失礼でなければ、お名前をお聞かせ頂けませんか？」

ひっくり返る声を無様だと感じる余裕すら、デイルにはない。

ただ、今にも消えてしまいそんな恋しい人の事が一つでも多く知りたかった。

眩しげに見上げられて、デイルの心臓が大きく高鳴った。

花のような唇が、何事か音を紡ぐがデイルには聞こえない。

数度動いた唇は、やがて申し訳なさそうに閉じられてしまった。

「失礼ですが、お声が？」

そうだとしたら何と痛ましい事だろう。

ほっそりとした喉からは、きつと妙なる声が紡ぎだされるはずであるのに。

華奢な手が薄い絹の帯びの前で組まれ、ゆっくりと白い顔が上下した。

「それは、失礼しました！ですが、あの、お嫌でなければ少しの間でよろしいのです。貴方の幾ばくかの時間を私に与えては下さいませんか？」

咳き込むようなデイルの願いに、戸惑うように蒼空色の瞳が揺れる。

返事が返される僅かの間が酷く長く、まるで断頭台に上がる囚人のような気分で待つ。

呼吸すら止めて食い入るように見つめてくる眼差しに押されるように、天上の美しさを持つ人はそつと頷いたのだった。

デイルと名乗った青年の話はとても面白かった。

知らない世界の事を知るのは興味深かったし、何より楽しそうに語るデイル自身が素敵だと思った。

リゼイラには、こんなに熱中して語れるような事は何一つなかったから。

決して大きな声ではなく、ささいな日常の出来事や最近読んだ本の事を身振りを交えて話すデイルを眩しく思いながら、リゼイラは静かに耳を傾けた。

そうして過ごしている内に、初めに感じていた緊張はいつのまにか解れていた。

ただ、時折ジツと見つめてくる眼差しは不可思議な熱をリゼイラに伝えてくる。

決して嫌なものではない熱は、じんわりとリゼイラの心にしみこんで同じだけの温もりを残していく。

今までに感じた事のない感情に戸惑いながらも、この場から立ち去ろうとは思わなかった。

驚くほど打ち解けた空気の中、気付けばデイルの話にあわせて微笑んでいますらいた。

「……笑ってくださいましたね」

まるで少年のように素直な喜びを表すデイルに、リゼイラが慌てたように自分の顔を指で押さえた。

変な顔をしてしまっただろうか。

見当違いの懸念を抱くりゼイラを微笑ましく見つめながら、少しだけ照れながらそつとその指を捕らえた。

一回り大きく堅い指に、まるで硝子細工でも包むように触れられて、どうして良いかわからず掴まれた指先から硬直してしまう。

こう言った時に、どうすれば良いのか。

あの館の人たちは誰も教えてくれなかった。

ただ指先だけが触れているだけなのに、全身が縛られてしまったように動かない。

デイルの方もリゼイラの反応に、改めて意識してしまったのか赤い

顔で固まってしまった。

身動きの取れなくなった二人は、造作が際立っているせいもあってかまるで彫像のようだ。

時間が止まってしまったような一時。

それを壊したのは、跳ねた水音。

泉の精霊がいたずらな笑い声を立てて、初々しい二人をからかう。ハツとしたリゼイラが、思わずデイルの手から逃げ出すように立ち上がった。

あらためて見れば、どんなに二人の距離が近かったのか判って、驚く前に顔を赤くしてしまう。

どうして自分がこんな風になってしまうのかも、理解出来ずに混乱ばかりが先立つ。

それでも、空に架かっていた月がもう沈み行こうとしている。

戻らないと。

いや、それよりも早くこの熱い顔を冷ましてしまいたい。

『……ハ克蘭！』

混乱する中で、一つの導のようにリゼイラは誰よりも近しい精霊の名を呼ぶ。

呼びかけに応える様に風が、金色の髪を躍らせる。

去ろうとする気配を感じ取ったのか、追いかけるように立ち上がったデイルが声を上げた。

「また！また、お会いして頂けますか！この泉で、お待ちしておりますから」

必死の呼びかけに、リゼイラは馴染んだ風の腕に抱かれながら小さく、それでもハッキリと頷き返した。

『……ハ克蘭？』

部屋へと運び込んでくれた精霊はいつもと少しだけ様子が違ってい

た。

いつもなら、いくつかの言葉を贈ってくれて姿を消してしまうのに、今夜は考え込むように難しい表情で黙っている。

常と違うハ克蘭の様子に、リゼイラは不安になる。

『ハ克蘭、どうしたの？』

月が光を消して、いつのまにかリゼイラは幼い姿に戻っていた。

小さな手が、透き通る精霊に重なる。

不安な気持ちが揺れる空気に溶けたのか、精霊は宿めるような笑みを浮かべた。

『いいや。なんでもないよ愛しい子。あの人間の男は…』

『デイル、さま？』

『そつ……。好きかい？』

『好き？』

唐突な問いかけにリゼイラは、無垢な表情のまま首を傾げた。言われた意味が判らない。

好き、と言う言葉はリゼイラの中であまりに希薄だ。

『ハ克蘭は好き』

考えて出された言葉に、ハ克蘭はホツとしたような困ったような不思議な笑みを浮かべた。

リゼイラは誰かを愛さない。

愛せない。

幼い姿のリゼイラにずっとその成長を見守ってきた精霊は安堵する。

『……でも、デイルさまは』

続けられた言葉は途中で途切れてしまった。

『悪かったね。変な事を聞いてしまって。良くお休み』

『ハ克蘭』

透明な眼差しに、そつと手を重ねてハ克蘭は夜空に解けた。

一人、露台から外を眺めてリゼイラはそつと手摺に顔を伏せた。

『好き……じゃないよ』

好きなんて、優しくて心地よい感情じゃない。

ハ克蘭に感じる気持ちはデイルには感じなかった。

一緒にいて好きだとは思わなかった、安心も出来なかった。
好きじゃ、ない。

ただ、呼吸が出来ないくらい。

熱くて、苦しくて。

笑った顔が、忘れられないだけ。

あれから、ほとんど眠れなくて羽枕に顔を埋めたのは、太陽が朱色の裾を覗かせてからだった。

レジーナが寢室の窓を開けに来た時も、まるで種のようにまるまって眠っていた。

掛け布が螺旋を描いて、こんもりと小さな山が出来ている。思わず笑ってしまいながら、山の頂上にそつと手を添える。

「リゼイラ様、朝ですよ」

優しく揺すぶると子猫の鳴き声のような小さな声が漏れる。

そう思ったのはレジーナの気のせいかもしれない。

リゼイラは話せないのだから。

数度呼びかけると、青白い目蓋がゆつくりと開かれた。

「おはようございます。もう朝ですよ」

朗らかに朝の挨拶をすれば、半分夢の中のリゼイラがほにやと笑う。

そんな表情は、まるで赤ん坊のようで見るたびに実は癒されているレジーナだ。

抱きしめて頬ずりしたくなる衝動を必死で抑えて、目をこすりながら起き上がる主人のために水差しを用意する。

リゼイラの髪は、真っ直ぐだが触ってみると見た目に反してとても柔らかい。

そのせいか朝起きると、くるくると変な癖が良くついている。

今日も、枝豆の蔦のようになってる髪をレジーナは櫛で梳く。

半分寝ぼけているリゼイラは、促されるように顔を洗って、鏡の前でされるがままになっている。

「今日は珊瑚の耳飾りに合わせましょうか」

小さな花を二つ重ねた華奢な耳飾りでリゼイラを飾って、専用の部屋からそれにあう衣装を取り出してくる。

レジーナが選んだのは、淡紅色の絹にそれよりも明るい色で小鳥の刺繍がしてある物だ。

リゼイラが輿入れした時に用意された多くの衣装の内の一着だ。綺麗な絹はただの女官であるレジーナなど一生袖を通せないくらい高級なものだ。

少しだけひんやりした布地にうつとりしながら、ぼやぼやしているリゼイラに着せ付けていく。

あまり派手ではないが、無垢な印象の強いリゼイラが着ると、病的なほど白い肌に色が添えられて明るく映える。

最後にふんわりとした布を背中と結んで支度が完了する。

本当ならこの後で、対で用意された靴を履いてお仕舞いなのだが、足を痛めてから室内では素足で通していた。

前の様に誰か訪れてくれば別だが、それ以外であれば特に見る者もないのだからとライドールが提案したのだ。

レジーナも、リゼイラの足が無闇に傷つくよりは、とその考えに賛同した。

結果、リゼイラは痛みから離れて自由に歩きまわれるようになった。

「それじゃ、髪をまとめますね」

一度梳いた髪を、今度は少量の蜂蜜を混ぜた水を振りかけながら綺麗に結っていく。

長い髪を一つに大きく結うのが今の流行だが、まだ幼いリゼイラには似合わない。

とは言っても少女たちのように、二つに結わえてしまうのも子どもっぽくなりすぎる。

櫛を片手に考えて、両脇の髪を緩く編んで耳の上で纏め上げた。

小粒の真珠の髪飾りを添えれば、まるで神話に出てくる春の女神のようだ。

自分の腕に満足して一人頷いていると、そこで目がハッキリと覚めたらしいリゼイラがびっくりしたように鏡を見ていた。

「あ、どうですか？頭とか痛くないですか？」

恐る恐る髪に手を伸ばしていたリゼイラは、パツと手を放してから小さく首を横に振った。

レジーナはまるで精霊のようだといつも思う。こんなに凄い事がすぐに出来てしまうのだから。

尊敬の眼差しで見上げると、につこりと屈託ない笑みが返された。

「それじゃ、朝食の準備を致しますね。今日は、美味しいチーズがあるんだそうですよ」

軽やかに部屋中を飛び回るレジーナを、小さな微笑みと共に見ながらその後について食事を取るための部屋へと向かった。

公爵様のお屋敷はとても広い。

与えられた部屋だけで、お屋敷が埋まってしまうのではないだろうか。

そんな事を思ったけれど、庭に出て見てみれば、この部屋が幾つあっても足りないくらい大きかった。

円卓に置かれた花瓶に、まだ綻んだばかりの花が一厘飾られていた。

この花は、毎朝ライドルが庭園で取ってきてくれているらしい。

こっそりレジーナに教えてもらった時は、驚きと嬉しさで涙が零れそうだった。

準備された席に着くと、部屋の隅にいたライドルが銀のお盆に朝食を乗せて運んでくる。

今日の献立は、柔らかい白パンと塩付けのハムにとろんとしたチーズ、小皿には採れ立ての果物たち。

あまり食べれないリゼイラの負担にならないようにと、その量も加減されている。

パンに付けるためのジャムや蜂蜜も数種類ずつ用意されあった。

最近のリゼイラの楽しみは、この豊富な種類の中から一つを選ぶ事だ。

望めば好きなだけ、好きな種類を食べて許されるのに、リゼイラは

毎朝一つだけ選ぶ。

「今日はどれになさいますか？昨日新しく作られた杏もありますよ」

レジーナが紅茶の準備をしている横でライドルが、ジャムの小瓶をリゼイラの前に並べる。

真剣な眼差しで悩んでいるリゼイラに、ライドルの口元が知らず綻ぶ。

そうしてそつと指差された新作の杏のジャムを掬い取って皿のふちに乗せる。

「この前、厨房の者たちにリゼイラ様がジャムがお好きなようだと伝えたら、早速作りだしたんですよ」

その時の料理人たちの意気込みを思い出してレジーナはクスクスと笑う。

あまり部屋の外から出ないリゼイラだったが、あの庭でお昼を食べた時に厨房まで足を運んだのだ。

美味しいお料理のお礼を言いたくて、少し困ったようだったライドルに珍しく強く頼んだのだ。

突然現れた公爵夫人に厨房は大混乱だったが、言葉でなく身体いっぱい感謝を表したりゼイラに、一目で好感も持ったようだ。

あれ以来ライドルやレジーナが厨房に顔を出すと、好きな物は何だ、今日はたくさん召し上がったのか、と質問が怒涛のように押し寄せてくる。

本来であれば、もつと品数も量も多く出てくるはずの食事が少ないのも、厨房の心遣いの一つだった。

そんな優しさが嬉しくて、頬を紅潮させながら杏のジャムに乗せたパンを一口食べる。

杏の香りと甘みがふわりと口の中に広がって解ける。

美味しい。

心のままに笑えば、美味しかったと伝えておきますね、とレジーナに言われた。

本当に夢のような幸せだとリゼイラは、不思議と苦しくなる胸を握り締めた。

美味しい朝食も済んで、ぼんやりと柔らかな日差しに身を委ねていると自然に思い浮かぶのは昨夜の事。

たくさん話を聞いて、そのどれもが面白かった。

けれど、その話を思い出そうとしても何も思い出せないのだ。

記憶を反芻すれば、浮かび上がるのはあの青年の笑顔。

夜空の下で語らったと言うのに、その人が思い浮かぶのは温かな太陽の光なのだ。

温かくて、とても印象的な微笑み。

見ていると苦しくて、心臓が痛くなるのだ。

笑っている顔で、怒っていたり、嫌な顔をしているわけじゃないのに。

何故だか、いまこうして思い出だけでも苦しくなる。

どうしてだろう。

ここに来てずっとたくさんの想いを経験したと思う。

けれど、その中にもこんな気持ちは存在しなかった。

痛くて、苦しくて、熱くて。

ふっと吐き出した息にも、熱がこもっているような気がする。

一人掛けの柔らかな椅子の上で、リゼイラはころんと丸くなった。

綿打ちのされた椅子は、膝を抱えるリゼイラを包み込んでくれる。

まるで自分自身を守るようにうずくまるのはリゼイラの癖だった。

「リゼイラ様、眠いのでしたら寝台までお連れしましょうか？」

朝からどこかぼんやりとしている主人を気遣って、ライドルが申し出る。

心配かけてしまったらどうかと慌てて顔を上げて、首を横に振る。ホッとしたように笑うライドルは、手にした本をリゼイラに差し

出した。

「よろしければお読みになりますか？昨日、部屋の整理をした時に出てきた物ですが」

両手で受け取ったその本は、正方形に近い形をした大判の絵本だった。

少しだけ色褪せた表紙には美しい庭園の風景と東屋が描かれていた。

ライドルが本来なら処分されるはずだった本をとって置いたのも、この表紙絵を見たからだ。

庭の風景をいつも懂れるように見つめている主人に見せたら喜ぶだろうかと思っただ。

その考えが正しかったのは、見る間に綻んだ表情で明らかだった。絵本は今まで見たこともないくらい素敵なものだった。

四季折々の花が咲き乱れ、極彩色の小鳥や蝶がとびかっている。

一枚一枚の絵をまるで夢見るような顔で眺めて、リゼイラはほつと吐息を吐き出す。

なんて素敵なお場所だろう。

ここのお庭も素晴らしいものだけだ。

虹色に輝く空や青い羽を散らす小鳥、黄金の果実などは見た事がない。

広い世界には、こんな華やかな場所が存在するのだろうか。

リゼイラにはこの絵以上の想像など全く浮かばない。

食い入るように見つめるリゼイラに、ライドルが紅茶と焼き菓子を用意して声をかける。

レジーナは、先ほど呼ばれてこの場にはいない。

「それは神界の様子を描いたと言われる絵なのですよ」

適度に冷まされた紅茶を受け取って、リゼイラは初めて聞く単語に首を傾げた。

シンカイって何だろう？

疑問をいっばいに広げたりゼイラに、ライドルは優しく説明する。

「神の世界と書きますが、神族が暮らす世界のことです。神族は、美しい黄金の髪とこの空の様な青い瞳を持っている種族で、滅多な事では人間界には降り立ちませんね」

ライドールはリゼイラの膝の上の本を指で繰って、一枚の絵を指差した。

そこには、たわわに実る果実の木に戯れる神族の姿が描かれていた。

そのどれもが、ライドールの言うように金の髪と青の目をしていた。

まるで、昨夜の自分と同じように。

今までとは違う熱心さで絵を見つめるリゼイラにライドールは気付かなかった。

酷く取り乱したように戸が叩かれたからだ。

驚いて確認の声をかけるとレジーナが、飛び込んできた。

いつも元気な彼女だが、こんな乱暴な所作は初めてだ。

リゼイラも驚いて胸に手を当てて息を整えている侍女を見つめた。

「どうしたんだ？」

近くの水差しから水を注いでやってライドールが尋ねる。

冷たい水を一気に呷って、ようやく落ち着いたららしいレジーナはまですりゼイラに無作法をわびた。

「す、みま、せん。ちよつと急いでいたもので」

まだ荒い息で謝るレジーナにふるふると首を振って、そつと氣遣うように手を伸ばす。

小さく優しい温もりにレジーナは、感謝の笑みを浮かべる。
本当に愛すべき主人だ。

思わずほんわかした室内だったが、レジーナは慌てて我に返る。

「そ、そうです！大変なんです！」

「だから何があつたんだ？」

訝しげな仕事仲間に、レジーナは掴みかかる勢いで詰め寄った。

「ご主人様がいらつしやるそうです！」

「……ご主人様が？」

「そう、公爵様が！」

勢いに吞まれたライドールがなすがままに言葉を繰り返して、最後にハッと表情を強張らせた。

レジーナは泣きそうに顔を歪めている。

「どうしましょう……」

「いつお出でになるんだ？」

「午後からお見えになるって。何のお話なのでしょう。このままお会いにならないのだと思っていたのに」

不安げに呟くレジーナの視線の先には、戸惑うように首を傾げたりゼイラがいる。

何も知らない幼い主人に、まだ仕え始めたばかりの二人だが、本来の主人である公爵よりも心を傾けている。

公爵に問題があるわけではなく、ただどうしても立場が弱くなるであろうリゼイラが愛しいと思うのだ。

貴族の生まれで、何不自由なく育ったであろうに、こうして周りの者たちをごく自然に気にかけてくれるリゼイラに心から仕えたいと思っている。

できるなら、幾らの災いも降りかからぬように。

「とにかく、いらつしやるのだから準備を整えなければ」

「そうね。リゼイラ様には私から説明するわ。衣装などはこれで良いわよね」

「ああ。靴を用意するのを忘れないように」

「判っているわ。それと少しだけお化粧も」

慌しく打ち合わせて、二人は大車輪で動き始めた。

にわかに忙しくなった部屋にリゼイラは、本を抱えたまま困惑していた。

居場所なく立ちすくんでいたリゼイラの手をレジーナがそっと引いた。

寢室の方へと誘って、朝の支度の時のように鏡の前に座らせる。

「リゼイラ様、さきほど連絡がありましてお昼に公爵様がお顔を見せに来るそうです」

告げられた言葉にリゼイラは目を丸くした。

そうして、頭に木霊するのは地下にやって来た男の高笑いと蔑むような眼差し。

ぞくりと身体を震わせたリゼイラを、不安がっているのだと受け取ったレジーナは一生懸命に取り成す。

「大丈夫ですよ。少し厳しいところもありますが、本当はとても優しい方ですから」

言いながら、その優しさがリゼイラに向けられるのは難しいだろうと思って、苦い思いを飲み下す。

どうしてリゼイラ様なのだろう。

思っても仕方のない思いが、何度も巡る。

公爵様を幾度となく貶めてきた子爵の名はレジーナも知っていた。だから、子爵令嬢のお世話を任じられた時少しだけ嫌な気分にもなったりした。

けれど実際に見えたりリゼイラは、まるで繊細なお姫さまそのもので、疎むには純粹だった。

お傍に侍るようになって、どんどんその慎ましやかな性格や分け隔てない優しさが大好きになった。

「……大丈夫ですよ。私もお傍にいますから」

浮かびそうになった涙を、瞬きで乾かしてレジーナはにつこり笑った。

一緒に握り締めたリゼイラの手は、悲しくなるくらい小さかった。

10＊ 新芽

公爵様がいらつしやる。

レジーナはそう言った。

それから、レジーナとライドルは急がしそうに部屋中を動き回っている。

お昼のご飯の後に公爵様は来るらしい。

一人、リゼイラは邪魔にならないように寝台の上に座っていた。膝の上にはライドルがくれた絵本を広げている。

だが、その美しい絵の世界にもうまく入り込めないで居る。理由は明らかだ。

公爵様がいらつしやるから。

『公爵さま……』

呟いて目を閉じる。

どんな方だろうか。取り入らなければならない方だ。

レジーナは厳しいけれど優しい方だと言っていた。

それなら、取り入れるだろうか。

そう考えて、ふと首を傾げた。

取り入るってどうすれば良いのだろう。

アリゼの子どもだから取り入るのは得意だろうといわれた。

その顔と身体があれば簡単だとも。

あたりと自分の顔を触って、次に腕や胸に手を当てる。

この身体があれば良いのだろうか。

何かしたりしなくても大丈夫なのだろうか。

それだったら何とかなるかな。

初めて会う人に、笑顔を向けたり親しくしてみせたりするのは苦手だ。

まず顔を満足に見ることも出来ないのだから。

怒られないと良いな。

怖い声や大きな声を出されると身体が動かなくなってしまうて、苦しくなるから。

ぼんやりと思いながら、リゼイラは寝台の上に寝転んでいた。うつらうつらしながら、思い浮かべた公爵様の顔はどうしてか昨夜の青年の顔になっていた。

午前中の決済を全て終わらせて、デイルはぐつと伸びをした。

うつらかな日差しが、満足に寝ていない身体をやわらかく包む。

思わず午睡へと強い誘惑を感じるが、午後一番に行かねばならない所を思い出してガシガシと両手で顔を擦った。

今度のマリーニエの誕生会にまだ会ってもいなかった自分の妻と出かける事になったのだ。

幾らなんでも、その前に顔をあわせておく必要があった。

本当なら憂鬱この上ないのだが、今のデイルはむしろ少しばかり浮き立っても居た。

ベルリードなどそんな様子に訝しそうだったが、すぐに原因に思い当たったらしい。

曰くありげな微笑みを一瞬だけ向けて来た。

見透かされている事に居心地悪い気もしたが、この幸福感を幾らも削ぎはしない。

何故なら昨夜、二度と会う事も叶わないと思っていた想い人に再会出来たのだ。

そればかりか僅かな間だった二人きりで話す事もできた。

いや、話を聞いてもらえた、と言うのが正しいだろうか。

あの人は声を出す事が出来なかったのだから。

それだけは残念で仕方がなかった。

彼の人の名を呼ぶ事が叶わないから。

ため息を吐きかけて、いやいやと己を叱咤する。

そんなにあれもこれも望みすぎてはいけない。

一時、同じ空気に触れられただけでも奇跡なのだから。そっと両手を開いて、指先を見つめる。

この指が、昨日あの人に触れたのだ。

細く小さな指先に。

少し冷えた指は、触れている間にゆつくりと温まって、気付けば自分と同じ温もりを持っていた。

困ったような戸惑ったような蒼の瞳を思い出す。

この世の何よりも美しい青だった。

透き通る瞳は、どんな宝石よりも美しく見えた。

思い出すだけでデイルの胸は少年のように高鳴る。

まだ自分にこんな情熱があったとは驚きだった。

仕事以上に打ち込める事など、もう何もないと思っていたのに。

くすぶる胸の熱を持て余すことさえ、こんなにも喜びに満ちている。

苦笑交じりに緩んでしまう口元を押さえて、窓辺から熱を持った顔に風を受ける。

「デイル様、早いですが昼食に致しましょう。午後からも予定がつまっていますからね」

夢見心地から現実に戻り返る一言を無造作に投げた側近に、デイルは思ふ存分嫌な顔をした。

公爵になってから建前も取り繕う事も覚えた。

だが、本来は素直な性格だったデイルは、身近な人間の前では感情がそのまま表れてしまうらしい。

ベルリードにしてみれば、そういう所が不相応に可愛らしく思えてしまうのだが。

本人には不名誉極まりないことだろう。

嫌いな食べ物を前にした子どものような顔で、手早く昼食の支度をするベルリードに近寄って籠に盛られたパンを一つ摘む。

「支度が整うまでお待ちなさい」

まるで母親の様に手の甲を叩かれて、不服そうに白パンを齧った。公爵家に来る前からの付き合いがある二人に遠慮もない。

「軽くて良い。どうせ向こうに行けば、嫌でも食べるんだ」

「無言で居るために食べるのは、無作法ですよ」

「そんなもの気にされようが、関係ないだろう」

意に介さない公爵にベルリードも、やれやれとため息を吐いて小皿に盛り分けられていた野菜とこんがりと焼かれた厚めの肉をパンに挟んで渡してやる。

簡単にすむこの食べ方は、デイルは気に入っている。

もともと美味しい食事は好きだが、作法だ行儀だのを気にするのは嫌いなのだ。

この辺り、悪がきがそのまま育ってしまったている。

晴れ渡った青空を見上げ、デイルは軽食を片手にそつと息を吐いた。

「リゼイラ様、もうすぐ公爵様がいらっしゃいますよ」

なるべく優しく聞こえるように気遣ったレジーナに、硬い表情で頷き返して膝の上の手をぎゅっと握り締めた。

うとうとと眠ってしまった後、レジーナに崩れた髪を編み直してもらって、その後で薄っすらと化粧も施された。

白晢を通り越して透き通るように白いリゼイラの肌に白粉は浮いてしまうので、かわりに頬紅をはたかれて、唇にも薄く色を乗せられた。

化粧のおかげで、ともすれば不健康に見えるリゼイラの顔立ちはずっと華やかになった。

小鳥の舞う刺繍が施された裾からは、柔らかな布靴が見え隠れする。

部屋はいつも以上に磨き上げられ、窓辺には水の上に浮かべた花び

らが硝子の器に飾られている。

ほのかに香るのは、特別に南国から取り寄せた練香だ。

少しでも落ち着こうと外を見つめてみたり、目を閉じてみたりするけれど緊張は高まるばかりだ。

強張ったリゼイラの姿に、部屋の中で遊ぶ精霊たちも心配そうに近寄ってくる。

『大丈夫かい、穏やかな方』

『落ち着くように気持ちの良い風を送ろう』

清かな風が送られて、リゼイラはそっと微笑んだ。

『ありがとう。少しおちついた』

『それなら良かった』

『その笑顔が何より素晴らしい』

さざめく精霊たちは、けれど部屋から出てはいかなかった。

これからの事を知っているかのようにリゼイラの傍を離れない。

そんな気遣いが嬉しく、また勇気付けられる。

「公爵様のお越しでございます」

いつもより堅いライドルの声にリゼイラは息を深く吸い込んで背筋を伸ばした。

痛々しいほどに真っ直ぐな視線が扉へと向けられる。

背の高い姿が部屋の扉をくぐる。

あわせるようにレジーナが、深く頭を下げ公爵を出迎えた。

思っていたよりも大きな人だ。

あの館にいた人のような男の人想像していたが、全然違う。

着ている物も、もっとずっと簡易なものだ。

なかなか視線を上げられず、胸から腰辺りを見ていたリゼイラはその影が近くに重なってやっと顔を上げる事が出来た。

身体と同じく立派な風采の青年だった。

ライドルと同じか、もしかしたらそれ以上に背が高い。

視線が遠すぎて、顔立ちまではつきりと窺えない。

だから、初めは気付かなかった。

「……こうして顔を会わせるのは、初めてだな。私の名はセルゲイラ・デイル・ベラル、貴女の、仮初の夫になるな」
苦い口調だった。

だが、それよりも引つかかったのはその名前、そして声。

『デイル、さま？』

驚きに目を見張って、知らず立ち上がって見上げてしまった。
目線は違う。

けれど、確かに目の前にいるのは昨夜に出会った青年だ。

髪を上げ、ずっと厳しい表情をしてはいるが見間違えることはない。

「貴女の名は、すでに聞いてある。名乗りは必要ない。挨拶もだ。
座ってくれ」

リゼイラの眼差しをどう受け止めたのかデイルは、煩わしそうに早口で促した。

リゼイラが座りなおしたのを見計らってレジーナが手際よく、紅茶を注いでいく。

白磁に赤の染料で絵付けした茶器は、風華の名産である磁器の一つ。

いつものように、ありがとうと微笑むとレジーナはちらりと応えるように笑ってからすぐに円卓から離れていった。

薫り高い紅茶が二人の間で、ふうわりと湯気をのぼらせる。

リゼイラは、向かいに腰掛ける公爵様をあらためて見つめた。

やっぱり、どう見てもあのデイルさまだ。

たくさんの事を一生懸命に語ってくださった方。

デイルさまは知って要らしたのだろうか。

だから、あんなにも熱心に語らってくれたのだろうか。

自分が、花嫁だから。

そう考えた時、何故だか胸の奥が針で刺したように痛んだ。
不可思議な痛みに気をとられる前に、デイルが話しだした。

「先に言っておかねばならない。私は、貴女を妻として扱う気はな

い。これまでのように賓客として出来うる限りの待遇は取らせて頂
くが、それ以上は望まないで貰いたい」

あまりに一気に言われて飲み込むまでに時間がかかった。

だが、自分は花嫁として扱われないらしい。

何だか変に苦しい気もしたが、今までの温かい生活が変わることも
ないのだとホッと安堵した。

レジーナとライドルが傍にいて笑ってくれるだけで十分だと思う。

それすら、過ぎた幸運のような気がしていたのだから。

素直に頷いたりゼイラにデイルの方が、驚いたような顔をした。
何故だろう。

デイルさまが仰ったのを受け入れただけなのに。

「快く受け入れてくださって感謝します」

快くは、あまりなかったけれど。

その理由が判らないから、少しだけ冷めた紅茶に口をつけた。

茶器から唇を離す時に、なにかべったりした感触があつて、口紅を
つけていたことを思い出した。

白い磁器に移った紅が何故か気持ち悪かった。

「それで、義妹の、マリーニエの誕生会ですが、それにはご一緒い
たしましょう。新しい衣装はこちらからお贈りいたします。今日は
これを貴女にと思ひまして」

気付けば、デイルの口調が少しだけ柔らかくなっていた。

首を傾げたりゼイラの目の前に天鷲絨の小箱が差し出される。

これが何なのだろうか。

戸惑うリゼイラに、公爵はその蓋を開け中の物を取り出した。

日の光を弾くそれは、黄金に紅玉があしらわれた首飾り。

華やかに己を主張する装飾品にリゼイラは、困ってしまった。

こんなに豪勢な物はいただけない。

けれど、拒むのも失礼だろうか。

「どうかなさいましたか？」

リゼイラの心中など思いもしない公爵はただ疑問を浮かべて受け取るのを待っている。

胸元をぎゅっと握り締めていると、見かねたレジーナが変わりに受け取った。

「素晴らしいですね、リゼイラ様。あまりに綺麗で驚いてしまいましたか？」

言いながら手早く小箱にその装飾品を仕舞う。

後で返して貰うようにしようと決めて、デイルにそつと頭を下げた。

「いや、気に入ったのなら良かった。…それでは、失礼だが執務が立て込んでいるのでこれで失礼します」

淹れられた紅茶に口をつけて、デイルは慌しく立ち上がった。

来た時と同じようにレジーナが丁重に礼をとって見送る。

そうして、完全に公爵がいなくなってからリゼイラの元へとやって来た。

あの贈り物について伝えようとしたら、判っていますと微笑んでくれた。

「後で、角が立たないようにお返ししますわ。本当に、公爵様も何を考えておられるのか。こんな派手なものリゼイラ様には似合わないのに」

それこそマリーニエにでも贈った方が余程似合っている。

ずっしりした意匠の黄金より、繊細な銀の透かし彫り。

艶やかな紅玉よりも、淡く光る真珠。

リゼイラを彩るに相応しい物は、そんな可憐な物だ。

贈り物一つにも、相手の気持ちは推し量れるのだと言うのに。

小さな憤慨を胸にしまってレジーナは、小箱を棚のなかに片付けてしまう。

そんな心優しい侍女を見つめて、ホッと息を吐く。

さつきから変に苦しい。

どうしてだろう。公爵様として出会う前なら、デイルさまを思うの

は苦しくても辛くはなかった。

それなのに、今は辛い。痛い。

傍に居た精霊たちが、そんなリゼイラに慌てたように言葉をかけてくれる。

優しい言葉を嬉しく思いながら、リゼイラは一粒、涙を落とした。

11* 間引き

デイルは戸惑っていた。

本当ならもう少し、交流なり親交なりを深めるべきなのだが妙な混乱を抱えて予定よりも早く部屋を出てきてしまった。

さきほどまで目の前にいた令嬢を思い出す。

想像と全く違っていた。

ベルリードの言葉で想像していた人物とは正反対だった。

私の強い、家柄を誇るような高飛車な少女を思い描いていた自分が恥ずかしくなる。

淡紅色の衣装が引き立てていたのは、実のない栄華ではなく、可憐な容色。

あんなに繊細な少女を見たのは初めてだった。

デイルの周りにいる女性たちは、皆良くも悪くも遅しかった。

男の意向一つで立場が変わる彼女たちの必死さをデイルは、否定するつもりはない。

それを自分に向けられることはあまり歓迎してはいないが。

魅力的な微笑みを向けられる事も、かすかに媚を滲ませる肢体を寄せられるのも、嫌いではないが鼻を伸ばす事もない。

ふくよかな肉体に感じるのは肉欲よりも母性だ。

早くに母から離された寂しさが、女性に対して一歩引かせているのかも知れない。

女性の対応の冷静さに、義妹の行き過ぎた好意も原因に含まれている事に本人は自覚していない。

そんな事を考えながら、一番落ち着ける執務室の椅子に身体を委ねた。

なるべく人と対する時は、第三者の意見に惑わされずに自分の目で見極めてきた。

人を見極める目には自信がある。

いや、自信があつた。

それが今僅かに崩れてきつつある。

「……少しあいつの印象に影響されていたかもしれないな」

反省して、はれぼつたい目の上に腕を乗せる。

視界を遮ると身体の中から小刻みに拍動が響いてくる。

違う、問題はそんな事じゃない。

動揺したのは、子爵家の令嬢が予想と違っていたことではない。

触れた先から散ってしまいそうな儚さに驚いたのではない。

顔に出ない動揺を、心臓は正確に表す。

「似ていた」

落とすように呟いた言葉は、予想以上の重さで己に跳ね返った。

腕に覆われた眉間が強く引き絞られる。

そうだ、似ていたのだ。

あのまだ子供と言つても良い令嬢が。

似ていたのだ。

美しい金色の天上人に。

憂いを紗のように纏つた、妙なる方に。

この心を奪つた、愛しい人に。

「馬鹿なことを」

あまりに年恰好が違いすぎる。

髪の色も瞳の色も、違っていた。

大きな違いを数え上げて、それを何度も繰り返す。

その事が既に捕らわれている証だとは気付く余裕もない。

会いたいと強く思った。

星振る夜を静かな泉の水面に映して、あの方と二人で語らえたらこ

のような惑いは消えてしまふだろう。

愚かな煩悶だと無理やりに自嘲を浮かべて、気を入れ替えるように

拳を額に当てる。

「よし、仕事だ」

気持ちを切り替えて、大事な案件に集中する。

ふと、誕生会の衣装を考えねばと思い至る。
今日与えた装飾品は、適当に見繕った物だ。
適当と言っても細工も宝石も選りすぐりの一級品だったが、あの令嬢には少々派手すぎたかもしれない。
衣装はもう少し気を使って贈ってやろう。
春の淡い陽だまりに咲く、花のような令嬢に。
優しい色合いの可愛らしい衣装を。

『もうすぐ、月が満ちる』

「何やら気もそぞろのようですね」

かたん、と窓の木枠が揺れて年月の刻まれた手がそえられる。

青の下地に白綾を重ねた衣服は、特徴的な型をしていた。

けれど、珍しいと言う物ではない。

世界にこの直線的な衣装は、細かな差異はあれど多くある。

神に仕える、神官たちの礼服だ。

その中でも最高位を現す衣装をさらりと着こなしているのは、この部屋の主。

おっとりとした柔和な主立ちの老人は、風華の最高位の神官。

老人とは言っても、若かりし頃はさぞ騒がれたであろう容貌を今も漂わせ、歳を重ねた分だけその面立ちに深みを増してさえている。

「気になるのであればお行きなさい。貴方の可愛らしい方が待っているのです」

窓の外で空を見上げている精霊に穏やかに諭すが、頑固な精霊はこの手の気遣いを受け取った例がない。

『まだ太陽は天にある。あなたの傍を離れるわけには行かない』

「私ならば大丈夫だと言うのに。精霊がこんなに頑固だとは知りませんでしたよ」

精霊の気質は一言で言って奔放。

美しいもの、楽しいことが好きな彼らはいつも気の向くままに行動する。

精霊術の扱いが難しいとされるのも、ひとえに彼らのこの性情ゆえだ。

そんな精霊の中で、珍しく融通の利かない己の精霊に最高位の神官もため息を吐く。

神官でただ一人呼ぶ事を許された名を呼んで、語りかける。

「ハ克蘭。確かに、ここ最近の神殿は慌しい。けれど貴方の大切な者を振り捨てる理由にはなりませんよ」

「……あなたはこの神殿の長だ。私はそのあなたに仕えている身。なれば、神殿を第一に考えなくてどうすると」

「本当に頑固なことだ」

長い付き合いの中で、こうなるとどんなに言い聞かせても無駄だと悟る。

「それに愛しい子のことで悩んでいたのではない。もうすぐあの子の誕生月が訪れる」

気を回したのかハ克蘭が付け足した言葉に、神殿長はほんのりと微笑んだ後に、感慨深げに空を見上げた。

視線の先には水鳥の羽の様な雲が流れている。

「ああ、今年は来臨の年でしたね。そうですね。貴方の気がかりも晴れるというわけですね」

「そうだと良いが」

やはり難しい顔で漂う精霊に、神官はやれやれと見切りをつけた。

ちょうど扉が叩かれて、身の回りの世話をする少年たちが顔を覗かせてきた。

「白嵐様、お客様がお見えでございます」

「わかりました。すぐそちらに伺いましょう」

きつちりとした礼をとる神官の少年に微笑みを送って、窓辺に浮かぶ精霊を一瞥する。

そんな視線に気付きもせず熟考する精霊には声をかけずに部屋を

出た。

どうせ言ったとしても聞こえなかっただろうと思いながら。

数多の想いが巡った陽が沈み、幾多の人が望む夜が訪れる。

ぼんやりと露台に立ったりリゼイラは、迷っていた。

デイルさまはまた会いたいと言ってくれた。

けれど、昼間に会った時には夜の事は何も仰らなかった。

まるで自分の事など知らない、と無言で示しているようにも見えた。

どうしよう。

本当にデイルさまは待っていて下さるのだろうか。

でも昼間に会ったからともう来ては下さらないのかもしれない。

尽きぬ迷いを重ねている内に月が昇る。

わずかずつ丸みを増していく月のように、リゼイラの想いは膨らんでいく。

迷いながら、考えながら、リゼイラの足は泉へと向かっていく。

さらに、一陣の風がリゼイラを天上の一族へと変貌させる。

輝く黄金の髪をリゼイラはそっと手に取った。

やはり昼間の鏡に映る自分の髪とは全く違う。

手も形は変わっていないようだが、大きさが違ってしまっていた。

近くに鏡はない。だからはっきりした事はわからないけれど。

ぎゅっと胸の前で手を握り締めて、リゼイラは心を決めた。

泉へ行こう。

もしかしたら、デイルさまがいらっしゃるかもしれない。

もし、悲しいけれどいらしてくれなかったら、その時はハ克蘭に自分の事を聞いてみよう。

何かわかるかも知れない。

とても大切な事が。

歩きなれた道を辿り、リゼイラは今までになく緊張して繁みから顔を覗かせた。

そこにいたのは、

『デイルさま……』

その時、湧き上がった気持ちを言葉には出来ない。

「良い月夜ですね」

昨夜の、あの時と変わらない笑顔。

ちゃんと微笑み返す事が出来ただろうか。

柔らかな草を踏み締めながらデイルの前まで行った。

昼と同じ場所に立って、公爵様の目を見つめた。

ずっと近くにある優しい褐色の瞳。

「どうかされましたか？」

ジツと見つめていると困惑したように問い返された。

小さく首を振ってデイルの隣をすり抜けた。

泉の前に立って一度目を閉じる。

それから、ゆっくりと膝を折って水面に己の顔を映した。

見覚えのある顔が凪いだ湖面に映し出される。

今朝も見覚えのある顔だ。

公爵家に来てから何度も見た顔。

リゼイラ自身の、少しだけ成長しているが、顔だ

白い肌を彩るのは金色の髪。大きく丸くなっているのは青い瞳。

『神にちかしい一族……』

ぼんやりと呟くと、震えるように湖面に細波が立った。

泉の精霊たちが騒いでいる。

「あの！どうなさったのです！酷い顔色だ」

ふっと我に返ったりリゼイラの薄い両肩をデイルが必死の表情で掴んでいた。

真剣な眼差しだった。偽りのない目だった。

ずっと人と切り離された生活をしていたりリゼイラにだって、一生懸命な人の気持ちはわかる。

微かな微笑みを浮かべて心配そうなデイルに、何でもないと首を振った。

「本当に平気ですか？休まれた方が良いのでは？」

それでも気遣ってくれるデイルの優しさを受け入れて、抱きかかえられるようにして泉から離れた木の根元に腰を下ろした。

背に当る木肌の温もりがリゼイラの気を落ち着けてくれる。

耳をつけると流れる鼓動が聞こえてくるような気がする。

飽和する頭に目を閉じていると、そっと顔にかかる髪が掻き揚げられた。

薄っすらと確認するとデイルの大きな指が丁寧に髪を避けてくれていた。

「あ、すみません。お邪魔そうだったので」

本当に気を使ってくれているデイルの様子に、突然ああと気がついた。

仕方がなかったのだ。

自分でも驚くくらい姿が変わっていた。

デイルさまが、気付くわない。

「……お気に触ったのならすみません」

真摯に対応してくれるデイルに、ようやく落ち着いた気持ちで微笑む事ができた。

嫌われたわけじゃなかった。

ただ、気付いてもらえなかっただけ。

無自覚な痛みを飲み込んだ微笑みに、デイルは気遣わしげな表情を浮かべたが何も言わなかった。

代わりのように膝の上に置いていた手が重なった。

あの時のように、冷えた手を温めてくれるように大きな手が握ってくれる。

けれど、あの時とは違って身体が強張る事はなかった。

ただ温もりだけが優しく残ってくれる。

この時だけの優しさでも、こんな自分に、自分のためだけに与えて

くれた優しさだ。

嬉しくて嬉しくて、それなのに少しだけ悲しくて。

デイルからは見えないように浮かんだ雫を瞬きで散らした。

そうして、顔を俯けたままデイルの手を握り返す。

大きく動揺するようにデイルの手が震えたが、次には少し痛いくらいに力をこめて握られる。

その痛みが、幸せだった。

温かな幸福を噛み締めながら、リゼイラは一つだけ自分に約束した。

自分が必要とされるのはこの姿の時だけ。

それなら、それ以外の自分はデイルに近づいてはいけない。

嫌な思いをさせたくない。

だから、デイルに会うのはこの場所だけで。

夜だけ。

そう決めた。

リゼイラが小さな決意を固めたとしても、大きく何が変わるわけではない。

数日後には、デイルから誕生会の時にと美しい衣装が届いた。

この前の首飾りの件から、少しだけどんな物が届いたのかと不審そうだったレジーナも、思わず息を呑んだほどだった。

ふんわりと広がる柔らかな絹は薄紅と淡い紫を重ねた神秘的な色合いに染まっている。

リゼイラの可憐な容貌を引き立てる仕立てになっており、絹で作られた小花が散らされている。

「まあ、こんなに綺麗なご衣裳は初めて見ましたわ」

感嘆しきりのレジーナは丁寧に薄紙を巻き取りながら、遠巻きに眺めるリゼイラに微笑んだ。

「近くで見てもみませんか？」

そう勧められて、おずおずと近寄ってみるが触れるには恐れ多かった。

綺麗だと思う。

いつか見た夕焼けのような、庭園に咲き誇る花のような、それ以上に美しい彩妙な色合い。

夢のような色彩だ。

ふと、地下の薄暗い灰色にまみれていた自分が思い出された。

伸びた手が強張った。

なんて違いだろう。

こんな綺麗な物があるなんて知らずにいた。

あの小さな石の部屋。

埃ではなく泥が溜まっていた地下。

垢にまみれ、薄汚れていた自分。

忘れかけていたことをどうして、思い出したのだろう。

ああ、違う。

どうして、忘れていられたのだろう。

あの静かで穏やかな閉塞の時間を。

「リゼイラ様？」

焦点を失った虚ろな様子に気がついたのはライドルだった。

食べ終わった昼食の片づけを終えて戻って来た彼は、そつと声を掛けてぼんやりと立ちすくむリゼイラの肩に触れた。

途端、ライドルが驚いたほどにリゼイラの肩が震えた。

「……あ！」

聞こえないはずの声をライドルは聞いた気がした。

「リゼイラ様！」

くずおれた華奢な身体を咄嗟にライドルが支える。

レジーナも慌てて駆け寄る。

ぼんやりした青灰色の瞳が怯えるように揺れていた。

それは、この屋敷に初めて来た時のリゼイラのように言いようのない想いがライドルの喉元を渦巻いた。

「大丈夫ですか？最近、良く眠れて居ないのではないですか？」

驚くほど軽いリゼイラに、ドキリとしながら長椅子まで運んだ。

レジーナに温かい飲み物を頼んで、身体を休められるように腰より少し上で結ばれた飾り帯を緩める。

ころんと寝返りを打って丸くなるうとした所で、ライドルの心配そうな目に気がついた。

「リゼイラ様、このごろきちんとお眠りになっていらっしゃいますか？」

青白い顔でぼんやりとしてばかりいる主人に、ライドルは懸念を抱いていた。

それはリゼイラと出会ってから感じている違和感に続くものだ。

真剣な問いかけにリゼイラは、惑うように視線を泳がせた。

デイルとはあの夜以来会っていない。夜にしか会わないと決めたのに、不意に会うのが怖くなってしまった。

怖くて、それなのに会いたくて。相反する思いに戸惑いながら毎夜過ごしていた。

闇夜の帳は幾重にも重なって、少しずつリゼイラから眠りを奪っていった。

ハ克蘭も顔を見せてはくれるが、あの頃のように一晩傍についてくれる事はない。

少し寂しい気もするけれど、仕方のない事だから。

眠れないのは、ただデイルさまがあそこで待っているかもしれないことが心苦しいせい。

「眠れていないのですね」

ため息混じりの声に、リゼイラはハツとした。

怒られるかもしれない。

血の気の引いた唇がかすかに震えだす。

冷たい目線や叱責を思い出す。

リゼイラの喉がひゅつと鋭い音を立てた。

嫌だ、怖い。苦しい、寒い。

「リゼイラ様！ライドル、何をしたの！」

温かい蜜湯を貰ってきたレジーナが、ライドルを押しつけるようにしてリゼイラの手を握り締めた。

「大丈夫ですか？後でライドルは私がきちんと叱りますから」

ぎゅつと強く握られた手が優しく、冷えた指先がほんのりと温もってくる。

苦しげだったりリゼイラの表情がほんのりと綻んだ。

まだ青い顔色でゆつくりと起き上がったリゼイラに、押し退けられていたライドルが甘い匂いを漂わせる蜜湯を差し出した。

ライドルが困ったように微笑んでいて、ああ怒っていないのだと改めて安心する。

「リゼイラ様、これからお昼寝をなさってください。このままでは身体を壊してしまいます」

「あら、ライドルが苛めてたんじゃないの」

「レジーナ……」

ほとほと疲れたらしいライドールの情けない声にリゼイラが小さく笑った。

両手で持った茶器のじんわりとした温もりに、胸の奥で目覚めたひんやりした記憶がほろほろと解れる。

一口含むと、蜜の甘さが口中に広がって喉を通り過ぎると、お腹の中でばつと熱が広がった。

「少しだけ生姜も入れてあるんですって。身体が温まりますよ」
血の気のない顔が段々と熱を帯びてくる。

レジーナの言うとおり飲んでいると身体中がぽっぽとして来た。それにさっきまで感じなかった眠気が全身を覆う。

とろんとしてきた目蓋と必死に戦うが、蜜湯を全部飲みきる前にリゼイラは眠ってしまった。

「……お眠りになられたみたい」

持ったままだった茶器をそっと受け取ってレジーナが、小さく囁いた。

けれど、妙に寝つきがいいのにレジーナが不審そうに首を傾げる。

茶器を盆へと戻しながらある事に気がついた。

「あら、これ蒸留酒の小瓶……。ライドール？」

ちらりと睨むと気真面目な同僚は、軽いため息を吐いて降参した。

「数滴、混ぜたんだ。このままだとお体を悪くしそうだったから」
酒類にはあまり強くなかったようだ。

眠ってくれた事にホッとする。

寝室まで抱きかかえて、羽毛の枕に小さな頭を沈める。

結っていた髪はレジーナが手早く解いてくれたから、ゆっくりと休めるだろう。

仮初の安息であつたとしても。

ライドールは静かに寝室の扉を閉めた。

マリーニエの誕生会当日。

贈られた美しい衣装を身にまとい、鏡の前で最後の仕度を整えていた。

丁寧に梳られていく髪は、日頃の入念な手入れもあって艶やかに輝いている。

蝋燭の火に照らされるとまるで琥珀のような光を帯びる。

薄っすらと化粧を施されたりゼイラは可憐な容貌をさらに魅力的に見せている。

衣装自体が華やかであるから、レジーナはあえて装飾品は控えめに揃えていた。

乳白色に虹の輝きを宿した蛋白石の首飾りは慎ましくリゼイラの細い首を彩り、紅水晶と藍玉の蕾を模した耳飾りも繊細な輝きを放っていた。

髪も少し背伸びを見せて一つにまとめて、銀と蛋白石、真珠などの髪飾りで整えられた。

全ての仕度が整ったとき、隣りの部屋にいたライドルが思わず息を呑んで見惚れたほど素晴らしい出来栄だった。

リゼイラの持つ、可憐で無垢な印象は少しも損なわずに、華やぎと明るさを醸し出すいでたちは美しいの一言だ。

「とてもお似合いですよ」

ライドルに褒められて、リゼイラは頬を緊張で紅潮させながら何とか微笑んだ。

あまりご令嬢の相手は慣れていないライドルだったが、まるで物語の王子のように手を差し伸べた。

花のようなお姫さまは戸惑うように己の従者を見上げてから、おずおずと手を重ねる。

緊張で冷たくなった指先は、ほんのりと色が乗っている。

文字通り指の先まで磨き上げられたらしい。

「今日はたくさんの方がお集まりになられます。色々和不睦な視線

を受けるかもしれませんが、頭を下げずに微笑むことを忘れないでください」

背の高いライドルに導かれるようにして歩いていると、公爵様のことを思い出してしまふ。

ああ、そうだ今日がお会いできる最後の日。

それに、とても大切な宴なのだろうからお邪魔にならないようにしないと。

心構えを新たにすると可憐な容貌がさらに強張る。

苦笑してしまったライドルは、最後の部屋から出るための扉の前で立ち止まった。

この先に本来のリゼイラの相手である公爵が待っているはずだ。

「リゼイラ様、大丈夫です。宴の始まりは無理ですが、途中から私がお傍に付くことが許されてますから」

暗い地下にパツと光が差したようだった。

縋るような視線を受けてライドルは、不謹慎にも笑い出しそうになってしまった。

本当に可愛らしい方だ。

喋れないという事すら気にならないのは、感情が素直に現れるせいだからだろう。

だが、これからリゼイラが向かう場所は美德が美德として認められない世界だ。

マリーニエがあれば接触してくる事はなかったが、何かがあるとすれば誕生会だろう。

鼻屑目もあるかもしれないが、今宵のリゼイラはまるで大輪の花のように美しく印象的だ。

集まった人たちの目を一身に浴びるだろう事は予測がついた。

叶うなら、何事もなくこの宴が終わるように。

不安を煽らないように、優しく手を握って扉を開いた。

リゼイラに与えられた一室の前の待合室。

それほど広くはないが、美しく設えられたそこでデイルは着飾ってくるであろう令嬢を待っていた。

堅苦しい詰襟を指で弄りながら、やれやれと息を吐く。

だいたい私邸で開かれる宴に着飾るも何もないものだ。

それでも、今日は伯爵令嬢だの侯爵夫人だのが集まってくる。

むせ返るような香水や化粧の臭いを思い出して、すでに気が滅入ってくる。

濃い青の上着は裾に蔦と獅子が刺繍されている。

前日になってマリーニエが贈ってきたものだ。

本来ならリゼイラの衣装に合わせて、紫の色調の上着を着るはずだったのだが、今日の主役の頼みを断る事もできなかった。

こんな相手の意向を無視しての行動が、義妹を苦手とする一因になっている。

窓の外には夕闇が迫っている。

今頃は中央の広間に招待客が続々と集まっているはずだ。

金や銀、宝石に象牙の装飾を施した馬車が列をなしているのが容易に想像がつく。

きらびやかな宴になどあまり興味を持たないデイルだったが、先代の公爵、デイルの父親の時代は夜毎華やかな園遊会が開かれていた。

何度か出席した事もあったが、あまり楽しい思い出ではない。

暗い幼少期の思い出を数え上げてしまうのは、ここ最近のデイルが落ち込み気味だからだ。

「……嫌われたのか」

がつくりと肩を落として、影を背負う姿は惨めだ。

最後に会った時、あの人はどこか変だった。

具合が悪そうで疲れているようにも見えて。

なるべく気を使ったのだが、もしかして反対に負担に思われてしま

つただろうか。

それどころか押し付けがましい人間だと思われただろうか。どどん沈み込んでいくデイルは端で見る分には滑稽だが、本人にはこれ以上ないほど一大事だ。

泉で夜を明かした事もあった。

愛しい人は顔を見せてはくれなかったけれど。

悲しそうに俯いていた顔が浮かんで消えない。

何があつたのだろうか。

もし、誰かがそんな顔をさせていたとしたら許せない。

この手で守れば良いのに。

少しの怪我也、災いもないように。

大切に守ってやる頃ができれば、幸せだと思う。

この空っぽの手に包み込む事ができたら。

強く握り締めて硬いため息を床にぶつけた。

「それにしても、遅いな」

女性の仕度の遅さは、それなりに知っているつもりだが、あまり遅くなるのは困る。

私的な宴とは言え、当主として挨拶もしなければならぬのだ。声をかけようかと考え始めた時、小さな音を立てて扉が開いた。

特別に付けた従者がまるで大切な恋人を紹介するように連れ添っていた。

その光景を見て、不意に怒りに近い感情が浮かんで戸惑った。変だ。

「お待たせいたしました」

そつと導くように手を離してリゼイラが一步前に出る。

どんな衣装を贈るのか、事前に見て知っていたが、それでも思わず見入っていた。

初めて会った時は純無垢な印象の強かったリゼイラだが、今は可憐で彩麗な印象が加味されていた。

ほんのりと混じる艶が、まだ幼い少女だと思っていたデイルすら惹

きつける。

緊張しているのか戸惑うような視線はデイルの方を向かない。

胸の前で組まれた小さな手が稚い。

「手を、どうぞ」

警戒心の強い野うさぎを前にしているような気持ちで、デイルは手を差し出した。

細い喉が大きく上下する。

無意識なのか後ろに控えているライドルに窺うような視線をやっている。

数瞬の間が空いて、冷えた指先がかするように添えられた。

それをしっかりと繋ぎ直して、リゼイラを傍に寄せた。

ひゅっとか細く息を飲む音がして、小さな身体から発せられる緊張が手のひらに伝わった。

ライドルも驚いたらしい。

あまり表情の変えない男の、そんな変化を小気味良く思いながら、自分の感情の不可解さに首を捻る。

「宴の間は、なるべく私から離れないようにしてください。守りますから」

付け加えるようにして言った言葉に、リゼイラが大きく目を見開いた。

零れるような大きな瞳。

戸惑い、揺れる青灰色。

似ている。

小さなミルレイアもこんな大きな瞳で見上げていた。

似ている。もう一度思って、今度は強く否定した。

似ていない。似てなど居ない。

あの人になど…。

13* 虫食い

公爵家の一人娘の誕生会は見るとを圧倒する華やかさで執り行われた。

「本当に、マリーニエ様のお美しい事。あの品の良さは私の娘にも見習わせたいですわ」

「あら。お嬢様は明るい方だと伺ってますわよ。それより、あの布地はどちらから手に入れたのかしら」

「あれは水華で最近織り出されたばかりの物ですわ。わたくしも早速手を回しましたのよ」

絢爛な装いの中で、見栄と虚飾が入り乱れる。

朗らかな笑みの下で交わされるのは、相手を蹴落とすための揚げ足取りだ。

灯火にほのかに照らし出される生花や綾紐は、揺らめく影も添えられて美しく幻想的な空間に仕上げている。

狐狸の化かしあいにも似た談笑は、年かさの夫人たちだけではない。

その娘や息子たちも社交に余念がない。

「あちらの男性はどなたかしら。立派な風采だわ」

「ふふ、嫌だわ。公爵様のお屋敷に来て他の男性を見るなんて。ねえ？」

緑柱石の指輪を口元に寄せた令嬢が、上目遣いで今日の主役である少女を見上げた。

赤みのある茶色の巻き毛を豪奢に纏め上げたマリーニエは、軸を香木で作り上げた高価な扇子を広げてゆつたりと微笑む唇を隠す。

「駄目ではないわよ。今夜は素敵な男性が多くいらっしやって下さってますもの」

朱色の絹に藍の更紗を重ねた衣装に青玉をあわせたマリーニエは、まるで王女の風格でその場の注目を集めていた。

実際、その場の同じ年頃の少女たちと比べてもマリーニエは別格の美しさを誇っている。

招待状を貰い受けた貴族たちは、彼女に気に入られようと独身の青年たちを多く送りいれていた。

多くの婚約者候補を適当にあしらって見せながらもマリーニエは、ちらちらと扉を気にしている。

まだお兄様は現れない。

来て下さるとお返事を下さったなら、初めから顔を見せてくださらないと。

不満はたまっていく一方だ。

それでも顔には表さないのは、公爵家の娘である意地と誇りだ。

数多の男性に艶やかな微笑みを返してマリーニエが、うんざりと内心ため息を吐いた時、入り口が大きくざわめいた。

ハツとして扉口を見ると、ようやく待ち人が姿を現してくれた。

ああ、やっぱりお兄様にはあの色が良く似合うわ。

一月も前から布地を選んで、丁寧に刺繍を施したのだ。似合わないはずがない。

喜びに自負を滲ませてマリーニエは兄を出迎えるために悠然と足を運んだ。

そうして近づくに連れて、その場の雰囲気がおかしいことに気がつき始めた。

マリーニエが兄のもとに向かっているのだ。他の招待客は事前に避けるのが礼儀だろう。

それなのにほとんどの者たちが、直前になって慌てて道を譲るのだ。

まるで何かに目を奪われているかのように。

不快な思いでデイルの前に立って、マリーニエは艶やかに微笑み、口上を述べようとしてその顔を強張らせた。

最愛の兄の傍には、可憐な美姫がたおやかに寄り添っていた。

リゼイラは、扉の奥に広がるきらびやかな世界を目にして思わずデイルの背に隠れそうになった。

今までに見たことのない世界が存在していたのだ。

窓の外は夜なのに、まるでこの部屋にだけ太陽を持ち込んでしまったらしい。

キラキラと輝く室内には、それ以上に華やかで煌びやかな人たちが笑いさざめいている。

こんなに多くの人に会った事すらないリゼイラは、完全に萎縮してしまっていた。

デイルと並んで歩くことの緊張すら吹き飛ぶくらいの衝撃だった。どうしてこんなにたくさんの方がいるのだろう。

泣きたい位の混乱に、知らず絡めていた腕に力がこもってしまった。

それに気付いたデイルだったが、リゼイラの必死な表情に離れるように言うのも躊躇われてそのままゆっくりと宴の中を歩いて進む。

ああ、やっぱり来てはいけなかったのかもしれない。

レジーナとライドールは褒めてくれたけれど、変な格好でもしているのかもしれない。

考え始めると周り全てが怖くなる。

俯いた頭からは、囁くような声と笑い声が降りかかる。

どうしよう、どうしよう。

今すぐにでも逃げ帰りたくなったりリゼイラの脳裏に、部屋に出る前のライドールの声が横切る。

『頭を下げずに微笑むことを忘れないでください』

俯かないで、微笑んで。

深く息を吸って、きゅっと顔を上げる。

途端、視界に飛び込んできた煌びやかな空間に吞まれかけたが、必死で踏みとどまって堅い表情に微笑みを登らせた。

まだ少し緊張の残る微笑みだったが、はにかむような初心な笑みはその場を一瞬で魅了した。

「まあ、なんと可愛らしい」

ため息の様な声が所々から漏れる。

だが、そんな賛美の声を聞き分けるほどの余裕はリゼイラになかった。

ただ一生懸命、顔を上げて微笑むので精一杯だ。

稚い少女が、若き公爵の花嫁である事は既に知れ渡っている。

それが追い詰められている子爵の悪あがきである事も。

リゼイラに注目する視線には、そんな噂の証を見るような物も混じっている。

まるで高価な芸術品か、珍しい獣でも見定めるような注視は、人と接する事になれていないリゼイラにはきつい物だ。

早く部屋に戻りたい、そればかりが小さな頭を巡っている。

リゼイラの顔からは既に血の気が引いているが、施された化粧がそれを判り難くする。

何より、公爵として挨拶などを交わさなければならぬデイルの注意はリゼイラまで回らない。

公爵様のお邪魔にならないようにしないと。

針のような多くの視線に耐えてリゼイラは、その場に立っていた。すると、少しずつ人波が割れていつか出会った女性が姿を現した。

部屋に訪れてくれた事のある、そう、デイルさまの妹の…。

そこまで思い出して、そつと見上げたマリー二エの強張った表情に首を傾げた。

美しいだけに表情が一切そぎ落とされた顔は、仮面のように無機質で恐ろしくすらある。

ぞくりとした悪寒が走るが、次の瞬間には朗らかに微笑まれて気のせいだったのかとホツとする。

「まあ、お兄様にリゼイラ様。ご出席下さって、とっても嬉しいですわ」

「たった一人の妹の誕生の祝いだ。出席しないわけがないだろう」
デイルとマリーニエ、二人が並んだ姿はとても美しかった。

どちらも華やかで堂々とした物腰が生まれながらに備わっているようだった。

遠い思いで、少し身体を離して会話する二人を見つめる。

そつと腕から力を抜いたりゼイラに気付いたデイルが、ごく自然な動作でリゼイラの肩に手をまわす。

本当なら腰に手を添えたいところだろうが、如何せん身長が足りない。

それでも、守ると言ってくれた言葉を実行してくれているのが感じられてリゼイラは嬉しかった。

心臓が痛いくらい鳴っていた。

ぎゅうつと胸の前で手を握り締めたりゼイラは、回された手をマリーニエが怒りにそまつた瞳で見下ろしていることに気付けない。

「……それでは、お兄様もリゼイラ様も宴をお楽しみくださいね」
あくまでも公爵家令嬢の品格を失わずに去った妹にデイルは内心でホツとしていた。

今までなら、このままさも当然の様に纏わり付かれたのだが。

腕の中の小さな少女を見下ろして、やはり妻と言う立場には遠慮したのかと考えていた。

そこで、ようやくリゼイラの顔色があまり良くない事に気がついた。

「人混みに酔いましたか？」

優しく、あくまで紳士的に触れ合わせた手で壁際までリゼイラを案内する。

所々に置かれている椅子の一つに座らせる。

少し落ち着くことが出来たりゼイラは、膝を折って気遣ってくれるデイルに感謝の気持ちを込めて微笑んだ。

「……何か飲み物でも持ってきて来ましょう」

酷く複雑そうな表情を浮かべてデイルが立ち上がる。

その苦しげな顔に、何か失礼な事をしてしまったのかと慌てたりゼイラだが、デイルは気付かずに宴の中に紛れていつてしまう。一人残されたリゼイラは、心細さと自己嫌悪で俯いてしまう。どうして、ちゃんと出来ないのだろう。

いつもいつも、デイルさまのお気に障る事ばかりしてしまう。笑っていて欲しいのに。気持ちよく過ごしてもらいたいのに。どうして、こんなに駄目なんだろう。

「リゼイラ様？お加減でもよろしくありませんの？」

不意に掛けられた声に慌てて浮かんだ涙を拭って顔を上げると、マリーニエが取り巻きらしき少女と共にリゼイラの前に立っていた。椅子に座っているせいで、周りの様子は一切判らない。

立とうにもマリーニエがあまりに傍にいるために、上手く立ち上がれない。

につこりと笑っている令嬢に、何故かあまり良い気持ちにはなれなくて戸惑いながらゆるゆると首を横に振った。

「あら、でもお顔の色はすぐれませんわ」

頬を掠るように手が伸ばされて、思わず身を竦める。

身体に触れられる事にリゼイラは慣れていない。

「まあ、失礼を。そうですね、こちら私のお友達ですの。後でご紹介いたしますわ。今は、別のことをお聞きしたくて参りましたの」何だろう。素直に首を傾げたりゼイラにマリーニエの後ろに立っていた少女たちが蔑むような声で口を開いた。

「それにしても、いくら公爵夫人と言えども、元を正せば落ちぶれた子爵家の娘。それなのにマリーニエ様にお声の一つもかけないのは無礼ですわよ」

「ええ、まさかそんなご教育もされていない程、お困りではありませんませんわよね」

くすくすと笑う声に、胸が苦しくなる。

「お二人ともお止めなさいな。リゼイラ様はお声が出せないのですわ。お可愛そうでしょう」

「まあ！本当ですよ、それは失礼を」

「お可哀想に。お声を賜れず残念ですわ」

形ばかりの謝罪に、リゼイラは顔を俯けたままゆるりと首を横に振る。

塞ぐ思いは、嵩を増しいつか溢れてしまいそうで恐ろしい。

「それよりも、今日のご衣裳は大変素晴らしいですわね。お兄様のお見立てでしょう。私も良く見立ててもらいますのよ」

賛辞を受けている筈なのに、マリーニエの声は酷く遠かった。そこに気持ちが込められていないから。

「……そうだわ、ご気分が宜しくないのならお庭の方にご案内致しますわ。風に当れば気分もよろしくなると言いますものね」
え、と思う間もなく腕を取られてしまう。

あの時と同じように断る暇をマリーニエは与えてはくれない。

しかも今はご友人だと言う二人も逃げ場を封じるようにリゼイラを取り囲んでいる。

呆氣に取られながら、それでも外に出られるなら嬉しかった。

ここは人がたくさんいて、少し息苦しい。

本当に風に当れば楽になれるかもしれない。

素直にそう思ったりリゼイラは、さざめくように笑う令嬢たちの真意に気付かない。

先頭を歩くマリーニエの瞳は、冷ややかに沈んでいた。

大きな広間から続く露台には、宴にあわせて飾りが施されてあった。

こんな所にまで、と驚くのはリゼイラだけだ。

「あら、ごめんくださいね。ちよつと呼ばれてしまいましたわ。本当ならお庭の方にまでご案内さしあげたかったですけど。とっても美しい場所があるんですの。是非リゼイラ様にお見せしたくて！

そうだわ、お兄様には私から伝えておきますからそちらまで足を伸ばしては如何です？そう遠くない場所ですから、大丈夫ですわ」
露台から降りて、庭園にまで降りた所で急にマリーニエは足を止めた。

リゼイラには何も聞こえなかったのだが、どうやら広間から呼ばれたらしい。

それなら、広間に戻ろうとしたところでマリーニエから一気に喋り倒されてしまう。

驚いて目を丸くしていると、いつかのように流されるように次の行動まで決められてしまった。

困惑しながらも、マリーニエの言う美しい庭園には興味があつて、それに今は人ごみの中に戻るのも躊躇してしまう。

デイルさまに伝えてくださるなら、ちょっとだけ良いだろうか。
揺れ動いたリゼイラに止めを刺すようにマリーニエが言葉を足す。

「今の時期だけ咲く花がありますの。是非見ていらして下さいな」
少し考えてリゼイラはこくと頷いた。

につこりと笑ったマリーニエは、さらに詳しい道順をリゼイラに告げる。

「迷うような場所ではありませんから、平気ですわ」

そう最後に告げてマリーニエは、取り巻きの少女と共に輝かしい広間へと戻っていった。

一人夜の庭園に残されて、それでもリゼイラはホッと息を吐いていた。

たくさんの方々が息づく気配を感じる。

太陽の下を好む彼らは、多くが夜には本体である植物や風に溶け込んで、人間で言えば眠っている。

さくつと柔らかな草の上を歩き出してリゼイラは教えてもらった場所に向けて歩き出す。

今日の靴は踵もあまり高くないものだから、足が酷く痛むことはなかった。

それでも、慣れてはいないから少しゆっくりと歩く。

涼やかな夜の空気は清華で、気持ちを穏やかにしてくれる。

凝った気持ちを吐き出すように呼吸を整えて、空を見上げた。

気付けば誕生会の宴の音色は遠くになっていた。

そろそろ言われた場所だろうかと目を凝らした時。

『……！』

とつぜん、繁みから突き出した手に引き倒された。

何が起ったか判らない。

「なんだ、まだ子どもじゃないか」

「でも、結構きれいな顔してるな。本当にヤツちゃっていいのかよ」

「馬鹿、あのお嬢様のお墨付きだろ。怖いもんなかないだろ」

強張った身体が複数の手で拘束される。

ぼそぼそと交わされる声が、酷く気持ち悪い。

驚愕の淵から帰ると、リゼイラは必死で抵抗を試みる。

口を覆った手が汗で濡れていた。

良くわからないけれど、怖くて気持ち悪い。

レジーナやライドル、それにデイルに触れる時とは全く違う。

触れられた場所から冷たく凍えていくような、それどころか腐って

いくような嫌悪感が湧き上がる。

「こら、大人しくしてろ！」

「ちよつとジツとしてれば、気持ちいいこと教えて上げるからさ」

嫌だった。

首筋にかかる息が生暖かい。

ひゅつと息を詰めたリゼイラの胸元に、手がかかった。

両手を頭の上で拘束され、足の間には男が一人座っている。

抵抗など無意味に等しい。

「まだ胸もほとんどないな」

布地の上から弄られる感触に、リゼイラは吐き気を覚えた。

涙浮かんでは、無意味に流れ落ちる。

「あーあ、泣いちゃってるよ」

「声でないんだろ。その手、どけてやれば？」
ずっと覆われていた口が自由になる。

冷たいはずの夜風が変に生ぬるい。

「それじゃ、そろそろ中身を拝見させて頂きましょっか」
笑う声と共に、布地が裂かれる音が虚しく響いた。

そして、浅く息を注いでいた喉が悲鳴を上げた。

『……ハクラン！助けて、デイルさまっ』

空気が止まった。

裏方の仕事がひと段落ついて、ライドルは邪魔にならないように静かに宴の中に滑り込んだ。

盛況な宴の中では、ライドルが一人潜り込んでいても誰も気に止めない。

流行の並び市のような衣装の中で、ライドルの傍仕えの格好は粗末ではあったが堂々とした立ち振る舞いに咎められることはなかった。

人よりも高い背を活かして捜すのは、小さなご主人様だ。

きらびやかな中にあっても、あの可憐な姿を見つけ出す自信はあった。

だが、華やかな宴の中でもその姿を見つけることは出来ない。

眉をひそめたライドルは代わりに、何やら招待客に捕まっている主人を見つけた。

両手には色硝子の杯が握られている。

その周りにリゼイラがいないかと確認するが、それらしい姿は見つからない。

嫌な予感が背筋を駆け抜ける。

振り払うようにもう一度室内を確認して、奥の露台へとつづく窓が開いている事がやけに視線に引かかった。

焦りを覚えながら足を踏み出した所で、後ろから腕を引かれた。

驚いて振り返るとデイルが真剣な表情をしてライドルを見ていた。

「公爵様……」

「どうした？お前には彼女についてもらうように言った筈だが」

咎める訳ではなく、戸惑うように尋ねられてライドルも言葉に詰まる。

「いらっしません」

ゆつくりと首を振って言う従者に、デイルは一瞬意味を取り損ねた。

「何だつて？」

「先程から探しているのですが、お姿が見えません」

「そんな馬鹿な。あの隅に……」

指差した先の椅子は、座るものなく据えられている。

二人の表情が途端に険しくなる。

あれほど人に対して怯えていたリゼイラが一人で何処かに移動したとは考え難い。

考え込んだデイルに、ライドールは先程から気になっていた窓辺に視線を寄せて、その近くに居た令嬢たちに目が吸い寄せられた。

目立たない場所に立っていたのは、今日の主役であるマリーニエとその取り巻きである少女たち。

奇妙しい。マリーニエは自己主張が強い少女だ。こんな何よりも己を誇れる場で奥に引っ込んでいるなどらしくない。

いや、むしろ不穏さすら感じる。

「すみません、近くを探して来ます」

「ああ、いや私も行く」

持っていた酒杯を巡回していた侍女に渡して、デイルとライドールは招待客の視線を集めないように室内を通り抜ける。

マリーニエたちの傍を通り過ぎて露台へと出る。

「お兄様！どうなさったの？」

パツと顔を輝かせた義妹に、かすかに顔をしかめたデイルだったがさすがに無視するわけにはいかない。

「いや、何でも……。そうだ、リゼイラを見ていないか？」

「リゼイラ様？ああ、そう言えば先程お庭の方に出て行かれたのを見ましたわ」

につこりと笑って告げられた言葉をデイルは素直に受け止めた。

「庭に？」

デイルが訝しげに呟いている間に、ライドールは駆け出していた。

追いかけるようにデイルが後に続く。

暗い夜闇に広大な庭が沈んでいる。

こんな所にリゼイラが一人で出て行くだろうか。

部屋の中で陽だまりに目を細めているリゼイラしか知らないライドルには、伸し掛かるような闇に怯えている姿が浮かんで消えなかった。

深々とした庭園を走り抜け、奇妙な悲鳴の様な物音を耳に拾った。

「何だ？」

足を止めたライドルの横で、追いついたデイルも同じように耳を澄ます。

音がしたのは昼間でも人気のない花園の方だ。

駆け出したのは次はデイルが先だった。

二人、必死な面持ちで走りながら、不穏な予感に歯を食いしばっていた。

嫌悪と恐怖で、助けを求めたのは幼い頃から傍に居てくれた精霊とまだ出会ったばかりの公爵様。

どうしてだろう。

どうして、助けて欲しいと願ったのだろう。まだ、数度しか会っていない人なのに。

荒く息を乱しながら、リゼイラは引き裂かれた胸元を掻き合わせていた。

顔も見えない男たちはリゼイラから離れて、引きつった面立ちでその場に座り込んでいる。

『ハ克蘭……』

ほつれた髪が幼い顔に乱れかかり、色褪せた唇から安堵の聲が落ちる。

蒼白な頬には止まらない涙が幾筋もこぼれ落ちて、膝の上に染みを

作り出す。

『遅くなってしまった。怖い目にあわせてしまったね』

伸ばされた淡い指先が、流れる涙を掬う。

来てくれて嬉しい、そう首を振る幼い子にハクランは優しい瞳を向ける。

そして、後ろで突然の風に襲われた人間たちを冷淡に睥睨した。

呼吸も儘ならない程の力で押さえつけられた男たちは、恐怖と苦しさに血走った目を宙に向ける。

『よくも汚いその手で、至尊の身に触れられたものだ』

リゼイラには一度として見せた事のない冴え冴えとした怒りを醸し出して、ハクランは普段は見せないその姿をあえぐ男たちの前にさらす。

「ひっ」

満足に悲鳴も上げれない彼らが見たのは、髪も目も肌も、全てが白一色の凄絶な美貌の異形の者。

白は、この世界では死を意味する色でもある。

「し、死神……」

ガクガクと震える顎から涎が垂れ、だらしなく顔を汚す。

無様な醜態を見せる男たちにハクランは冷然とした笑みを浮かべ見下ろす。

『我が愛し子に触れた罪、その生涯掛けて償ってもらおう。これより先、清めの風に加護はないと心得るが良い。澱み沈む大気の中でその罪を悔いて嘆け』

朗々と伸べられたのは、呪いの言葉。

ハクランの言葉が終わると同時に男たちを戒めていた風の捕縛が解ける。

我先にと逃げ出した人間たちに、ハクランは冷笑で見送る。

風に加護を失ったと言う意味を彼らが思い知るのはまだ先であろう。

だが、愚かな人間の男たちなどどうでも良い。

心配なのは蹲るリゼイラの事だ。

『大丈夫かい、愛しい子。傍にいてやれずにすまなかったね』

『うっん、助けてくれてありがとう』

蒼褪めた顔でそれでも微笑むリゼイラの頬をハ克蘭はそっと包む。

『無理をすることは無い。お泣きなさい。誰も居はしない。怖いのなら、泣いても良い』

優しく促す声に、リゼイラの顔がくしゃりと歪んだ。

怖かった。

気持ち悪かった。

どうして良いかわからなかった。

助けて、欲しかった。

ふううっと思を押し出すようにして泣き出したリゼイラを抱きしめるようにハ克蘭が腕を広げる。

確かな温もりはない。

それでも、ハ克蘭が包んでくれる、その安心感が嬉しくてリゼイラは泣いた。

今までこんなに泣いた事はなかった。

喜怒哀楽の感情が希薄なりゼイラは、泣き方も上手く出来ずに苦しそうにしゃくり上げる。

「……リゼイラ様！」

泣き濡れた顔を上げたリゼイラの目に飛び込んできたのは、肩を下させるライドールと、髪を振り乱して駆け寄ってきたデイルの姿。

「大丈夫か？」

労わるように伸ばされた手に、リゼイラの身体は無意識に跳ねた。身体が、先程の恐怖を引き摺っている。

震えだしたリゼイラの格好にデイルの顔が引きつる。

胸元が酷く破れている上に、裾の辺りが捲れて細く白い足が剥き出しになっている。

どう見ても何か大変な事があったのは明らかだ。

デイルは着ていた外套を脱いでリゼイラに着せ掛けた。

華奢な身体が幸いしてか、デイルの服はリゼイラの身体をすっぽりと覆い隠してくれる。

「申し訳ない、守ると言っていたのに」

苦渋の表情で頭を下げたデイルの顔におずおずと小さな手が伸ばされた。

ひんやりとした手が俯いた顔に添えられて上を向けさせる。

泣き濡れた瞳が戸惑うように揺れていた。

困っているのは、デイルさまに謝ってもらうようなことはないから。

助けてもらいたいと願ったのは、ただのわがままで、叶う筈もないことだから。

そつと睫毛を伏せたりゼイラの目には、潤むような悲しみが満ちていた。

「……リゼイラ殿」

触れている手を包んで見つめると、リゼイラは一瞬驚いたように目を丸くした後でふわつと微笑んだ。

名前、初めて呼んでくれた。

嬉しい。名前を呼んでくれた。

リゼイラにとつて名前を呼んでもらえることは、自分を認めてもらえることだから。

本当に嬉しかった。

笑った時に弾けた涙が風に散る。

ハクランはまだ傍に居てくれている。それも安心できて嬉しい。

「公爵様、リゼイラ様をお部屋にお連れしたいのですが……」

一歩後ろに控えていたライドールが、そつと声を掛ける。

「ああ、そうだな」

立ち上がるうとするデイルにあわせてリゼイラも立とうとするが、その前に身体が宙に浮いた。

ハ克蘭が風を操ってくれたのかと思ったが、自分のものとは違う温もりがあまりに近くにあつて身体が固まってしまった。

「ライドール、私が部屋まで連れて行く。先に、部屋の仕度を」

「はい、判りました」

一礼したライドールが足早にその場を去る。

デイルに抱き上げられたリゼイラは、瞬きすら出来ずに着せ掛けられた外套をぎゅっと抱きしめた。

ど、どうすれば良いのかな。

こうやって抱き上げられたのはライドールの時から二度目だ。

やはり慣れないリゼイラは呼吸まで止めてしまいそうなほどガチガチになっている。

『ハ克蘭……』

不安げに精霊の名前を呼ぶと優しい笑顔がすぐ近くに来てくれる。ホッとして指を差し伸べると白い指先に口付けが落とされる。

『大丈夫だよ、優しい子。私は傍にいるよ。安心してお休み』

穏やかな声はリゼイラを無条件に安らがせてくれる。

「あんな事のあった後で、お嫌かもしれませんが少しの間我慢してください」

硬直したリゼイラをどう思ったのか、申し訳なさそうに言葉が添えられる。

ゆっくり身体から力を抜く。

もたれるように頭を添えるとデイルの心臓の鼓動が聞こえてくる。安心すると精神的な疲労から、目を閉じるだけで眠ってしまいそうになる。

「本当に申し訳ない」

遠くなる現実から、かすかな謝罪の声を聞いたような気がした。

ただ、微笑んだ顔があの方と重なってしまった事に動揺したのだ。

そんな自分の頭を冷やそうと離れたのが、こんな事になってしまうとは。

リゼイラが一人で庭に出たと聞いた時は一人で心細く思っていないか心配だった。

一度だけしか会った事がないとは言え、あまりに繊細な容貌は広い庭園で迷う姿を想像させるには十分だ。

少しでも早く見つけなければと思ってはいたが、実際は想像以上の事が起こっていた。

荒れた庭園で、繁みの傍らに泣きながら呆然と蹲っていた令嬢に言葉もなかった。

まるで咲き初めを散らされた花のような姿は痛ましい。

涙で濡れた顔で、差し出した手にすら怯えていたリゼイラに己の不甲斐なさを突きつけられた。

確かに、最初の印象は良くないものだった。

はつきり悪いと言っても良い。

けれど、その時でもこんな風に傷つけることなんて考えもしなかった。

自分の目の届く範囲なら全て守れると思っていた。

そんなのは慢心だと思い知らされてしまった。

腕の中で気を失うように眠ったりリゼイラを見つめて、苦い笑みを浮かべる。

謝って済むようなことではない。

見た限りでは、最悪な事は免れたようだが実際、何があつたのかは判らない。

事実を知っているのはリゼイラだけだが、こんな事を少女に聞けるわけもないし、それに何よりリゼイラは話せない。

名前を呼んだ時のあまりに無邪気な微笑みを思い出して罪悪感が膨れ上がる。

どうして酷い目に会わされた直後に、あんな笑みを浮かべる事が出来るのだろうか。

傷を受けたのはリゼイラの方なのに、労わるような眼差しと素直な喜びの表情。

人を疑う事など知らない環境で育ったからだろうか。

周りに愛されて育ったから、あんなにも素直に周りを愛せるのだろうか。

安穩と幸せに暮らしてきた令嬢を軽侮していた。

けれど、もしリゼイラのように無邪気でいられるのなら安穩と暮らしてきたと言う事は問題ではないのかもしれない。

まだまだだ。そのため息を吐くデイルは、己の考えの根本的な間違いを知らない。

知らないから、間違う。

少しずつ違えていった答えの先は、暗く深い闇の底だ。そんな事など知らぬデイルは、まっすぐに歩んでいく。

足元に咲く小さな雑草を踏み潰した事にも気がつかずに。

ただ、前だけを見据えて、真っ直ぐに。

歩いていった。

15* 根腐り

とおい、とおいゆめのそこ

あかい花がさいている

そこでねているのはだあれ

真つ青な顔で眠るリゼイラの傍には、レジーナが付き添っている。

公爵の腕に抱えられて戻ったりリゼイラを見た彼女は、小さく悲鳴を上げてから素早く寝床を整え始めた。

寝台に横たえられたリゼイラのほつれた髪を解き、身体を締め付ける衣装からゆったりとした夜着に着替えさせる。

その間、薄い目蓋は開かれず、レジーナも無言だった。

続きの部屋では、デイルとライドルが真剣な顔で額を突き合わせている。

誕生会の方は、適当に理由をつけて退出した。

その時、マリーニエが最後まで食い下がったがあしらう様にして逃れてきた。

「いったい何があったんだ？」

握り合わせた手を額に当ててデイルが呟くと、向かい合うように立っていたライドルが眉間に皺を寄せる。

何があったのかは、明らかだ。

口に出したくもないおぞましいこと。

「……何があったかは、明らかでしょう」

怒りを内包した声は冴え冴えとしていた。

リゼイラには聞かせたこともない声だ。

それこそが、ライドルの感情を露にしている。

声もなく苦しげに泣いていた小さな身体が目蓋の裏に染み付いている。

汚れた白い手足が、千切れた絹を掻き合わせていたのを覚えている。

何故だ。

何故、きれいなものは汚されなければならないのか。

何故、その美しさは認められない。

握り締められた爪が、手のひらに食い込み血を流す。

無表情に、何の感情も外に出さずライドルは怒っていた。

「ああ、そうだな。だが、彼女は私の妻だと知られているはずだ。

わざわざ、手を出すような危険を誰が犯す？館の招待客は全員身元は明らかだ。外から忍び込む事などできない」

「……招待客なら、リゼイラ様に害をなさない又何故言い切れますか？」

静かな声にデイルが顔をあげ呆れたように答える。

「招待されているのは貴族だぞ。下手に公爵に手を出せば自分の身が危なくなる事ぐらい承知している筈だ」

ベール公爵家は国王の膝元に最も近い筆頭貴族だ。

他の貴族とは格段の差がある。仮にとは言え、リゼイラはその公爵家夫人だ。それを祝い事の最中に、乱暴を働くなど愚行などと言う問題ですらない。

自殺行為にも等しい。

一蹴したデイルに、だがライドルはずっと気になっていることがあった。

宴の中、目立たぬ場所で談笑していたマリーニエ。

窓辺に近いあの場所で彼女はいったい何をしていた。

華やかな宴の中心にいることを何より好む彼女が。

「その招待客が、決して表沙汰にならないとしたら如何です？」
「何？」

そう。絶対に自分たちの身元が割れず、たとえ露見したとしても庇いだててくれる絶対的な存在が居たとしたら。
どんな愚かな行為だろうが、いつそ嬉々として行っだろう。

もとより、貴族と言う地位に相応しい人間など、それが子息ともなれば、数えるほどもいない。

「例えば、マリーニエ様が命じたとすれば……」

「ライドル！立場を弁えるが良い！」

ライドルが疑惑を全て口にする前に、鞭のような叱責が飛んだ。
それは隣にいたレジーナが思わず立ち上がった程の強い声だったが、ライドルは顔色一つ変えずに頭を垂れた。

「マリーニエは、私の義妹だ。いくらこのような事が起こったとしても、無闇に疑いを向けるなどこの館に仕える人間として恥じだと思え！」

「……申し訳ありません。出すぎた口を利きました」

淡々と吐き出された言葉に、デイルは憤激を飲み込み黙って扉へと向かった。

最後、部屋から出て行く前に平坦な声で告げる。

「マリーニエにはこちらから話を聞く。勝手な行動は慎め」

「はい」

感情の窺えない返事を背にデイルは扉を閉めた。

その音を待っていたかのように寝室の戸が開かれ、レジーナが心配そうな顔を覗かせた。

「ライドル、一体どうしたの」

「いや、心当たりを述べただけだ。確かに不敬な事ではあったが」
それでも、言わずにはいられなかった。

リゼイラがこれ以上傷つけられるのは我慢が出来ない。

「……あれはマリーニエ様がなさったの？」

自嘲したライドルに、小さく堅い声が投げられた。

ぎゅっと両手を祈るように握り締めたレジーナの真剣な眼差しがそこにあった。

「私が疑っているだけだ」

「ライドルが疑うだけの根拠はあるのね」

ほとんど同じ時期に奉公にあがるようになったレジーナとライドルは兄妹のようにして育った。

レジーナの両目には、揺ぎ無い信頼の光がある。

「公爵様は、ほとんど疑ってはいらっしやらないが」

「仕方がないわ。妹様だもの。それに、マリーニエ様はとても頭が良い方だわ……」

言葉を呑んだレジーナの、その先を悟ってライドルは憂いを吐き出す。

きつとマリーニエは確たる証拠など与えはしないだろう。

デイルは知らない。

彼女が幾度その手を汚さずに、この屋敷から兄に想いを寄せる女性たちを追い出してきたか。

ボロボロになって館を去っていた侍女をライドルは何人も目にしていた。

そんな目にリゼイラをあわせるわけにはいかなかった。

「私たちが気をつけましょう。リゼイラ様がお健やかに過ごせるように」

「ああ」

誓うように囁いたレジーナの肩を抱き寄せ、ライドルも願うように頷いた。

あの優しい笑顔が汚されることのないように。
大切に守っていこう。

『愛しい子、今日はずっと傍についていよう』

朝、目が覚めるとハ克蘭が優しい微笑みを向けてくれた。

そんな事は初めてでリゼイラは大きな目をさらに大きくしながら輝くような微笑みを浮かべた。

昨夜の事がリゼイラに暗がりや落としていないかと気を揉んでいたレジーナとライドールも、嬉しそうなリゼイラの様子にホッと胸を撫で下ろしていた。

午後の麗らかな日差しの中、木陰で本を広げてリゼイラは幸せそうに笑っている。

それが、どれだけ周りの救いとなっているか本人だけが知らない。ライドールがくれた画集を膝の上に乗せて、優しい風に包まれる。

『ねえ、ハ克蘭』

こうしてハ克蘭が傍に居てくれる事なんて、最近では本当に久しぶりだったからリゼイラはずっと気になっていたことを尋ねた。

『どうしたのかい、優しい子』

『あの、神族って何？』

小さく口に出したりゼイラに、ハ克蘭は表情を止めた。

それに何か大変な事を聞いてしまったのかとリゼイラが、ぎゅっと膝の上の本を掴む。

『ああ、怖がらせてしまったね。何でもないのだよ』

『……ほんとうに？』

『ああ、愛しい子。そなたが憂うことなど何もないよ』

微笑んで言われた言葉に、ようやくリゼイラの手から力が抜ける。

『神族とは、我ら精霊にとって敬い尊ぶべき一族のことだよ。美しい金の髪に透き通る青の瞳。妙なる歌声をなさった方々だ』

『金のかみ……』

繰り返したりゼイラは、絵に描かれた神族をそっと指で辿る。

『どうして、夜になるとかみかわるの？目のいろも青くなるの？』

不安そうな質問が口をつく。

知らないことが多くて、時々自分が何なのか判らなくなる。

『……それは、まだ教える事は出来ないのだよ。すまないね。けれ

ど、もうすぐだよ。もうすぐ、幸福がもたらされるから』

『もうシアワセ、だよ』

不思議そうに首を傾げるリゼイラを、半透明の手が優しく撫でる。

『愛しい子、そなたの幸せが続く事を祈っている』

滲むようなささやきにリゼイラは心地よく目を閉じた。

本当に、十分幸せなのだ。

ハ克蘭がいてくれて、レジーナもライドルも傍で笑ってくれる。

それに、デイルさまも名前を呼んでくれた。

本当に、幸せだから。

リゼイラはそれ以上など、何も望んでいなかった。

幸せだったから。

今が続くだけで良かった。

誕生会が終わった、次の日。

マリーニエは、宴の時よりも念入りに化粧を施して着飾っていた。

赤褐色の髪には、兄から贈られた黄金と緑柱石で作られた大輪の花を飾り、衣装もそれにあわせた淡い緑の絹に深緑の天鵝絨を重ねた豪華なものだ。

だが、そんな衣装に見合うだけの美貌は確かに彼女に備わっていた。

繊細な磁器に指を沿わせながら、特別に設えさせた露台で優雅に香茶を楽しむ。

マリーニエは、お気に入りのものに囲まれてとても気分が良かった。

何より、今彼女の前には誰よりも愛している兄がいるのだから。

美しいと評判の笑みを浮かべて、マリーニエはその豊富な知識で会話を豊かにする事につとめる。

兄に認められるように、浮ついた流行や噂だけでなく、世情や政治的な知識も進んで取り込んでいた。

彼女は、讃えられるに相応しい人間であるように努めて来た。

公爵家の一人娘として、兄の自慢になれるようにいつでも必死で努力しているのだ。

子爵ごときの娘で安穩と暮らしてきたあの子どもに、優るこそすれ劣る物など何一つない。

自信はさらにマリーニエを美しく見せる。

傲慢さすら彼女を持ってすれば魅力の一つとなった。

それは、確かにリゼイラにはないものだ。

「お兄さま？どうかなさいましたの？お疲れの様ですけど」

どこかぼんやりとして見えるデイルを氣遣って言うと、何でもない
と微かな笑みが返った。

小さな微笑みは、それだけでマリーニエを魅了する。

「それより、今日はお前に聞きたいことがあって来たんだ」

「まあ、なんですよ」

お兄さまになら何でもお教えしますわ、上品に笑って手にした茶器を白い円卓に戻す。

「昨夜の誕生会のことだ」

ぴくりと纖手が小さく震える。

だが、何でもないように両手を重ねてマリーニエはデイルをじっと見つめた。

「お前だから言うが、昨夜リゼイラ殿が何者かに襲われた。無事ではあったが、何か気付いた事はなかったか？」

「まあ！そんな事が？どうしましょう……」

悲鳴を上げるようにして立ち上がった義妹をデイルが驚いたように見上げる。

「何か知っているのか？」

「あ、いいえ。いいえ、そうですわね。リゼイラ様が怖い思いをなさったのですものね。あたくしの愚かな行為のせいですわ」

荒れる事のない手で唇を覆って、マリーニエはその場に座り込む。動揺しているようなマリーニエの肩を戸惑いながらデイルは抱く。「お兄さま、怒らずに聞いてくださいます？あたくしが全て悪いのですわ」

「ああ、怒ったりはしない。だから知っていることを教えてくれ」腕の中、俯いたマリーニエの表情はデイルからは伺えない。

けれど、少しこもったような声は泣いているかのように震えていた。

「あの日、リゼイラ様をお庭に誘ったのはあたくしですの」
「なに？」

「お庭の奥に、今が盛りの風扇花がありますでしょう。リゼイラ様がお庭に出るのが好きだと聞いて、是非ご覧になつていただこうと思ひましたの」

震えた語尾にあわせて、マリーニエの身体が小さく揺れた。心から後悔して懺悔している様子に、デイルは何も言わずに先を促す。

「本当はあたくしがそこまでご案内しようと思つたのですが、途中でお客さまに呼ばれてしまつて。リゼイラ様がお一人でも大丈夫だとおっしゃるから行かせてしまいましたの。それに、そこで知り合つた方にリゼイラ様がお庭にいらつしやるからお頼みしたのです」

それが……、わつと泣き出したマリーニエは声を詰まらせながらデイルの胸に抱きつく。

「その方たちが、リゼイラ様を恐ろしい目に合わせたのでしょうか？それでしたら、あたくしのせいですわ。本当に大変な事をしてしまいましたわ！」

「いいや、お前は悪くない」

「本当に？お兄さまは、あたくしを信じてくださいますか？」

「ああ」

「嬉しい！」

泣き濡れた目で見上げてくる義妹が嘘を言っているなど、デイルには思えなかった。

だから、優しく慰めることを選んだ。

その腕の中で、マリーニエが薄っすらと笑んでいる事など気付きもしなかった。

先程まで泣いていた目が、恐ろしい策謀の光を浮かべているなど思ってもなかった。

デイルが仕事があるからと部屋から出て行くと、マリーニエは微笑んでいた表情をスッと拭い捨てた。

「ナーガ、あの男たちはどうしているの？」

命令しなれた口調で、自分付きの侍女の名を呼ぶ。

ひそやかにその足元に頭を垂れた侍女は、静かに報告を述べる。

「エミール子爵のご子息様たちは、原因不明の病に倒れたと聞いております。噂では死神につかれたとか」

「……役立たずな！」

吐き捨てたマリーニエは、持ち上げた茶器を中身の紅茶ごと露台に叩き捨てた。

飛び散った欠片が、ナーガの手元まで飛んで薄く血が滲む。

だが、侍女は眉一つ動かさず、マリーニエも全く気に止めなかった。

「お兄さまに、変な疑いを持たれてしまつては意味がないのよ！今度は、もっと慎重に……。いいえ、いつそ大胆でも効果的なものが良いわ」

妙案を思いついたようにマリーニエの口角が吊りあがる。

紅くぬられた唇は血を吸ったように禍々しい。

「ナーガ、あの娘の傍付きを引き離す事は出来て？」

「ご命令であれば」

「そう。あの二人、邪魔なのよ。どちらもお兄さまに顔を覚えられているから下手なことはしないで。引き離すだけで良いわ」

「判りました」

「……最初から、こうすれば良かったわ。ああ、もう直ぐですわ。お兄さま。あたくしがお兄さまの頭痛の種を消し去って差し上げますから」

うつとりと呟かれた声音は、艶めいて、それだからこそ背筋が凍るほど恐ろしいものだった。

齒車は廻された。

狂気と言う名の力に押されて、運命は廻る。

誰にも止められない何かが、動き出したのだ。

16＊ 咲き初め

パツと目が覚めた。

何か、夢を見たような気がした。

ぼんやりと寝台から起き上がって、寝癖のついた髪で部屋の中を見回した。

まだ外は暗い。夜のようだ。

やわらかな寝台に足を取られながら、ちょっと転びかけながら床に足を着ける。

露台の窓に手を付ければ、ひんやりした硝子の向こうに眠る花園が見える。

迷うように視線を彷徨わせてから、カタンツと窓は開かれた。

あの宴から夜は少し怖い。

それなのに、ハ克蘭は今いないのに。

外に、泉に、行きたかった。

緊張を呑むように細い喉が上下する。

裸の足が芝草を踏む。

夜露がひんやりと白い足を洗う。

優しい風が吹けば、金色の流れを作り出す。

そつと身体を抱きしめて、小さく無意識にため息を吐いた。

憂いに染まった顔は、無邪気さを拭い、大人びた色を乗せる。

勇気を離さないとするように、折れそくに細い手がきゅつと胸の前で組まれる。

清かな水音が聞こえてくる。

揺れる気持ちを抑えながら、泉へと足を踏み入れた。

木々に囲まれた泉は、静寂に満ちていた。

ほろほろと揺れる小花が、夜風に散って波紋を作る。

『……いない？』

求めていた人の姿は、ない。

ずっと来ていなかったから、デイルさまも呆れたかな。

寂しく思いながら泉の縁に座り、冷えた水に指先を浸す。

波立つ水面を見つめているとざわつと泉に眠る精霊たちが、いっせいに目を覚ました。

驚いて目を見張っている前で、泉に現れたのは見慣れた姿。

だが、明らかに違う面立ちの精霊。

『泉を揺らすのは、その名に反しているのではないかい』

『……誰？』

艶然と笑うのは、ハ克蘭と同じ半透明の姿。

『ふふ、ロランという。本当なら、こちらに来るのはあまりよろしくないのだがね』

『ハ克蘭のお友達？』

『似たようなものかな』

『青い目……』

『ん。ああ、これは貴方がたとは違うよ。この目に血も力もないからね』

『ロラン、何をしている！』

尋ねようと口を開いたりゼイラの声を奪ったのは、厳しいハ克蘭の声だった。

『何だ、もう来たのかい。もう少し、逢瀬を楽しみたかったのに』
至極残念そうな声は、けれど揶揄するような笑みも含んでいる。

『ロラン、何を考えている』
『おや、怖い。ただ、お帰りになる前に少しばかり話してみようと思っただけさ』

『ロラン……！』
叱責するような声が、軽やかな声に重なり叩く。

『帰る？』

不思議そうに繰り返したりゼイラの目を覆うように抱きしめたハ克蘭は、厳しい視線をロランを投げる。

『まだ、知らなかったのか……』

『去れ』

『はいはい、帰りましょう』

ロランがふつと痛そうな目を向けた。

『一つ、置き土産だ。公爵の娘には気をつけると良い』

水面に落ちる雫の様に姿を消す寸前の言葉にハクランは眉を寄せた。

意味が掴めないのではない。懸念を裏付けられた事が腹立たしいだけだ。

本当に、人間とは何故こうも愚かなのだ。

『ハクラン……』

戸惑う頼りなげな声音に、意識的に優しい笑みを浮かべる。

『すまない、驚かせてしまったね』

『あの方は？』

『あれは、水華の精霊だ。水の性かいつも気ままに流れているよ』

『……楽しそう』

小さく微笑んだりゼイラに、ハクランも気を緩めたように笑った。

『さあ、今日はもうお帰り』

『うん。あのね……』

『なんだい？』

風に運ばれる力を感じながらリゼイラは、思いを馳せるように目を閉じた。

『名前』

呟いて、ふつと口を閉ざした。

『夢を見たの。きれいな女の人が、名前を呼んでくれた。……聞いたことのない名前だった』

ロランと話している時に不意に先ほど見た夢の事を思い出した。

ふわふわとした黄色の花に彩られた優しい夢。

『ハクランは、リゼイラって呼ばないね』

腕の中、安堵と共に訪れた眠気にぼんやりと呟く。

『それは、そなたの名ではないよ』

『ちがう、の……？』

眠くて、もう呂律が回らない。ハ克蘭が言っていることも良く判らない。

『そなたの名は、もつと美しい。もつと穏やかだ』

健やかな寝息をたて始めた温もりに、ハ克蘭は慈しむように口付けを落とす。

『“導の花”。幸せを招く名だ。そなたにこそ相応しい名前』

名づけた人の明るい笑顔を思い出し、精霊の顔に偲ぶ微笑みが浮かぶ。

『……ミルレイア』

囁く声は、眠るリゼイラには届かない。

『もう一つ。その名を呼ぶのも近いかもしれない』

次に目を覚ましたら、もう朝だった。

また、ハ克蘭に寝台まで運ばれてしまった。

ちゃんと自分で戻ろうと思っていたのに。

甘えてばかりではいられない。そう思っているのに、やっぱり会ってしまふと甘えてしまふ。

「リゼイラ様。今日は早起きですね」

水差しを持ってきたレジーナが、軽く驚きを滲ませたのに照れたように首を傾げた。

そんなにいつも寝坊してるかな。

「いつもリゼイラ様を起こすのが楽しみなのに、ちょっと残念ですね」

悪戯っぽく笑うレジーナにきょとんとしてしまふ。

起こすのが楽しい？

顔一杯に疑問符を浮かべたりゼイラの素直さに、吹き出してしま

そうになつてグツと堪えた。

やっぱり可愛いご主人様だ。

「さあ、今日も綺麗にしましょうか」

楽しそうなレジーナの言葉に頷きながら、鏡の前に座る。
いつもと変わらない一日の始まりだった。

「今日は雨模様ですね」

朝食のお皿を片付けながらレジーナが、窓を見つめながら呟く。
いつも太陽の光をいっぱいに取り込む窓は、水にぬれて透明な筋を
いくつも作り出していた。

『雨……』

そう言えば、初めて雨を見た。

窓辺に立つて空を見上げると、大きな埃のような雲がいつぱいに広
がってそこからポタポタと雫を落としている。

空の上には水差しがあつて、それをこぼしているのだろうか。

庭は薄っすらとぼやけていて何だか不思議な光景だ。

空気の匂いも、いつもとちょっとだけ違う。

風が温もつて、水気を含んで少し重い。

精霊たちも、何だか身体が重そうにしている。

反対に元気なのは、葉や花の精霊と水の精霊たち。

精霊にも色々居るのだと思うと楽しくなる。

「そうだ。お外に出られないんですから、今日は温室に行ってみま
せんか？」

『おん、しつ？』

首を傾げると、元気良く頷かれた。

オンシツって何だろう。

何かの部屋だろうか。

「ちよつと離れた場所にあるんですけど、館からそのまま回廊が伸

びてるんです。雨でも楽しめるように」

良く判らなかつたけれど、レジーナは楽しそうできつと良い所なの
だと思った。

「レジーナ、また勝手に……」

呆れ混じりのライドルの小言をいつものように振り切つてレジー
ナはリゼイラを誘う。

「如何ですか？温室だけで育てられてる植物もいっぱいあるんです
よ」

奥の手の様にレジーナが付け加えると、リゼイラの目が輝く。

「それじゃ、お昼が済んだら行つてみましょうね。早速、準備をし
てきます！」

ライドルが口を挟むより早く侍女の姿は外に消えた。

付き合いが長いと言うのは、良いばかりではない。

「落ち着きのない」

額を押さえながら言う声には、どこか諦めの様な甘さがあつた。

本人はきつと気付いていないのだろうが、ライドルはレジーナに
はほんの少し態度が甘くなる。

小さな発見はリゼイラを楽しくさせる。

こうやって傍にいる人たちの事を知つていけるのは嬉しい。

「……リゼイラ様、それでは午前中はどうしましょうか？画集でも
持つて来ましょうか？」

尋ねてくるライドルに少し考えるように俯いた。

前に貰つた画集は、全部見てしまった。何度見てもドキドキするけ
れど。

「画集でしたらたくさんそろつてますよ」

遠慮を見せる令嬢に視線をあわせて、少しだけ誘惑するように言葉
を重ねる。

これではレジーナを諫められないな、と苦笑しながら、それでもリ
ゼイラにはこれくらいが丁度良いのだと学びつつあるライドルだ。

やがておずおずとお願いするように頷かれた返事に、かしこまりました、と立ち上がる。

見上げる視線に見え隠れするのは、申し訳なさとお本当に良いのかと自問する戸惑い。

そんな懸念を払い除けるように笑うとようやくリゼイラはホッと安堵の表情を見せる。

本当に、どんな境遇にあった方なのだろうか。

日の強さを知らない決めの細かい肌は、数多の女性が羨望の眼差しで見るだろう。

だが、あまりに白すぎると感じるのはライドルが男だからだろうか。

その身体の細さを心もとなく思うのはライドルが下働きの女性を見慣れているからだろうか。

不穏な胸騒ぎを感じながらライドルが、リゼイラにお茶をいれようとした時に扉を叩く音が響いた。

レジーナが戻って来たのかと扉を開くと、そこに居たのはこの館の奥向きを仕切っている侍女頭の伝言を携えた侍女だった。

彼女のことは、ライドルも良く知っていた。

だから、不信に思うこともなく伝言を受け入れた。

リゼイラには聞こえないように伝えられたそれに頷いて、いったん部屋に戻る。

「リゼイラ様。申し訳ありませんが、少し席を外してもよろしいでしょうか。すぐにレジーナも戻ってくると思います」

本当に申し訳なさそうなライドルをリゼイラが止めるわけもなく。

リゼイラは、この屋敷に来てから初めて一人きりになった。

ハ克蘭も今は、傍から離れている。

太陽が空にいる間は、仕事があるから仕方がない。

それでも、この頃は夜になるといつも一緒に居てくれるからそれで十分だ。

慈しんでくれる精霊を思い出して、ふっと昨日の名前の事が思い出された。

リゼイラは、違う名前だと言っていた。

その言葉だけは夢うつつの中でも聞き取れた。
それなら。

それなら、本当の名前って何だろう。

名前は、あるのだろうか。

『いたっ……』

ぼんやり考えているとツキンと頭が痛んだ。

まるで考える事を否定するように頭痛がする。

フラフラと椅子に座って、身体を丸めた。

外は降りそぼる雨。

雨垂れに紛れるように、カチャリと扉が開く音がしてレジーナが帰って来たのだろうか重い頭で振り返り、部屋の入り口に立っていた訪問者の姿に息を呑んだ。

「突然、お邪魔してしまって申し訳ありませんわ」

しとやかに部屋に入って来たのは公爵家のご令嬢。

「今日はリゼイラ様とどうしてもお話しがしたくて」

そう言って、マリーニエはとても美しく笑った。

いつかのようにリゼイラは、マリーニエの背中を追いかけていた。綺麗な絹の裾を見つめながら、小走りについていく。

部屋に訪れたマリーニエは、驚くりゼイラに微笑みながら告げたのだ。

「レジーナなら用を言い付かったようですよ。温室にいらっしやるとお聞きして、この前はご案内できなかったですでしょう。だから、是非ご案内させてくださいな」

温室に行く事は、さつき決まったばかりの事だ。

レジーナとライドルしか知らないことだから、きっと二人がマリーニエに伝えたのだろうと素直に思った。

それなら着いていっても大丈夫だろう。

につこり笑うマリーニエの心の裏側を見通すことなど、リゼイラには出来るはずもない。

足早な令嬢の後を置いていかれないように無心に追うだけだ。

「そうだわ。ここはお兄様の執務室がありますのよ。少し、ご挨拶していきましょう」

今思い出したと声を上げたマリーニエに、リゼイラの胸がドキリとした。

夜には会えなかった。

あの誕生会から一度も会っていない。

今までとつても会いたかったのだと、マリーニエの言葉を聞いて今更の様に胸が苦しくなった。

青灰色の瞳を切なく染めて、とくとくと鳴る心臓に手を当てる。

デイルの執務室は、すぐ近い場所だった。

まるで、最初から目的地だったかのようにマリーニエの足取りは淀みない。

廊下の奥にデイルの執務室はあった。他の部屋の扉と比べても立派

だ。

飴色に磨かれた扉は、光沢があつてリゼイラの目にはとても美しくみえた。

マリーニエは、贅沢品のような扉を無造作に叩く。返事はない。いらつしやらないのだろうか。残念だったけれど、少しだけホツとしてリゼイラは戻ろうと一歩足を退いた。

だが、マリーニエは頓着せずに扉を開く。

「お留守かしら。ちょっと待ってみましょう。大丈夫ですわ」

戸惑うリゼイラの腕には、マリーニエのほっそりとした指がしがみ付いている。

半ば無理やり引き摺られるように部屋の中に招き入れられる。

執務室は、すっきりと整っていた。

それでも所々、書類や本が転がっているのが不在の主の名残の様でリゼイラは一つ高鳴った胸を抱く。

雨に叩かれる窓に近づけば、いつかお弁当を広げた庭が見えてビツクリした。

いつも、デイルさまはここからお庭を見ていたのだろうか。

冷えた硝子に手を添えて、こつんと額を乗せる。

少しの間、瞳を閉じてふと机の上に目がいった。

リゼイラには良くわからない書類が積み重なっている。

その中、まるでひっそりと隠すように飾られている栞に目が吸い寄せられた。

日に褪せ、黄ばんだ台紙。

薄紙に覆われ、枯れた小花が貼り付けられている。

そっと指を伸ばして、盛り上がった表面を撫でる。

どうしてだろう。

とても、懐かしい。

――エィア――

不意に滑り込むように、遠い声が頭を打った。

ひゅっと息を呑んで耳を塞いだリゼイラはぎゅっと目を閉じる。

何。何。誰の声…。

―…エイア。…レイア―

優しい声が細波の様にリゼイラを浸していく。

―ミルレイア―

『あ……』

大きく見開かれた瞳は、朧から離れない。

光が分散した虚ろな瞳が青味を増した事に、リゼイラは気がつかない。

『や、くそく、のはな』

無意識に紡いだされた言葉が、記憶を刺激する。

誰かが笑ってる。キラキラ、キラキラした光の中で。

……笑ってる。

いっぱい、いっぱい笑って……。

「あ……」

喘ぐように開いた口から、か細い音色が漏れた。

誰にも聞き取れないような小さな音。

「リゼイラ様？」

混濁した意識は、堅い声によって引き戻された。

まるで白昼夢から覚めたように、リゼイラの顔から血の気は引いていた。

だが、マリーニエにはそんな事はどうでも良い。

執務室の重厚な机から、かたんと封書を開けるための小刀を取り出す。

何をしたいのか、判らぬままにリゼイラは鈍く光る刃物とマリーニエを交互に見る。

「あたくし、お兄様のことがとっても大事ですの」

静かに話しだしたマリーニエの口元は笑っているのに、何故か恐ろしい。

「お兄様ほど素敵な男性なんていませんわ。他の貴族の男なんて、器量も度胸もまるで駄目。家柄だけであたくしと並ぼうなんて不遜

だと思いませんこと？」

問いかけてもリゼイラには、他の貴族のことなんて判らない。ただ光る小刀から目が離せない。

「お兄様と会ったのは、幼い頃に数回でしたわ。お母様がお許しにならなくて。けれど、あの日出会ったお兄様は誰よりも素敵でしたの」

うつとりと呟くマリーニエは、その時の事を思い出しているのだろう。本当に幸せそうに見えた。

「公爵の地位に相応しいだけの知識と品格、教養。全てが段違いでしたわ。お庭で、散策していたあたくしに優しく微笑んでくださった事忘れられませんわ」

ですから、蕩けるような甘い声音が一転して凍える冷気をまとう。

「リゼイラ様が嫌いですわ。どうして、あたくしが立てない場所に貴方ごときがいらっしやるの？」

真正面からぶつけられた憎悪に、リゼイラの足は竦んだ。

今までにも疎まれたり、軽侮の笑いをぶつけられたことはあった。

けれど、マリーニエの感情はそんな生易しい物ではない。

「お兄様の隣りに、どうして臆面もなく立っていらっしやるの。子爵の娘が、身の程を知らなくてはなりませんわよ。お兄様だって、貴方の事疎ましくお思いになっておられるのに。嫌われている事にお気づきではなくて」

次々に飛び出す研ぎ澄まされた刃のような言葉は、リゼイラを過たず切り裂いていく。

嫌われていた？疎まれていた？

だから、花嫁ではないと仰った？

だから、もう泉にはいらっしやらなかった？

呼吸まで止めて、青白い肌がさらに色を失っていく。

強張った表情のリゼイラに、不意にマリーニエが笑んだ。

「ですが、お兄様はお優しいからリゼイラ様にそんな事仰らないでしょう。だから、こうするしかありませんの」

マリーニエが手にした小刀が、振りかぶられる。

鋭い刃の光に吞まれたように、リゼイラはその輝きを見つめるしか出来なかった。

ザッ……！

絹を裂き、白い肌から血が飛ぶ。

リゼイラは宙を舞った赤い飛沫に、表情を失い目を見張る。
ポタポタと落ちる血は、マリーニエの腕から滴っている。

マリーニエは、自らの腕を刃物で切り裂いたのだ。

数瞬自失していたリゼイラだったが、ふらりとマリーニエがよろめきながら更に振り上げる小刀を慌てて取り上げた。

抵抗するマリーニエから、刃物を手放させようとリゼイラは必死だった。

自分の顔や手に血がベツタリとついたことにも気がつかない。

やつとの思いで、刃物から手を離させた時、マリーニエは一瞬だけ暗い笑みを浮かべた。

そうして、部屋の扉まで駆け寄るとその場にしゃがみ込む。

傷が痛むのかとリゼイラが傍に寄ろうとした時、マリーニエは悲鳴を上げた。

館中に響き渡るような、恐怖に満ちた悲鳴だった。

突然の大きな声にリゼイラが戸惑っていると、廊下から数人の足音が聞こえてきた。

「……何があった！」

飛び込んできたのは、デイルとその後ろに従っていたベルリド。

ホッとしたリゼイラに、だがデイルは驚愕を浮かべ、一瞬の後に憤激の色を乗せた。

「お兄様！助けてくださいませ！」

マリーニエが、傷を抑えてヨロヨロとデイルに縋りつく。

え、と戸惑ったリゼイラは呆然と目の前の光景を見ているしか出来なかった。

「リゼイラ様が、リゼイラ様がお兄様の執務室に入られるのを見か

けて。あたくし変に思ってお声をかけたら、突然腕を！」

蒼褪めた顔で、涙を浮かべるマリー二エの姿はどう見ても被害者だった。

かたんっ、小刀が床を叩いた音はか細く、だが絶対的な音色で響いた。

血にぬれた小さな手が、震えていた。

どうして。どうして。違うのに。そんなこと、してないのに。

ゆるゆると否定を示すリゼイラだったが、デイルの厳しい眼差しにぶつかって目の前が暗くなった。

「失礼致します」

ベルリードが、リゼイラの身体を拘束する。

違う。やってない。

そんなひどいこと、やってない。

助けたかっただけなのに。傷つくのを見たくなかっただけなのに。引き立てられるように歩きながら、リゼイラはデイルを見上げた。

「……そうやって無力な顔で取り入れと言われたのか」

冷やかな声に、リゼイラはもう笑いたくなくなってしまった。

どうして、一度でも夢を見てしまったのだろう。

嫌われていたのに。疎まれていたのに。

どうして、ハ克蘭のように抱きとめてくれるかもしれない、なんて期待したのだろう。

もう自分が愚かすぎて、可笑しい。

なのに、零れたのは笑みではなく、冷たい涙だった。

「北の幽閉室へ連れて行け」

断罪する声音を背に、リゼイラは目を閉じた。

目蓋の裏で赤い花が散っていた。

「どう言う事ですか！」

ライドルの張り上げた声が、執務室に響いた。

対するデイルも厳しい表情だが、ライドルはそれ以上に怒りを滲ませていた。

侍女頭に呼ばれたと行ってみれば、指定された場所に彼女はおらず。

館中を盪回しにされた。あげく、侍女頭はライドルを呼んだ覚えはないと言う。

嫌な予感に急いで部屋に戻ればリゼイラの姿はなく、レジーナが同じように青い顔をして戻って来たのだ。

そのレジーナは、今無理やりリゼイラの傍に付き添っている。

「どう言う事もない。あれが勝手にこの部屋の書類に手を付け、マリーニエを切り付けた。捕らえるには十分だ」

「その証拠はあるのですか？」

「証拠も何も、目の前で起こったことだ。血まみれで小刀を手にしていたんだ。証拠など必要ない」

吐き捨てるような公爵に、ライドルは必死で己を落ち着けさせていた。

そうでなければ、何を言い出すか自分でも判らない。

そんなライドルに、デイルは怒りを滲ませながら机上の書類を叩いた。

「これは、あの子爵の横領に関する証拠書類だ。大方、この書類目当てで忍び込んだ所をマリーニエに見つかって、後先考えずに刃物を振り回したんだろう！」

「……そんな方ではありません」

震える声でライドルは反駁する。

「そんな方ではありません。あの方は、誰かを傷つけるくらいなら自分を傷つける方です。わがまま一つも言えずに、ただひっそりと生きているのを望むような方です」

「それくらいの演技は出来る」

振り切るようなデイルの言葉に、ぐっとライドルは唇を噛んだ。

今のデイルには何を言っても無駄だろう。

それにリゼイラの無実の証拠などあるわけもない。

これ以上詰め寄っても、リゼイラの立場が危うくなるだけだ。

激情に流されそうになる中で必死で冷静さを取り戻す。

意識的に細く息を吐いて、懷から小箱を取り出した。

デイルが差し出された小箱を見て眉を寄せる。何処かで見た覚えがあった。

「リゼイラ様からです。このような高価な物を頂くことは出来ない
と、お返しするように頼まれておりました」

中身は、初めてリゼイラに会った時に渡した黄金と紅玉の装身具。

驚いたらしいデイルをそのままに一礼してライドルは退出する。

それでも、最後にどうしても一言告げたくて扉に手をかけて言った。

「リゼイラ様は、貴方に何一つも望んでいらっしやいませんでした」

滲む声にデイルが何か返す前に扉は閉まった。

一人、残されたデイルは小箱を片手にぐしゃりと前髪を握りつぶす。

あの時、執務室に居るはずのない二人の姿を見て愕然とした。

混乱する中、両手を血に染めたりゼイラに裏切られたと思った。

部屋の中には、子爵を蹴落とすための証拠書類が並べられていたのだ。それを手にするために来たのかと頭が真っ赤に塗りつぶされた。

血を流すマリーニエの言葉は、そのままデイルの最初の考えを肯定するものだった。

「……なんだ、最初から俺は信じていなかったんじゃないか」

自嘲して、もやもやする不快感を飲み下す。

そうだ。最初から信じてなどいなかった。子爵の娘が馬脚を現した。それだけの事だ。

ライドルやレジーナは、何か取り入られているだけだろう。

頭の良い二人のことだ。すぐに目も覚める。

馬鹿馬鹿しい。何をこんなに混乱する事がある。

むしろ好都合だ。これを手がかりにして子爵を効果的に追い詰める事が出来る。

手始めに、今回の事件を子爵に内密に伝えよう。大切に育ててきた娘の一大事だ。どんな反応を示すかと思うだけで楽しみだ。

……楽しみだろう。これが、俺のやりたかった事だろう。その筈だ。

強く自分に言い聞かせても、先程から亜麻色の髪がちらついて仕方がない。

最後の、酷く傷ついた瞳が忘れられない。

食いしばった奥歯がギリギリと不快な音を立てる。

間違っていない。何も間違っていないだろう。

今まで信じたままを進んできた。これからも同じようにしていくだけだ。何を迷う事がある。

握り締めた小箱を床に投げ捨てる。

留め金が外れ、床に豪華な輝きが零れた。

こんな物は小細工だ。惑わされるわけがない。

「……くそっ」

小さく自分を罵って、ふと机の上の栞に目が入った。

長く褪せた色で台紙の上にあった小花は無残だった。

栞の花は、まるでデイルを責めるように一つ残らず散っていた。

18* 温室

花が散っている。

黒の空からひらひらと深紅の花弁がヒラヒラと。

小さく狭い場所に座り込んで空を見上げていた。

ぺったりと両手をついて、まるで見惚れるようにして。

赤光の花びらは、降り注ぐ。

差し伸べた白い手に落ちた花びらは、どろりと融けて逝く。

それは、赤く膚を汚した。

その名前は…。

ひゅつと喉をならして目を覚ますと初めて見る部屋にいた。

眠っていた自分に戸惑いながら、ゆっくり身体を起こして周りを見回した。

今までの部屋よりも狭いけれど小ざっぱりとしていて、リゼイラにはむしろ安心出来る広さだった。

幽閉と言っても、身分ある人を軟禁するための部屋らしい。

取り付けられた小窓に鉄格子が嵌められているのが、初めて見る造りだった。

ぼんやりする頭を抱えながら固めの寝台から降りる。

服はゆつたりした物に着替えさせられていた。

懐かしい麻の感触に、少しだけホッとする。

でも、これからどうなるのだろう。

首を傾げながらも、すぐに考えるのを止めた。

考えても仕方がない。また、あの日々に戻ったのだと思えば良いのだろう。

地下の部屋よりもずっと気持ちの良い所だから、そう大変ではないと思う。

寝台と小さな円卓と椅子が置かれただけの部屋だが、リゼイラは贅沢な部屋だと思っていた。

閉じ込める人にどうして机が必要なだろう。

公爵様のお屋敷だから、こんな場所も綺麗にしているのだろうか。立ち上がったても何もすることが浮かばずに、ちよこんと寝台の隅で膝を抱えた。

あの暗い生活を過ごしていた時のように。

顔を埋めて目を閉じると、本当に何もかもがあの頃に帰ったような気がした。

闇の中で、思い起こされるのはマリー二エの悲鳴。

デイルの冷ややかな瞳。

手に触れた血の温度。

そこまで思い出して、ビクツと顔を上げて慌てて自分の手を見つめた。

赤く汚れていた手は拭われたのか、血の染み一つ残っていない。

何度も手を握っては開いて、白い手のひらを何度も見つめて。

ようやく安心したのか、倒れこむように長く長く息を吐いた。

良かった。良かった。赤くない。

噴出した汗にぎゅつと身体を縮めて言い聞かせる。

大丈夫、赤くない。この手は、あの時みたいに汚れてはいない。

……あの時？

あの時っていつ？

自分の戸惑いに、リゼイラは考え込んだ。

気付いた時には地下で生活していた自分の手は、いつでも垢で汚れていた。

夜闇に浮かび上がるほど白く磨かれた手になっているのが、むしろ異質なのかもしれない。

けれど黒く汚れた手をしていただけで、赤い色にそまった記憶はない。

『……いたい』

蹲ったまま伸ばした手を額に寄せる。

ズクズクと疼く頭を抱えて、嘔き出す汗に浅く息を継ぐ。

頭が痛い。気持ち悪い。

疑問は苦痛に消えていく。

込み上げてくる吐き気を必死で飲み下していると徐々に不快な痛みは消えていった。

遠くなる耳鳴りに、はあと小さく息を吐いた。

その時、二つの足音が聞こえ大きく錠が開く音が響いた。

なんだろう。また、どこかにつれていかれるのかな。

痛みに上手く回らない頭を必死で巡らせて、閉ざされていた頑丈な扉を見つめる。

「……リゼイラ様！」

小さな悲鳴の声は、リゼイラに喜びを感じさせてくれた。

転がるように駆け寄って来てくれたのはレジーナだ。

いつも綺麗に結っていた髪が解れているのを初めて見た。

寝台の隅に痛々しく蹲るリゼイラを見つけたレジーナの方は、明朗な輝きを持った瞳を涙で曇らせている。

「すみません、リゼイラ様。私が、私が先走ったりしなければ良かったんです」

ぼろぼろと透明な雫が頬を伝っていく。

重い体を起こしてレジーナの頬をそっと拭う。

拭っても拭っても濡れる頬にリゼイラはちょっと困ってから微笑んだ。

「ああ、すみません！私が泣いてもしょうがないですよ。リゼイラ様をお慰めするために来たのに。駄目ですね、私ってば」

泣き笑いの表情でレジーナは自分で頬を拭う。

「顔色が良くないですよ、リゼイラ様。横になったださい」

優しい手のひらに促されてリゼイラは先程まで眠っていた寝台に再度横になる。

浮いた汗を柔らかい布でそっと叩くように拭いてくれる感触が心地

良い。

短い間だったのに、いつの間にか誰かという心地よさを知ってしまった。

こうして傍に居てくれるだけで幸せだ。

「リゼイラ様……、マリーニエ様の事です」

ぴくりとリゼイラの手が動いた。

言い難いのか数瞬だけ優しい侍女は視線を揺らした。

それでもマリーニエの事は気になって、リゼイラはジッと見つめて先を促す。

「傷は大したことはないそうです。痕も、残らないでしょう、と」

その言葉を聞いてリゼイラはホッと微笑んだ。

良かった。大したことがなくて。

「……リゼイラ様」

労わるような微笑みにレジーナが眉を寄せた。どうしてこんな時に人の心配などが出来るのだろう。

「いいえ。何でもありません。ゆっくりお休み下さい」

何か言いたげなレジーナに、不思議そうな顔をしながら目を閉じた。

日が暮れていく。

レジーナは、それから時間の許すまでリゼイラに付き添っていた。

「公爵様、子爵様からの返書が届いていますよ」

騒然とした日から一日が経ち、煩雑な処理を、未消化の気持ちさを晴らすかのように行っていたデイルは寝不足で沈んだ目でベルリードを迎えた。

「眠らなかつたんですか？」

責めるような声音を無視して渡された封書の蠟を破る。

どうせ、内密に穩便に済ませて欲しいという嘆願書だろう。

リゼイラは子爵の实の娘ではないが、見たところ大事に育てられた令嬢のようだ。

これからの事を考えても、下手な傷はつけないだろう。重いため息をかみ殺しながら、無駄に贅沢な飾りが縁を彩っている封書を開く。

面倒くさそうにそれを読んでいくデイルの横で、ベルリードは処理済の書類を仕分けていく。

いくつか未処理の書類が紛れ込んでいるのも、選り分けておく。

普段ならここで小言の一つも入るのだが、今そんな余裕がないことは判っている。

一山を片付け終わろうとした時、突然デイルが騒然と椅子から立ち上がった。

重厚な椅子が、衝撃で床に転がっている。

「な……、どうしましたか？」

普段の落ち着きをかなぐり捨てたデイルの様子にベルリードの方が驚いた。

「あの男……」

唸るような低い声がデイルの怒りを余さず現している。

か細い音を立てて、封書が握りつぶされる。

「子爵の要求は何だったのですか？」

そんなに不遜な物でも送られて来たのだろうか。

お姫さまの身柄と引き換えに金貨か名誉を引き合いにだすのは、わかりきっていたはずだが。

あの男に品性などデイルも求めているだろう。

だが、今デイルは心底怒っていた。

一体何に。

困惑するベルリードに、公爵は無言で拳の中の封書を渡した。

既に塵と同じような状態になっていたが、読む分には支障はない。

丁寧な皺を伸ばして達筆な字が踊る返書を読む。

それにしても誰の代筆だろうか、そんな馬鹿な感想は途中まで目で

追っていく内に吹き飛んだ。

「な、んですか、これは」

ベルリードの声が震えた。

「何ですか、この返書は。仮にもご自分の姪御さんでしょう！それをお好きなようにご処分ください、とは。あの男家族の情もないんですか！」

その返書の文面には、ただの一文もリゼイラの身を案じる物は含まれて居なかった。

ただ自分とは関係ない事柄だ、一度そちらに嫁に出した身だ、そればかりが躁言のように書かれている。

「どうやら、思っていた以上に腐っていたらしいな」

憤激するベルリードに対して、デイルは何か突き抜けたらしい。不気味なまでに平静な声で応対する。

たった一言で良い。

そこにリゼイラの身を案じ、庇おうとする言葉が一つなりと含まれていると思っていた此方が甘かったのか。

身柄の引渡し条件によって、確かにデイルは子爵の失脚の足がかりにしようと目論んでいた。

だが、たった一言。

たった一言で良い。家族としての情愛を見せてくれれば、リゼイラは子爵家に無条件で引き渡しても良いと思っていた。

子爵はそんな密かなデイルの想いを見事に粉碎してのけた。

もしデイルであれば、どれだけ苦手にしていようがマリーニエに何かあれば何らかの手は打つだろう。

家族とは、そう言うものであると考えている。

一人が窮地に立てば無条件で手を差し伸べるのが家族である筈だ。こんなにも簡単に切り捨てられるような存在ではない。

「……リゼイラ様のご処分は、どうなさいますか」

一時、感情に支配されたベルリードはすぐに自分を取り戻した。

「しばらくは今の状態のままにしておくしかないだろう。子爵の手

に返すわけにもいかない」

渡したが最後、どうなるか。デイルには想像もつかないが、リゼイラにとって良いことではないだろう。

色々と忙殺された後で、随分と感情が落ち着いてきた。

そうして、もう一度己の下した判断を冷静に見つめ直す。

間違っではないはずだ。

公爵家の者に軽傷とは言え怪我を負わせたのだから、幽閉措置を取るの正しい判断だ。

そう思いながらも、誕生会の時に泣き震えていた姿が頭から離れない。

幽閉室は、時に精神を病んだ者を隔離するような部屋である。

屋敷の最上階、そして最も北に位置している。

日が余り差さず、狭い部屋の中での窮屈な暮らした。

あの少女に耐えられるだろうか。

抱き上げた時の軽さを思い出して、思わず自分の手を見つめた。

そうして、名前を呼んだ時の嬉しそうな笑顔を思い出す。

あんなに無邪気に微笑んだ子どもが、義妹を傷つけたのか。

だが、リゼイラ自身の考えでの行動だとは思えない。恐らく裏で糸を引いていたのは子爵だ。

一晩たつてようやく頭が回転してきたらしい。

当たり前のことに今さら思い至って、恥ずかしくなる。

昨夜の自分がどれだけ動揺していたのか、自覚すると強い羞恥心を感じた。

とりあえず、リゼイラがまだ幽閉と言う立場は変わらない。何にせよ、罪は犯したのだから。

それでも一度きちんと話し合う必要はあるだろう。

「ああ、ライドルとレジーナはどうしている？」

昨日、凄惨な剣幕で談判にやってきた従僕を思い出してベルリードに尋ねる。

「二人でしたら、リゼイラ様についてますよ。何がそんなに気に入

ったのか判りませんが」

肩を竦めたベルリードに、わずかに苦笑を浮かべる。

子爵の事で、少しばかり同情心は芽生えたようだが、まだ良い印象は持てないらしい。

一度、自分の目で見極めた事を簡単に撤回するような男ではないから仕方がないだろう。

「今度、また会ってみるといい。新しく見えて来る物があるかもしれない」

半分自分に言い聞かせるように呟くと、側近は少し考えるようにして頷いた。

「落ち着いたら、お顔を見に行かせて頂きますよ」

歩み寄りを見せたベルリードに、同じように頷き返しながらデイルは今日の仕事に取り掛かる。

まだ、気付いていない。

リゼイラは狭い部屋の中だ。

赤い花が咲いている。

まるで絨毯の様に一面に。

空は黒くて、星ひとつも輝いていない。

ああ、夢だ。

不思議に冷静な部分がそう判断している。

そう夢なんだ。

一歩踏み出すたびに、足の裏で花が潰れ紅い液が滲み出す。

足跡が水溜りとなって、転々と後に続いていく。

遠くに誰かが横になっているのが見えた。

眠っているのか。

横たわった場所から、花がつぶれて赤い川がここまで流れて来た。ぼんやりとした感覚のまま、一歩一歩近づいていく。

暗闇の中なのに、不思議と花とその人の姿は見えた。

赤い流れに足を浸して、横たわった人の直ぐ近くまで来た。

もう顔が見えても良い距離。

その人は、花と同じ赤い服を着て、胸の上で手を組んで眠っていた。

ふわふわとした髪が、肩から胸へと流れている。

静謐な表情で眠るその人の顔は。

リゼイラは、悲鳴をあげた。

19* 探光

おねむり、おねむり

かわいいわこよ

おねむり、おねむり

いとしいわこよ

かぜのゆりかご ゆらゆらゆれて

おねむり、おねむり

やさしいゆめにおねむりなさい

何か小さな物音がしてリゼイラは、ふわりと目蓋を揺らした。

横たわった視界にぼんやりとしながら、もう一度目を閉じる。

ひらひらと目蓋の裏に赤い残像が散る。

この部屋に来てから、良く眠れない。

うつらうつらとすれば赤い花の散る夢を見る。

そうして悲鳴をあげて飛び起きるのだ。

何を見たのか、起きた時にはわずかも覚えてはいない。

全身が汗で濡れ、身体は冷え切り、それなのに吐く息は喉を焼こう

としているように熱い。

幾夜もそれを繰り返せば、いつしか眠りは恐怖になる。

夢を見るのが怖い。眠るのが怖い。

怯える心は眠りを遠ざけ、慢性的な疲労を肉体に与える。

一人、幽閉室で過ごすようになって幾夜か。

寝台に起き上がって、鉄格子のはまった小窓から背伸びをして外を

見る。

どうやら夜のようなだ。

ぼんやりしながら寝台に戻って、膝を抱えて丸まる。

最近、精霊たちが静かだ。

まるで何かを恐れているかのように、それぞれの本体から顔を覗かせようとしない。

ハ克蘭とも何日も会っていない。

いったい何が起こってるのだろう。

まるで情性のように考えて、けれど本当に知りたいとは思えない。ただ、ハ克蘭と会えないのが寂しい。

『会いたいな……』

呟いて、無意識に思い浮かべたのは精霊の顔ではなかった。

白い額に不似合いな皺が寄る。

棘を飲み込んだような痛みを感じて、リゼイラはぐつと唇を噛んだ。

『デイルさま』

労わるような微笑みが浮かんだ、すぐ後にあの冷たい視線に切り替わる。

悲しみに浸された中で、ふつと微笑んだ。

でも、もう会うこともないから。

あの泉での事だけ、覚えておこう。

とつても素敵な思い出をもらったから、それだけ大事にしよう。

デイルさまの笑顔だけ、覚えておこう。

膝の間に額を乗せて笑んだ表情が、酷く大人びていた事をリゼイラは知らない。

幼い姿でありながら、それは余りに深い微笑みだった。

滾々と湧き出る泉。

そこは、公爵家の敷地内にある小さな泉だ。

庭から外れた場所にあるため、ほとんどの者はその存在にすら気付いていない。

静寂に満ちた泉には、一つの影。

高い背を木の幹に寄りかからせているのは、この館の主人。

いつもはきつちりと上げられている前髪が、長く目元を覆っている。

深い知性と同時に若さが持つ情熱が混在する瞳は、今はわずかに曇っている。

組んだ腕はまるで他者を拒絶するかのようで、またその腕に抱くものを待ち望んでいるかのようでもある。

数日、デイルはこの泉に来る事が出来なかった。

心は何度も馳せていたが、最近の一連の出来事に身体が空く事はなかった。

結局、あの苦しい表情を見たのが最後となってしまった。

噛み締めるように思い出していた悲しい蒼い瞳が、不意に泣き濡れた青灰色の瞳へと変じた。

慌てて指で触れた金色の髪を思い浮かべるが、それもふんわりとした亜麻色の髪へと移ろう。

これではまるであの少女に恋しているようではないか。

そんな事を思つて、ハツとする。

「ば、馬鹿な事を……！」

自分の考えに動揺したせいか、思わず声が漏れた。

確かに、あの令嬢に同情してはいる。

信じていた叔父に裏切られ、ぬくぬくとした生活から一変しての軟禁生活だ。

今も泣き暮らしているかもしれないが。

狭く薄暗い、冷え冷えとした部屋の中で涙を流すリゼイラを想像して、デイルの胸が小さくなく痛んだ。

だが、同情と憐れみで己の決定を覆すなどあつてはならない。

それは上に立つ者の責任であり、己の地位を守るための鉄則だ。勿論、過ちであれば頭を下げることも厭わない。

「……過ちであつて欲しいのか、俺は」

リゼイラの前で謝罪する自分をごく自然に思い浮かべて苦笑する。自嘲気味に片手で髪を梳き上げた時、がさりと繁みがなつた。

一瞬、期待したデイルだったが、その後顔を覗かせた姿には驚きを隠せなかった。

「申し訳ありません、お邪魔させていただきました」

「何用だ？ライドル」

そう尋ねて、用など一つしかないと呟いた。

ライドルがここまで来て話したいことなど、心当たりは一つしかない。

「ご令嬢の無実を訴えにでも来たか」

不思議とこぼれた声は、疲れたような憐れむような響きを含んでいた。

公爵のそんな様子にライドルも、わずかに違和感を感じたがすぐに首を横に振った。

「いいえ。証拠もない状況で何を言っても意味はないと存じます」

凜とした返答にデイルは、背を預けていた幹から身体を起こす。

「それでは何の用だ？」

「一つ、お伺いしたいことがあつてまいりました」

伏せ目がちに言葉を紡いでいたライドルは、ずっと眼差しを上げると臆することなくデイルを見つめる。

ライドルのこんな所をデイルは買っていた。

普段は出しゃばらず、奥に控え、事があれば臆することなく意見する。

ベルリードとは違う意味で、得難い人間である。

「カンターナ子爵は、リゼイラ様のお身柄をお引取りになられるのですか？」

自分の考えを読ませない淡々とした質問に、デイルは一時どう応え

るべきか迷う。

だが、結局真実のままを伝えた。

令嬢に忠誠する従僕がどんな反応を見せるのか、知りたくもあつた。同時に重苦しい想いを吐き出したくもあつたのだ。

その言葉を聞いていたライドールの反応は、デイルのどの予想とも違つていた。

まるで何処かで悟つていたかのように終始冷静な表情を崩さなかつた。

訝つたのは公爵のほうだ。

「お前、何故そんなに冷静でいられる？あのベルリードですら、怒り狂つていたぞ」

「ベルリード様は、幸せにお育ちになつたのですね」

羨むでなく、揶揄するでなく。

ライドールは、心から微笑ましいと言つた表情を浮かべた。

「お前はベルリードの過去を知っているのか？」

知つていたらそんな言葉は出てこないはずだ。

ベルリードは、貴族によつて家族を奪われ、辛苦を舐めて市井から這い上がつてきた人間だ。

幸せなどと言える育ち方などしていないのは、彼を引き立てたデイルが一番良く知っている。

「ええ。お母上を何処かの貴族の妾に取られ、その後は兄弟たちと病の父上を支えながら暮らし、学問なさつたと聞いておりますが」
平然と返されて、デイルは微かに怒りを覚えた。

「ならば、どうしてベルリードが幸せだったのだと言える」

「お幸せでしょう。家族は、一番の味方はいつだって傍らにいらつしやつたのですから」

家族が一番の敵である苦痛など、知らないのなら幸福な事だ。

ライドールは静かに話します。

「私は、貧民層の生まれです。あそこは本当に酷い所でした。子どもは死んで当たり前。むしろ食い扶持が減るだけ有難い。そんな言

葉が子守唄の様な場所です」

初めて語られるライドールの過去にデイルは口を閉ざした。公爵であるデイルの耳には決して入ってこない世界の話だった。

「親が無条件に子どもを愛するなど幻想です。子どもと自分、どちらか一方しか生きられなければ、迷わず我が身を選ぶ。それが当たり前。生きるに困った親が子を売ろうと殺そうと、それが当たり前に通る場所です」

そんな陰惨な体験を述べた後、ライドールはニツコリと微笑んだ。

「ベルリード様はお幸せです。子爵様はリゼイラ様のただの伯父。手駒を切るなど当たり前の事でしょくに」

パンツとライドールの身体が強い衝撃に揺れた。

殴られた拍子に切れた唇から血が流れる。

デイルは怒りにそまつた目でライドールを睨みつけた。

「お前は！あれだけ、心配しておきながら。当たり前だとその一言で片付けるのか！」

家族に見捨てられた少女を、たったそれだけで切り捨てるのか。

激昂する公爵に、ライドールはため息を一つ吐く。

「そんなに心配して下さるなら、もう一度真実の奈辺をお調べ下さい」

「……それが目的か」

一瞬で、冷静さを取り戻したデイルが冷ややかに問えば、いいえと首を振られる。

「デイル様は、リゼイラ様を何不自由なく幸福に過ごして来たご令嬢だと思いいなんでしょう」

「違うと言っのか？」

「はい。あの方が幸せな生活をして来たなど私には信じられません。むしろ、あの目は私と同じ……」

同じ物、そう言いかけてライドールは言葉を途切れさせた。

同じではない。荒んだ傷など欠片もなく、ただ透明なあの瞳。

「ライドール？」

言いかけたまま黙る従僕に、デイルが訝しげに名を呼ぶ。

「失礼しました。リゼイラ様の足をご覧になられましたか？あの方は歩く事に慣れていらっしやいませでした。筋肉などほとんどついていない枝のような足をされていました」

「ほとんど動かずとも生活できたのだろう。子爵家で贅沢に過ごしていたのなら不思議ではないだろう」

「いいえ。贅沢に過ごしてきたのであれば、あのような足になるはずはありません。リゼイラ様のお歳になれば社交会へのご参加を考えて舞踊の練習もなさるでしょう。衣装に合わせた華奢な靴も履きこなさなければなりません。…マリーニエ様を見ればお分かりのはずです」

言われて、デイルはぐっと言葉に詰まった。

確かにマリーニエは、公爵家の娘として贅沢な暮らしを当たり前のように過ごしている。

だが、決してリゼイラのように頼りない細さではない。

歩けないほど足を痛めた事などない。

「リゼイラ様は、恐らく長く歩くことが必要ではなかった。もしくは、許されなかった」

「どう言うことだ？」

答えを想像しながらも、デイルは聞かずに居られなかった。

「私は、リゼイラ様と良く似た身体をしている人間を知っております」

ライドールの目は、デイルも知っているはずだと言っていた。

血色の悪い肌、やせ衰えた手足、そして外界の汚濁を全く知らないあの瞳。

一つ一つを思い返して、デイルは符合していく欠片に苦しげに眉を寄せた。

ああ、そうだ。知っている。そんな病み衰えた姿になる人間たちを。

幾度か、王城などで見かけたことがある。

リゼイラのように無垢な瞳の落ち主はいなかったが。

それが、それこそがリゼイラが幸福であつた筈がない何よりの証。

「……幽閉、監禁。長く拘束された人間は、靴など履きはしません」

静かに悲しむライドールの声は、夜の空の下で厳然たる真実をディルに突きつけた。

「歩く事など、許されません」

痛みを知らない薄い皮膚。

日の強さを知らない白い足。

それは柔らかな羽毛だけを踏んで生きてきたと言つ事ではない。

それは優しく守られた証ではない。

自らの足で、歩く事も許されなかったと言つこと。

自らの体で、日の輝きを知る事も許されなかったと言つこと。

薄い肩、細い腰、痩せた腕、軽すぎた身体。

何故、気付かなかった。

何故、見ようとしなかった。

あんなにも、あの子の身体は告げていた。

それまでの過酷な日々に悲鳴を上げていたのに。

愕然と表情を落とした公爵にライドールは、目を伏せる。

「お願いですから、もう一度お考え下さい。リゼイラ様は、誰かを傷つけるような方ではありません。自らの境遇を不幸であると思つていらつしやいませんか。お庭に出る事が好きで、甘い物が好きで、誰かが微笑んでくれる事が好きだった方です」

どうかお願いします、静かに告げてライドールは泉から立ち去った。

一人残されたディルは、長く身動きせずにした。

齎された事實は重く、己の愚かさこそが罪だったのだと突きつけられた。

苦悩の夜は更けていく。

20* 陽だまり

デイルは、上へと続いていく階段を前にして躊躇っていた。

滅多に使用されない階段は、さすがに手も届かないのか固まった埃が隅にたまっている。

朝だと言うのに灰色の空気に満ちたそこは、清々しい風など流れるはずもない。

ライドルと話してから、一睡もせずにデイルはこの場まで来ていた。

さすがに深夜や早朝に押しかけるわけにもいかなないと時間が経つのを待っていたのだが、いざとなるとやはり臆してしまう。

それでも、心を決めて足を踏み出した。

小鳥の鳴き声を耳にしながら、リゼイラは膝に当てていた額を持ち上げる。

結局、今日も眠れなかった。

ボーっとする頭が重くて、壁にもたれた背を動かすのも億劫だ。

床に落ちた日の光は朝が来た事を知らせてくれるが、リゼイラはぼんやりとまた目を閉じる。

ちよつと辛いかもしれない。

回らない思考で、緩く考えながら細い腕で自分の身体を抱きしめた。

だが、力をこめたはずの手はピリツとする痺れと共にぱたりと寝具の上に落ちる。

こぼれるため息すら重い気がする。

苦しいとか痛いとか、辛いとか。

ほとんど感じた事がなかったけど。

何故だろう。

今は、辛いような気がする。

知ってしまったから、かな。

隣りで笑ってくれる人のいる暖かさとか。

優しく労わってもらえる心地よさとか。

……想うだけで幸せになれる人の存在とか。

あまりに沢山の幸福を知ってしまったから、いつの間にか欲張りになつていたのかもしれない。

あの暗い地下の世界が、自分に相応しい場所だったのに。

それでも、自分は幸せなのだ。

こんな状況なのに、レジーナは毎日温かいご飯を持って来てくれる。

いつも少しの時間しかいられない事を謝りながら、それでも笑って話してくれる。

リゼイラは、それがとても楽しみだった。

レジーナの来てくれる時間だけが、いつも鮮やかで一人で過ごす、こうした時間は酷く現実味が薄い。

曖昧な感覚は、五感にまでおよび段々と全てを麻痺させていくようだ。

ふうつと意識的に息を吐いて、まどろむとも言えない漫然とした眠気が全身を浸している。

絡め取られるように意識を手放そうとした時。

聞き慣れない靴音が耳をかすめた。

レジーナの足音ではない。彼女ならもつと軽くてこんなに足早ではない。それにお皿がぶつかり合うような力チャカチャとした音も混じっているはず。

そんな事ばかり、しっかりと聞き分けている自分にちよつと笑う。でも、レジーナでなければ誰だろう。

今までこの部屋まで来たのはレジーナだけだった。

真つ直ぐに近づいてくる足音に、遠くない過去の記憶が甦る。

あの暗い地下での生活をおくっていた時も、予期せぬ足音がしてか

ら沢山の事が起きた。

本当に、たくさんの方が。

また、何かが起きるのだろうか。全てを変えてしまおうような、たくさんの方が。

じつと身体を強張らせて頑丈な扉を見つめる。

少しばかりの間の後で、軋む金属の音が響いた。

リゼイラは、知らず息を止めていた。

ようやく踏み入れた部屋の中、デイルは一瞬その部屋に居る人を見つけれなかった。

堅い寝台の上には眠っていた痕がない。

視線をそのままずらしていくと壁に接した寝台の隅に丸くなったりゼイラがいた。

ぼんやりとした視線が、それでも驚きを乗せてデイルの方を見つめていた。

薄い夜着だけをまとった姿は、その身体の細さを浮き彫りにする。

華奢などと言うものではない。

両腕などまとめて片手で掴み取れそうだ。

まるで飢え切った猫だ。

一歩、一歩慎重に近づいていく。

怯えたりゼイラを刺激しないように。

「朝早くに、失礼します」

極力優しい声を出したつもりだが、リゼイラは更に身体を強張らせる。

丸まった膝の間から覗いた瞳は戸惑うような光が揺れている。

憔悴しているのはデイルも同じだったが、リゼイラは更に消耗しているように見えた。

ぼんやりとした表情は、初めて出会った時の可憐さをそぎ落としている。

そうさせたのは自分だ。

悔恨に唇を噛んで、リゼイラの傍に膝をついた。

「貴方に謝りたくて来たのです。一晚、考えました」

考えた。今度こそ間違わないように。

不思議そうなりゼイラの眼差しが痛い。

ライドールの言葉と己の見た光景を何度も反芻しながら、考えた。

そして、真実など見つからなかった。

ある訳がない。

真実など見ていなかったのだから。

愚かな自分ばかりがそこにいる。

「許して欲しいとは思いません。けれど謝罪だけでも思って…」

言いながら、ただの自己弁護だな、と自嘲う。

今さらなのだ。本当に、ここまで来なければ何一つ気付けなかった

自分。本当にいまさらでしかない。

苦い表情で俯いた額に、ひやつとした何かが当たった。

ひんやりと、けれど心地の良い何か。不思議に思っ顔を上げると、

パツとそれは引っ込んだ。

デイルの前で、リゼイラが困ったように自分の手を引き寄せていた。

途切れた言葉と吸い込まれるような青灰色の瞳にデイルは吞まれてしまう。

固まってしまった公爵に、リゼイラは更に困ってしまう。

小さな頭の中は混乱に次ぐ混乱でもう何が何だか判らない。

どうしていきなりデイルさまがいらしたのだろう。

それに、どうして謝るのだろう。

謝らないといけないことなんて何かあっただろうか。

上手く頭が回らない。

それでも、デイルさまが苦しそうな顔をしているのは嫌だ。

触っても嫌がられないかな。

そんな不安と共に、一度伸ばした指を再度差し伸べる。

サラリとした乾いた肌と堅く張った骨の感触。

どちらもありゼイラには持ち合わせぬもの。

くたびれているような目の下あたりをそっと親指の腹で撫でる。

暗く色の着いたそこは撫でると一瞬だけ薄くなつて、少しでも消えれば良いと無心に繰り返す。

沈黙の中、二人を繋ぐのはリゼイラのか細い手だけ。

「……あ、あなたは」

目を閉じて、小さな手の温もりを感じていたデイルの口から掠れた声が切れ切れに漏れた。

ピクツと指先が振るえ、慌てたように遠退く。

離れていく手を掴んだのは、大きくしつかりとした大人の男の手。

力強く握られた驚きに思わず目を閉じると、戸惑うように手の力が緩められた。

それでも、リゼイラの手はデイルの拳の中だ。

冷えた自分の手に流れてくる熱が、怖い。

心臓の音と一緒に全てを飲み込んで行ってしまうそう。

「貴方は、優しすぎる」

搾り出すような声にリゼイラは、ただ首を傾げるしかない。

優しいのは、ライドルやレジーナ。

自分が優しいなんて思わない。

だって、何をすれば優しくなれるのかも判らないのに。

眉を下げて困惑するリゼイラを、デイルは苦笑して見上げる。

優しく、優しすぎて、優しさの意味すら知らない人。

怖がられないように、ゆっくりと手を伸ばして少しやつれた頬を撫で撫でるように流れる髪を掬った。

線の細い亜麻色がデイルの指に絡んで、すぐに解けていく。

「本当であれば、すぐにでもこんな所から出して差し上げるべきなのですが。まだ確固たる証拠もない中でお出しすれば、貴方にとつて辛い事となるでしょう。本当に言えたことではありませんが、私を信じてくれないでしょうか？」

自分の償いとして、何一つ不自由なく元の生活に戻るようにする。

子爵家にも戻さずに一生をかけてでも償う。

そんなデイルの決意までは判らなかつたけれど、リゼイラは素直に頷いた。

デイルさまを信じていればいいのなら、それはとても簡単なこと。そして、嬉しいことだ。

小さく上下した顎に、デイルはホツと息を吐いた。

嬉しげな微笑みはリゼイラを幸せにする。

ふんわりと儂げな花のような笑みを浮かべたりゼイラに、デイルは目を見張り次の瞬間、衝動的に抱きしめていた。

驚いたのはリゼイラで、初めての抱擁に大きな目が更に大きくなっている。

「あの時の誓いをもう一度。今度はこの命にかけて誓います」

デイルの声が、心臓の鼓動と一緒に振ってくる。

少しでも早い拍動は、腕の中の温もりと一緒にリゼイラを安らがせてくれた。

久方ぶりに、健やかな眠りへの誘いがリゼイラを包み込む。

「貴方を守りますから」

強く噛み締めるような言葉を、嬉しく思いながらリゼイラは眠り込んでいた。

抱きしめたまま腕の中で身動き一つないリゼイラに、デイルが慌てて身体を離すと可愛らしい寝息が聞こえて、思わず脱力してしまった。

何かまたやらかしたのではないかと動揺した自分が滑稽で、腕の中のリゼイラが愛おしかった。

もうここまで来たら開き直る。

ずっとリゼイラを愛おしいと感じていた。

それが、あの泉の方に似ているからなのかどうかなんて判らないけれど。

今、この腕の中で無防備に眠る少女に何がしかの愛情を抱いているのは確かなのだ。

無理に否定し続けた結果が、こんな歪みでしかなかったのなら取り繕う事は害にしかないのだろう。

こんこんと眠るリゼイラの額に口付けを落として、これは親愛の印だが、そんな訂正を自分に入れる辺りまだ完全には開き直れて居ないらしい。

ともあれ、もつとゆっくり眠らせてやらねば、とデイルの胸に倒れこむようにして眠っている身体を抱え上げた。

「……っ軽い」

あの誕生会の時にも抱き上げたが、あれは衣装の重さがほとんどだったのだ。

予想外の軽さに勢い込んだ分だけよろけそうになった。

これならリゼイラの半分の年齢の子どもの方がまだ重いかもしれない。

噛み締めるようにぎゅっと抱き寄せて、再度己自身に誓った。

今度こそ守る。

己の名と命にかけて。

寝台に横たわったりリゼイラの頬を撫で、ご令嬢の寝顔を見るのも無作法だろうと立ち上がるうとして中腰で止まった。

自分の服の胸から白い腕が伸びていた。

見下ろせば、リゼイラがしっかりと握っている。

微笑ましいやら困ったやらで、とりあえず起こさないように手を外そうと格闘してみる。

だが、結局どれも失敗に終わって諦めて枕元の床に座り続けることを選んだ。

一日くらい、リゼイラのために使っても悪くはないだろう。

もぞもぞと寝返りを打ったりゼイラは、デイルの方に身体を寄せて身体を丸める。

「良い夢を……」

照れくささに顔を赤らめながらも、そう囁いてデイルは微笑んだ。やがて朝食を運んできたレジーナが見たのは、寝台に顔を寄せ合うようにして眠る公爵とリゼイラの姿だった。

それからデイルは仕事の合間を縫っては、こっそりとリゼイラの元を訪れた。

やはり、あまり大っぴらに行く事は出来ないのだが、今までの分を取り返すように通い詰めている。

最初は、やはり戸惑ってはかりのリゼイラだったが最近では、一緒に画集を開いたり仲睦まじく過ごすようになった。

やっぱり何があつてデイルが怒らなくなったのかリゼイラには判らない。

不思議ではあつたが、笑ってくれるデイルが嬉しくて気にすることもなかった。

公爵が訪れるのは、たいていが夜の遅い時間。

だから、あまり長い間一緒に過ごす事は出来なかったけれど、短い時間でも楽しい時を過ごせる。

「今日は帰ります。……良い夢を」

デイルはそう言つて、帰り際にいつもリゼイラの額に口付ける。

リゼイラはその意味を判っていなかったが、そのおまじないをしてもらうと不思議とちゃんと眠る事ができた。きつととても凄いおまじないなのだろう。

だから、その日もやっぱり同じように額に唇を寄せられた後、屈めた身体を起こそうとする公爵の顔に手を伸ばした。

「どうかし……」

不思議そうなデイルの頬に、ちゃんと柔らかい感触が移る。

寝台の上で膝立ちになりながら贈られた口づけ。
理解すると同時にデイルの顔は真っ赤になった。
ただの就寝の挨拶だ。

そう判っているのに、何をこんなにも動揺しているのか。

自分を叱咤しながら慌てて立ち上がって、ニツコリ笑っているリゼイラに赤い顔を更に赤くした。

「あ、ありがとうございます。それじゃ、これで！」

もう自分の言っている言葉すらわかっていない。

フラフラと出て行ったデイルの背中を不思議そうに見送って、寝台の中にもぐりこんだ。
もう眠るのは怖くない。

リゼイラが唐突にもたらされた幸福に、戸惑いながらも嬉しく思っている頃。

全く、正反対の気持ちに怒りを浸透させている人物が居た。

デイルの異母妹である、マリーニエだ。

夜闇に満ちた部屋の中、手燭の明かりだけで公爵家のご令嬢は憤激にそまつた瞳で侍女を睨みつけていた。

「どう言うこと！」

投げつけられた銀の手鏡が侍女の額をかすめて毛足の長い絨毯の上に転がる。

「お兄様があの女の所に通っているなんて。あり得ないわ！」

金切り声で詰る声にも、侍女は表情をゆるがせない。

ここで何がしかの反応を見せれば、マリーニエが更に逆上することは長い経験からわかっていた。

「本当に、何て女かしら。まだお兄様を誑かすなんて……」

ブツブツとした囁きが暗い部屋を満たす。

「ちゃんと退治しなくては。これ以上のさばらせて置くんなんて許せ

ない」

常軌を逸した光を瞳に乘せてマリ―ニエは立ち上がる。

何かを考え始めた令嬢の背後で、長く仕えてきた侍女は悲しそうに目を伏せていた。

21＊ 散る

信じてはいなかった。

だって、あり得ない事だから。

信じてなどいなかったのに。

「不思議だわ。何でここで和めてるのかしら」

しみじみと呟いてレジーナは、こぼこぼと温かい香茶を注ぎ入れる。

こうばしい匂いが部屋に満ちて、リゼイラは差し出された茶器を受け取って微笑んだ。

デイルの取り計らいかレジーナやライドルが昼間に一緒にいてくれるようになった。

狭い部屋だから三人もいれば窮屈だが、触れ合う場所に人が居てくれるのは何だか嬉しい。

「あ、リゼイラ様、お菓子もどうぞ」

蔓籠に盛られた焼き菓子を差し出したレジーナは、リゼイラの隣りあわせて寝台の上に座っている。

ライドルが一つきりの椅子に納まると、そこしか座れる場所はこのつていなかった。

だが、リゼイラが気にすることはないし、レジーナも勧められれば素直に従う。

ライドルだけが最後まで抵抗していたが、結局押し切られた。

「……私が一人で椅子に座るわけには」

「まだ、言ってるの。いい加減に諦めなさいな。ですよ、リゼイラ様」

ニッコリ笑顔を向けられてリゼイラも同じように微笑み返す。

ライドルが、疲れたようにため息を吐いて深く椅子に座りなおした。諦めたらしい。

「あれからちゃんと眠ってますか？公爵様から苛められたりしてません？」

真剣な顔で尋ねてくるレジーナに、気圧されるようにコクコクと頷く。

「何かあつたらちゃんと教えてくださいね！」

意気込む彼女の優しさが嬉しくて、リゼイラはちょっとだけ困惑しながらも笑う。

「レジーナ、また先走って」

「先に勝手に走って行った人の意見は聞きません」

いつものように口を挟んだライドルの言葉をレジーナは、ツンツと退ける。

先走る？

疑問符を浮かべたりゼイラにライドルが珍しく慌てた表情をする。

「レジーナ！」

「あら、慌ててる。リゼイラ様、何したか気になりますか？怪しいですよ」

「……レジーナッ！」

どうやら勝手に公爵と話をつけたライドルに対しての意趣返しらしい。

デイル相手には何処までの対等に渡り合ったが、この侍女に対してだけは弱いようだ。

良く判らないリゼイラは、戸惑うように二人を見比べるだけだ。

ライドルが何かをして、レジーナはそれがちよつと面白くないらしい。

そこまでは何とか思い至って、けれどやっぱり何が何だか判らない。

でも、二人の様子はどこか楽しそうだ。

くすくす笑ってリゼイラは、慌てるライドールと素っ気ない対応するレジーナを見守ったのだった。

「今日は楽しそうですね」

夜になってデイルが、やって来たとき明るい表情を示されてリゼイラはパツと顔を手で押さえた。

そんなに判りやすい表情をしていたかな。

外は冷えてきたのか羽織ってきた外套を脱いで、デイルは昼はライドールが座っていた椅子に腰掛ける。

まだ少しだけ遠慮しながら、リゼイラは革長靴の紐を緩めるデイルに近づく。

デイルの身体からは、夜露と緑の匂い、そして太陽の香りがした。

「そんな所に座っては身体が冷えますよ」

ぺたんと床に座り込んだリゼイラを抱き上げて、少し考えてから自分の膝の上に乗せる。

重くないだろうか。

慌てて降りようとするリゼイラを片手で制して、それでも身体が冷えるだろうかと机の上に置いていた外套をふわりと着せ掛けた。

少しだけ重い布地は、まだほのかに温かく。さきほどデイルから香ってきた外の匂いがもつと強く漂ってきた。

全身すっぽりどころか母親の服に紛れた幼子のようになっているリゼイラに、デイルは気付かれないように小さく吹き出す。

何とも可愛らしい様子だった。

しばらく落ち着かないようでデイルから身体を離そうと頑張っていたが、途中で疲れたらしい。ぽすつと胸に倒れこんできた。

視線を落として見ると貝のような耳がほんのりと色づいていた。

「今日は、何かお話でもしましょうか」

とくんとくん、と優しい鼓動を数えていたリゼイラはそつと顔を上

げる。

見上げたデイルの表情は、過去を思い出しているように淡い。

「昔、まだ私が子どもの頃の事です。この屋敷の近くに一人の女性が暮らしていたんです」

女性？

首を傾げたりゼイラの髪をそつと一房掬い上げる。

「貴方と良く似た髪をしていましたよ。いつも明るく笑っている人で、豪快で、料理はちよつと苦手だったみたいですが」

何だかデイルさま、楽しそう。

笑ってくれるとリゼイラも楽しくなる。

膝の上に座っている緊張感も忘れて、リゼイラは話しに聞き入る。

「子どもの頃の私は、勉強が嫌いだね。その人の所に先生の目を盗んで逃げ込んでたんです」

悪戯っぽく目配せしたデイルに、青灰色の瞳がきょとんと丸くなる。

デイルさまがお勉強が嫌いだったなんて不思議な気がする。

何となく、やらなければならぬ事はちゃんとしている様な気がしていた。

「意外ですか？」

驚きを見透かされて、今度は外套に顔を隠す。

本当に、そんなにわかりやすい顔なのかな。

そう思うと顔を見せるのが恥ずかしくなる。

デイルは笑いながらも、無理に顔を覗くような無礼は働かない。

代わりに、肩から落ちかけた外套を持ち上げて着せ掛ける。

「彼女には、一人家族がいて、可愛い子どもがいたんですよ」

子ども。首を傾げたりゼイラは少し考えてふと思う。

そう言えば、子どもって見た事がない。

「小さな子で、彼女に似たのが良く笑う子でしたよ」

リゼイラの戸惑いはすぐに消えて、デイルの影を差すような微笑みが気になった。

目元を隠す前髪を梳き上げると、そつと頭を撫でる。

何故かはわからなかったけれど。ただ、そうしてあげたくなった。リゼイラの拙い手の感覚にデイルは、ふつと笑う。

「その子も、良く頭を撫でてくれましたよ。撫でると言うより、軽く叩かれてるみたいでしたけど」

きつととても好きな人たちだったのだろう。

寂しそうな顔は、見ているほうも少しだけ悲しくなる。

「……ミルレイア、という名前の子です。今は、貴方よりも一つか二つ上ですね」

生きていれば、その言葉は飲み込んだ。

まるで、自分の気持ちを映し出すように切ない表情をしている令嬢にこれ以上悲しい顔をさせたくはなかった。

そろそろ眠る時間だろう。

抱き上げて寝台まで運ぼうかと思っていると、ぎゅうつと強い力で

リゼイラが外套を握り締めているのに気がついた。

……ミルレイア。

声のない言葉が繰り返される。

どうしてだろう。

そんな名前知らないはずなのに。

……ミルレイア。

誰かの声がする。

とても、懐かしい、とても、悲しい声が。

「リゼイラ殿？」

さすがに奇妙しいと感じたデイルは、肩に手を当てて強く名を呼んだ。

ふつ、と花のような唇から吐息が漏れる。

もう一度、名を呼ぼうとした時。

乱暴な音がして、頑丈な扉が蹴破るように開けられた。

信じてなかった。

だって、あつてはならないことだから。

だから真実を確かめに来たのに。

どうして、お兄様はあんな娘を抱いているの。

どうして、あたくしではない、あんな子を抱きしめているの。
あつてはならない。

そんなこと、あつてはならないのに！

「マリーニエ……。お前、何故ここに？」

真つ青な顔をして部屋に踏み入って来たのは、黒い外套をまとった異母妹。

いつも美しく飾り立てて自分の部屋で過ごしている彼女が、何故この時間にこんな場所に居る。

不審に思いながら、まだ虚ろな様子のリゼイラを膝からおろす。

その様子を心配しながらも背に庇うようにして、マリーニエと相対した。

「どうして、のですの？」

「何？」

か細い声に、デイルは眉をひそめる。

会えば自らの誇りに輝きを乗せていたマリーニエからは、考えられない様子にデイルは何が目的なのかと考えを巡らせる。

リゼイラが誕生会の時に襲われた事件を丁寧に調べていつて判った事があつた。

そして、デイルの執務室にリゼイラが入った時にも言える共通の事実。

それはいつでもマリーニエの姿があつたこと。

自分の身内を無闇に疑うのは、恥ずべき事だと思う。

だが、状況はそんな生易しい事など許しはしない。
身分も立場も全てを取り払って考えれば、怪しいのは一人だけなのだ。

全ての状況を操る系を持つ先にいるのはただ一人。

だが、その動機だけがデイルには理解出来ない。

「どうして、お兄様がここにいらつしやいますの？」

まるで酔っ払ってでもいるような覚束ない足取り。

ふらふらと近寄ってくるマリーニエを警戒して間合いを取るが、唯でさえ狭い部屋にそれも無意味だ。

「お兄様が、こんな娘に関わる必要なんてありませんでしょう。こんな娘、こんな薄汚い人間なんて！」

悲鳴の様に甲高い糾弾の声に、リゼイラが大きく身体を震わせた。背中でそれを感じ取って、安心させるように後ろ手に腕の辺りを撫でた。

「マリーニエ、口が過ぎる。それに、彼女は…私の妻だ」

確固たる口振りで言い切ったデイルに、リゼイラまでが驚く。

だが、それ以上にマリーニエに与えた衝撃は計り知れなかった。

「何ですの？嘘ですよ？お兄様、ご冗談でしょう？あたくしは、認めませんわ。こんな、こんな人間公爵家に相応しくない！」

涙を浮かべて言い募るマリーニエに、デイルは揺ぎ無い沈黙で答えを返した。

それが、何よりも真実を突きつける。

「……やはり、貴方ですの。お兄様を誑かして。貴方がこの家に来てから全てが狂ったんですわ！」

バツと外套の下から突き出されたのは、鋭い光を反射する短刀。過たずリゼイラを目指すマリーニエに、デイルも剣を抜こうとするが狭すぎる空間に上手く行かない。

血走ったマリーニエの瞳には、憎い相手しか映っては居ない。

短刀は、真っ直ぐにその肉に身を沈めた。

「……あ、ああ、あああ」

ばたばた、と赤い滑りで彩られた刃物を手にマリーニエは、錯乱状態で立ちすくんでいた。

リゼイラには何が起こったか、判らない。

デイルさまの身体が大きくて、何も見えない。

ずるりとその大きな身体がリゼイラの上に覆いかぶさってくる。

重さに耐え切れずに、床の上に座り込む。

膝の上には、赤い色に染まったデイルさま。

赤い、赤い色。

いつかも見た色。でも、こんなに多かつただろうか。

床が真っ赤になっている。絨毯を敷いたみたい。

赤い、赤い色。

どんどん広がっていく。

それは膝を濡らし、温かな命の鼓動を奪っていく。

「……さん」

同じ光景を見た事があった。

あの時、赤い花の中で寝ていたのは誰？

今、こうして倒れているのは誰？

「……おかあさ、ん」

夢の中。全身を血に染めて倒れていたのは、たった一人の家族だった人。

そして今、その色にそまっているのは誰よりも傍に居てもらえて嬉しい人。

「……いやあああああああつ！」

閉ざされた喉から、悲鳴が迸った。

22* 月光

耳の奥でジンジンと空気が鳴っている。

脇腹が熱い。

幾度か経験のある感覚だ。痛覚が鈍くなっている。

己の身体から流れる血を見ながら、襲ってくる眠気の中でデイルはそれでも身体を起こした。

腕に力を入れるたびに、脇腹が引き攣れるように痛み、血が流れていく感覚が明確になる。

圧縮された空気の間こうで、悲痛な叫びが聞こえてくる。

聴覚が麻痺しかけている中でその声だけが、デイルに訴えかける。

ああ、どうか泣かないで欲しい。

その瞬間、大気が止まった。

気を失ったような無音が部屋を支配した。

異常な空気に、初めて人をその手で刺し取り乱していたマリーニエも虚脱して座り込んだ。

虚無の静寂。

打ち砕かれたのは、その一瞬後。

ドンツと館中を揺るがすような音が響いた。

小さな部屋に渦巻くのは、目を開ける事すら儘ならない程の突風。壁際に寄せられていた机が大きく揺らぎ、先程まで使われていた椅子が煽られて飛び砕け散った。

螺旋をえがく風の中、先程まで喉を裂くような悲鳴を上げていたりゼイラはかつくりと首を落として頂垂れている。

亜麻色の髪がうねるように舞う。

壊れた人形の様に傷ついたデイルを抱いている姿は異様だ。

唸る強風は呼吸すら奪う。

部屋の隅に座り込んでいたマリーニエの喉から吐息のような悲鳴が漏れた。

体温を奪い、身体から水分を奪いさる暴虐の風。

「あ。ああ……」

見開かれた目が乾くのも気付かず、マリーニエは一点を見つめ続ける。

視線の先。

糸の切れた人形の様だったりゼイラの様子が、まるで変わっていた。

上を向いていく顎先に従って巻き上がる髪が肩を泳ぐまでに落ち着く。その色は、柔らかな亜麻色から劇的に変わる。

天を仰ぐ瞳も、青灰色から更に青味が強まっている。

輝く金色は小窓から降り注ぐ月光を弾き、金色に映える瞳は蒼空の色。

か細い身体をしていた子どもの姿はそこにはなかった。

けれど、表情豊かな優しい雰囲気の子ともいなかった。

表情をそぎ落とした容貌は、硬質で玲瓏だ。

過ぎた美貌は恐怖に繋がりやすい。

冷めた蒼の瞳に無感動に見つめられて、マリーニエは喘ぐように喉を上下させて壁に背をはり付ける。

怖い。

何も考えられず、そればかりが身体から思考までを支配する。

その余りの重圧に耐え切れず気を失った。

倒れこんだ令嬢には欠片の興味も示さずに金色の天上人は膝の上に力なく横たわっている人間に手を差し伸べた。

「癒して」

囁くような声は、かすかに囁いていたが不思議と風に散らされずにはつきりと届いた。

血にまみれたデイルの上空に、一瞬だけ透き通る精霊の姿が浮かび

上がる。

葉や泉にひそむような小さな者たちではなく、人とそう変わらない姿をしていた。だが、その微細な美しさは比べるべくもない。

「……リ、ゼイラ、殿？」

癒されていく傷に、デイルはゆつくりと身を起こした。

まだ治りきれしていない傷から新たに血が流れるが、そんな事に構ってなどいられない。

霞んだ瞳がふらつきながらもリゼイラだった人の姿を見上げた。

痛みに呻いていた口から、切れ切れに驚きが漏れる。

「いず、み、の……」

声と共に幾筋かの血が流れる。

見開かれた目が力を取り戻す。

全てを見透かすような蒼空色がデイルと結びつく。

だが、その目はデイルを見ても何の感情も浮かべない。

身体を起こそうとして失血の酷さから床に倒れこんだ公爵を横目に、夜着からのぞく白い足が立ち上がる。

吹き荒れる風が、動きに合わせるようにして勢いを増す。

表情がないだけであまりに印象を違えた横顔。

デイルは、食い入るようにその顔を見つめる。

この人はいったい誰だ。

ぼんやりと巡る疑問に、重複するように答えが降りかかる。

泉で出会った人、だ。

子爵家の令嬢、だ。

すぐ先程まで、この腕の中にいた少女、だ。

それならば。

それならば、自分が愛した人は誰だ。

一步、また離れていく人に、混乱しながらも声を掛ける。

「リゼイラ殿！」

それしか、呼ぶ名を持たない。

知っているのは、その名だけだ。

だが、声は風の壁に阻まれたのか。清麗な人は振り返ることも足を止める事もなかった。

まるで何かに囚われているかのように虚ろに足を進めている。

部屋の中程まで進んで、華奢な身体が止まった。

背に流れる金の髪がさわつと風に浮く。

上向いた瞳が、何を思ったのか微かに眇められる。

瞬間、屋根が吹き飛んだ。

土塊と木っ端が部屋中に降り注ぐ。

デイルも降りかかる土ぼこりに目を腕で庇う。

「な……っ」

何だ、と口に出す余裕もない。

吹きすさぶ風の中。デイルは輝く月を見上げて息を呑んだ。

屋根が見事に砕かれていた。

薄い月光の帯が深い青味を含んだ夜空を覆っている。

月に照らされた姿が、より一層美しさを増す。

夜空に消えて行きそうな程、その姿は美しく儚げだ。

覚束ない足で、デイルは立ち上がった。

風に足を取られながら、時折膝を付きながら、デイルは真っ直ぐに進んでいく。

「リゼイラ殿！……っ！？」

叫びながら、か細い腕に手を伸ばした、その時。

真っ白な閃光がその場を支配した。

視界を奪われ、デイルは平衡感覚を失う。

クラクラとする中で、気がつけば壁にもたれるようにして膝をついていた。

何が何だか判らないまま、顔を上げ新たな光景に言葉を失った。

「風」

染み入るような研麗な声音が、その場を満たす。

切り取られた空から舞い降りたのは、柔らかな光。

輝くばかりの黄金に飾られた人影はまるで人形のように立ち尽くす

華奢な子どもに慈愛の微笑みを浮かべた。

「^{なま}風」

囁くように声は繰り返す。

優しい声に従うように、暴れる風は瞬く間に収まっていく。

「変わらない者、穏やかなる者、静寂をもたらす者。そなたの名だ。

“風”」

謳い上げる声が静かに収束した時、金砂の輝きが小さな背に走った。

複雑な図柄が真白の背に描かれる。光は一瞬で、すぐに消えたが薄っすらとほとんど膚と同化するようにその紋様は残されている。

鳥の翼にも似たそれは、神族の証。

地下に囚われ、名すら与えられなかった子どもに意味ある名が与えられた瞬間だった。

ふるり、扇形の睫毛が月光を弾いた。

明確な意思の光を持って蒼空色の瞳が、宙に留まる人の姿を見上げる。

「……おとうさん？」

たどたどしい単語が喉を震わせる。

豎琴の様に伸びやかで、小鳥のように可憐な声は天上からの訪い人を喜ばせた。

「そうだよ。風。ようやく逢う事が叶った」

性別を感じさせない神族らしく、父と呼ばれた筈の者も一目では男女とも言えない微妙な美しさを持っている。

何処か誘惑的な眼差しは女性を感じさせるが、落ち着いた笑みを浮かべる口元には男性的な揺ぎ無さがあった。

『^{せん}旋様』

ふわりと夜風が動き、白透明の精霊が姿を現す。

「ハ克蘭か。久方ぶりだ」

『こうして再びお会いできた事、嬉しく思います』

短い遣り取りの後、ハ克蘭は立ちすくんだままの子ども、リゼイラと呼ばれていた子どもを、新たに凧と言う名を与えられた子どもを見つめた。

「ハ克蘭？」

精霊の言葉でなく、声を通して意思を伝える子にハ克蘭は安心させるように微笑んだ。

『愛しい子。ようやくそなたの名を呼ぶことが出来る』

「名前？」

『そう。そなただけの名だよ』

リゼイラと言う固体を示すだけの記号ではなく、存在を存在たらしめるための名前。

「アリゼイラの与えた名も美しいが、今まで逢えずに居た父からの最初の贈り物だ。そなたに相応しい名を」

「……凧？」

「ああ。永久に平穏をもたらす名だ」

穏やかに微笑んでいられるように。安らかに過ごせるように。溢れるばかりの願いが込められた名前。

片手間ではなく、長い時間をかけて考えられた大切な贈り物。

「凧」

噛み締めるように呟いて、リゼイラは、凧はぎゅっと胸元を握り締め。

『もう一つ、アリゼイラ様から預かっている名をそなたに』

「アリゼイラ……おかあさん」

呟いた凧は、一瞬だけ酷く苦しそうな表情を浮かべた。痛みを堪えるように、白い額に皺が寄せられる。

「凧？」

訝しげにした旋に、ふるふると首を横に振る。

先を促すようにハ克蘭を見つめた。

こちらも心配そうであつた風の精霊は、それでも途中であつた言葉を口にする。

『ミルレイア』

ぴくつと薄い肩が跳ねた。

丸くなつた蒼空の瞳が、吸い寄せられるようにハ克蘭を見つめる。

『いつか、そなたを迎えに訪れる父上が見失う事がないように願われた名だよ』

隣りあふ旋も、幾ばくかの悲しみを乗せて微笑んだ。

「ミルレイア、幸福の導の花。私の、無二の宝だ」

幸せそうな声は、たおやかな調べとなつて部屋を流れる。

その時、大きな音が立ち、人間にあらざる者たちは一斉に其方に向いた。

青の瞳に射抜かれた場所に立っていたのは、酷く憔悴した顔の人間。

「……ミルレイア？」

「何だ、お前は？」

折角の親子の邂逅を邪魔された旋が途端に不機嫌になる。

だが、デイルはそんな事に気付かず、風を見つめる。

困惑の視線を受けた風は、どうしようもなく俯いた。

「ミルレイア、なのか？あの小さな家の？」

一歩踏み出したデイルに、旋は更に訝しげに表情を歪める。

「何だ、この人間は」

『……これまでの風様の記録です』

ふわりとした光の玉が渡される。

溶け込んでいったそれを噛み締めるように抱いた旋は、強い憤りの眼差しをデイルに向けた。

「それ以上、近寄るな！」

力ある命令に、精霊たちが即座に反応した。

見えない力に足止めされたデイルが、それでも視線だけは逸らさな

い。

「それ以上、我が子に近づくな。己の家族によってどれだけ風が傷つけられたと思うのか」

デイルには反駁の余地すらない。また、言い訳は何一つ言う気もなかった。

罵倒され、恨まれても当然の事を己はしたのだから。

「デイルさま！」

身動き一つ出来ないようにされたデイルに、風が近寄ろうとするが、その前に父親の腕に阻まれた。

「おとうさん！」

「可愛いそなたの頼みなら、幾らでも聞きたいところだが。こればかりは駄目だ。…しばらくお休み」

白い手が風の目に翳されると華奢な身体はぐったりと力を失った。愛おしそうに抱きしめて、厳しい眼差しがデイルに向けられる。

「アリゼイラと風に免じて、その命ばかりは助けてやろう。だが、二度と風の前に現れるな。その時は、容赦せず叩き潰す」

掛け値なしの本気の通告にデイルは、動けぬ筈の中で手を握り締めた。

そんな事、納得出来ない。

まだ、話さなければならぬ事が多くあるのだ。

父親だろうが、何だろうが。

第三者に阻まれる謂れはない。

「……ど、……に」

「ふん、お前なんぞに関係ない。もうここに用はない」

あっさりと背を向ける神族に、デイルは絡め取られた喉を必死で開く。

だが、満足に声も出せないまま、目の前で神族は姿を消した。

その手に、大切な者を抱いて。

残されたのは瓦礫と壊れた屋敷。

そして、何も出来なかった自分。

「ちくしゅっ…」

がつくりとくず折れたデイルの声は、寒空に虚しく響いただけであった。

23* 土壌

ごめんなさい。

ごめんなさい、おかあさん。

わすれてしまつて。

たすけられなくて。

ごめんなさい。

例えば、運命の始まりがあるとするなら。

それはきっと、15年前に遡るのだろつ。

一人の女性が、金色の天上人に出会ったあの日に。

全ての始まりと、全ての終わりは同じ意味を持って生まれた。

恋と言う名の花のように。

やけに明るい人間だ。

それが、旋のアリゼイラに対する第一印象だった。

神族はある一定の周期に則つて、人間界へと降り立つ事を許されている。

あまり変化を望まない神族にあつて、旋は少し特異な存在であつた。

穏やかで、変わりなく続いていく暮らしを物足りなく感じていた。

人間界に降り立つ事は、旋にとって数少ない娯楽だった。

見たことのない景色や何が起こるか予想のつかない世界は、いつも

驚きと楽しみを与えてくれたのだ。

そんな時に、旋は一人の人間の女と出会った。

明るい太陽の光に包まれた小さな庭に惹かれて思わず足を止めた場所。

健やかな風に揺れる緑の葉は可愛らしく同時に逞しい。

思わず見入っていると視界の影に座っていた人間が声をかけてきた。

今でも忘れられないくらい、型破りな第一声だった。

―あら、美人さんだわ。変質者でも許してしまいそう―

そうニツコリ笑ってお茶に誘ってきたのが、アリゼイラだった。

勢いに流されるようにして、彼女と話したのが始まり。

すぐにその独特の明るさと強さに惹きこまれてしまった。

恋愛ごとには奔放な面を持っている神族らしく、旋は直ぐに口説き始めた。

だが、いつだって軽妙な口振りでかわされた。

そう。いつだって楽しそうに笑っていたから、断り続けるアリゼイラの立場を知るまで時間がかかってしまった。

それは今でも悔やんでいる。

アリゼイラは、もう斜陽している貴族の一人娘だった。

美しさと聡明さで噂に上るような貴族のご令嬢。

家の実情から何処かの財産持ちの貴族に嫁ぐ事は既に決定事項だった。

旋と出会ったのは、そんな婚姻が固まりかけていた頃。

アリゼイラが旋の求愛を受け入れるわけにはいかなかった。

どんなに応えたくても、それだけは許されないのだと彼女は判っていたのだ。

アリゼイラの結婚が、確定のものとなった時。

旋が神界に戻る時が近づいていた。

風が酷く強い日だった。

いつものように庭園の片隅にある東屋でお茶を飲み、他愛ないお喋

りに興じていた時。

旋は、今日でお別れだと告げた。

もう戻らなくてはならない。また、十年、二十年後に逢いに来る。でも、その時にはもう今のようでは居られない。

最後だった。

人間の一生は短い。

神族である自分には、わずかな時間でしかなくても。

人間である彼女には途方もない時間が過ぎていく。

最後に告げた愛の言葉に返されたのは、淡く染まった柔らかな肌の温もりだった。

過ちは一度。

浮かされた熱は全て風が覆い隠してくれた。

そして、たった一度の熱が新たな命を紡ぐことを旋は感じ取っていた。

それは旋が望んだ事でもあったから。

—もし子どもが生まれたなら名を与えなければ—

旋の言葉に、アリゼイラは驚いたように微笑んだ。

—そうすると貴方が帰って来るまで、子どもは名無しになってしま
うわね—

他愛ない空想だと思っていたのかもしれない。

彼女の魅力である明るい笑い声が忘れられない。

—ねえ、私の旦那様は貴方だけよ—

別れの瞬間、そう告げてくれた彼女の笑顔が忘れられない。

アリゼイラ、ただ一人真実愛した人。

何故、あんなものに奪われなければならなかったのだろう。

旋はふわりと流れてきたそよ風に、まどろんでいた顔を上げた。
白く透明な日の光が満ちた部屋は、一通りの家具がそろってはいる

が人の気配はほとんどない。

まるで絵の世界に引き摺られてしまったかのような、静かで穏やかな空気だけが満ちていた。

ここは思い出の家を再現して旋が作り上げたものだ。

ハ克蘭から渡された記録の中にあつた家。

ミルレイアが、風がとても幸せだった頃の居場所。

小さな庭園には、旋とアリゼイラが語らった東屋も再現されている。

失われた過去がこの場所には、多く止め置かれている。

二度と奪われないように。

窓辺から見える光景に、笑う人の面影を追って旋はそつと目を閉じる。

そつすれば消え去った声が届くような気がした。

幾ばくかの時間を思い出に浸ることに費やして、旋は子ども部屋へと向かった。

小さな家の小さな部屋。

小さな寝台の上に眠っているのは、月金色の髪を枕に散らす可愛い子。

子どもと言っても、16歳ほどの年齢に見える。

日の光の中で眠る姿は、この世のものとは思えない程美しく、泡沫のように優しい部屋の雰囲気溶け込んでしまっている。

「風……、もう嫌なことなど覚えておかずとも良い。私が全てを取り去ってやるう。そなたが憂う事などなくなるように」

身じろぎ一つなく眠る我が子の額に口付けを落として、旋は慈愛に満ちた表情で笑う。

「穏やかに、安らかに過ごせるように」

色づいた唇が、何ごとかを呟く。

だが、それは言葉にならずに眠りに吸い込まれる。

「全ての災いは、私が絶って行こう」

何かを決めた青の瞳が、剣呑な光を浮かべる。

「お休み、ミルレイア」

もう一度だけ、口付けが頬に落ちた。

「良い夢を」

旋が部屋を出て行った後。

眠る子どもは、小さく呟いた。

「……デイル、さま」

眦に光が溜まっていた。

夜が開け、公爵家は上に下への大騒ぎだった。

館の一部が大破したのも一大事だったが、その場にいたのは館の中心とも言えるべき公爵家の兄妹だったのだ。

マリ―ニエは自失状態で部屋に運ばれ、公爵から暫らく自由な行動を禁じると嚴重な沙汰が下された。

何が起こったのか、情報の行き渡らない使用人たちは首を傾げるしかない。

全ての情報を握っている筈の公爵は、表立って出てくる事はなく、医者が呼ばれたりと周りは慌しく動いていたがそれも昼には落ち着いていた。

「何が、あったのか。もうお聞きしてもよろしいでしょう」

ベルリ―ドは、血まみれで見つかった主人を前に静かに口火を切った。

尋常ではない量の血を吸った衣服を見た時は、身が凍るような思いがしたが見てみれば怪我など一つもなく奇異な思いを味わっただけだった。

それでも真つ青な顔をしていたデイルを一先ずは安静に寝かせ、今ようやく話が出来る状態にまで落ち着いてきた。

「何があったか、か……」

重厚な椅子に身体を預け、デイルは整えることもされていない前髪

に手を突っ込んだ。

自嘲の笑みを隠す仕草にベルリードは眉を寄せるばかりだ。

「こちらが聞きたいくらいだ。いったい何がどうなっているんだ」
ぐつと髪を弄っていた手が握り締められる。

食いしばった歯から重苦しい言葉が吐き出される。

いつにない様子の公爵にベルリードもどう接すれば良いのか困惑する。

「リゼイラ様はどうなさったのです？」

屋根に大穴が開いていたのは、リゼイラを軟禁していた部屋があったでしょうだ。

そして、その場にリゼイラの姿はなかった。

異変に気がついたライドールやレジーナが駆けつけた時にも、姿はなかったらしい。

二人から何度もせつつかれているベルリードも、これだけは聞いておきたかった。

「リゼイラ……」

呟いたデイルは、ふつと暗い微笑みを浮かべた。

「そんな人間はいなかったらしい」

「何ですって？」

自分の呟きが気に入ったのか、デイルは何度もそればかりを繰り返す。

「リゼイラなんて人間はそもそもいなかったんだ。そうだ、最初から間違っていた……！」

「デイル様！落ち着いてください」

やり場のない思いを吐き出す公爵をベルリードは必死で宥めた。
訳が判らない。

何故、こんなにも公爵が追い詰められているのか。

「最初から話してください。整理しましょう。状況を把握すれば、新しい考えも浮かぶはずですよ」

ベルリードの説得に、暗く落ち込んでいた瞳にかすかな光が戻る。

「ああ、そうだな……」

ようやくいつもの公爵らしい表情が戻って来た。

大丈夫だ。

ともすればデイルの不安に引きずられそうになる己を叱咤して引きとめる。

ここで一緒に倒れるわけには行かない。

ベルリードは、語られる事の成り行きを気持ちを落ち着けて聞き始めた。

「……ええと、待ってくださいね」

一気に語られた情報の多さに、さすがのベルリードも混乱した。

「リゼイラ様は、実は貴方の片思いの相手の神族で、しかもずっと探していたミルレイアと言う子どもでもあった。そう言うことですよね」

「ああ……」

語り終わるとまた深い後悔に身を浸し始める公爵を他所に、必死で頭を整理する。

つまり、ミルレイアだった子どもは神族との混血児で、何がしかの理由により子爵家に引き取られ、成長して公爵家の花嫁としてやって来たわけである。

「……運命ですねえ」

思わずしみじみと呟いたベルリードに、デイルが反応した。

「いや、考え方を変えてみれば素晴らしいご縁だな、と。むしろデイル様の執念が運命を引き寄せたと言うか」

「何を言ってるんだ？」

訝しげなデイルに、有能な側近は頼もしい笑みを浮かべる。

「間にどんな経緯があったかなんて知りませんが、普通は再会出来ないような二人が出会ってるんです。素晴らしい奇跡だと思います」

せんか？」

「お前は楽天的だな」

考えもしなかった言葉に、沈み込んでいたデイルがほのかに笑った。

「でも、そうだな。結局、俺は同じ人を同時に好きになっていたわけだ」

そう考えると、自分が可笑しいやら間抜けやら。

リゼイラだった人の、何処までも優しい手の温もり。

泉で出会った人の、神秘的で聡明な眼差し。

今考えれば、どちらも姿が僅かに違っただけで同じであつたのに。

「……後悔だけで終わらせますか？」

静かに焚き付ける声が耳に届いた。

後悔だけで、終わらせるか。

いや、終わらせられるわけがない。

ここで終わってしまったえばそれこそ死んでからも後悔するだろう。

「ベルリード、子爵家のアリゼイラ殿について片っ端から調べてくれ。俺は、心当たりを当ってくる」

「調べるのは良いですが、どちらへ？」

既に着替え始めているデイルの背中に問いかける。

外套を手にしたデイルは振り返らずに答えた。

「神殿だ。精霊について聞くなら、そこしかない」

バタバタと出かけていった公爵を、ベルリードはやれやれと見送った。

思い立ったら一直線なところはまだ直らないようだ。

だが、寝台の上でグチグチされるよりはよっぽど安心出来る。

「それじゃ、こっちもお仕事を頑張りましたよかね」

こんな事が、誤解ばかり積み上げてしまった人への罪滅ぼしにはならないだろうが。

少しでも皆が幸せになればそれに越した事はない。

空は、晴れやかな青空。

風は静かに凪いでいた。

24＊ 成長日誌

風華の大神殿は、国中を巡る風が戻ってくる場所と知られている。記録に残された中で、およそ三百年。一日も神殿にまとう風が止まった事はない。

ころろ、ころろと音を立てるのは、開放的な入り口を飾る薄い陶器で作られた魔除けの風鈴だ。

風が吹くたびに、可愛らしい柔らかな音色を奏でる。

一日中響く音色は、この神殿の名物であり何気ない日常の一部だった。

まず最初に異変に気がついたのは、神殿の庭に出ていた神官見習いの少年たちだった。

庭の草むしりを行っていた一人が、汗を拭う手を止めて空を見上げた。

空は見事に晴れ渡った青。

だが、何かがおかしい。

青草を靡かせていた風が、僅かずつ力を失っていく。

見習いの少年たちが次々に顔を上げ、不安げに互いと目を見交わす。

籠に詰まれた雑草が、その重みで転がる。

地面に散った草は、けれどそのまま飛び交うこともなく萎びて落ちている。

やがて、神殿の何処に居ても聞こえていた風鈴の音色が人々の不安を煽るように消えていった。

「白嵐様」

幼い、けれど甘えを含まない理知的な声が客人の訪れを告げた。

窓辺で憂いの表情を浮かべていた神殿長は、このような場所で会うとは思いもしなかった人物の姿に軽く驚きを滲ませた。

「突然の、ご訪問を失礼致します」

馬を飛ばしてきたのか、威厳すら軽がるとまとう顔からは汗が滴っている。

「公爵様。かような場所まで如何なさいましたか？」

まずは落ち着くように椅子を勧めて、部屋に控えていた神官に飲み物を持ってくるように伝える。

筆頭公爵であるデイルが、大神殿に私用で訪れることなどほとんではない事だ。

ましてや神殿長の居室まで訪れるとは、何か余程の事があったのだろうか。

風の絶えた神殿の状況とあわせて考えて、神殿長の顔は曇った。

「申し訳ありません。本来なら総神殿長の貴方には礼儀を尽くさねばならないのですが」

「そのような事、お気になさいませんよう」

運ばれて来た冷たいお茶を有難く飲み干して、デイルは率直に言葉を重ねる。

「ハ克蘭、と言う名の精霊をご存知でしょうか」

神殿長は、ずっとその表情を改めた。

「公爵様、二度とその名は口になさいませんよう。名は尊い物。みだりに口にしては災いとなります」

「判っています。もう口には致しません。ですが、教えては頂けませんか？」

必死な様子で詰め寄ってくるデイルに、神殿長もどうしたものかと考える素振りを見せた。

ベラール公爵の鋭敏な手腕も威厳に裏打ちされる実力も、世俗とは切り離されている神殿まで聞こえてくる。

その高潔な人柄に神殿長も一目置いていた。

「……理由をお伺いしてはいけませんか？」

静かな要求だった。

まるで押し付けがましくない、ゆるやかな声音。

老いてなお往年の美しさを宿す神殿長の深い眼差しを見つめて、デイルは一度閉じた唇を解いた。

長い、もしくは短い、話の後。

神殿長は、深々と息を吐いた。

「まさか貴方だとは……」

「白嵐様？」

苦笑する神殿長にデイルは眉を寄せた。

「私の事はエルゼナとお呼びください。混乱してしまうといけませんから」

公爵の疑問をかわして神殿長、エルゼナはその知れない微笑みを浮かべた。

やはり経験の差か。まだまだ若輩のデイルには持てない深みがあった。

「これから、私は神殿に起きている異常を知るために彼を呼びます。その上で、貴方の求める物を求めるとよろしいでしょう。ただし、それが確実に得られると言う保証は致しかねますが」

「構いません」

即答だった。

もし何も得られなかったとしても、デイルが求め続ける事に変わりはない。

他の手段でたどり着くだけだ。

「では、呼びましょうか」

気負いなく立ち上がったエルゼナは、開かれた窓辺に立つ。

「ハ克蘭、お聞きしたい事があります」

何でもないように囁いたエルゼナの声に、ふわりと絶えた筈の風がふわりと流れた。

霧の様に現れた姿にデイルは思わず腰を浮かせた。

だが、押し止めるような神殿長の目線に、無理やり己を落ち着けさ

せた。

『……やはり、こうなったか』

「風が止まった原因をご存知なのですね」

どこか苦しい表情を見せたハ克蘭の声はデイルには聞こえない。

だから黙って成り行きを見守るしかない。

『知っている。怒っているのだよ。あの方が、とても』

「あの方？ もしや、来臨の年と何か関係が？」

眉を寄せたエルゼナの言葉にデイルが小さく指を揺らしたが、それ以上の反応は見せなかった。

『……あの子の父親だ。金と青の一族。風の名を持つ方だから、精霊たちが怯えている』

「風の名を持つ神族ですか。それが、今の無風の状態に？」

『ああ。だが、心配する事はない。全てが終われば元にもどるだろう』

「どう言う事です？」

淡々と述べる精霊をエルゼナは問い質す。

聞き逃せない言葉だった。

『もう誰も止められない。長い過去の罪を償う時が来ただけのこと』

冷たい言葉ではない。ただ、仕方がないと既に起こった事を諦めるような突き放した感があった。

エルゼナもそれ以上問うことは諦めた。

代わりに、ずっとデイルの方へ身体を向ける。

「最後に一つだけ。彼の希望を聞いてあげられますか？」
デイルを見つめたハ克蘭の目が軽く見張られる。

どうやら覚えていたようだ。

『何を望んでいる？』

咎めるような精霊の眼差しを、エルゼナは軽く笑ってあしらう。

「何も。ただ、貴方が現状をどう捉えているかに寄るかとは思って

いますが」

何の含みも無い表情を浮かべる人間をハ克蘭はため息を吐いた。もう十年単位での付き合いをしているが、エルゼナの性格を掴めた事などない。

諦めて、それでも興味を抱いていた人間を見定める。

ハ克蘭がデイルを初めて見かけたのは、アリゼイラの家に迷い込んできた時だ。

あの頃は、ただ普通の子どものように見えた。

特に興味も関心も抱かなかった。

それが、今になってこう対面することになるとは。

皮肉と言うのか。

それとも、運命とはこう言うものなのだろうか。

精霊にあるまじき考えを巡らせて、ほのかに緊張を滲ませる青年をしつかりと見つめる。

まだ若い故に力のある瞳。

そして、若い故に揺らくその強さ。

風が、ミルレイアが惹かれた一人の人間。

きっぱりと言ってしまったえば、何故この男なのだろうかと思う。

ハ克蘭から言えば、いつも傍らに控えていた人間の男の方がほとんど見込みがあるような気がする。

けれど、ミルレイアは選んだのだ。

数秒が数分に数時間にも思える間。

ぎゅつと膝の上で握り締められた拳は、力を込めすぎて色を失っている。

『私は、彼の方の邪魔をするつもりはない』

ハ克蘭の返答にエルゼナは、少しばかりの落胆を込めて手を組みなおした。

『だが、あの子の幸せを願うのも真だ。私には何が一番良いのか判らない』

旋がなそうとしている事が絶対に正しいなどとは言えない。

願うのは、多くを奪われ続けた子どもがこれ以上何も失わないように。

半透明の腕が伸ばされて、白い光の玉が生み出される。いつかも見た、光景にデイルは息を飲んだ。

『あの子に関わる全ての記憶だ。これを見て、何を成すかは己で決めるが良い』

舞の一手のように差し出された手に誘われるように、光はデイルを包み込んだ。

一瞬、立ち眩みの様に視界が回り、長い長い手紙の様な映像が一気に駆け抜ける。

与えられた情報量の多さに、酔ったように足元が覚束なくなる。座っていたから醜態は見せなかったものの、立っていた状態だった間抜けな姿を曝してしまっていただろう。

『それでは、私は精霊たちの方を見回ってくる。何かあればその都度知らせよう』

グラグラする視界に頭を抱え込んだデイルには、興味を示さずエルゼナに必要な事を告げるとあっさりと姿を消した。

「公爵様、お加減はよろしいですか？どうやら、必要な記憶を全て渡して行ったようなのですが」

乱暴なハ克蘭のやり方を申し訳なく思いつつ労わりの言葉を述べる。

「…まだ、少し混乱していますが。もうしばらくすれば落ち着くかと」

頼りない声だが、意思はハッキリしているようだ。

その事にひとまず安心する。

お茶のお代わりを運ぶように頼んで、エルゼナはデイルが落ち着くのを待った。

幼い子とは言え、人の一生の記憶だ。

突然に前置きもなく与えられれば混乱するのは無理もない。

頭痛を堪えるような仕草を見せる公爵に同情しながら、風のない空

を見上げる。

降り注ぐ日差しがやけに暑く感じた。

ハ克蘭によって、いきなり手に余るほどの情報を与えられたデイルは、必死で脈絡もなく飛び出してくる記憶の断片を整理していた。

うつかり目を開くと、実際の視覚からの情報と与えられた情報が混ざり合って訳がわからなくなる。

目蓋を閉じ、ゆっくりと必要な情報だけをより分けていく。

今までにした事のない作業だったが、やって行くうちに何とかコツは掴めて来た。

黄色と茶色、薄っすらとした緑色の明るい色彩が閃いたと思えば、暗い灰色の光景が延々と流れる事もある。

薄暗い光景は恐らく何処かの地下牢だろう。

意識を向ければ、その時のリゼイラが感じていた光景がまるでその場にいるかのように感じ取れる。

冷たい、暗い、怖い、…寂しい。

ぼんやりとした気持ちは、酷く希薄でそれがリゼイラの生きていた大半なのかと思うとやりきれない。

何が、貴族のご令嬢だ。

こんな小さな世界で、あの人は生きてきたのか。

これだけの世界しか知らずに、どうしてもあんなにも優しくあれのか。

過去の己への慙愧と羞恥が入り混じる。

ともすればそればかりに囚われそうになり、無理やり思考をずらす。

今必要なのは、後悔ではない。

一度は手放してしまっただの小さな手をまた握り締めるための手が

かりを。

暗い過去を振り解き、もつと奥へともぐりこむ。

記憶の渦は底がないかと思われるほど深い。

やがて、灰色の記憶が途絶え始め、代わりに柔らかな光に包まれた記憶が現れ始める。

それは、ミルレイアだった頃の記憶。

時折垣間見えるのは、懐かしい女性の姿。

おぼろげだった記憶が今はつきりと像を結んだ。

そうだ、この人だ。

明朗な微笑みが印象的な人。

流れ込んでくる感情は、どれも朗らかで温かい。

母親を慕う気持ちが多く溢れていた。

その中に、幼い自分の姿も見つけ何やら面映くなる。

誰もが幸せだと思っていた頃だ。

ひらり、赤い花弁が一枚流れた。

デイルを誘うように真っ赤な花びらは一枚、また一枚と増えていく。

奥へと進み行くうちに、花びらは辺りを埋め尽くしていく。

今までになく不吉な物を感じて、デイルはぐつと息をつめた。

ここで引き返すわけには行かない。

いつのまにか記憶の断片は、一つも浮かばなくなっていた。

赤い欠片だけが鮮明だ。

やがて、デイルの目にこんもりと盛り上がった何かが見えた。

吸い寄せられるようにそれに近づく。

花に覆い尽くされた何かを見極めようと、積もった赤を払っていく。

一払い、二払い。

中から見えたのは白い石膏のような何か。

震える手で、その全体を明らかにする。

「……っ！」

デイルの口から声が漏れた。

否、漏れたような気がしただけでもかもしれない。

花びらに埋もれていたのは、一人の女性。

昔、少年だったデイルを温かく迎え、たくさんの事を教えてくれた人。

ミルレイアと言う名の赤ん坊を嬉しそうに紹介してくれた人。

長じて名前を聞いていなかった事を後悔していた。

今は、その名を呼べる。

「アリゼイラ……、お姉さん」

懐かしい呼び名を口にして、余りに多くの事が思い返された。

だが、何故彼女がこんな状態になっているのだろう。

そっと伸ばした手が、アリゼイラの冷たく強張った肌に触れた。

ぞくりとする冷たさに戸惑う隙もなく、最後の記憶がデイルに流れ込む。

これまでの乱雑な記憶ではない。

整理された単調な情報は、これまで以上にデイルを打ちのめした。

「……っ、嘘だ！」

「公爵様！」

絶叫した拍子に、意識は現実へとほじき出された。

心配そうに見守るエルゼナの姿も今のデイルには映らない。

ただ、今見たものが信じられないでいる。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ」

繰り返す言葉は、否定を望みながら、否定出来ない現実を悟って揺らいでいる。

何故、何故出会ったんだ。

出会わなければ、良かったのか。

「義母が殺したのかっ」

あの人の母親を。アリゼイラを。

父に囲われていたから。

旋の言葉がデイルの言葉を打った。

「俺が、俺の家族が……あの人の全てを奪ったのか」
もう後悔すら遠すぎて。
デイルは壊れたような笑みを浮かべた。

25* 購入

アリゼイラ・エル・カンターナ。

美貌と才で名の知れた彼女だが、その行く末を知る者はいない。

ただ、伯爵家との婚姻がいつの間にか立ち消えた事をいぶかしんだ者は当時もいた。

何かが起きたらしい事は周りの者も薄々と悟っていた。

目に見えて亡霊のようになっていた子爵が、ある日から豪勢な暮らしぶりを現し始めたのだ。

浪費家であった子爵のため傾く一方だった館が、最盛期の華々しさを取り戻した。

家の輝かしさと引き換えに、子爵家の花と呼び名が高かった令嬢は姿を消した。

目を閉じて、十五年ぶりに知らされる事実を思い返し、旋はギリツと歯を食いしばった。

「娘を売り、誇りを売り、そうして長らえた血筋に幾らの価値があるものか」

冷え冷えとした声は、吹き荒れる嵐を内包していながら恐ろしいほど静かだ。

怒りを通り越した激昂は、精霊たちを怯えさせ風の国から大気の流れを奪い去った。

「全ての憂いは、この手で絶とう……」

眼下に広がるのはカンターナ子爵家。

全ての悲しみと怒りは報いを受けるべき人間の下へ。

崩壊の足音は、実にささいなものだった。

風がやみ、梢は静まり、小鳥は羽をふるわせ木陰に身を寄せた。

子爵家に勤める使用人たちは、異様な静けさを感じ言葉少なに仕事を進めていた。

誰もが言い知れぬ予感を抱きながら、口には出せない何かを敏感に感じていた。

じつとりと暑い空気が屋敷中を包み、汗が皮膚から滲み出てくる。

不快感はいや増すばかりだ。

「おいっ、大扇を……いや、魔術師だ！魔術師を呼べ。こっも暑くてはかなわん」

みつしりとした分厚い脂肪からダラダラと汗が流れ落ちる。

幾重にも重なる首周りを締め付ける詰襟を指で緩め、豪華な上着が床に投げ捨てられる。

金鎖が大理石の床にあたり耳障りな音をたてた。

「まったく何という暑さだ」

虹色貝をふんだんに使った豪華な窓を開け、少しでも涼を求めようとするが、空気は澱み新たな流れは作りださない。

苛立たしげに子爵は、更に襟元をくつろげる。

「ええい、まだか魔術師は！」

子爵家にお抱えの魔術師はいない。

原則的に魔術師は協会に属さなければならない。

個人で魔術師を雇うには、かなり面倒な手続きとそれなりの財力を必要とする。

公爵にでもなればお抱えの一人や二人はいるだろうが、子爵程度では無理な話だ。

慌しく動く使用人たちを苛立ち混じりに叱り付け、ささくれ立った気分をわずかばかり抑える。

「まったく、魔術師さえ居ればすぐに涼しくなるものを」

本来の魔術師の存在意義を全く無視した呟きは、誰にも拾われずに消えるはずだった。

子爵以外に、誰もいないはずの部屋にくすりと笑い声が落ちる。

「誰だ！」

「つれないお言葉ですね、兄上」

皮肉な声は実に美しかった。

妙なる調べの旋律は、茹だるような暑さすら吹き飛ばしてしまうようだ。

振り返った子爵はそれまでの苛立ちを思わず忘れた。

虹色貝の窓辺に立っていたのは、輝く金色の髪と透明な蒼の目を持つ至上の人。

間抜けな表情をさらして立ち尽くす子爵に、天上の住人は実に艶やかに微笑んだ。

木漏れ日に透ける葉のように、穏やかで印象的な笑顔。

「あ、兄？何だお前は！いったい何処から…」

笑顔に気を取られながらも、不信人物を問い質すだけの理性を取り戻した。

「礼儀知らずで申し訳ないと思いますよ。兄上」

「い、いや、それは…、違う！だから、兄とは一体どういう事だ！あ、私はそのように言われる覚えは」

動揺をそのままに表してうるたえる子爵に、黄金の訪い人、旋は更に優雅な微笑みを浮かべる。

誰に対しても優しく、礼儀を守るのが心情である神族らしく旋はどこまでも穏やかだった。

否、穏やかに見せていた。

「いや、私にはそう呼ぶ権利がありますよ。カンターナ子爵」

「何だと」

暑さを冷ますための汗が、別の何かに変わる。

「間違えるわけがない」

徐々に室内が冷えていくような気がした。

自分の身体が熱を持っているせいか、逆に冷えていく末端の四肢が妙に浮いて感じた。

にこやかな笑顔に目が離せない。

何故だろうか。友好的な表情であるはずなのに、無言の威圧すら感

じる。

「アリゼイラの兄上。親が妹を色狂いの公爵に売るのをけしかけ、私の子を汚らしい地下に押し込めたあげく、またしても自分の財のために公爵に売った」

決して、激昂することなく、淡々と旋は告げる。

「アリゼ？アリゼイラがお前のなんだと……」

見苦しく空回りする舌を凍りつかせたのは、旋の一瞬にして変わった表情。

太陽が暗く輝いているような禍々しい美しさ。

「私のただ一人の伴侶だ。軽々しくその名を呼ぶな」

礼儀などかなぐり捨てた相手の豹変に、子爵はもう喘ぐしかない。

「子爵、実に素晴らしい保身能力だと褒めてさしあげよう」

「ひっ！」

ゆつるりと伸ばされた手に、子爵の身体が跳ねる。見苦しく揺れる贅肉を嫌悪で見下ろし旋は断罪を下す前に、一言口を開いた。

「これはほんの祝いの品。我が子が天へと帰る祝賀の手向け。遠慮なくお受け取り下さい」

白絹のような手が閃いて一瞬。

ガタンツ、と立った音に何の興味も示さず旋は来た時と同じように窓から外へと出た。

誰に見咎められることなく姿を消した旋の背後で、子爵は最大限に口を開いて声もなくのた打ち回っていた。

断続的に襲う痛み気を失う事もできないまま床を這う姿は醜悪だ。

その日から、カンターナ子爵は原因不明の病で床に就いた。

王城付きの医師ですら頭を振った病は、子爵が息を引き取るまで十五年にわたって苦痛を与え続けたのだった。

旋が一つの復讐を果たした頃。

デイルは、ようやく混乱の縁から抜け出していた。

「大丈夫ですか、公爵様」

心配そうに見送りに立った神殿長に、憔悴した面立ちでそれでも微笑んでみせる。

「ええ、この度はご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。頂いた情報を役立てていきたいと思っています」

しつかりとした挨拶にエルゼナは、まだ少し懸念を感じながらもゆつくりと頭を下げた。

「貴方様のご意思が神の御許に届きますよう、お祈り申し上げます」

「感謝いたします」

辞去の挨拶は短く、だが溢れる程の気持ちが入められていた。用意された馬に手早く跨るとデイルは、短く声を発して手綱を振るった。

駆けて行く公爵をエルゼナは長く見送っていた。

デイルが館に戻ったのは、昼を過ぎ午後のお茶の時間になるうかと言う刻限。

早足でベルリードの待つ執務室へと向かった。

「ああ、お帰りなさいませ。言われていた資料は整いましたよ」

外套を脱ぎながらの帰宅と言う無作法を見ぬ振りで、有能な側近は仕事の成果を片手に報告してくる。

それを受け取り、ざっと捲ってみていく。

紙面に書かれていたのは、神殿で与えられた記録と寸分の変りもない事実。

疲れたように椅子に座り込んで目を閉じれば、血にぬれた人の姿が鮮明に映し出される。

苦しげに息を吐いた公爵をベルリードが労わるように見つめてくる。

「……義母のことを詳しく知っている人間はいるか？」

「大奥様ですか？」

いきなりの要求にきょとんとしたベルリードだったが、詳細は尋ね返さずに一人の侍女の名を上げた。

「マリーニエ付きの侍女の名を。」

少しして二人の男に挟まれるようにして侍女、ナーガがデイルの前に連れてこられた。

落ち着いた容貌の彼女は、公爵の前に出ても落ち着きを崩さずに立っている。

従者二人を下がらせてから、デイルは口を開いた。

「お前は、義母の侍女からそのままマリーニエ付きに移ったと聞いた。義母に仕えていたのはどれくらいだ？」

「お亡くなりになる二年ほど前からです」

無駄な口を聞かずに答えるナーガにデイルは難しい顔で考え込んだ。

義母が亡くなったのは、マリーニエが7歳。デイルが15歳の時だ。

リゼイラが子爵家に引き取られたのが3歳だとすれば、何かを知っている可能性はある。

「……この屋敷で昔一人の女性が父に囲われていた。心当たりは？」

単刀直入な問いにナーガは、小さく眉を動かした。

それだけの仕草だったが、何かを知っていることは明らかだった。

「知っているな」

問い詰めれば、肩を落として話し始めた。

「アリゼイラと言う子爵家の娘が、先代の公爵様のご寵愛を受けておいででした」

ぎゅっと肘置きに置かれていたデイルの拳が強張る。

「義母は、その女性をどう思っていた」

核心に迫れば、さすがの侍女もわずかに言いよんだ。

それでも、二、三度唇を噛み締めてから真実を吐き出す。

「大奥様は、先代の公爵様を愛しておられたのです……」

苦しげに言われた言葉は、デイルに事実を突きつける。

「殺したな。無頼の男を雇い入れて、四人だ。たった一人の女性を殺すには、手が込んでいるな」

吐き捨てた声に、控えていたベルリードの方が驚いたようだ。

ナーガに至っては蒼白な顔でデイルを食い入るように見つめていた。

「何故、それを」

「誰も見ていない事など有りはしない。いずれ全ては人の目に触れ、人の耳に入る。それだけの事だ」

「公爵様、いったいどう言う事です？」

一人、置いていかれるベルリードが痺れを切らして問い質してくる。

言うべきか迷ったデイルだが、これ以上黙っている事など出来ない
と判断した。

「昔、父はカンターナ家の支援と引き換えにその家の娘を妾に貰い受けた。その娘は、婚姻も決まっていたが理由から破談になっていた。：父親の知れぬ子を宿したからだ」

アリゼイラは誰にも父親のことを話さなかった。

婚姻前の娘が、子供孕むなど許されないことだ。

村娘ならまだしも、アリゼイラは貴族の娘だ。

「それで、金と引き換えに子爵はアリゼイラ様を売り渡したのですか」

「ああ。父が買った。その美しさに目が眩んだのかただの好色かは知らないが」

嘲笑うデイルの声は苦い。

何故、思い至らなかったのか。

子どもの自分が、勉強の合間に抜け出せるような場所に女性が住んでいるなんて可笑しな事だったのだ。

公爵家の敷地は広い。

子どもの足で抜け出すのは一苦労だ。

だが、大した苦勞もせずに逢っていたのだ。

アリゼイラが、公爵家の敷地に立てられた別宅に住んでいたからだ。

「そして、嫉妬に狂った義母が男を雇って殺した。父は知っていたのか？」

「いいえ。御領地の視察に言っている間に、病で亡くなられたとお伝えしました」

「それを信じた？」

「少しの間は、疑っておられたようですが。数ヶ月も経てば何も仰らなくなりました」

そつと目を伏せたのは、声にならない憤激を感じ取ったからか。長くデイルの傍に仕えていたベルリードさえ直視するのが躊躇われた。

椅子に座るデイルの周りから怒りが陽炎の様に揺らめいて見えるようだった。

今にも剣を手にしそうな物騒な雰囲気は、部屋中を緊迫させたが、恐るべき自制心でデイルは口を開いた。

「判った。戻って良い。マリー二エの処分は、追って沙汰する。だが、荷物を纏める準備はしておくように」

「……はい」

静かに頭を垂れたナーガは、どこかホッとしたように見えた。長い事実の隠匿はそれだけ彼女にとって重荷だったのだろう。

いま、その荷は全てデイルの肩へと移された。

二人になった部屋は、重苦しい静寂が満ちて不用意な発言を切り捨ててしまう。

「俺は、あの人を迎えに行く権利があるのだろうか」

膝の上に立てた腕に額を当てていたデイルは、不意に呟いた。

迷い、躊躇う声にベルリードが息をつめた。

未だに事実がきれいに飲み込めないベルリードだったが、言うべき言葉は決まっていた。

「ありますよ」

あつさり言う側近に公爵が顔を上げる。

「権利はないかもしれませんが、会って謝る責任はあるでしょう。何を迷っておいのですか？嫌われるのが怖いのですか？」

容赦ない言葉に、デイルは思わず苦笑した。

ベルリードの言うとおりだ。

怖がって何もなさなければ、今までの自分と何一つ変わらない。

「そうだな。迷っている暇はないか」

立ち上がったデイルに、ベルリードが首を傾げる。

「行くべき場所は判ってるんですか」

「ああ。思い出した。会えるかは判らないが、行つて来る」

静かに決意を決めた背に、ベルリードは何も言わずに送り出した。言葉は必要ないと思つたのだ。

後は祈るだけだ。

全てが上手く行くように。

散乱する書類を片付けようと腰を屈めた時、扉を叩く音と共にライドルが顔を覗かせた。

「ああ、来たの」

「ええ。今度こそ、ちゃんと話をお伺いしようと思ひまして」

「良いけどね。こつちも混乱してるんだ。散漫になるよ」

拾い上げた書類をまたパツと散らしてベルリードは自分の椅子に座る。

律儀に立つたまま一步も退かない構えを見せたライドルに、やれやれとため息を吐きながら何処から話そうかと考える。

「長くなるから、お茶をいれてくれない？」

あの時のことをミルレイアは、辛い気持ちと一緒に閉じ込めてしまつていた。

怖くて、苦しくて、痛くて。

なかったことにしてしまいたくて、そうして忘れてしまった。
優しい家に突然やって来た怖い男の人たち。

時々やって来るおじさんとも違う人たちを見て、母は咄嗟にミルレイアを戸棚の中に隠した。

暗くて狭い戸棚の中にいるのは怖くて、それでも真剣な母の言葉に
じっと我慢していた。

細く伸びる光の隙間から見える母の後姿だけを見つめて。

そうして、見てしまったのだ。

見るだけしか出来なかったのだ。

振り下ろされた鋼に反射する光を。

母が上げた悲鳴の声を。

床に流れた赤い血潮を。

冷たくなつた母の身体を。

見つめるしか出来なかった。

怖くて、苦しくて、痛くて。

母が死んだなんて思いたくなくて。

ミルレイアは忘れてしまった。

怖くて、苦しくて、痛くて。

今、こんなに痛いのも忘れてしまふのだろうか。

26＊ 小道

記憶の中の日々が、損なわれずにいたら、
きつとこんな後悔はしなかった。

いつだって人間は悔やんで生きていく。

それが、取り返しようもない事だとしても。
悔やみながら生き続けるのだろうか。

かさり、踏み締めた足元で青草が小さな抵抗を見せて揺れている。

雑草が首を傾ける道なき道を掻き分けながら、デイルは照りつける
太陽を振り仰いだ。

白い太陽が鮮やかな青空に浮き上がるように輝いている。

浮かんだ汗を手の甲で拭って、一つ息を吐く。

まるで真夏の様な暑さに辟易していると、ふわりと爽やかな風がひ
とひら首筋を撫でた。

それだけで、救われる様な心地がする。

もう一息だと己に言い聞かせて、先を指指そうとして足を止める。

その足元に、小さく揺れる小花が一輪。

踏んでしまわぬように気をつけて、新たな一步を踏み出した。

広がった光景にデイルは思わず息を飲んだ。

少年の頃に何度も見た光景が、寸分違わずに広がっていた。
まるで思い出の中に迷い込んでしまったようだ。

踏み込んでしまっても良いのだろうか。

自分と言う現実が入り込んだ瞬間に全てが消えていつてしまいそうな気がする。

恐る恐る暗い繁みから木漏れ日のあたたかな庭へと全身をさらした。

全てを抱きしめてしまふ優しさに満ちた風景は、デイルを懐かしい少年時代へと誘う。

そうだ。

どうして忘れていたのだろう。

この光景だった。

円蓋のような木立の道を走り抜けて行っていた。

もっと目線は低く、今よりずっと広く感じていたけれど。

風華の花々に紛れて、葎や薄荷の緑が無造作にあるのも懐かしい。

―あら、可愛い騎士様ね。お姫さまを探しに来たのかしら―
クスクス笑うアリゼイラの声がそよ梢の中から聞こえてくる。

記憶の中の自分は、袖の短い白衣に刺繍の施された贅沢な上着を羽織って、立ち止まっている。

柔らかくなめされた短革靴が、今の堅く磨かれた革靴に重なって溶け合った。

さわり、風が歓迎するように葉を揺らす。

思い出の光景はどこまでも揺ぎ無い母親のように、デイルを受け入れて包み込む。

排除される事も覚悟の上だったデイルは、穏健な風景に逆に戸惑ってしまふ。

天上から差し込む透明な日の光。

金色の輝きをまとうて佇むのは緑の蔭に飾られた煉瓦作りの小さな家。

幸せの象徴の様な家。

遠くに見つめて、湧き上がる思いを押し込めるように息を飲んだ。
そこが全ての決着の場所。

デイルは歩き出した。

褪赤色の扉に色硝子の小窓がついている。

アリゼイラが気に入っていた小鳥の形をした小窓。

そんな些細なところまで完全に再現されている。

そつと黄色の硝子を撫でて、扉に手を掛けた。

部屋の中も、外観と変わりなくひとつの違いも見つけられなかった。

変わらない風景は、なおさら足りない人の影を思い起こさせる。

それだけが物悲しい。

小花模様の射光布が掛けられた出窓。

日差しにあたるその場所に、籐で編まれた揺り椅子が持ち主の居ないままに揺れていた。

「二度とその顔を見せるなど言わなかったか」

懐かしい音を刻む椅子に手をかけた時、不意に響いた妍麗な声音にガタツと椅子にぶつかりながらデイルは振り返った。

出窓に腰掛けるのは、流れる金色の髪 of 貴人。

見るからに不機嫌な様子にも臆することなく対面した。

こうして見ると目元の華やかさなどが、ミルレイアに良く似ている。

ミルレイアが優しさと恥ずかしさを滲ませる瞳に、旋は自負と誇りの光を輝かせている。

「まだ、言わなければならない事があるんです」

伝えなければならない事がある。

謝らなければならない事がある。

このまま会えなくなるのは、罪の上重ねだ。

全てを思い出した今はなお更に。

揺るがない瞳の強さをどう受け止めたのか、旋はふんつと鼻を鳴らして顔を背けた。

行儀悪く片膝を立てた体勢で、頑なにデイルと目を合わせようとしない。

「お願いです。彼女に、ミルレイアに会わせてください」

必死に掻き口説いて頭を下げる。

外聞も体面も邪魔なだけだ。

今ここにいるのは、過去の過ちを取り戻そうと無様に喘ぐ男だけだ。

「彼女？ 凧はまだ子どもだ」

「……は」

馬鹿にしたような言葉に、デイルは間抜けな声を上げた。

「お前は何も知らぬのだな。それで凧を娶るなど片腹痛い」

嘲る笑みに彩られた顔すら美しく輝いてみせる。

「神族に固定の性別などない。愛した者にあわせて身体を変えてゆく。凧はアリゼイラの子だが、神族の血が濃い。まだ身体は変化していなかったぞ」

どう言う事か説明するまでもあるまい。

皮肉に途切れた声に、デイルは俯いて考える。

どう言う事が。

神族の身体が感情によって変化すると言うのなら。

変化を示さなかったミルレイアの気持ちは…。

ぐつと声を詰まらせたデイルに旋は嘲笑を浴びせる。

「不当な扱いをしておきながら愛されようなど厚顔も良いところだ。人間とはなんと無恥な生き物だろうか」

「…それでも、そうだととしても！」

貶されるのは仕方ない。それだけの間違いを重ね、罪を犯してきた。

だが、謝罪を、贖いを努める事はまた別の事だ。

「謝らねばならないのです。許される事など望んでいません。ただ、それでも謝らねば…」

情けない。

高ぶった感情から言葉が途切れる。

握り締めた拳を胸にあて、意識的に呼吸を繰り返す。

「会わせてください。恥知らずな願いだとしても。どうかミルレイ

アに会わせてください」

不器用なまでに真っ直ぐな言葉に、旋が鼻白む。

沈黙が二人を包み、遠くから聞こえてくる小鳥の歌声が場違いに長閑だ。

ふつつと長い息が花びらの唇から漏れる。

「良いだろう。会わせてやろう」

下げられたままのデイルの顔がバツと上がる。

安堵したような希望の輝きが色を添えていた。

「だが、お前の手の元に返すつもりはない。風は神界に連れて行く」

決定事項として伸べる旋の言葉を、痛みを堪えて受け入れる。

あの優しい人を腕の中に取り戻したいなどと言えるほど、デイルは恥知らずではなかった。

「……この一時でも許されるなら」

「ふん。それならば良い。その言葉を通じるかは知らぬがな」

意味深な言葉の意味を考える前に、旋が立ち上がる。

流れるような物腰で奥へと導かれる。

家中に満ちる太陽の香りが、その部屋にも満ちていた。

薄絹がひるがえる窓からは、可愛らしい小花をつける繁みが見える。

ドクドクとなる心臓を押さえながらデイルは、可愛らしい部屋に足を踏み入れた。

白木の壁には森の動物が織り込まれた壁掛けが飾られている。

薄い青と緑を配置した部屋は小ざっぱりとして気持ちが良い。

そんな部屋の隅に白と青の掛け布の寝台が置かれている。

覗く月金色の髪が日の光を弾いて、デイルの目を一瞬で奪った。

立ちすくむデイルに枕元に控えた旋が目で近くによるように促す。

「起こしても？」

躊躇う声にぞんざいな許可が出された。

起こしても良いと言われても、伸びる手はオズオズとしたものだ。

健やかに眠る人に触れることも出来ずに、枕元に膝を付き寝台の縁に指を掛けるだけで精一杯だ。

「…… お願いです、起きてください。貴方に、たくさんの事を謝らねばならないのです」

悔やみに震える声が届いたのか、金の睫毛が覚醒を告げる。

けぶる蒼空色がデイルに多くのものをもたらす。

魅入られるように動けない青年を後目に、華奢な身体が寝台の上で起き上がった。

まだ眠いのか白い手が目を擦っている。

「風、良く眠れたか？」

「…… おはよ、う、ございます」

とろとろと頭を下げた子どもに旋は慈しみに満ちた笑みを浮かべる。

泉で出会った時の翳りを持った人ではない、幼い仕草にデイルは声もなくミルレイアを見つめる。

まだ赤ん坊だった頃のミルレイアがそこにはいた。

言葉を失ったデイルを、父を見上げていた瞳が映す。

泣かれてしまっただろうか。

一瞬身構えたデイルだったが、ミルレイアの瞳に浮かんだのは純然たる戸惑い。

パツと寝台から飛び降りると旋の背後に隠れてしまった。

声をかける暇もない。

「だれ、ですか？」

胸を振るわせる透明な声が室内に響く。

声に、殺された。

比喻でなく、デイルはそれだけの衝撃を受けた。

父親の背に隠れて、ミルレイアは見も知らぬ客人を見つめて旋を見上げる。

「おとうさんのお友だち……？」

「いいや。そなたに会いに来た人間だ」

優しい手つきで髪を撫でられてミルレイアは不思議そうな顔を浮かべる。

「お客さま……」

噛み含めるような声にデイルの手が力なく床の上に落ちた。

「なにか、ごようですか？」

初めて会う人を見る目で、人見知りする声で。

ミルレイアはデイルを見つめていた。

澄み渡る瞳に、痛みも苦しみも存在しない。

名前の通り、凧いだ湖面のような穏やかな目。

デイルの脳裏に、いつか読んだ詩の一文が虚ろに泳ぐ。

そこに救いは存在するだろうか。

仰いだ天は、晴れやかに澄み渡っていた。

忘却とは

人に与えられた至高の妙薬である。

27* 告白

ねえ、デイル。お願いね。あの子をお願いね。
守ってあげて。
約束よ。

あと、もう一つだけ。
私の旦那様に。
伝えてくれるかしら。

ミルレイアは困っていた。

目を覚ましたら見知らぬ男の人が枕元に跪いていた。
それだけで驚いてしまって、傍にいた父の後ろに隠れてしまったの
だが。

頼れる父の背中に寄り添いながら自分に会いに来たと言う青年を見
つめる。

繊麗な父親とは違った感じの人だ。

大きくて揺らぎない大樹のような人。

どこか懐かしく感じるのは何故だろう。

初めて会った人なのに。

嫌な気持ちにさせないように気遣いながら青年を見つめる。

おずおずと眺めているとデイルと視線がかち合って、慌てて俯いて
視線を外す。

びつくりした。

驚きを素直に表す鼓動に、白い簡素な衣を握り締めた。

悲しい目をしていた。

一瞬だけだったが、全てを諦めてしまったような静かな色を湛えた

瞳にミルレイアは囚われた。

どうしてそんな悲しそうにしているのだろう。

「言いたい事があるのだろう」

告げるべきことがあると言いながら黙ったままのデイルに旋が呆れたように促す。

言いたい事？

首を傾げたミルレイアの肩から金糸の髪がさらりと流れ落ちる。

何だろう。

ふっとか細い風が流れてデイルが立ち上がる。

立ってみると本当に大きな人。

旋よりもずっと大きかった。

この人にはどんな世界が見えているのだろう。

驚きから派生した恐怖が静まると興味が湧いてくる。

緊張が少し解けて父の背中から一歩踏み出した。

精一杯の勇気にデイルの目が、安堵したように優しい光を浮かべる。

それでも苦痛の色は隠せない。

傷ついた森の動物の様な目。

踏み出す一步に躊躇いはない。

「悲しいですか？」

「……いいえ」

驚いたように見開かれた目は、すぐに取り繕うように瞬かれた。慰めてあげたいとごく自然に思う。

けれど、悲しそうだと思った瞳はきれいに隠されてしまった。

代わりに懐かしいような微笑みが返される。

「すみません、少し取り乱してしまっ」

そつと引かれた身体に、何か大きな隔たりを感じてしまう。

どうしてだろう。

初めて会った人にそんな感情を抱くなんておかしい事なのに。

「初めまして、ミルレイア殿」

「は、はじめまして……」

膝を屈めての挨拶は、貴婦人に対して行われる丁重なものだった。近くなつた瞳の優しさにミルレイアの胸は高なる。わからない。

どうして、こんなに反応してしまうのか。

「私の名はデイルと言います」

「デイル、さま？」

「ええ。貴方にお会いしたくて、お邪魔させていただきました」

「わたしに、ですか？」

戸惑つてさまよつた手がぎゅっと握り締められる。

デイルは屈んだ姿勢から、ミルレイアが俯いた視線の先に居れるように膝を付く。

まるで忠誠を誓う騎士のような格好。

「きつと何を言っているのか、判らないかと思いますが。お付き合いくださいますか？」

見上げられて頼まれると断れない。

小刻みに頷くとホツとしたように硬い表情が柔らかくなった。

とくんつと身体があつたかくなる。

不思議な人。

どうしてこんなにも揺り動かされてしまうのだろう。

すんなりとした口元に目を吸い寄せられる。

いったいどんな事を話すのだろう。

疑問と戸惑いを胸に、ミルレイアは小さく息を吸い込んだ。

何から話すべきだろうか。

そして、何を話さないべきか。

混乱からどうにか抜け出して、デイルは頭を回転させる。言わなくても良いことが多すぎる。

言い換えてみれば、それだけしか与えられなかったのだ。

「デイルさま？」

気遣うような声音に、デイルはハツとする。

ああ、また助けられている。

いつだってミルレイアは優しくて、強いのだ。

誰にだって、その優しい手を差し伸べられるだけの強さを持っている。

些細なことに囚われて真実を見失うような自分とは大違いだ。

だから、今度こそ間違いたくない。

今のミルレイアが幸せだと言うのなら、それを壊すようなことだけはしたくない。

「すみません。貴方にはあまりに謝らなくてはならない事が多くて」

「あやまる、ですか？」

不思議そうな声はただの疑問だけで彩られている。

何も知らないでいられるなら、あんな苦しみを忘れてしまえたなら。

きつとそれは救いとなるだろう。

これからの道筋は明るく幸いに守られたものになるだろう。

頭は嫌になるくらい理解している。

けれど、心は擦れるように痛みを訴えている。

情けない事だ。

こんな顔は見せられたものではない。

「私は多くの過ちをずっと見過ごしてきてしまいました」

過ち。罪。見過ごしてはならない多くの物。

透き通る無垢な瞳を悲しみで曇らせてきたのは、自分の罪悪だ。

そして、大切な宝物だった思い出を赤く穢したのは自分の両親だ。

「貴方の幸せを崩してしまいました。償いようもない罪です」

声が詰まって、ハツと息を吐く。

泣くわけにはいかない。

涙は悲しみを、苦しみを磨耗させてしまう。
楽になるわけにはいかない。

揺らぐデイルの目に何を見つけたのか、ミルレイアの小さな手が伸ばされる。

いつかのように。

救いを与える手に迷いはない。

だが、今回は縋るわけにはいかないのだ。

優しい温もりをそっと手で止める。

火にでも触れたようにミルレイアの手が跳ねた。

すぐに困ったように手を引っ込めた子どもにデイルはほのかな表情を浮かべる。

「償えるなど思いません。けれど、これだけは伝えたいのです」

黄金の花芯のような睫毛がふわっと瞬く。

筆頭公爵として国王である人以外に下げた事のない頭を床に擦れるまでに落とす。

滑らかな丘陵を描く白い足の甲に額づく。

「申し訳ありません」

これだけの言葉しか言えない。

たかが数文字の言葉しか返せないのだ。

一体、何をして来たのだろうか。

「デイルさま！」

慌てたように肩に手が置かれる。

「あの、あやまらなくていいです」

訳が判らないのだろう。

混乱が鮮やかに浮き立つ瞳を見上げる。

感情が素直に現れる瞳は、幼いあの子と何も変わっていない。

下げた頭を持ち上げ、デイルは泣き笑いのような複雑な顔を手で覆った。

「今、貴方は幸せですか？」

目元が隠されてミルレイアには、青年の口元しか見えない。

「はい。おとうさんもいるから」

躊躇いのない言葉に、旋が満足そうな笑みを浮かべる。

デイルも顔を隠していた手を退けて、真っ直ぐにミルレイアを見つめた。

「今から言うのは、遠い人への手向けです。よろしければ、代わりに聞いていただけますか？」

「とおい人？」

囁くような反復する声に微笑んで頷いた。

「大切な人です。もう手の届かない、人です」

切ない声音にミルレイアはドキリとする。

何故か、その言葉を聞いた途端、胸がぎゅゅと握り締められたように痛んだ。

自分の気持ちに戸惑って視線を泳がせると、大きな手のひらがそつと被さって視界を塞ぐ。

「このままで、聞いてもらえますか」

布一枚ほどの隙間で留まった手に、おずおずと頷いた。

デイルの安堵したような感謝の言葉を聞いた。

視覚が閉ざされた分だけ声に含まれる多くの気持ちが明確に伝わってくるようだ。

ふつと気持ちを落ち着けるような吐息までハッキリと聞こえる。

「リゼイラ殿、すみません。貴方を不当に貶めてしまった」

震える言葉。

滲むのは後悔。

「泉で出会った時に気付かなければならなかったのに」

泣いているのだろうか。

震える声にそう思ったが、声音は柔らかで郷愁が混じっているような気もする。

また一つ息がこぼれた。

温もりが近づいて来るのを感じて小さな身体に緊張が走る。

首から肩にかけての素肌にとろりとした糸の様な物が触れる。

少し冷たい感触。

「……愛しています」

囁かれた息は、熱かった。

「もう良いのか？」

未練もなく立ち上がった公爵に旋が少々意外そうな顔をした。

もつと醜く足掻くものだと思っていたのだが、潔い姿に爪の皮一枚分くらいは見直す。

潔さは行動を美しくさせる。

「ええ、十分です」

言いながら、そこに含まれる感情は決して満ち足りてなど居ない。

何を言われたのか、ぼんやりと目を見開いている我が子を見つめ旋は長い髪を掻き揚げる。

「……貴方にも伝言があるのですが」

「伝言？」

この人間に伝えられるような覚えはない。

「アリゼイラ殿からです」

ハッキリした言葉に旋の目がデイルに向いた。

その目は、下手なことを言ったら何をするか判らないと告げている。

「昔、ミルレイアを頼まれた時に貴方への言葉も頼まれたんです」

もう会えないかもしれないから。

そんな悲しい予言と共に。

ミルレイアの部屋から出るように旋は促す。

最後に振り返るデイルの背を見ることはしなかった。

居間は温かな日の光に満ちていた。

アリゼイラがいつも楽しそうに座っていたゆり椅子に旋はそつと触れる。

この目で見たかった光景。

情報の中のアリゼイラは、いつも微笑んではいたが自分に向けられるものはない。

編み物をしながら、風をその手に抱きながら、アリゼイラは楽しそうだった。

時々、遠い目をしていたのは自惚れても良いだろうか。

「それで、伝言とは？」

毛織のひざ掛けを掬い上げて頬を寄せる。

妙に艶っぽく見える動作にもデイルはそれどころではないのだろう。

過去を見つめ直すようにぼんやりとしている。

「旦那様に」

懐かしい呼び名に旋の目が眇められる。

アリゼイラのハキハキとした声が、そう呼ぶ時だけ甘くなるのが好きだった。

「旦那様に、伝えて欲しいと言われました」

微笑みながら形作った言葉を正確に復唱する。

「私は、貴方だけの花嫁です」

―生きる時がどれだけ違っても、この先愛するのはただ一人だけだから―

―私は、旦那様だけの花嫁なのよ―

「風……？」

デイルが去って小さな家はとても静かになった。

先程から、物音一つしない子ども部屋の間を開く。

華奢な子どもは、寝台の隣りでぺたんと座り込んでいた。

白い光が差し込む窓を見上げながら。

旋の立つ戸口からは小さな背が見えるだけで、どんな表情を浮かべているかはわからない。

風に月金色の髪がたゆたう。

キラキラと輝くのは何だろうか。

気分でも悪いのかと近づこうとして、旋の足は絡め取られたように動かなくなった。

「……くるしい、です」

空を仰ぐ白い額に、悲し気な皺がよっている。

呼吸が上手くいかないかのように、細い指が喉に沿わされる。

真っ直ぐに伸びた手はそのまま熱い吐息が残る耳を覆った。

まだ、あの囁きが残っている。

強く力を入れられた目蓋からぼろぼろと落ちるのは透明な雫。

「風」

涙は薄麻の布に染み入っていく。

苦しい、と訴えてから何も話せないでいる子どもの傍らに膝を付く。

「何が苦しい？」

判らないと頭を振るミルレイアの喉になる。

見上げる瞳は自分の感情を正確にあらわす言葉を探しているようだ。

蒼が薄くなり、また次第に色味を増していく。

不思議な揺らめきを薄い皮膚の下に隠してしまう。

薄い、けれど確かな温もりのある胸に抱きしめられながらミルレイアは震える唇を開いた。

「ん……。わ、からない。でも、くるしいです」
わからない。

どうしてだろう。

あの人が行ってしまうってから、とても苦しくて、とても痛くて。

「凧、ミルレイア……。あの人間のせいかな？」

幾らかの腹立たしさが込められた声。

けれど、それは揺らぐ己を律しようとする声でもある。

デイルがもたらした伝言は、確実に旋の何かを動かした。

認めたくない事実を脇に置きながら、当惑しているミルレイアの頭を掻き抱く。

その目から涙が止まる事はない。

「ちが……」

否定しようとして、否定出来ずにミルレイアは俯いた。

この苦しいのは、あの人がいなくなってから。

最後の囁きが消えないから。

――愛してる――

あの言葉の意味は何だろう。

判らないことが多すぎて、この苦しさは不安なのだろうか。

それすらミルレイアには把握出来ない。

「……会いたいです」

涙を振り切ってミルレイアは、父の腕から顔を上げた。

わからない。

だから、辛いのか。

だから、苦しいのか。

知りたいと思った。

このままだと沢山の物が駄目になってしまいそうな気がする。

根拠などない焦燥は瞬く間に身体を焼いていく。

「凧！」

慌てる旋の腕を振り解いてミルレイアは駆けて行った。

自分が何をしようとしているかなんて、きっと自分が一番わかっていない。

このまま優しい家に、温かい父の腕にいたならきつと、綺麗な自分のままで居られるのかも知れない。

そうだとっても。

何もわからないのは怖い。

あの人が誰かわからないのは辛い。

滑らかな木の床を蹴って、小窓のついた扉を開けはなつ。

空は青い。

風は流れている。

草地はまるで高価な毛氈のようだ。

世界は、とても美しい。

ミルレイアは、陽だまりのような思い出から飛び出した。

半球の木立の屋根を足早に通り抜けながらデイルは、やるせない想いを抱えながら髪をかき混ぜる。

感情を持て余した時の癖だが、もう何処の山の民かと思うほどぐしゃぐしゃになっていた。

あの家を後にしてから、伝えたい事が溢れるように出てきて尽きないのだ。

まだまだ言いたい事はあったのに、結局言えた事など高が知れている。

蓄えた語彙など何の意味もなさない。

どれも口にした途端に、真実を霞ませていくばかりだ。

「情けないにも程があるな」

精一杯の自嘲を無理やり浮かべて、自ら作りだした小道を行く。

この一歩が進むだけ、ミルレイアから離れていく。

もう背を向けたはずなのに、心は振り向くばかりだ。
きっと自分はこの後悔を一生引き摺るのだろつな。

厭世的な気分で考えて、今度は本心からの自嘲が漏れた。
ベルリード辺りから辛気臭いと怒られそうだ。

「ああ、ライドールたちには何と説明したものかな」

彼らは本当に心からリゼイラを、ミルレイアを愛してくれていた。
出来るなら彼らには、神界に帰る前に会ってもらいたい。

また、神殿に出向いて神殿長の精霊に伝言を頼もうか。
つらつらと今後の事へ思考を走らせる。

消えない痛みからは必死に意識をそらせる。

悲しみに浸るのは雑務を終えてからでも良い筈だ。

言い聞かせる言葉がなければ、今すぐにでも振り返ってあの家へと
走ってしまいそうになる。

丈の高い草に手を掛けて、ふと何かが聞こえたような気がして足を
止めた。

何だろうか。

名前を呼ばれたような気がしたのだが。

振り返っても、人影など勿論ない。

とうとう頭まで狂ってきたのか。

筆頭公爵が恋狂いとは格好が付かないことだ。

いっそ適当に跡目を譲って隠居でもするか。

何もかも捨てて静かに余生を過ごすのも中々魅力的だ。

あり得ない未来だからこそ想像は何処までも広がる。

何処かの山の中に小さな屋敷を構えて、隠者のように本に囲まれた
生活。

庭では根菜や青菜などの野菜を作るのも良いだろう。

時には狩などもして、悠々自適な生活。

なんと素晴らしい事だろうか。

デイルの目にはもう綺麗に剪定された庭木が見えている。
現実は今すぐそこだ。

あそこに戻れば、公爵としてまた第一線に出なければならない。
安らぎなど欠片も存在しない世界に戻るのだ。

自然とデイルの顔が硬く厳しい物へと変じる。

そこに揺らぎ悲しんでいた青年の顔は存在しない。

ほとんど虚勢であったとしても弱った顔は見せられないのだ。

木立を掻き分けるように手を伸ばし、足を持ち上げた。

その時。

「デイルさま！」

夢の薄布がふわりとデイルを包み込んだ。

自分でも驚く程の速さで振り返って、信じられない思いでその人を見た。

「ミルレイア殿」

丈高い草に囲まれるように駆けて来たのは金色の美しい人。

先程、全てを手放してしまった人のはずだ。

「まって、まってください」

息も切れ切れに、進路塞ぐ草を手繰り分けてミルレイアはデイルの前に倒れこむようにしてたどり着いた。

情けない事に、そこまで来てもデイルはこれが現実なのか判別がつかなかった。

本気で幻が見えるほどに狂ったのかと途方にくれる。

だが、ミルレイアの手が自分の腕を掴む強さに嫌でも現実だと教えられた。

「だ、大丈夫ですか？」

歩きなれていない足は、慣らされていない獣道を通ったせいでボロボロだ。

小さな爪や踵は土に汚れて、所々から血が滲んでいる。

デイルは慌ててしゃがみ込むと自分の衣服を裂いて足に巻きつけた。

「無茶なことを」

白い夜着もすっかり汚れてしまっている。

このままでは不味いとミルレイアを抱き上げて開けた庭に出る。生垣に薄紅の大輪の花が色を添えていた。

此处からならば、あの泉が近い。

足の汚れを落とさねばならないと真っ直ぐそこへ向かった。

泉は、幾分の変わりもなく滾々と湧き出ている。

水辺にミルレイアを下ろすと、簡易に巻きつけた布を解いて水で傷口を洗う。

「沁みるでしょうが、我慢してください」

デイルの言葉に、ぎゅっと目が閉じられる。

子どもっぽい我慢の仕方に、今までのことも忘れて笑みが漏れる。

丁寧に、丁寧に土を落として新たに裂いた布で足を覆った。

「これで良いでしょう。あまり手当てなどはした事がないのですが」

貴族であるデイルが戦場に出る事は稀だ。

嗜みとして剣を習いはするが応急処置などは下位の者に任せるのが一般的である。

そうは言っても腕白だった子どもの頃に簡単な怪我の手当てくらいは自然と身に着けている。

一通りの事が終わると、途端に静寂が重く申し掛かってきた。

あのままミルレイアとは会う事もなく別れるはずだった。

それなのに、今その人は目の前に居る。

いつかの様な月ではなく太陽の光に包まれて。

現実味の薄い光景に、思わずぼんやりとしてしまった。

「ミルレイア殿、何か私にご用でもありましたか？」

らしくない自分を押し隠して、話のきっかけを作る。

同じようにぼんやりしていたミルレイアもその言葉にハツとしたように瞬いた。

蒼空色の瞳が真っ直ぐにデイルを見つめる。

リゼイラと呼ばれていた幼い少女と泉の方の姿が溶け合った姿。

そう思ってしまうが、どちらがどうだと言う問題でもない。

今日の前にいる人が、自分が愛した、そしてこれからも愛し続ける人。

自然、デイルの目には切なさが溜まる。

「会いたかったんです」

見詰め合った瞳の間から声が生れ落ちる。

聞き間違いかと瞬いたのはデイル。

素直に自分の言葉を吐き出したのはミルレイア。

「デイルさまがいなくてくるしいです、痛いです」

胸を押さえて吐露される心情。

偽らない気持ちは何よりも強くデイルを揺さぶった。

「ミルレイア、殿……？」

不幸のどん底に居たはずの自分に与えられた言葉。

夢だろうか。

本当に何か良くない物に囚われたのではあるまいか。

衝撃で息も出来ないで居るデイルに、ミルレイアは必死に言い募った。

「もつといっしょにいたいです」

デイルはその言葉が終わるか終わらないかで、華奢な身体を強く抱きしめた。

もう騙されていようが、何だろうが構わない。

今のこの瞬間のために生きてきたのだと言い切ってしまいたい。

初めて触れた身体は、温かった。

頼りなくすらある肉体は脆弱でありながら何処までも優しかった。

「リゼイラであつた貴方に償い続けたいと思っていました」

抱きすくめた体勢のままで低くつぶやく。

「ミルレイアである貴方の幸せを願っていました」

赤くなつた頬を上向けてミルレイアはデイルの顔を見つめる。

「凧である貴方にこれからの幸運を祈りました」

自分に関する記憶を全て失った人に何もできることはないと思っていた。

ただ、自分と言う存在ごと忌まわしい出来事を封じてしまっしかないのだと考えた。

それがミルレイアの幸せだと言い聞かせて。

けれど、そんな想いを越えてミルレイアはその足で駆けつけてくれた。

自分の背を追いかけてくれた。

どれ程幸せなことが。

込み上げる想いはデイルの目元をぬらした。

そつとデイルの後頭部に軽い感触がもたらされる。

「貴方を愛しています」

二度目の言葉は、ミルレイアに何をもたらしただろうか。

“愛”と言う言葉の意味はわからない。

いつも誰かが口にするのを不思議な気分で見ていた。

どんな想いがそこにはあるのだろうか。

熱に浮かされたようなものだろうか。

深く包み込むようなものだろうか。

“愛”はどんな色をしているのだろうか。

“愛”はどんな形をしているのだろうか。

抱きすくめられた腕の強さに、まず驚いた。

薄い皮膚が骨に当って痛いくらいの強さ。

けれど、その痛みは辛さではなく安心をもたらしてくれる。

ずっと溜まっていた苦しさは解けていく。

不思議。

どうしてこんなに安心出来るのだろうか。

耳元で響く心臓の音がとても懐かしい。

記憶など何も残っていないのに。

少しだけ駆け足の鼓動は、ミルレイアの心の音にそっと寄り添ってくれる。

やっぱりデイルの傍はあったかい。

空気に色鮮やかな花が咲いていくようだ。

「すみません」

ほとんど陶然とした気分で目を閉じていた所で、身体を離されてぱちつと瞬いた。

デイルは顔を赤くしながらも、どこか苦い顔つきでいた。

いまさら愛している、など言っても重荷にしかないのに。
嬉しさに突き進んでしまった自分を叱咤する。

悔やむデイルの前で、ミルレイアはほのかに熱を引き摺る顔を傾けた。

「愛ってなんですか？」

「……ミルレイア殿？」

唐突な疑問にデイルの方が驚いた。

素っ頓狂な声で名を呼んでしまう。

変なことを聞いてしまっただろうかミルレイアの顔が一瞬で曇る。

それに大慌てで取り成す。

「すみません！いえ、ちょっと驚いただけです。あの……」

「……ごめんなさい。わからないんです。愛しているって意味が、よくわからなくて」

ハ克蘭が何度も口にしていた言葉。

父からも贈られた言葉。

けれど、それが一体どんな意味を表すのかわからない。

デイルもたくさんの気持ちと一緒にくれたけれど。

ミルレイアには、うまく伝わらない。

「愛の意味ですか」

泉の前で、やけに哲学的な問答に腕を組んだ。

デイル自身、そう改めて問われると明確な答えは持たない。

恐らく生きている人間の中でも、この問いに答えられる者など一握りだろう。

困ったような、ほんの少しだけ怯えるような表情を浮かべる人を見て、そつと手を伸ばした。

抱きしめるのではなく、膝の上に置かれた手を取るために。

「恐らく、たくさんの意味が込められた言葉です」

「たくさん、ですか？」

「ええ、口にする人の数だけ意味を持っているでしょう」

考えながら話す。

少しでも伝わるように。

「私の言った愛の意味は、最も身勝手なものかもしれませんが」

その人の全てを捕らえてしまいたいと願う言葉だ。

優しく甘い言葉に彩られただけ、強い欲望を内包する物。

包み込んだ小さな手にそつと口付けを落とす。

「この手を握るだけで、途方もない幸せだと思いつながら、それだけでは我慢ならない自分もいる。貴方を此処に縛り付けてしまいたいと請うてさえいる。身勝手で、愚かな願いです」

「……一緒にいたいってことですか？」

おずおずと聞き返すミルレイアの言葉の優しさに苦笑する。

「そうですね。それもあります」

実際はもつとドロドロとした感情だけれど。

「包み込み守るだけの愛もあります。優しさを与える愛も。けれど、私にはそれほど高尚な想いを捧げる事は出来ません」

全てが欲しいと願ってしまう。

心も身体も。未来への約束も。

贅沢な願いを全て、たった一言にこめればデイルの持つ愛になる。

「貴方を愛しています」

三度の言葉は、ミルレイアの心に波紋を広げた。

ざわつく心の中心に何かが芽吹く。

それが何なのか確かめようとした時、強く風が巻き上がった。

咄嗟にデイルがミルレイアを庇うように抱きしめる。

「……風！」

強い声にミルレイアが顔を上げる。

そこにはハクランを従えた旋が、複雑な表情で空に立っていた。

「おとうさん」

振り切って行ってしまった事がミルレイアにすまなそうな表情を浮かべた。

それでも後悔は感じていなかった。

旋は、そんな我が子を見つめて何ともいえない顔で大地に降り立つ。

「風、おいで」

差し出されたのは手。

強制する言葉ではない。

叱り付ける声でもない。

ただ、請うような、願うような響きを含んでいた。

父親の迎え入れる言葉に、ミルレイアはわずかに迷って首を振った。

ふるふると揺れた髪は、空気をはらんでまるで手布のように横になびく。

「だめ。ごめんなさい……」

駄目だと繰り返される言葉を旋は苦い顔で受け止めた。

飛び出していった背中を見た時に、いくらか悟ってはいたが事実になるとやはり辛いものがある。

「その人間と居ても幸せになどなれまいよ。一度ならず信頼を損なった人間だ」

噛み含めるように言い聞かせる。

「おぼえていないから」

迷いない声に、旋と身動きできずにいたデイルが息を飲んだ。

「昔のことは、よくわからないけど。それでも、デイルさまといっしょにいたいです」

何か大変な事があったのかもしれない。

けれど、今の自分はデイルの傍にいたいから。

それが偽りようなない本当のこと。

胸元で交差する腕の強さが嬉しい。

背中に感じる温もりが優しい。

それだけで十分だから。

「いっしょに、いたいです」

「私と離れてもか？」

「……っ、はい」

突きつけられた冷たい言葉に、それでも頷いた。
その返事にデイルの方が慌てる。

「ミルレイア殿！」

「いいです。おとうさんとは、また会えるから。今はデイルさまと
いたいです」

繊細可憐な声は、はっきりとした意思によって紡がれる。

嬉しいやら戸惑うやらでデイルの顔は赤い。

対して旋は覆いかぶさるような重いため息を吐いた。

「だから、嫌だったのだ」

『仕方ないではありませんか』

慰めるような精霊の声に、恨めしげな視線が返される。

「十五年ぶりに、生まれてようやく会えた我が子をたかが人間の手に
奪われるのだぞ！」

『アリゼイラ様もそのたかが人間です。それに……』

ハクランは真剣な眼差しを向けてくる愛し子を喜びと共に見つめる。

『あの子が望んだ相手です。少々の器量不足には目を瞑りましょう』

ミルレイアが初めて自らの意思で選んだのだ。

尊重すべきだろう。

真つ当な答えだ。親である旋が納得するには時間がかかるだろうが。

「風、その人間でなければならぬのか？」

確認の言葉にもはっきりとミルレイアは頷いた。

「その人間が、お前の母を奪ったとしてもか？」

ミルレイアの瞳が驚きに見開かれた。

ぐっと力が込められたデイルの拳に、それが全くの嘘でないことを
知る。

だが、答えは変わらない。

「デイルさまのそばにいたいです」

傍らにいないと苦しくて、悲しくて、辛いから。

近くに居るとそれだけで、嬉しくて、楽しくて、幸せだから。

ああ、もしかしたらこれがそうなのかもしれない。

心の中に芽吹いたもの。

もしくは、小さく実をなしたものの。

「デイルさまを、愛しています」

最後通牒に旋は、ため息と共に降参するしかなかった。

「ミルレイア殿？」

震える声はデイルだ。

背中から抱きしめてくる腕に頬を寄せて、ミルレイアはもう一度デイルのためだけに呟く。

「愛しています」

デイルから贈られたのは、痛いくらいの抱擁と温かな涙だった。

やがて日々は日常を取り戻し、ベラール公爵は新たな花嫁を正式な妻として迎え入れた。

その花嫁は、名もなき家の娘だと言う事で一時期は噂にもなったが、花嫁が披露されると誰もが納得した。

美しい月光の様な金の髪に、晴れ渡った空のような蒼の瞳。

若き公爵は天上の者を伴侶としたのだ。

美しき花嫁の名は、ミルレイア・ナギ・ベラール。

堂々たる体躯の公爵の傍らに控える花嫁の美しさは、高らかに謳われた。

30＊ 落花

遮光布が掛けられた一室は、薄暗く沈んでいた。

世界各国から取り寄せられた芸術的な家具の数々すら部屋を明るく引き立てることは叶わないようだ。

空気すら灰色に染まりきったような鬱々とした雰囲気だけが唯一の彩りだ。

そんな中であって、部屋の主は過去の華やかさからは考えられない質素な衣服に身を包んで、その人の訪れを待っていた。

質素とは言っても色味を抑えているだけで、使われている布地は最流行の高級品だ。

薄く施された化粧も、計算し尽くされた憐憫を作り出す。

しとやかに椅子に座って待つマリーニエの足元に、扉から一筋の光が伸びた。

「お兄様、お待ちしておりました」

部屋に入って来たのは、堂々たる体躯の青年。

まだ若輩と言っても良い年齢ながら、明敏な頭脳と如才ない外交術を有したこの国の公爵である。

そして、マリーニエの腹違いの兄でもあった。

兄妹ただけに向かい合うと、思いの外、似通った部分がある事に驚かされる。

だが、与える印象はまるで違う。

生真面目で、硬い印象に人当たりの良さを滲ませたデイル。

くつきりとした目鼻立ちに華々しい輝きを乗せるマリーニエ。

本来であれば、何がしかの家族の情が交わされる筈の間柄であったが、それはつい先日には潰えていた。

床に膝を付き頭を垂れた異母妹を見下ろして、苦い感情を飲み下す。

簡素な略装に身を包んだマリーニエに椅子に戻るよう言う。

だが、デイル自身は勧められた椅子に見向きもしない。
長く時間をかけるつもりはなかった。

「お前の処遇が決定した」

ごく事務的に切り出した兄をマリーニエは悲しげな顔で見上げる。
潤む瞳の光も、震える指先を握り締める所作も、見る者の同情を誘う。

「お兄様。あたくしがした事は許されることはありません。ですが、あれは本当に、愚かな事だったと反省しております」

泣き濡れる声にデイルの肩が揺れる。

それに反応したかのようにマリーニエは立ち上がり、乞うように膝をついた。

「どうか、嫉妬に狂った愚かな女だと軽蔑しないでくださいませ。ただ、お兄様のことを愛していたのです」

気位の高い普段の彼女からは考えられない動作だった。

だが、デイルはわずかの感情も揺るがせはしなかった。

「……それが家族の情であれば、こんな事にはならなかったのだらうな」

苦々しい声に、ハッと顔を上げる。

「椅子に座るんだ。今さら、何が変わることもない」

厳しい兄の様子に、マリーニエは愕然とした表情をあらわした。

今までの兄とは、まるで違っていた。

「今回の事は、公にはしない。公爵家の恥を吹聴は出来ないからだ。お前を庇ったわけではない」

よろよろと席に着きなおしたところに向けられた言葉に、色づいた

唇を噛み締める。

「お前には閑扇かんせんの神殿へ行って貰う。俗世から離れ、己の所業についてもう一度考え直す時間を与えよう」

「嫌ですわ!」

神殿など、社交場からは最も離れた世界だ。

厳しい規律の元で、ささやかな贅沢品すら手に取れない場所。

己を飾れないなんて、マリーニエは想像もできなかった。

「お願いです、お兄様。そんな酷いところにあたくしをおやりになるのですか」

必死で掻き口説く妹をデイルは黙ってみつめた。

その常にならない様子にマリーニエは情に訴えることも忘れて息を飲む。

「神殿は、学識と規範を学ぶ最適の場だ。お前に欠けている物を学び直すには最適だと判断した。それに……」

事務的に説く言葉を跳ね除ける。

「そんなの、そんなの我慢できません。お兄様と離れるなんて、あたくしには耐えられせんもの！ねえ、お兄様。あの事ならあたくしも反省しているのです。もう、二度とお兄様の大切な方を傷つけたりはしませんわ。だから、だから……」

「それほど、神殿が嫌か？」

「ええ、もちろんです！他の事ならば何でもお聞きしますから、どうか」

パツと顔を輝かせたマリーニエだったが、次の瞬間に凍りついた。

自分を見下ろすデイルの瞳が恐ろしく冷たい事に気がついたのだ。

「ならば、今後の生涯を幽閉塔で過ごすが良い。神殿が嫌と言うならば仕方がない」

「え……？」

「人を貶め、罪を被せた。罪人には相応しい処遇だろう。どうする？」

マリーニエは甘く見ていた。

ずっと自分の言う事ならば何でも聞いてくれた兄なら反省して見せれば良いと思いこんでいたのだ。

だが、そんな思惑は完全に外れていた。

デイルは、名だたる貴族の頂点に立つ筆頭公爵としてマリーニエを断罪していた。

家族の情など、欠片も存在してはいない。

絶望に染め上がった妹を無感動に見定め、再度選択を迫った。
苦しげに息を吐きながらマリー二エは選んだ。

「…神殿へ、学識を深めに参りたいと、存じ、ます……」
震える声は、言い終わると同時に嗚咽へと変わっていた。

暗澹たる思いでデイルは、廊下を歩いていった。

公爵家を統べる者として今回の妹が犯した事は隠さねばならなかった。

それが義に反する事は重々承知している。

だが、家の恥を易々と表沙汰にすることは出来ない。
政治的判断だ。

喉元を締め付ける襟飾りを筆り取って、大きく息を吐いた。

情けないが、マリー二エを公に罰する事は出来ないと判断したのだ。

他の貴族に付け入る隙を与えるわけには行かないと。

自己保身の考えに反吐が出そうだった。

「あの女の処罰は決したのか」

流麗な声が大股に歩くデイルを呼び止めた。

「旋様」

何時の間に来たのか、廊下の壁に寄りかかるようにして黄金の青年
が立っていた。

艶めいた雰囲気を持つ旋は、目も覚めるような美しさだ。

「僻地にでも飛ばしたか？」

剣呑な言葉も旋から出れば歌の一節のようだ。

「僻地とまでは行きませんが、規律の厳しいと評判の神殿へ」

「お優しいことだ」

クスクスと笑う旋に、デイルは苦い顔を浮かべるしかない。

優しさなどではない事は旋も知っているだろうに。

「……あの人間の娘は風を傷つけた。お前如きのために」
笑いを治めた旋の眼差しは、暗く厳しい。

正当な怒りをデイルは逃げずに受け止めた。

「二度はない。そもそも私は、風を連れ帰ることを諦めてなどないからな」

「……な！」

さすがのデイルも、聞き逃せない言葉に声を上げかけた。

「だが、無理強いして風に嫌われるのもご免こうむる」

「それでは」

「もう少しすれば風もお前に飽きるだろう。それを待つとしよう」

何ともな台詞にデイルは、僅かに気圧されながらも言い返した。

「ミルレイアから飽きられる事はないと自負しておりますが」

この際、少々のはったりも必要だろう。

実際には、言葉の半分も自信などないが。

デイルの言葉に今度は旋の眉が寄る。

一色触発の空気が流れた時、優しい声がピリピリした雰囲気破つた。

「デイルさま、おとうさん」

にこやかな笑みで駆け寄って来たミルレイアをデイルが両手を広げて迎える。

一歩出遅れた旋は、思い切り苦い顔だ。

デイルの腕の中で、ミルレイアは恥ずかしそうにしながらも幸せそうだ。

「デイルさま、お仕事は終わったんですか？」

「大きな物は一段落つきました」

マリーニエの事については気取らせない。

知らなくても良いことだ。

「それなら、お庭を見に行きませんか？おとうさんも」

晴れやかな微笑みは、デイルのささくれ立った心を癒してくれる。思わず、ぎゅっと抱きしめる腕に力を込めた。

「デイルさま？」

「ああ、いや。一度、仕事に戻るの。それから、お邪魔します」

「はい、お待ちしてます」

「私は一緒に行こう」

デイルが腕を解くと、すぐに旋がミルレイアの隣りを奪う。

もう日常と化しつつある光景に、デイルはそつと笑みを浮かべた。窓の外から、甘やかな花の香りが辺りを満たしていた。

30* 落花（後書き）

このお話は、サイトでは「花の行方」として短編として載せていたものになります。

今回、ちよつと流れるに無理やりですが、本編に組み込みました。

31＊ 実りの果実

「リ、じゃないミルレイア様、お茶が入りましたよ」

レジーナは香ばしいお茶を淹れた磁器を円卓に置いて、花の手入れをしている主人に声をかけた。

花が好きで、それが高じて最近では庭弄りも始めている。

いつも楽しそうに外に出ていくのを咎める者はいない。

「レジーナ、蕾が一つ付きました」

「ミルレイア様が丁寧にお世話をなさっているからです。これからもっともつと蕾を増やさなくては」

「頑張ります」

茶目つ気を含ませた言葉に、ミルレイアがくすくすと笑う。

お茶とお菓子を楽しんでいると部屋の扉が叩かれてライドルが顔を覗かせる。

「お茶のお時間でしたか」

「はい、ライドルも一緒にどうぞ」

につこりと椅子を勧める主人に、眩しげに目を細めてライドルも相伴した。

幼い少女だったはずの人が、数日の内に成長を見せたことで当初はライドルもレジーナも混乱した。

だが、それよりも優しい主人が声を取り戻した事の方が大事だった。

少したどたどしい声で初めて名を呼ばれた時、レジーナなどは涙ぐんでいた。

もちろん、ライドルもほとんど同じ気持ちだった。

「あと少ししたら公爵様もいらっしゃるそうです」

茶器を傾けて、ライドルがそう告げるとミルレイアはパツと顔を明るくした。

だが、輝くような明るい表情と真反対の声がその場に響いた。

「来なくて良いものを」

「旋様、いらつしゃったんですか」

露台の手摺に腰掛けるように現れた神族をレジーナは、慣れた動作で迎え入れた。

「ああ、茶を飲みたくなつてな」

「今日のお茶は、氷蓮の霞茶ですよ。胸がスツとするお茶です」

「ふうん。面白いな。不思議な味がする」

レジーナが嬉々として説明するのを旋は興味深げに聞いている。最近ではすっかり馴染みとなった光景だ。

「またいらしたんですか……」

和んでいる円卓に新たに訪れた声は、ひどく疲れているようだった。

「デイルさま」

につこりと迎えたミルレイアに、同じように優しく微笑み返してライドールが設えた席につく。

「我が子に父が会いに来て何の不服がある」

「神界に帰ると言うのはいつの話なんですか」

頭が痛いデイルだ。

何せ、旋はあれから半年近く人間界に滞在している。

あの時は今すぐにでも帰るような口振りだったのに。

「期限内ならいつ帰っても良いからな」

「そうなんですか？期限っていつくらいなんですか？」

レジーナが首を傾げて質問する。

厨房自慢の焼き菓子を摘み上げて旋は気のないように答えた。

「人間の暦ならば一年くらいだな」

「一年！」

叫んだのはデイルだ。

無理もない。

「ははあ、それで納得しました」

遅れてやって来たベルリードがしたり顔で頷く。

席を勧めるミルレイアに、感謝を返しながらもデイルの背後に控えている。

すぐに出て行く予定だからだ。

「何が、納得なんだ」

疲れたように呟く主人にベルリードは指を一本立てて説明した。

「聡明と評判だったご令嬢がそんな会って直ぐの人を愛するわけないじゃないですか」

明瞭な答えだ。

思わずデイルも納得した。

言われて見ればその通りだ。

「あ、それとお仕事です。領地の方で何か揉め事が起こったらしくて使いの者が飛んできました」

「……わかった。すまない、また後で」

慌しく去っていったデイルとベルリードを見送って、ミルレイアはお茶を飲む。

そうして、自分の周りにいる人たちを見て微笑んだ。

旋が取り除いた記憶は、ミルレイアに返された。

最初は、旋もデイルも難色を示していたがミルレイアが強くそれを望んだ。

自分の事を何も知らないで良いわけがない。

取り戻した記憶は、少なからずミルレイアを傷つけたけれどデイルがいてくれた。

旋も、レジーナも、ライドルも。

だから、今はこうして笑っていられる。

「ミルレイア様、お茶菓子も一緒にどうぞ。甘い物は疲れに良いんですよ」

「そうだな。それに、そなたはもう少し肉をつけた方が良い」

狐色に焼きあがった菓子を進めるレジーナに旋も同意して、いくつかを取り分けてくれる。

「美味しい」

さくつとした齒ごたえに、中に潜んだ胡桃がほのかに甘い。

「そう言えば、お庭の方はいかがですか？」

「あ、蕾が一つ付きました」

他愛無い話をして、一緒にお茶を飲んで。

大好きな人がたくさんいる。

ひっそりと幸せを噛み締めて、ミルレイアは微笑んだ。

日が落ちて、夜になるとデイルが訪れてくる。

昼間はあまり会えないけれど、代わりに夜にはゆっくりと話すことが出来る。

高価な薄い麻布の夜着を来て、ミルレイアは寝台に座っていた。

こうしているといういろいろな事を思い出す。

一度は失った過去の思い出は、皆が思っているほど辛いものではない。

ちゃんと楽しい事も幸せな事もあったのだ。

「何を考えているのですか？」

かっちりと整えられた昼とは違う、髪を下ろしゆったりとした寝着をまとってデイルが寝台へと近づく。

仕事をしている時の厳しい顔も好きだが、こうして全てを取り払った姿の方がミルレイアは好きだった。

「いろんなことを思い出してました」

そう言うのと、デイルはわずかに痛い顔をする。

きつと今も後悔は消えないのだろう。

何度ミルレイアが言葉を重ねても、デイルは己を許せないようだ。それを痛ましく思う影で、実は少しだけ嬉しく思っている自分をミルレイアは知っている。

いけないことだと判っているけれど、そうまで想っていてくれることが嬉しかった。

「後悔、してはいませんか？」

「しません。一緒にいたいと思ってます」

あれから、幾らかの時間が過ぎてミルレイアも幼さを脱ぎつつあった。

あの時の言葉を否定する気はないが、それでもあの言葉はまだまだ他愛無いものだったのだと今ならわかる。

今なら、きっとデイルと同じだけの想いを返せる。

手燭の明かりの中で、ミルレイアのきめ細かな膚がとろりとした輝きを帯びる。

伸ばされた手は隣りに座るデイルの頬をなぞる。

「デイルさまが好きです」

囁く言葉に、デイルは目に見えて動揺する。

ここはミルレイアに詠えられた部屋だ。

デイルの寝室はまた別にある。

夫婦と言う形を世間では取っていても、実際はまだ初々しい恋人同士のようなもの。

手が触れ合う事すら滅多にない。

大事に、大事にしてもらっている。

ミルレイアにだってそれくらいは判る。

けれど、少しそれが寂しいと感じている。

身体はそんな想いに反応してか少しずつ変じてきている。

半神のせいか、あまり目立った変化ではないけれど。

「ミルレイア……」

絡まったような声が褥に落ちる。

「貴方を愛しています」

淡く燃え立つ炎のような声。

言われるたびにミルレイアの心の中で沢山のものが花開き、芽吹いていく。

だから、同じだけ返したくて花唇を開いた。

「私も、愛しています」

相手を傍らに縛り付ける言葉。

デイルはそう言った。

でも、今ならわかる。

それは同じだけ相手を思いやる言葉なのだ。

与えるだけではなく、与えたいと言う事。

二人分の重みを微かな音と共に受け止めた寝台に月光が伸びる。

窓の外では、爛熟した花が風に舞っていた。

地中深くに埋められた名もなき花があった。

誰に知られることもなく、その花は暗い世界で芽吹いた。

花は輝く世界で咲き綻び、襲う風雨に儚く散り行き、やがて一つの
実をなした。

その実の名を“愛”と呼ぶ。

f i n

31* 実りの果実（後書き）

ここまで、お付き合いありがとうございます。

初回で100ちよつとだったPV数も最高で20倍以上になったりと驚かされたりしましたが、少しでも楽しんで頂けたなら幸いです♪

本編は、ここで完結しますが、まだ番外編などもあるので、あともう少しお付き合い頂けたら嬉しいです。

あとがきに代えての設定集（前書き）

本編終了までのネタばれを含みます。

読まなくても何ら問題のないページです。

あとがきに代えての設定集

〕 世界は繭に似て三つに分かれている 〕

【 神界 】 神に近い世界

太陽が満ち欠けする世界。

火、水、風、地など、それぞれの精霊がどこよりも多く存在する。
大きな一つの箱庭のような世界。

【 人間界 】 混沌とした世界

月と太陽、魔力と精霊が同時に存在する世界。

四つの大陸に八つの国。そして、一つの島で構成されている。
それぞれの特色を持った国は互いに共存しあっている（戦争はない）

【 魔界 】 魔に近い世界

三つの月が架かる世界。

魔力が澱のように溜まっており、そこに浮く形で11の城が螺旋状に配されている。

国と言う概念は存在しない（城に土地がくっ付いている感じ）

〕 それぞれの世界で暮らす人々 〕

【 神族 】

金の髪と青の瞳を持つ種族。神に近い一族であり、神その者ではない。

自然の大気を糧として生きる一族。寿命は平均800歳だが、1000年を超えるものも珍しくない。
あまり他世界に興味を抱かない閉鎖的な種族でもある。

【人間】

固有の色を持たず、土地柄によって様々な髪と瞳の色を持つ種族。寿命は60歳ほどで、いわゆる短命種。

茶髪茶眼が基本のため、それ以外の髪や目の色をしているとちよつとだけ特別な気分になれる。
緑の目は美人の条件の一つ。

【魔族】

銀の髪と赤の瞳を持つ種族。
魔力を糧として生きている。寿命は神族と同じ程度。
より強く、より美しい者に憧れる性質がある。

【精霊】

自然物に宿る意思を持つ力の現われ。
性格は奔放で享樂的な面を持つ。
神族には敬意を持って従っている。神官には気まぐれに力を貸したりしている。

【半魔・半神】

それぞれの血が強く出た外見をしている場合が多い。
寿命は500年ほど。幼少期の成長が不安定で、見た目通りの年齢とは限らない。
たいていの場合は、魔界か神界で育てられている。

「名もなき花」の人々

■ リゼイラ・カンターナ（ミルレイア・凧・ベラール） 14歳
幼い頃から地下で暮らし続けた子ども。

話し相手が精霊しかいなかったため、声が出るようになった後も喋るのは苦手。

半神のため、見た目と年齢が一致してませんが、精神年齢ももっと幼いと思われます。

■ セルゲイラ・デイル・ベラール 24歳
若き筆頭公爵。

色々と悩みの多い24歳。

セルゲイラは公爵家に引き取られてから与えられた名前（異母兄の名前）

デイルは生みの母親からつけられた名前です。

■ ベルリード・フライゼン 25歳
公爵の補佐官。

デイルとは幼馴染。いろいろとあって、今の地位まで来ました。今も貴族に対しては、まだわだかまりは残ってます。

■ ライドール・カスタナ 24歳
公爵家の従僕。

いろいろとあって（以下略）↑この辺りは番外編で載せる予定です。

レジーナには弱い。

■ レジーナ・ヒーリー 17歳

公爵家の侍女。

明るく元気な17歳。色恋沙汰に縁遠いのが最近の悩み。

■ 旋

ミルレイアの父。神族。

意外と神界では上から数えた方が早い地位にいます。

人間界に来るのは、仕事の内です。趣味を多大に兼ねてますが仕事です。

女性に優しく男性に厳しく、我が子に甘い。

あとがきに代えての設定集（後書き）

一度、このページを手違いで消してしまいました…。
心が折れたので、ちよつと時間差でアップしました。

本編的に関係ありそうな所だけ載せてます。

ちなみにサイトでは魔族の方々を中心にしたシリーズを載せてます。
神族の方々は、お話が「花」くらいしかないので、こっちでもうち
よつと触れて行きたい所です。

こんな所までお付き合いありがとうございます♪

EX・1 貴方に花を

広大な敷地を誇る王都は、王城を中心に上流貴族の館から中流、下流、そして商人の館へと裾を広げている。

筆頭公爵でもあるベラール公爵家は、その中でも王城に最も近く、そして貴族の中でもっとも広い館を下賜されていた。

館はもちろん、風華の古典的様式を色濃く残した庭園も館と比例するようにゆつたりとした空間がとられている。

直線で区切られた区画によって様々な花たちが妍を競う庭園は、代々の公爵の目を楽しませて来た。

当代の公爵は、なかなか庭を楽しむ時間を取れない多忙ぶりだが、代わりにその公爵夫人は毎日のように庭での散策を楽しんでいる。

最近では、散策だけでなく自らの手で花を育ててすらいる。

社交界のご婦人方であれば、聞いただけで眉を顰めるもしれないが、ベラール公爵夫人は少しだけ他とは違っていた。

ミルレイアは、しつとりと濡れた葉にそつと指を寄せた。

王都では、ここ数日ずっと雨続きだった。

今日は久方ぶりの晴れ間となり、室内にこもる日々が続いていた。

部屋にいても、出来る事はあるし、それも楽しかったのだが、やはりこうして外に出られると心が弾む。

「ミルレイア様、あまり急ぐと滑りますよ」

後ろから籠を持ったレジーナが声をかけてくれる。

雨上がりで、まだ濡れた煉瓦道はレジーナの言う通りいつもの小道とは少しだけ違っている。

立ち止まった途端、片足が滑った。

「ミルレイア様！」

小さく声を上げたレジーナに、どうにか転ばずに体勢を立て直す。

「ごめんなさい、大丈夫だから」

「ああ、良かった」

小走りに駆けよって来てくれたレジーナに礼を言う。

「ゆっくり行きましょね」

「はい」

そうして、二人並んで庭への煉瓦道を辿る。

「雨上がりですから、空気が澄んでますね」

「みんなも、気持ち良さそう」

「そうですか。久しぶりのお日様ですからね」

他の者であれば、戸惑うであろうミルレイアの受け答えもレジーナには慣れたものだ。

ミルレイアの蒼空色の瞳は、レジーナたちが見る事が出来ないものが見える。

「今日は、どんな種を植えましょね」

両手の籠を抱え直してレジーナが問えば、ミルレイアは首を傾げながらゆっくりと答えた。

「この前、もらった、白い小さな花の種を」

「ああ、これですね！私の好きな花なんですよ」

籠から取り出したのは、麻の小袋に入れられた種だ。

数日前に公爵家の庭師が、良ければミルレイアにと持って来たものだ。

レジーナの言葉に、ミルレイアはパツと顔を明るくする。

言葉よりも雄弁なその表情に、レジーナもくすくすと笑う。

「楽しみですね？」

「はい！」

弾むような足取りでミルレイアが生垣の角を曲がる。

その時、角からちょうどやって来た大きな人影にミルレイアはまともなぶつかってしまった。

「すみません、大丈夫ですか！？」

慌てた言葉と同時に傾いた身体を支えられる。

背中に感じるしっかりとした腕の感触は、既に馴染んだ物だ。

「デイル様」

「ああ、怪我はないですか？」

心配を顔中に貼り付けてミルレイアを立たせたのは、この館の主でもあるベラール公爵その人だ。

城内では辣腕と切れ者の名を欲しいままにしている公爵だが、我が妻の事になると人が変わったように落ち着かなくなる。

「大丈夫、です」

「良かった……」

心底、安堵してデイルはようやく笑みを浮かべる。

「デイル様も、お散歩ですか？」

まだ昼食にも早い時間だ。

常であれば、王城に出向いているか、執務室にこもっている時間だ。不思議そうなミルレイアに、デイルは笑みを苦笑に変えた。

「陛下に呼ばれていたのですが、来客が入られたので戻って来ました」

ちやうど急ぎの仕事もなく、ぼっかり時間が空いた形になったらしい。

「ミルレイア殿が庭に行かれたと聞いたので、ご一緒しようかと」だが、どの庭に行ったのかまでが分からず探していたらしい。

「デイル様も一緒にですか！」

輝くような笑顔にデイルの相好も緩む。

「お邪魔じゃなければ。今日は、どんな事をするんですか？」

自然と隣立って歩く。

レジーナは、そつと三歩後をついて行く形だ。

こうして見ると、夫婦と言うよりも初々しい恋人同士のようなだ。

それでも、似合いの二人に違いはない。

嬉しそうに話すミルレイアに、相槌を打ちながらゆっくりと歩くデイル。

後ろから仲睦まじい二人の姿を眺めてレジーナは一人で笑みを深めた。

他国からの客人も目をみはる公爵家の庭は、今は夏咲きの薔薇が見頃だ。

芸術的なアーチを描く蔓薔薇の下を潜り抜けて、少し奥まった場所にミルレイアの為の小さな花壇がある。

赤煉瓦で区切られた花壇には、まだ目を出したばかりの双葉が顔をのぞかせている。

「もう芽を出しているんですね」

「はい。いちばんに植えた子たちです」

「何の花ですか？」

「ええと、夕映菊と風知花です」

たどたどしく伝えられたのは、どちらも晩夏から初秋にかけて咲く華やかでこそないが良く知られた花たちだ。

夕映菊は、縁起の良い花として定番意匠の一つともなっている。

ミルレイアはもう慣れた手つきで如雨露で水をあげている。

貴婦人であれば土いじりなど嫌悪するものだが、そう言った悪感情はないらしい。

そもそもミルレイアは、そう言った世間の常識や貴族的な習慣と言うものを知らない。

そう言ったところもデイルは、微笑ましく思っているが、これからはそうも言っていないだろう。

何より、すでに少し問題にはなっている。

「……あつ！駄目ですよ！ミルレイア様、それは触ってはいけぬ虫です！！」

「え？」

大きな声を上げたレジーナに、ミルレイアはきょとんと目を丸くした。

デイルが見下ろしてみれば、伸ばされた細い指の先で見るからに毒

々しい色をした虫が土をはつていた。

双葉についていたのを、指でつまみ上げようとしたらしい。慌ててデイルがその手を掴んで虫から離れた。

「レジーナ、何か手袋は用意出来ないか」

「はい。今回は用意してまいりました」

前回も同じ事があつたらしい。

有能な侍女は、籠から薄い布を裁って作った手袋をテキパキとミルレイアにつけさせた。

違和感があるらしくミルレイアは手を握ったり、開いたりしている。

「手を傷つけてはいけませんから。今度からつけて下さいね」

「はい」

素直に肯いたミルレイアの横で、レジーナはスコップで虫を遠くへ投げ捨てている。

小さく聞こえた悲鳴は愛嬌だろう。

「デイル様。デイル様はお花が好きですか？」

成り行きで後ろから抱きかかえる形になったデイルを下から見上げてミルレイアが尋ねる。

自然と上目遣いになった角度は、凶悪なまでに可愛らしい。

思わず赤くなつた顔を片手で覆って、こちらは不自然に視線をそらした。

「え、ええ。好きですよ」

それ以外になんと答えれば良いのか。

今なら、例え尋ねられた対象が何であれ肯いてしまいそうだ。

「良かった。お花が咲いたらデイル様に一番にあげますね」

「……はい。楽しみにしてます」

どうにか表情を取り繕って返事をすれば、にっこりと輝くような笑顔が返る。

「この前、教えてもらいました」

「うん？」

きゅっとミルレイアの指がデイルの袖を掴んで振り返る。

「お花をあげるのは、好きってことですって。だから、デイル様にお花をあげますね」

恐らく、侍女から何か聞いたのだろう。

確かに求愛の贈り物と言えば花束が一般的だ。

だが、その事実の正否よりもミルレイアの言葉の方が嬉しかった。

言葉もなく抱きしめたデイルに、ミルレイアも同じく背中に手を回す。

「……………私も」

「？何ですか？」

震える声は聞き取りにくかったようだ。

顔を上げてもう一度、伝える。

「私からも、花を捧げます」

「はい……、うれしいです」

貴方に花を贈りましょう。

尽きぬ言葉を、花にこめて。

ありったけの、愛をこめて。

f i n

EX・1 貴方に花を（後書き）

結婚してすぐ位の二人です。

とりあえず、甘いのだけを目指してみました。

まだ、初々しい二人です。

この短編は、再掲ではありません。久しぶりに二人を書きました
…。

EX・2 宿り木

ひっそりと閉じた目蓋に口付けを。
二度とは見開かれぬ瞳に懺悔を。

俺は此处にいる。

汚水があふれ出る道を、垢にまみれた裸足が踏み締めていく。
痩せた鼠の死骸が転がり、そこに複数の鼠が群がっていた。

喰らいあう醜悪な光景もここでは見慣れた背景の一つにすぎない。
冷めた目で汚物と塵に埋もれた廃屋を眺めながら、褐色の髪のパデ
イは前方から聞こえてきた喧騒に眉を顰めた。

段々と近づいてくるその騒ぎの元は、どうやらパディと同じ年嵩の
子どもたちらしい。

「なんだ？」

少し離れた場所で立ち止まって、何が起こっているのか見定める。
複数の少年たちが不意に歓声を上げた。

何かを持ち上げながら去っていく。

残されたのは、うずくまる中年の男。

どうやら追いはぎにあっただらしい。

近づいていけば泥に汚れてはいたが、男の身なりはここでは考えら
れないほど良い。

そんな格好で来れば物の数分で身包みはがされて当然だ。

どんな馬鹿だと思いながら、さらに近づく。

行く先に男がいるだけで、何かしてやろうと言う気はない。

「う、痛た……。あー、ビツクリした」

前を通り過ぎようとした時、やけに暢気な声が聞こえた。

無視していくつもりが、あまりに間の抜けた言葉に足が止まってしまった。

「馬鹿がおっさん」

「ん？おや、まだいたのか。でも、さっきの子達に全部持っていかれてね。あげられるものは……。あ、お菓子があつた。いるかい？」

さっき強奪されたばかりだと言うのに、何だこの男は。

こんなボケボケした大人など見た事がない。

差し出された色紙に包まれた菓子をうるんげに見つめて、ひったくるように取り上げた。

くれると言うのなら貰っておく。

男はそんなラディをにっこり笑いながら見ると汚れを払いながら立ち上がる。

恰幅が良いが背丈はそれほどではない。

そんな体格がさらに男を軟弱に見せる。

「おっさん、こんな所で何してんだ？あんたみたいなのがこのこ来たら良い得物だ」

忠告めいたことを口にして、ラディはチツと舌を鳴らした。

「はは、そうみたいだね。でも、ちょっと人を探していてね。此処にいるって聞いたんだけど」

まいったなあと頭をかく暢気すぎる男に、ラディはイライラとした。

本当になんで足を止めてしまったのか。

「そつだ、君は知らないかい。探してるのは、君くらいの女の子で、名前はドーラと言うんだけど」

「ドーラ？知らねえよ。女ならさつさと売られていったんだろ」

この最低の場所で、長い続ける子どもなどほとんどいない。

病や栄養不良で死ぬか、喧嘩や親への暴力で殺されるか。

運が良ければ、どこか良い場所に売られていったか。

そんな幸運は、満に一つあれば奇跡だが。

「そうか、そういう可能性もあるのか……」

消沈した男に見切りをつける。

「だから、さつさと家に帰れよ」

このまま付き合っていたら、こっちの頭がおかしくなりそうだ。

「うん、ありがとう。またね」

ほがらかな別れの挨拶を背に受けて、数歩歩いたところで足を止める。

また……？

怪訝な顔で振り返ったとき、男はもう貧民区の外へと歩き出していた。

馬鹿馬鹿しい。

酷い目にあつたのなら、もうこんな所に近づいては来ないだろう。

「おかえり、ラディ！」

ラディがねぐらに戻ると、明るい声で出迎えがあつた。

長い飴色の髪を垂らした少女は華奢を通り越した枯れ枝のような体を薄い布団の上に起こしていた。

「ドーリア、寝てろよ。まだ熱があるんだろ」

がらくたを積み上げて作った家ともいえない建物。

不安定な足場を踏み越えながら、熱で潤んだ瞳のドーリアのもとに向かう。

汚れた薄布を体に巻きつけた少女は、嬉しそうにラディの帰りを喜ぶ。

「今日はだいぶ良いんだよ」

「熱があるだろ。嘘つくな」

「ラディは心配すぎなんだって」

不服そうに言うドーリアに笑いながら、土産を差し出した。

滅多に見られない綺麗な包装のお菓子にドーリアは目を輝かせた。

「きれい、きれい！」

摘み上げたお菓子を日に透かすように持ち上げて何度も角度を変えて見つめる。

かさかさの肌にほのかに血の色が浮かぶ。

明るい笑顔にラディの尖った顔もゆつたりとしたものへと変わる。

「はい、はんぶんこ」

存分に眺めた後、ドーリアははいつと二つあったうちの一つをラディに渡す。

「え、俺は別に良いよ。お前が食べよ」

「いーから、はい半分」

ぎゅっと押し付けられたお菓子をラディは苦笑混じりに受け取る。さっきの暢気なおやじから貰ったものだ。

手のひらで転がしながら、嫌な気分を飲み下す。

「どうしたの？」

「いや……、何でもない」

もうあの男も来ないだろう。

楽しげにお菓子を眺めているドーリアをモヤモヤした気分で見つめた。

ラディとドーリアが出会ったのは、四年ほど前だ。

親からの暴力に嫌気が差して家を出たラディが、うろつろと貧民区を彷徨っていた時に捨てられて泣いていたドーリアと出会ったのだ。

そのとき以来、何故だか懷かれてしまい何だかんだで今では家族の様に暮らしている。

泥水を啜る暮らしも一人でないだけ救われる。

けれど、ドーリアは近頃身体を崩している。

熱が下がらず乾いた咳を繰り返すドーリアは、日に日に弱っていく。

こんな所では薬も手に入らず、滋養のある食べ物すら儘ならない。

せいぜい近くの森で、果物を取れば良い方だ。
その果実すら、途中で奪われる事が多い。

ドーリアは衰弱していく一方だ。

何の助けにもなれずにいる自分が情けなくて仕方がない。

熱のせいかうとうとしながら寄りかかってくるドーリアを、そつと布団の上に横たえる。

放り出された手を握れば、それと分かるほどに熱い。

垢に汚れたドーリアの手の甲にある痣が熱を持ったのか、不自然に赤く浮かび上がって見えた。

寒くないようにあるだけの布を掛けて、枕元に座る。

ほつれた髪を指ではらって、唇を噛み締めた。

亡くしたくない、そう思っているのに。

次の日、同じように何か金になるものはないかと辺りをうろついて
いると陽気な声をかけられた。

「おまつ、また来たのかよ！」

「うん。だってまだ探してないところがあるからね」

のほほんとした表情で言うのは、昨日出会った男だ。

「だったら傭兵でも何でも雇って来いよ。また狙われても知らねえぞ」

「ありがとう。君は優しいね」

「ば、馬鹿野郎！」

臆面もなく、そんな褒め言葉をもらったのは初めてで顔が赤くなる。

「それで、あんたが探してる女って何なんだよ」

倒壊した家屋の塀に腰掛けて、どうにも頼りない大人を見上げる。

昨日よりもくたびれた格好だが、それでもラディよりもまともだ。

「ドーラはね、僕の子どもなんだよ」

「……捨てたのか？」

厳しい声が出たのは、思うところがあるから。

「まさか！五年位前かな、お屋敷にいく所で盗賊にさらわれてしまったんだ。それから、ずっと探しているんだけど手がかりが少なくてね。あ、そうだドーラの手の甲にね、こう赤い痣があるんだよ。赤ん坊の頃の火傷の痕なんだけど」

ここが最後の手がかりの場所なんだよ。

情けない笑顔を向けられて、ひゅっとラディは息を飲んだ。

五年前？

赤い痣？

目の前で飴色の髪が揺れる。

「本当は、もう死んでるのかもしれない。それでも、あの子の何かを見つけたくてね」

「あんた……、良い所で働いてんだろ。子どもの一人位良いじゃねえか」

「……子どもは掛け替えのない宝なんだよ。たとえ、他に子どもが居ても。ドーラを見捨てたくはないよ」

そこにはラディが知らない愛情があった。

生まれてから一度もラディには手に入らなかったそれ。

目の前で見せ付けられて、ラディは怒りにも似た衝動でいっぱいになった。

「あー、またつまらないことを聞かせたね」

「……ドーラが生きてたらどうすんだ？」

「ん？」

「ドーラが生きてたとしても、ここで五年も暮らしてたら犯罪にも手を染めてる。そんな子ども、どうするんだ？」

吐き捨てるように問うラディに、男は少し目を瞠ってから困ったように頬をかいた。

「嫌われるかもしれないけど、引き取りたいと思ってるんだ。甘い」と君に言われそうだけど「」

「ホント、甘すぎだ」

断定した少年に、恰幅の良い腹が揺れた。

温かな笑い声を聞きながら、ラディは目を閉じて考えた。目蓋の裏に焼きついていて、ドーラの痩せ果てた身体。もう歩く事すら儘ならない頼りない足。

かさついて咳き込むたびに切れる唇。

それでも笑ってくれる顔。声。瞳。

「ついて来いよ、おっさん」

本当は、そうでなければ良いと思っている。

たった一人、こんな泥に汚れた世界にいるなんてたまらない。何故、自分ばかりが救われないのか。

そんな浅ましい思いがずつと底の方から聞こえてくる。

耳をふさいでもふさいでも。

声は体に絡み付いて離れない。

「えーと、何かあるのかな？」

戸惑いながらも素直についてくる男に笑いが込み上げる。

本当に危機感がない。

グルグル考えながら、ラディは寢床へ向かって大股で歩く。積み上がったごみの山が見えてきて、喉が上下する。

あそこに着いたら、全てが変わる。

「ひやあ、凄いな。おじさんは大変だ」

言うとおりの息が上がっている。

額から滝の様な汗が流れ落ちている。

情けない、と横目で見ながら近づいて来た自分の家に違和感を感じた。

何かがおかしい。

「どうしたの？」

ラディの隣りにまでやって来た男が不思議そうに立つ。

二人の視線の先には、荒らされ崩されたがらくたの数々。土砂崩れでも起こったかのように流れている。

広がる光景の意味を悟った時、ラディは言葉にならない悲鳴を上げて駆け出した。

何が起った。

土ぼこりが上がっている。

何があった。

ドーリアッ。

転がり落ちるように走って、着いた先。

「……ドーリアッ!!」

ラディが見たのは、潰れた家。

転がっているのは、ドーリアが使っていた小物入れだ。

歯のかけた櫛を拾い上げ、歯を食いしばって耐えた。

「ドーリア! 何処に居る!」

逃げているはずだ。

逃げていて欲しい。

最近、この辺りの治安は悪くなる一方だ。

面白半分で、がらくたの家を壊すくらいは平気でやる連中がゴロゴロしている。

そんな輩にドーリアが見つかったら……。

上がる息を懸命に抑えて、辺りを探す。

だが、見つけたい人影は何処にも見つからない。

嫌な予感ばかりが先立って、前すら見えなくなりそうだ。

「……ドーリアッ!!」

身体中で叫んで、瓦礫の影に動く影を見つけた。

思うより早く体が動いた。

長い髪が毛羽立った枯れ枝のように辺りに散っている。

抱き上げた身体は、今までになく冷たく、そしていつも纏っていた衣服はズタズタにされていた。

「……っ!」

何があったか明らかだった。

震える手で、自分の着ていた服を脱いで半裸の体に着せ掛ける。

「ドーリア、ごめん。ごめん……」

謝りながらボロボロに傷ついた少女の体が霞む。
こぼれ落ちる涙が、乾ききった肌に落ち流れる。

「ラディ……だあ」

か細く掠れる、そして心から嬉しそうな声。

「ごめ、うち、壊れちゃ……た」

「……馬鹿、また作れば良い。どうせ、そこら辺ので出来てるんだから」

「そ、か。じゃ、もっと、おおきな……のが、いいな」

必死で笑おうとして、でも目の前の笑顔を見てしまうと涙が止まらなくなった。

「ドーリア……」

何も言えない。

もう何も言ってあげられない。

「ああ、良かった。いきなり走っていくからどうしたのかと……、怪我をしたのかい！はやくお医者さまに！」

慌てて走っていかうとする男を叫んで呼び止めた。

今にも息を止めてしまいそうなドーリアを抱き上げて男に抱くように言う。

戸惑いながら男は、驚く程軽い少女を抱き取る。

「……あんたのドーラだ」

涙混じりの声に柔和な表情を崩さなかった男が凍りついた。

「ドーラ？」

もうほとんど焦点のあっていない目でドーリアが自分を抱く人間を見上げる。

「可愛い私の、ドーラ。私の大事な宝物……」

涙に揺れる声にドーリアの手が上がる。

「おと……さ、ま」

ふつくらとした手が、己の半分もない小さく痩せた、赤い痣のある手を握り締めた。

ラディは、そつとその場を離れた。
振り返ることも、その場に留まる事も出来なかった。

「ありがとう」

しばらくして、一人瓦礫の前に立っていたラディの後ろに男が立った。

声だけ聞いても泣きぬれていたことがわかる、かすれた声だった。

「もう良いのか？」

浮いた涙を拭ってラディが振り返ると、男は赤くなつた目じりを和らげてラディを見つめる。

その優しい眼差しが、ひどく気に障った。

「本当にありがとう。あの子に会えるとは思わなかった」

「……死んじまつたじゃねえか！」

物柔らかな感謝の言葉をラディは語気強く跳ね除けた。

「あんたのドーラは死んだじゃねえか。俺が、俺といたから……」。

あんな、酷いこと……っ」

本当ならもつと早くに会えた筈なんだ。

元気に笑っていたドーリアに会えた筈なんだ。

俺が、気付かずにいたあの時間がドーリアの最後の時間だったのに。

悔やむラディの手をそつと優しい温もりが包んだ。

「君といたから、ドーラは優しい女の子になった。最期でも、私はあの子に会うことが出来ました。心から感謝してます」

「でもっ、俺はドーリアが憎かった……。勝手に、幸せなところに行こうとするドーリアが羨ましかった」

あの一瞬、彼女の死すら望んだかもしれない自分。

流れる涙は、悔恨と懺悔。

誰よりも彼女を守りたいと思っていたはずなのに。

「良いんですよ。あの子を君から取り上げようとしてしまつてすみ

ません」

本当に申し訳なさそうに言う男に、クツと笑いがもれた。

「あんだ、本当に甘いな」

「すみません。甘いついでに、私と一緒に来ませんか？」

「は？」

「私の子どもに、あの子のお兄さんになつてくれませんか？」

本気でラディは耳を疑った。

「何、言つてんのおっさん？」

律儀に子どもに向かつて謝る大人は、それでも嘘偽りのない眼差しで塵の道に立つ少年を見つめる。

「ドーラは幸せだった。君が幸せにしてくれたお陰だ。なら、今度は私が君を娘の代わりに幸せにしてあげたい」

差し出されたのは、優しさと穏やかさと、愛情。

欲しいと願ひ、そして与えたいと祈つていた物。

「私とドーラの家族になつてくれませんか？」

再度の言葉に、ラディは泣きながら震える手を差し伸べた。

「ドーリアは……一緒につれてくのか？」

「もちろん。遅くなつたけど、一緒にお家に帰りましょう」

握られた手が嬉しく、そして申し訳なかった。

本当ならドーリアの居るべき場所だったのに。

貧民街を通り抜け、薄汚れた町並みを見下ろせる場所に立ちラディはぐつと足を踏み締めて振り返った。

「……名前、」

「はい？」

「あんたの子どもになるんだろ。子どもは親から一番初めに名前を貰うんだ。だから、何か俺に名前くれよ」

男は、否父親はその言葉に驚きを浮かべ、そして優しい声で新しい名前を付けてくれた。

そうして、ラディは大切な仲間を喪つて、家族を得た。

歩き始めた彼は二度と振り返ることはなかった。

「それでは、行つて参ります。父上」

「公爵様のお屋敷は、色々大変だが頑張りなさい」

春の風が、花の眠りを覚ます季節。

有り触れた一軒の家は、新たな門出を迎えていた。

「はい。父上もあまり無理はしないように」

「大丈夫だよ。それにしても、あの子どもがここまで立派になって、こんなにも嬉しいことはない」

感無量の涙を浮かべる父親に、褐色の髪を一つに纏めた背の高い青年は苦笑を浮かべる。

「こうして働きに出られるのも、礼儀作法や言葉使いを教えてくれたおかげですよ」

「いや、君が頑張ったからだ。本当に君が息子で幸せだ。あの子ども喜んでいるよ」

「……休みには、戻ります。二人で会いに行きましょう」

「ああ。それじゃ、頑張りなさい。大丈夫、君ならうまくやれるよ」

「はい」

懐かしさと今も胸を締め付ける苦しさに目を細めて、青年は家を出る。

新たな一步を踏み出した息子の背に父はまた言葉を贈る。

「君は君のままで大丈夫。頑張りなさい、ライドル」

「……行つて来ます」

父の温かく力強い言葉を胸に抱いて、ライドルは光の中を歩き出した。

ひっそりと閉じた目蓋に口付けを。

二度とは見開かれぬ瞳に懺悔を。

ドーリア、君の全てを受け継いで俺は此処にいる。
光知らぬあの頃の俺たちの代わりに。
今、私は此処にいる。

私は、此処に居る。

f i n

EX・2 宿り木（後書き）

本編である意味、公爵様以上に活躍していた彼の過去話です。
サイトの物をちょこつと加筆修正してます。

ちなみに、この約10年後が「名もなき花」になります。

EX・3 萌芽

開けられた窓からふわりと甘やかな香りが届く。
春が一番美しい時期。

ベラール公爵の館は、浮き立つ空気とは反対に慌しい雰囲気満ちている。

回廊を小走りに行き来する侍女たちの手には、清潔な布や盥が積み重なっている。

忙しそうな様子ではあるが、どの顔も嬉しそうに輝いている。

「はやく、いそいで。もうすぐよ」

「お医者さまも、もういらしているのよね」

さざめきながら小走りに館内に吸い込まれていく。

ひらめく侍女服も軽やかで楽し気だ。

館の中は、そわそわとした空気でそこかしこが落ち着かない。

用もなくウロウロしているのは、こういう時には得てして役に立たない男性陣だ。

休む暇もなく立ち働いている侍女たちを肩身の狭い思いで眺めている。

「なあ、もう結構経ったよな」

「いやいや、こういうもんは時間が掛かるもんだ」

女たちよりも余程落ち着かない会話が交わされる。

訳知り顔で頷いている年配の男も、忙しなく階段を見上げている。

今日は、特別な日なのだ。

「こちらでお茶でも如何です？まだ、かかるんでしょう？」

落ち着いた緑に若葉の刺繍を施した長椅子に、当主よりも寛いでいるのは側近であるベルリードだ。

ライドルが淹れたお茶を美味しそうに飲んでいる。

「うん、美味しいね」

「ありがとうございます」

そつなく贅辞を受け取って、有能な従僕は忙しなく部屋を行き来する主を見やる。

腹を空かせた熊のように歩き回る公爵を責められる男はいないだろう。

今はまだ結婚も考えていないライドルだが、もし同じ立ち場になったら落ち着いてなどいられない。

ただ、心情は良く理解できるが、動き回られてばかりなのも少々鬱陶しいと正直思う。

「デイル様、お茶はいかがですか？」

「ああ、後でな」

声をかけてはみるが、視線も上げない返答ばかりだ。

ベルリードとライドルは示し合わせたようにため息を吐いた。

「やれやれ、国王との初対面でもこんなに焦った事はなかった筈なのに」

「仕方ありませんね」

「まあね」

仕方あるまい。

何度目かの言葉を呟いて、ベルリードは窓の外を眩しげに見る。

「あれから三年か……。早いものだね」

何を言わんとしているのか、ライドルは正確に察した。

同じことを考えていたからだ。

「あの時の事を考えると、今でも顔から火を噴きそうなくらい恥ずかしいよ」

独白にも似た台詞に、どう答えたものか迷う。

「世間知らずだったんだな、と思い知った。でも、こんな事言つと君に怒られそうだけど、お陰でいろいろ学んだんだよ」

子どもが親に小さく自慢するような表情を浮かべるベルリードに、

ライドルは苦笑を返す。

「怒るなんてとんでもありません。自省し学べる人間は、少ないですから」

新たに注いだ香茶を丁寧にし出し出す従僕に、軽く眉を上げてみせる。

「君のように真実を見極める目を持った人間はもつと少ないということ、いくら僕でも知っているよ」

「ベルリード様」

困り果てた声に、有能な秘書官はくすくすと笑い声を立てる。

「まあ、掛け値なしに君がいてくれて救われた。僕もデイル様も、そしてもちろんお方様もね」

「光栄な事です」

何処までも礼儀に則ったライドルの所作に、ベルリードは清々しさと少々可愛げが足りないと言ふ不満を同時に持つ。

そこで、ちよつと慌てる姿が見たくなった。

「ところで、君はレジーナとはどうなっているんだい？」

「は？」

思惑通り、普段からは考えられない抜けた声が上がる。

「いや、こうして晴れの日を迎えられる訳だし。結婚の約束も今なら取り付けられるよ」

ま、君になら何時だって許可をあげるけど。

とても良い笑顔で言つたベルリードに、ライドルは体温調整以外の理由から浮かんできた汗を拭つた。

「どうもこうも。私と彼女はそう言つた関係ではありませんよ」

「え、そうなの？皆が噂しているけど」

「噂は噂です。レジーナは妹のようなものですから。無用なお氣遣いは結構です」

きつぱりと言つたライドルに、ベルリードは何ともいえない表情を浮かべる。

「それじゃ、誰か他に意中の人はいるのかな」

「ベルリード様？」

何故こんな話題になったのか。

だが、ベルリードも引く気はないようだ。

「私の理想は高いんです」

予想外の言葉にベルリードが一瞬きよんとする。

「全てを満たしてくれる人でなければ愛するのは難しいでしょうね」

さらりとたまった侍従を探るような眼差しが見つめる。

「……館の侍女たちがこぞって泣きそうな言葉だね」

それでも、ベルリードはすぐに冗談めかした言葉でこの話題を切り上げた。

二人がそんな会話をしている間も、デイルはうろつろと落ち着きない。

会話すら耳に入っていないのだろう。

飲まれないまま冷めたお茶を片付ける。

その時、隣室と繋がっている扉が叩かれ、息を飲む一堂の前で開かれた。

頭を垂れた所作で現れたレジーナは、興奮で赤らめた頬で告げる。

「ご無事のご誕生でございます」

公爵の元にしっかりと歩み寄って、膝を折り更に告げる。

「女のお子様であらせられます」

「……ああ」

居竝んでいるようだったデイルは、その言葉にハツとしたように動き出した。

わき目も振らずに扉をくぐる公爵に、ベルリードとライドールは目を見合わせ暫らく遠慮することを決めたのだった。

代々の公爵夫人に与えられる部屋は、当代の夫人の趣味に合わせて

華美な装飾は取られ、代わりに簡素だが品の良い調度品でまとめられていた。

そこに飾られた花が、風に揺れている。

次々と祝いの言葉を述べる侍女たちの前を通り過ぎ、薄絹の垂れた寝台へと近づいた。

公爵の意を組んだ侍女頭が部屋に残っていた者を下がらせ、自らも一礼の後に部屋を辞す。

「デイル、さま？」

疲労が色濃く残った白い容貌に、デイルの顔を見てわずかに色味が差す。

垂れ絹を掻き分け、羽毛の寝台に横になる妻を見つめる。

「ああ、無事で良かった。ミルレイア」

汗に濡れた髪を払い退けてやりながら労わると、ミルレイアはにっこりと微笑んで掛け布をそつとめくる。

隠れるように眠っていたのは、まだ肌も赤い嬰兒。

白い布に包まれた赤ん坊を恐る恐る抱き上げる。

その小ささと軽さに驚きながら、デイルは喜びを噛み締める。

「女の子か。名前を決めなければ」

「あ……」

躊躇う声を上げたミルレイアにデイルが慌てて気遣いの声をかけた。

「何処か苦しいのか？」

「いいえ、そうじゃなくて。あの、名前……」

「名前？」

意味の掴めないデイルが首を傾げれば、ミルレイアはすまなそうに口を開いた。

「あの、凜と言っんです。その子。神族の血が強く出たみたいで、そつと寝台に戻された赤ん坊の頬を指で撫でてミルレイアが説明する。」

「私ほどではないから、性別はちゃんと女の子です。でも……」

心配そうに見上げるミルレイアに、デイルは安心させるように微笑んだ。

「そうか。可愛い名だ。凜か」

「はい」

嬉しそうに名を呼ぶデイルの姿に、ミルレイアもホッとしたようだ。

「デイルさまも、名前考えてくださいね」

「良いのか？」

「はい。最初の贈り物ですから」

親から子へ、最初に贈られる素敵な贈り物。

「それなら、二人で考えよう」

「…はい」

微笑みあつて、二人はそつと口付ける。

仲睦まじい両親の間で、赤ん坊は小さく声を上げた。

新たな幸せが芽生えた日のこと。

これから、さらに公爵家は賑やかになって行くだろう。

そんな幸福の予感が感じられる。

特別な日のことだった。

後にベラール公爵の息女は、風華国の王妃として世に認められることとなる。

けれど、それはまだまだ先のこと。

生まれたばかりの赤子は、両親の腕の中ですよすやと幸せな眠りについている。

誰からも愛されるように。

そして、多くの人に幸せを運ぶ人になるように。

そんな願いの込められた名が、嬰兒に与えられた。

アリスティーナ・リン・ベラール。

新たな家族の誕生である。

f i n

EX・3 萌芽（後書き）

本編から数年後くらいでしょうか。

そんな感じで生まれました。

ちなみに、この後は間を空けつつ男の子が二人誕生する予定です。

旋は、神界に戻っているのではありません（笑）

EX・4 ひなげし

知っているのよ。

実は小さな猫とか犬とかが苦手なこと。

実は甘いものに目がないこと。

実は不器用で、人の何倍も努力していること。
それに。

本当は、女の子が苦手なこと。

ちゃんと知っているの。

レジーナの一日は、大きなお屋敷の掃除から始まる。

館中の侍女、従僕が総出で床も壁も、飾られた花瓶までも手抜き無くピカピカに磨き上げる。

まるで鏡のように廊下に自分の顔が映るくらいまでになって、ようやく掃除が終わる。

侍女同士のお喋りを楽しみながらの掃除の後は、レジーナだけの特別な仕事へと向かう。

皆から羨ましがられるレジーナの仕事は、この館のご主人様の奥様のお世話をすることだ。

ベラール公爵の奥方は、類稀な出自と美しさで誉れ高い。

だが、レジーナにとって大切なことはその美貌でも稀なる血を引くことでもない。

容貌と比例するがごとく優しく、健気な性格。

レジーナのような侍女にも感謝の気持ちを忘れない謙虚な態度。本当に自分は幸せものだ。

じんわりと己の境遇を振り返って居ると、同じく公爵夫人付きのライドールが不審な顔で近付いてきた。

「レジーナ？何をやってるんだ？」

「日頃の幸せを噛み締めているの」

思い返せば、四人姉妹の三女と言う中途半端な生まれのせいで着る物と言えば姉のお下がりがばかり。

いつも忘れ去られた流行の服ばかり着ていたあの頃。

年頃の女の子としては看過出来ない、由々しき事態だった。

それでも実家の卸売り業を助けながら頑張ってきたのだ。

だが、それも父が勝手に決めてきた婚約者の登場で全てが灰燼に帰した。

「やっぱり今思い返してもあり得ないわ。だって、まだ年端も行かない女の子の旦那に、三十過ぎの子持ちの親爺を選んでくるのよ。

非常識ったらないわ！」

「…それはあの頃にも、散々聞いたが」

ため息交じりの宥めの言葉など、レジーナの耳を左から右へと通過していくだけだ。

そう。父親の選んだ相手と結婚なんてとんでもなかった。

このままでは人生が台無しになると危機感を募らせていた所に、天からの助けの如くもたらされたのが、この公爵家への侍女奉公の話だった。

一番上の姉は既に嫁いでいたし、二番目の姉は侍女仕事などとてもない、と断った。

末っ子などようやく一人で着替えが出来るようになったばかりだ。難色を示す父をほとんど泣き落とす勢いで納得させて勝ち取った仕事だった。

お陰で、ちょっとした装飾品なら自分のお金で買える様になったし、何より婚約話がうやむやの内に流れてしまったのが何より素晴らしい。

「しかも、お仕えするミルレイア様は可愛らしいし、お優しいし。

私って幸せ者よね」

「そうだな…」

諸々の言葉を飲み込んだ同意に、レジーナは彼女の魅力の一つでもある明るい笑顔を見せた。

「それじゃ、はやくお部屋の仕度に行きましょう。何やってるの、ライドル。ほら、早く！」

もはや何も言う気力をなくしたライドルは、引き摺られるがままにレジーナの後を追いつけた。

「レジーナ、来て貰っても良いですか」

「はい、何ですか？」

大事な大事なご主人様は、今日もとても輝いている。

毎日目にしても飽きない金色の髪の毛のせいもあるけれど、やっぱり何よりキラキラしているのはその屈託の無い笑顔。

ああ、これでご主人様でなかったら心のままに存分に抱きしめてしまえるのに。

心で拳を握るレジーナは、必死で外面を取り繕って精一杯の落ち着いた態度で返答する。

それでも、顔は心のままに緩んでいる。

「えと、凜が寝ちゃって…」

申し訳なさそうに言うミルレイアの膝の上には、三月ほど前に生まれたばかりの赤子が寝そべっていた。

誰もが待ち望んだ愛らしい嬰兒は、たくさんの愛情を一身に受けてスクスクと成長中だ。

最近ではきやあきやあと可愛らしい笑い声を聞かせてくれるようになった。

さっきまで、母親のミルレイアの膝の上で機嫌よく遊んでいたのだが、そのままコテツと眠ってしまったらしい。

まだ動き回るには早い頃だが、見たものを全部口に入れるようになったから中々目が離せない。

「今日は朝から早起きでしたからね。寝かせて来ましょうか」
ふわりと波状に広がった繻子の衣装では、赤ん坊を抱いたまま立つことは難しい。

緩やかに巻いた金髪をそつと撫でてミルレイアは赤子をレジーナへと渡した。

飴色の籐の揺り籠は、真っ白な綿打ちの布が敷き詰められて、所々に淡い蒼で刺繍がされてある。
起こさないようにそつと寝かせる。

こうして見ると、本当に物語的一幕が有名な画家の作品のようだ。

自然と浮かんだ微笑みは幸せそのものだ。

隣に立って同じように揺り籠を見つめるミルレイアと一緒に微笑みあう。

うん、幸せだわ。

ごく自然にそう思える自分が、かなり幸せなのだとレジーナは知っている。

「あ…」

ほっこり幸せ気分を満喫しているとミルレイアが何かに気付いたように声を上げた。

ちよつと驚いた伺ってみると、恥ずかしそうに胸の前で手を振って何でもない、と返ってきた。

「大したことじゃないです。ライドルが遅いな、と思って」

「ああ、そう言えばそうですね。マイラさんに呼ばれてみたいですから、何か言付かって外に出ているのかもしれないね」

公爵家の侍女を統率する立場の彼女は、恰幅もよろしく気風もよろしい女傑だ。

さすがのレジーナも侍女頭のマイラの前では、神妙に態度を改めてしまう。

それはともかく。

確かにちよつと遅すぎる。

何か用件を言付かったにしても、それを伝えてくる者の一人や二人はいるのに。

「ちよつと見てきますね。代わりの者も呼んでますから大丈夫だと思えますけど、何かあったら呼んでください」

「はい。大丈夫です」

大好きな笑顔で見送られてレジーナは、浮き立つ心と傍を離れることの残念さをせめぎ合わせながら部屋を出たのだった。

同じ時期に奉公に上がるようになったライドルは、ちよつとつつき難い、堅物だと思われていた。

思われていた、ってことは過去形なわけで。

ミルレイア様が公爵家に来られてから、ライドルにも少なからず変化があつたのだ。

そんな事を今更の様に考えていた。

日頃はあまり使われない小さな客室に通じる廊下。

ちよつとした気まぐれで、覗いてみたそこで目当ての人物を見つけてしまった。

しかも、一人ではなくレジーナも良く知っている少女と一緒に居た。

最近、この屋敷に上がるようになったばかりのレジーナの妹とそう変わらない年の侍女。

取り立てて可愛らしいと言うわけではなかったが、愛嬌のある表情と朗らかな性格で皆から好かれているような子だった。

レジーナが思わず足を止めてしまったように、部屋の前の廊下にいる二人には不思議な空気が流れている。

切迫したような悲壮な雰囲気を出して居るのは少女の方だ。

ライドルは普段と大して変わらない様子だ。

「あのっ、あた、じゃない。私、ずっと好きなんです」

言った、と思ったのはレジーナだ。

「…掃除がですか？」

ドキドキがこちら側にも聞こえてきそうなのに、素っ頓狂な返答をしたライドルにレジーナは地団駄を踏みたくなった。

この、鈍感！

「いえ、あの…。すみません、何でもないです…」

不思議そうなライドルに少女は、二度言葉を繰り返すことが出来なかったようだ。

消え入りそうな声で謝罪するとパツと駆け去って行ってしまった。

慌てて飾られた花瓶に身を隠したレジーナだったが、少女の目に光るものに気付いてしまう。

女の子から告白することがどれだけ大変な事か。

特に、社交界では男性から女性へ言葉をかける事が礼儀だとされている中で、それに関係のない家柄だとしてもやはり女性からの告白はかなりの勇気が必要な事だ。

「仕事中って言うのは、感心しないけど」

ひとり呟いてレジーナは一步踏み出した。

ライドルと言えば、突然走り去った少女にも関心を示さずに廊下を磨いていた。

「レジーナ？何をしてるんだ？」

「それはこっちの台詞です。ミルレイア様がご心配なさっていたから探しに来たの。何だって、こんな所で掃除なんか」

「ああ、さつき侍女の一人が此処にお茶をこぼしてしまったんだ」
通りかかったライドルとしては見過ごせなかったのだろう。

さり気なく手を貸す優しさに、先程の少女が思い余ってしまったのも良く判る。

何となく片づけをするライドルの姿をしげしげと観察してしまう。

整った鼻梁は高からず低からず。

一重の瞳は少々剣があるが、近寄りがたいほどではない。

どちらかと言えば、硬い表情のライドルがわずかに微笑んだりする所に魅力を感じる女性が多く居るのだろう。

「さっきの女の子泣いてたわよ」

「…見ていたのか」

バツが悪そうな、非礼を咎めるような声音にレジーナは先程の事をライドルが全て承知していたのだと知った。

「はぐらかすにももっとやりようがあると思うわ」

ツンツと横を向くレジーナにライドルは手にした箒を床に立てて、ため息を吐き出した。

「応えられないんだ、仕方がないだろう」

「そう言って、どれだけ女の子を泣かせば気が済むの。いい加減、誰か決めれば良いのに」

「簡単に決まるものじゃないだろう」

そんなの詭弁だわ。

レジーナは知っている。

何のかんのと尤もらしいことを言って、その実ただ逃げ居ていただけなのだ。

「…好きな人がいるんでしょう」

「何を馬鹿な」

一笑に付すライドルに、ほんの少し意地の悪い思いが湧く。

「女の子が苦手なの、知ってるのよ。それも小柄で線の細い、女の子」

「レジーナ？」

いつも堅苦しい表情を崩さないライドルが、わずかに戸惑った声を出す。

「私に隠し事なんて甘いわ。見てればわかるもの」

苦手、と言うのも違うのかもしれない。

でも、気付いていた。

一番それが顕著に出ていたのがミルレイアが、まだリゼイラと名乗

つていた頃だ。

まるで腫れ物に触るかのように、ひどく心を割いて接していた。それより前のライドルからは想像もつかないくらい、大切に大切に扱っていた。

傷口に触れたかのように寄せられた眉をレジーナは差し出した指で押さえた。

「初恋つて後を引くのよ」

知ってた？、と尋ねれば負けたと言うように肩から力が抜ける。

「本当に、お前には敵わない」

「あら、今更なこと」

冗談めかして笑えば、目の前に真剣な眼差しの同僚の姿があった。見たことのない男の顔をするライドルに、レジーナはぎこちなく笑みを引つ込めた。

何だか、変な雰囲気だわ。

ぎくしゃくと突き出していた指を引つ込めて、胸元で押さえる。

一歩、ライドルが足を踏み出すと鼓動が一拍大きく跳ねた。

「昔、家族みたいに思っていた少女がいた」

スツと何事もなく横を通り過ぎた身体に、ホツとしながらも何故か物足りなさを感じた自分を慌てて振り払う。

「……どんな子だったの？」

慌てた自分を知られたくなくて、思わず平静を装って尋ね返す。背を向けたライドルはかすかに俯いて笑ったようだ。

肩越しの覗いた口元が薄っすらと笑みを刷いているのが見えた。

「明るくて、少し我が侂で、それでも優しい子だったよ」

「そう……。今も好きなの？」

過去形で語られている事に気付いていたけれど、想いは時間ではないと思う。

昇華出来る想いもあるし、ずっと残り続けていく想いもあるだろう。

良い、悪いではなく。

どちらもあつて当然の物だから。

「そうかも知れない。どちらかと言えば罪悪感だらうな」

「罪悪感」

あまり良い響きの言葉ではないとレジーナは眉を寄せる。

そこで、ふと顔を上げた。

「って、違うのよ！ミルレイア様が心配なさっているから呼びに来たのに。私たちがお喋りしててどうするの！」

これでは本末転倒だ。

「ああ、そうだったな。先に戻っていてくれ。こつちを片付けたら行くから」

「わかったわ。それと」

向き直ったライドルの顔を思いきりよく両手で挟んだ。
パチンツと軽く音がした。

「…何だかわかんないけど、そんな顔してたらその子が嫌な思いするわよ。良い子だったんなら、そこだけ覚えておきなさい」

叱り飛ばすような言葉に、ライドルは目を丸くして次に吹き出した。

硬質な印象が一気に柔らかくなった物へと変化する。

「ちよつと笑いすぎだと思っただけ」

ムツとしたレジーナにライドルは笑いの余韻を残しつつ謝った。

「すまない。まさか叩かれるとは思わなかった…、だが」

憑き物が落ちたような表情にレジーナは、表情を緩めた。

「ありがとう」

感謝されるのは気持ちが良い。

優しい気分ですうたしまして、と返して早くミルレイアの待つ部屋へと戻ろうとした。

だが、足を踏み出すと同時に後ろから阻まれた。

「ちよつ、何！」

がच्चりと囲うように回されているのはどう考えてもライドルの腕だ。

首筋に感じる腕の温もりにレジーナは訳もわからずに顔が赤くなる。

今まで浮いた噂の一つもない彼女には、少々刺激が強かった。

慌てるレジーナの頭の上で、かすかな笑声が漏れた。

「か、からかつてるでしょう！もう、もうっ、離してってばー！」

力任せに腕から逃れようと足を踏ん張ってみるが、さすがにライドールの力には敵わない。

「一つだけ、訂正をしておく」

「何よっ」

顔が赤くて、息が苦しくて、心臓なんかもう滅茶苦茶に鳴っている。

このままだと殺されちゃうわ。

レジーナは本気で思った。

だから、ライドールの言葉などほとんど聞こえていない。

そりゃ、一時はもう冗談じゃないくらい歳の離れた婚約者もいたけど。それだって、親の決めた縁談であって、私は結局一回もあつてないし。だって、嫌じゃないそこで気に入られちゃったりしたら。

そもそも、うら若き乙女の縁談ならもつと良いものがあつたはずじゃない。

「レジーナ、聞いているか？」

「何でも良いから、早く言って！」

そして、この腕を退けて！心の叫びが通じたのかどうか。

少しの間の後で、ライドールは唇を開いた。

「女の子が苦手と言うのは、少し違っていい。確かに、昔の事もあつて構えるところがないとは言わないが」

そりゃ、こんなにがっちり掴んでおいて苦手も何もないかもね！

半泣き状態で内心叫んだレジーナである。

「まあ、何の抵抗もなく触れられる相手も限られているか…」

「それって私を女扱いしてないだけじゃない」

どう考えてもこの扱いはそうだろう。

何だか腹立たしくて、少し哀しい。

俯くとライドルは、面白いことを聞いたような、逆に困ったような、複雑な表情を浮かべた。

背後から抱きしめられているレジーナには見ることが出来なかったが。

「…今までの男運のなさはそのせいかな」

「何か言った？」

一人呟いたライドルの声が切れ切れに聞こえて、それも何か失礼な事を言われたような気がして、振り仰ぐように顔を上に向けた。いつそ無防備なレジーナに、苦笑が漏れた。

雖罌粟のような大人しやかで可憐な容貌と朗らかな人柄がどれほど魅力的か。

本人だけが気付いていない。

「あまり男を甘く見ないように」

「え？」

この状況で、顔を赤くして見上げられたら、勘違いされても文句は言えない。

前に回した手をそっと小さな頤に添えて、逃れられないように固定する。

「ちょ…っ！」

慌てるレジーナの声を無視して落とされた唇は、わずかにそれで口の端を掠めた。

大きな瞳をさらに大きく見開いたレジーナは凍りついたように立ちすくんだ後、力の限りライドルを突き飛ばして駆け出した。

林檎よりもさらに顔を赤く染めた侍女を己の腕から解放したライドルは、珍しくクスクスと笑いながら掃除の最後の仕上げにかかったのだった。

そうして、部屋に飛び込むようにして駆け戻ったレジーナは驚くミルレイアの前でへなへなと座り込んでしまった。

慌てるミルレイアに、レジーナは真っ赤に染まった顔を両手で押さ

えて何とか取り繕う。

「本当に大丈夫？」

「へ、平気です。それよりミルレイア様」

「はい？」

「男の人なんて信用しちゃ駄目ですからね！」

力いっぱい忠告する侍女に、ミルレイアは呆気に取られながら迫力に押されて頷いていた。

「もうっ、信じられない…！」

そりゃ、いろいろな事に気付いていたわ。
でも、あんな顔するなんて知らなかった！

f i n

EX・4 ひなげし（後書き）

本編では、後半からちょっとお預けくらってしまっていた彼女たちのお話です。

レジーナの方が年下ですが、なんだかんだとお互いを補い合っている二人だと思います。

ひなげしの花言葉 「慰め・思いやり」

EX・5 光降る庭

赤い小鳥が薄黄色の空へ飛び立とうとしたところで静止していた。器用に動いていた針が朱色の糸を突き通した状態でいささか乱暴に布につき立てられる。

飴色のゆり椅子に座っていたアリスティーナはそわそわと落ち着きがない。

「お姉さま？」

深窓のご令嬢には相応しくない、高々と組まれた足の上に肘をたてる姉に床で本を広げていたレナリースが首を傾げる。

放り投げられた刺繍枠を取り上げて、危なくないように円卓の上に置く。

せつかくの綺麗な刺繍が解けてしまつてはもつたいない。

「まだなのかしら。もう呼びに来ても良いわよね」

張り出し窓から曇った空を見つめてアリスティーナは、くつきりとした眉に力をいれる。

編みこまれた黄金の髪を振り回す姉の言葉にレナリースも落ち着かなげに扉を見やる。

今日は館中が騒いでいる。

九年前と十二年前も同じだったのだろうけど。

カタンと音を立てた扉に二人の子どもたちは同時に息を止めた。

「失礼します」

開いた扉から入って来たのは浅い緑色の上着を着た少年だ。

褐色の髪を一つにまとめた少年は、手に茶器を一式持っていた。

「なーんだ。メイラードか」

がっかりとため息を吐いたアリスティーナの落胆の表情を従僕であるメイラードは困ったような笑顔で受け止めた。

「メイ、お茶？」

「はい。皆さん忙しいみたいです」

少しぎこちない手つきでお茶を汲みながらメイラードは、近寄ってきたレナリースに笑いかける。

「私にもお茶！」

ふんぞり返った姿勢だが、アリスティーナがやると妙に可愛らしく感じてしまう。

「お嬢様、もつとお淑やかにした方がお似合いですよ」

「良いの！だって元気が良い方が可愛いよってお母様も言ってくれたわ」

「…お行儀悪くは問題だと思いますけど」

悪びれない答えにメイラードは押され気味に小さく呟いた。

ささやかな抗議をお茶と共にぐいっと飲み干して、一瞬妙な顔をしたら公爵家のご令嬢は敢然と顔を上げた。

「それにしても遅い！」

「時間がかかってるみたいです。子どもを産むって大変って言いますよね」

メイラードも少し不安そうに目を伏せた。

「…お母さま、大丈夫かな」

一番年下のレナリースが、二人の不安を感じ取ったのか心細そうに茶器を回した。

「や、やあね！心配しなくてもお母様にはお父様がいるんだもの。死神が来ても追い払っちゃうわよ」

力いっぱいな励ましは少々強引だったが、レナリースはホッとしたようだ。

青灰色の目が柔らかくなる。

「お父さま、強いものね」

「そうそう。それに何だかかんた言いながら独占欲強いんだから、あの親父は」

「お嬢様」

ボソッと付け加えられたご令嬢には似つかわしくない単語を注意する。

ぺろつと舌を出したアリスティーナは明るく屈託がない。

「一度様子を見てきますね」

腰を上げたメイラードが扉に近寄った時、扉の方が先に開いた。

「…ああ、メイ。ここにいたのね」

「び、びつくりした」

胸を撫で下ろした少年の前に立っていたのは、館で働いている侍女だった。

部屋で待っていた二人の子どもは、その姿を見て反射的に立ち上がる。

食い入るように見つめてくるアリスティーナたちに、侍女は明るい笑顔で膝を折った。

「若君がご誕生になりました。どうぞ、お部屋へ」

彼女が言い終えると同時にご息女とご令息は走り出していた。

普段なら諫めるべきだったが、今日ばかりは仕方あるまい。微笑ましく見送って、一つだけ注意しなければとお子様方の遊び相手である少年を見た。

「ところで、メイ」

「なんですか？」

「これ、お砂糖じゃなくてお塩よ」

「あ…」

しっかりしているようで何処か抜けているメイラードであった。

「お母様！」

まず、部屋に飛び込んでいったのはアリスティーナだった。

「お静かに、アリスティーナ様」

寢室の前の居室にいたライドルが物柔らかに諫める。

奔放なアリスティーナもこの侍従には、逆らった事はない。

「はあい。それより、お母様は？」

「お姉さま…、速い」

歩くのすら大変であるドレスで、レナリースを置いて行く勢いで走ってきたらしい。

何とも豪快なお嬢様にライドルは、お小言を言いかけて諦めた。それよりも全身で呼吸をしているレナリースに水を注いだ。

余り体力のないレナリースはお礼を言いながら水を一気に飲む。

「あ、それで。お母さまと赤ちゃんは？」

深く息を吐いてレナリースは背の高い従僕を見上げた。

「お隣にいますよ。静かに入って行ってください…」

いつでも滑らかに喋っているライドルの言葉が不自然に途切れた。

不思議に思った二人も振り返って、目を丸くした。

薄く空を覆っていた雲が割れていた。

柔らかな日の光が梯子のように地上に降りて来る。

「間に合ったか」

光のきらめきの名残を纏いながら窓辺に立っていたのは、黄金と蒼青の一族。

性別を感じさせない繊細な美貌にはわずかに焦りが見える。

「旋様」

ライドルのため息のような声に子どもたちが瞬いた。

「…お祖父さま？」

話に聞くだけの存在を前にしてレナリースが心もとなげに尋ねる。

旋は初めて会う孫を見つめて深い青の瞳を甘く溶かす。

「長く会えなかったが、良い子に育っているようだな」

優しく頭を撫でられてレナリースはくすぐったそうに笑った。

「初めまして、お祖父様。…凜です」

少し考えてアリスティーナは、家族にだけ許した名を名乗った。

堂々とした少女の態度に旋は好ましげに目を細めた。

「立派な淑女だ」

「光栄です」

「…僕はレナリースです」

慌てて名乗った少年に旋もアリスティーナも、そして後ろではライドルまでが微笑ましさに笑みをたたえていた。

「良い名だ」

孫との対面を楽しんでいると、隣室からレジーナが顔を覗かせた。

「賑やかだと思ったら。いらっしやいませ、旋様」

にこやかに出迎えたレジーナは今では侍女たちをまとめる立場に立っていた。

立場が変わっても彼女の本質は変わっていない。

「皆様、ミルレイア様がお待ちですよ？」

かすかにふくらみを持ったお腹の前で手を組んで、誘い入れる。

動いたのは旋とアリスティーナだ。

競い合うようにして入って行く二人に、レナリースだけが遅れている。

慌てて追いかけていった少年を見送ってライドルは新たな滞在客を知らせるために部屋を出て行った。

その顔は、知らずに微笑みを浮かべていた。

「ちっちゃーい」

「何か猿みたいだわ」

レナリースが歓声を上げている横でアリスティーナはひどく冷静な感想を述べた。

「お前たちも生まれた時はこんな風だったぞ」

寝室の窓辺に設えられた揺り籠を囲んでデイルは子どもたちに穏やかに話しかける。

信じられないのはアリスティーナらしい。

「もっと可愛いと思っただのに」

「もう少し成長すればお前の想像通りの赤ん坊になるよ」

苦笑交じりで不服そうな娘の頭を撫でる。

そして、寝台の方に目をやって少々複雑な顔をした。

「風、大丈夫か？」

「おとうさん？」

疲労で蒼褪めた顔に張り付いた髪を撫で付けて、旋は大変な仕事を終えた子どもを労わった。

「来てくれたの？」

ほのかに笑みを乗せたミルレイアに旋は大真面目に頷いた。

「お前のためなら、暦を早めるくらい何でもない」

さらりと大変な事をのたまう神族に、離れていたデイルはギョツとした。

どんなに大仰なことでも否定出来ないところが恐ろしい。

「名前は与えられていたようだな」

「はい。元気な子になりそうです」

「…休むと良い。生まれてきた子の為にも早く元気にならねば」
汗で冷えた額に口付けを落として旋は寝台から離れる。

ミルレイアもその言葉に引きずられるようにして眠りについた。

「さて、相変わらずお前が傍にいるのだな」

デイルの前に立った旋は不本意だと隠さずに言う。

「ですから、離れることはないと申し上げましたよ」

「何だってこんな人間が良いのだから」

ブツブツ言う旋をレナリースが不安そうに見上げる。

「お祖父さまはお父さまと仲がお悪いのですか？」

悲しい顔をした孫の姿にさすがの旋も慌てた。

「そ、そんなことはない。これは、挨拶代わりというものだ」

取り繕う旋にレナリースは泣きそうだった顔を安堵に変えた。

「それじゃ仲良しですね。良かったです」

「そ、そう。なるか」

無邪気な言葉に旋が言い返せずにいるのを見て、デイルは感心したように我が子を見つめた。

大人しい子だと思っていたが、意外に一番の大物になるかもしれない。

「さて、新たな命を授かった者への祝福を贈ろう」

気を取り直した旋が、生まれたばかりの嬰兒を見つめた。

「輝く者、誠実なる者、他者の行く末を指し示す者」

流麗な声は、現実感をそぎ落としてただ幻想的に部屋を包んだ。

「炯”（けい）」

額に落とされた口付けに誘われるように、赤子の手が動く。

「炯。貴方に幸いがありますように。家族として歓迎するわ」

「早くいっしょに遊ぼうね」

何もかもが未熟な弟を見守って二人も、旋と同じように口付けを贈る。

最後にデイルが、指の腹で柔らかな頬を撫でて口付ける。

「健やかな成長を祈っているよ」

温かな家族の歓迎がわかったのか、赤ん坊はくしゃくしゃの顔で笑みらしきものを浮かべた。

空から光が差し伸べられた日の出来事だった。

やがて、公爵家の三姉弟たちはそれぞれが注目されるようになる。華やかな噂の中心にあっても、彼らは両親を愛し姉弟を愛した。光差す庭はどれ程時が経とうともいつまでも笑い声が絶えることはなかった。

f i n

EX・5 光降る庭（後書き）

ここまでお付き合いありがとうございました。
「名もなき花」としてはここで終了です。

少しでも、ほんわか幸せな気持ちをお届け出来ていたら嬉しいです
♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9102s/>

名もなき花の散る果てに

2011年6月29日23時15分発行